

# 京都府遺跡調査概報

## 第118冊

1. 大垣遺跡・一の宮遺跡・難波野(条里制)遺跡
2. 先ノ段遺跡
3. 岡ノ遺跡第3次
4. 長岡京跡右京第856次・友岡遺跡
5. 京都第二外環状道路関係遺跡  
(平成16年度)

2 0 0 6

財団法人 京都府埋蔵文化財調査研究センター

## 序

京都府埋蔵文化財調査研究センターでは、京都府内の公共事業に伴う埋蔵文化財の発掘調査を行ってまいりました。この間、当センターの業務の遂行にあたりましては、皆様方のご協力を賜り、厚く御礼申し上げます。

本書は、『京都府遺跡調査概報』として、平成16・17年度に実施した発掘調査のうち、京都府土木建築部、国土交通省近畿地方整備局の依頼を受けて行った、大垣遺跡・一の宮遺跡・難波野(条里制)遺跡、先ノ段遺跡、岡ノ遺跡第3次、長岡京跡右京第856次・友岡遺跡、京都第二外環状道路関係遺跡に関する発掘調査概要を収めたものであります。本書が学術研究の資料として、また、地域の埋蔵文化財への関心と理解を深める上で、御活用いただければ幸いです。

おわりに、発掘調査を依頼された各機関をはじめ、宮津市教育委員会、福知山市教育委員会、長岡京市教育委員会、(財)長岡京市埋蔵文化財センターなどの各関係諸機関、ならびに調査に参加、協力いただきました多くの方々に厚く御礼申し上げます。

平成18年3月

財団法人 京都府埋蔵文化財調査研究センター  
理 事 長 上 田 正 昭

# 凡 例

1. 本書に収めた概要は、下記のとおりである。

1. 大垣遺跡・一の宮遺跡・難波野(条里制)遺跡
2. 先ノ段遺跡
3. 岡ノ遺跡第3次
4. 長岡京跡右京第856次・友岡遺跡
5. 京都第二外環状道路関係遺跡(平成16年度)

2. 遺跡の所在地、調査期間、経費負担者および概要の執筆者は下表のとおりである。

	遺跡名	所在地	調査期間	経費負担者	執筆者
1.	大垣遺跡・一の宮遺跡・難波野(条里制)遺跡	宮津市字大垣・江尻・難波野	平16. 9. 15～平17. 2. 21	京都府土木建築部	石尾政信
2.	先ノ段遺跡	福知山市今西中	平17. 12. 13～平18. 1. 23	京都府土木建築部	村田和弘
3.	岡ノ遺跡第3次	福知山市東岡町・南岡町	平16. 5. 13～平17. 1. 28	国土交通省近畿地方整備局	伊野近富 戸原和人
4.	長岡京跡右京第856次・友岡遺跡	長岡京市友岡西山16-1	平17. 8. 2～平17. 10. 12	京都府土木建築部	戸原和人
5.	京都第二外環状道路関係遺跡(平成16年度)	長岡京市友岡、調子、下海印寺岸ノ下・上内田・尾流・西条	平16. 7. 5～平17. 2. 25	国土交通省近畿地方整備局	岩松 保 松井忠春 竹井治雄

3. 本書で使用している座標は、世界測地系国土座標第6座標系によっており、方位は座標の北をさす。また、国土地理院発行地形図の方位は経度の真北をさす。

4. 本書の編集は、調査第1課資料係が当たった。なお、遺物の写真撮影は、同資料係主任調査員田中彰が行った。

## 本文目次

1. 大垣遺跡・一の宮遺跡・難波野(条里制)遺跡発掘調査概要-----	1
2. 先ノ段遺跡発掘調査概要-----	21
3. 岡ノ遺跡第3次発掘調査概要-----	29
4. 長岡京跡右京第856次・友岡遺跡発掘調査概要-----	53
5. 京都第二外環状道路関係遺跡平成16年度発掘調査概要-----	59

## 付表目次

3. 岡ノ遺跡第3次	
付表1 平成15・16年度発掘調査概要一覧-----	32
5. 京都第二外環状道路関係遺跡	
付表2 各地区調査概要一覧-----	61
付表3 出土遺物観察表-----	120

## 挿図目次

1. 大垣遺跡・一の宮遺跡・難波野(条里制)遺跡	
第1図 掘削作業風景-----	1
第2図 測量作業風景-----	1
第3図 関係者説明会風景-----	2
第4図 調査地および周辺主要遺跡分布図-----	2
第5図 大垣遺跡・一の宮遺跡・難波野遺跡トレンチ配置図-----	3
第6図 大垣遺跡・一の宮遺跡平面図-----	4
第7図 大垣遺跡・一の宮遺跡土層断面-----	4
第8図 難波野遺跡1・2トレンチ平面図-----	5

第9図	難波野遺跡3トレンチ平面図	6
第10図	難波野遺跡4トレンチ平面図	7
第11図	難波野遺跡土層断面図	8
第12図	井戸S E 03実測図	9
第13図	掘立柱建物跡S B 12実測図	10
第14図	掘立柱建物跡S B 14実測図	10
第15図	掘立柱建物跡S B 25実測図	11
第16図	井戸S E 16実測図	11
第17図	掘立柱建物跡S B 24実測図	12
第18図	竪穴式住居跡S H 23実測図	12
第19図	大垣遺跡・一の宮遺跡出土遺物実測図(1)	13
第20図	大垣遺跡・一の宮遺跡出土遺物実測図(2)	14
第21図	難波野遺跡出土遺物実測図(1)	15
第22図	難波野遺跡出土遺物実測図(2)	16
第23図	難波野遺跡出土遺物実測図(3)	17
第24図	難波野遺跡出土遺物実測図(4)	18
第25図	大垣・一の宮・難波野遺跡出土渡来銭拓影	19

## 2. 先ノ段遺跡

第26図	調査地位置図	21
第27図	調査トレンチ配置図	22
第28図	2-bトレンチ南壁土層断面図	23
第29図	1地区トレンチ平面図	24
第30図	2地区トレンチ平面図	25
第31図	3地区トレンチ平面図	26
第32図	掘立柱建物跡S B 01平面・断面図	27

## 3. 岡ノ遺跡第3次

第33図	岡ノ遺跡位置図	29
第34図	調査地位置図	30
第35図	調査区配置図	30
第36図	発掘調査地(1~3トレンチ)平面図	31
第37図	1トレンチ北壁土層断面図	33
第38図	1トレンチ西部平面図	34
第39図	1トレンチ東部平面図	35
第40図	方形周溝墓S T 1122	36
第41図	方形周溝墓S T 1122土層断面図	36

第42図	竪穴式住居跡 S H1195、土坑 S K1292実測図	37
第43図	土坑 S K1292実測図	37
第44図	竪穴式住居跡 S H1313実測図	38
第45図	竪穴式住居跡 S H1313土器出状況図	38
第46図	土坑 S K1425遺物出土状況図	39
第47図	2・3地区遺構平面図	40
第48図	3-1～3-4トレンチ遺構平面図	41
第49図	柵 S A3401実測図	42
第50図	掘立柱建物跡 S B3402実測図	43
第51図	掘立柱建物跡 S B3403実測図	44
第52図	掘立柱建物跡 S B3404実測図	45
第53図	掘立柱建物跡 S B3405実測図	46
第54図	1トレンチ出土遺物実測図(1)	48
第55図	1トレンチ出土遺物実測図(2)	49
第56図	3トレンチ出土遺物実測図	50

#### 4. 長岡京跡右京第856次・友岡遺跡

第57図	調査地および周辺主要遺跡位置図	53
第58図	調査地平面図	54
第59図	検出遺構平面図	55
第60図	検出遺構実測図	56
第61図	出土遺物実測図	57

#### 5. 京都第二外環状道路関係遺跡

第62図	調査地位置図	60
第63図	友岡・調子地区トレンチ配置図	63
第64図	友岡A地区トレンチ配置図、1-Aトレンチ検出遺構平面図・南壁土層図	65
第65図	友岡地区1-Bトレンチ検出遺構平面図・北壁土層図、15トレンチ南壁土層図	66
第66図	友岡地区1-Bトレンチ西壁土層図	68
第67図	友岡地区2トレンチ南壁土層図・3トレンチ南壁土層図	69
第68図	友岡地区4トレンチ検出遺構配置図・西壁土層図・断ち割り内土層図	70
第69図	友岡C・D地区トレンチ配置図	72
第70図	調子地区8トレンチ東壁・北壁・南壁土層図	74
第71図	調子地区6トレンチ北壁土層図・7トレンチ東壁土層図・8トレンチ石組側溝 実測図	75
第72図	調子E地区トレンチ配置図・10トレンチ北壁土層図	77
第73図	調子地区11トレンチ遺構平面図・南壁土層図	78

第74図	調子地区12トレンチ北壁土層図、13トレンチ遺構平面図・土層図-----	80
第75図	調子地区14トレンチ遺構平面図・土層図-----	81
第76図	岸ノ下地区トレンチ配置図-----	84
第77図	岸ノ下地区検出遺構平面図-----	86
第78図	岸ノ下地区1トレンチ東壁・西壁土層図-----	87
第79図	岸ノ下地区1トレンチ暗渠排水遺構実測図-----	88
第80図	岸ノ下地区2トレンチ東壁1・2区、断ち割り1南壁土層図-----	89
第81図	岸ノ下地区2トレンチ東壁1・2区、断ち割り1南壁土層図-----	90
第82図	岸ノ下地区2トレンチ畦畔遺構実測図-----	91
第83図	上内田地区トレンチ配置図-----	92
第84図	上内田地区1～4トレンチ検出遺構平面図-----	93
第85図	上内田地区1トレンチ南壁土層図-----	95
第86図	上内田地区2トレンチ西壁土層図・3トレンチ南壁土層図-----	96
第87図	上内田地区4トレンチ南壁土層図-----	97
第88図	上内田地区5～8トレンチ検出遺構平面図-----	99
第89図	上内田地区5トレンチ南壁土層図・6トレンチ東壁土層図-----	100
第90図	上内田地区7トレンチ南壁土層図・8トレンチ東壁土層図-----	101
第91図	尾流・西条地区トレンチ配置図-----	103
第92図	西条地区検出遺構平面図・3トレンチ東壁土層図-----	105
第93図	尾流地区1トレンチ西壁土層図・2トレンチ南壁土層図-----	107
第94図	尾流地区3トレンチ南壁土層図-----	108
第95図	尾流地区4トレンチ検出遺構平面図・南壁土層図-----	109
第96図	尾流地区4トレンチ土器集積平面図・集石遺構平面図-----	111
第97図	出土遺物実測図(1)-----	113
第98図	出土遺物実測図(2)-----	115
第99図	出土遺物実測図(3)-----	116
第100図	出土遺物実測図(4)-----	117
第101図	出土遺物実測図(5)-----	118

# 図 版 目 次

## 1. 大垣遺跡・一の宮遺跡・難波野(条里制)遺跡

- 図版第 1 (1)難波野遺跡航空写真(北から) (2)難波野遺跡航空写真(東から)
- 図版第 2 (1)難波野遺跡航空写真(西から) (2)難波野遺跡航空写真(南から)
- 図版第 3 (1)大垣遺跡・一の宮遺跡調査前(南から)  
(2)大垣遺跡・一の宮遺跡トレンチ全景(東から)  
(3)大垣遺跡・一の宮遺跡北壁東部断面(南から)
- 図版第 4 (1)難波野遺跡 1・2 トレンチ全景(空撮写真：下が北)  
(2)難波野遺跡 1 トレンチ全景(東から)  
(3)難波野遺跡 2 トレンチ全景(東から)
- 図版第 5 (1)難波野遺跡 1 トレンチ井戸 S E 03(南から)  
(2)難波野遺跡 1 トレンチ井戸 S E 03(北から)  
(3)難波野遺跡 1 トレンチ井戸 S E 03の北側縦板(南から)
- 図版第 6 (1)難波野遺跡 1 トレンチ土坑 S K 06たが状製品出土状況(北から)  
(2)難波野遺跡 1 トレンチ溝 S D 03土器出土状況(北から)  
(3)難波野遺跡 1 トレンチ掘立柱建物跡 S B 12柱穴・柱根出土状況(東から)
- 図版第 7 (1)難波野遺跡 1 トレンチ柱穴内土器出土状況(南から)  
(2)難波野遺跡 1 トレンチ西壁断面柵列 S A 13板状杭検出状況(東から)  
(3)難波野遺跡 1 トレンチ西壁断面(東から)
- 図版第 8 (1)難波野遺跡 1 トレンチ西部下層(南から)  
(2)難波野遺跡 1 トレンチ東部断ち割り東部壁面(西から)  
(3)難波野遺跡 2 トレンチ中央部断ち割り状況(南から)
- 図版第 9 (1)難波野遺跡 3 トレンチ全景(西から)  
(2)難波野遺跡 3 トレンチ全景(東から)  
(3)難波野遺跡 3 トレンチ北壁断面(南から)
- 図版第10 (1)難波野遺跡 3 トレンチ井戸 S E 16(北から)  
(2)難波野遺跡 3 トレンチ井戸 S E 16縦板組(東から)  
(3)難波野遺跡 3 トレンチ井戸 S E 17検出状況(東から)
- 図版第11 (1)難波野遺跡 3 トレンチ土坑 S K 19完掘状況(北から)  
(2)難波野遺跡 3 トレンチ掘立柱建物跡 S B 24の柱根(北から)  
(3)難波野遺跡 3 トレンチ竪穴式住居跡 S H 23(南から)
- 図版第12 (1)難波野遺跡 4 トレンチ全景航空写真(下が北)



(2) 難波野遺跡 4 トレンチ全景(東から)

(3) 難波野遺跡 4 トレンチ北壁断面

図版第13 出土遺物(1)

図版第14 出土遺物(2)

図版第15 出土遺物(3)

図版第16 出土遺物(4)

## 2. 先ノ段遺跡

図版第17 (1) 調査前遠景(南西から)

(2) 1-a・b トレンチ調査前全景(南東から)

(3) 2-a・b トレンチ調査前全景(北西から)

図版第18 (1) 3 トレンチ調査前全景(南から)

(2) 1-b トレンチ重機掘削作業風景(北西から)

(3) 2-b トレンチ重機掘削作業風景(北西から)

図版第19 (1) 1-a トレンチ全景(南東から) (2) 1-b トレンチ南側部分(北西から)

(3) 2-a トレンチ掘削作業風景(北から)

図版第20 (1) 2-a トレンチ全景(南東から) (2) 2-b トレンチ南壁断面(北西から)

(3) 2-b トレンチ遺構検出状況(南から)

図版第21 (1) 2-b トレンチ柱穴掘削作業風景(南東から)

(2) 2-b トレンチ掘立柱建物跡 S B01 柱穴 P 2 断面(西から)

(3) 2-b トレンチピット掘削作業風景(北から)

図版第22 (1) 2-b トレンチ遺構完掘状況(南東から)

(2) 2-b トレンチ遺構完掘状況(南から)

(3) 3 トレンチ全景(北西から)

## 3. 岡ノ遺跡第3次

図版第23 (1) 調査地全景航空写真(上が北) (2) 1~3 地区全景航空写真(上が北)

図版第24 (1) 1 トレンチ方形周溝墓 S T1122 土層断面(西から)

(2) 1 トレンチ方形周溝墓 S T1122 土層断面(南から)

(3) 1 トレンチ石錘出土状況(南から)

図版第25 (1) 1 トレンチ竪穴式住居跡 S H1313(南から)

(2) 1 トレンチ竪穴式住居跡 S H1313(東から)

(3) 1 トレンチ竪穴式住居跡 S H1313 出土遺物(北から)

図版第26 (1) 1 トレンチ竪穴式住居跡 S H1313 遺物出土状況(東から)

(2) 1 トレンチ土坑 S P1178 遺物出土状況(南から)

(3) 1 トレンチ土坑 S P1178 遺物出土状況(西から)

図版第27 (1) 1 トレンチ土坑 S P1306 遺物出土状況(北から)

- (2) 1 トレンチ 竪穴式住居跡 S H1195 遺物出土状況(北から)  
(3) 1 トレンチ S K1292 遺物出土状況(南西から)
- 図版第28 (1) 1 トレンチ土坑 S K1292 遺物出土状況(南西から)  
(2) 1 トレンチ土坑 S K1292 遺物出土状況(南西から)  
(3) 1 トレンチ土坑 S K1292 遺物出土状況(南西から)
- 図版第29 (1) 1 トレンチ土坑 S K1425 遺物出土状況(東から)  
(2) 1 トレンチ土坑 S K1425 遺物出土状況(東から)  
(3) 1 トレンチ土坑 S K1151 遺物出土状況(北から)
- 図版第30 (1) 1 トレンチ堀 S D1002 西側(南から)  
(2) 1 トレンチ溝 S D1018 遺物出土状況(北から)  
(3) 1 トレンチ土坑 S K1399 遺物出土状況(南から)
- 図版第31 (1) 1 トレンチ堀 S D1002 断面(南から)  
(2) 1 トレンチ堀 S D1002 遺物出土状況(南から)  
(3) 1 トレンチ堀 S D1002 上層 遺物出土状況(北から)
- 図版第32 (1) 2 トレンチ全景(西から) (2) 3-4 トレンチ南半(西から)  
(3) 3-4 トレンチ北半(西南から)
- 図版第33 (1) 3-4 トレンチ掘立柱建物跡 S B3402、P3327(南から)  
(2) 3-4 トレンチ掘立柱建物跡 S B3402、P3330(南から)  
(3) 3-4 トレンチ掘立柱建物跡 S B3403、P3328(南から)
- 図版第34 (1) 3-4 トレンチ掘立柱建物跡 S B3403、P3321(南から)  
(2) 3-4 トレンチ P3100(南から) (3) 3-4 トレンチ S X3365(南から)
- 図版第35 (1) 3-4 トレンチ S X3366(南から) (2) 3-4 トレンチ S X3367(南から)  
(3) 3-4 トレンチ S X3368(南から)
- 図版第36 (1) 3-4 トレンチ S X3369(南から) (2) 1 地区出土遺物(1)
- 図版第37 1 地区出土遺物(2)
- 図版第38 3 地区出土遺物
4. 長岡京跡右京第856次・友岡遺跡
- 図版第39 (1) プレハブ建上(北から) (2) 調査地全景(北から)  
(3) 調査地全景(南から)
- 図版第40 (1) 柱穴 P85651(上が北) (2) 土坑 S K85602(北から)  
(3) 土坑 S K85602(北から)
- 図版第41 (1) 土坑 S K85636(南から) (2) 柱穴 P85603(北から)  
(3) 柱穴 P85643(上が北)
- 図版第42 (1) 柱穴 P85638(南から) (2) 柱穴 P85664(南から)  
(3) 柱穴 P856140(西から)

- 図版第43 (1)柱穴 P 85661(南から) (2)柱穴 P 85622(南から)  
(3)柱穴 P 85619(南から)

図版第44 出土遺物

5. 京都第二外環状道路関係遺跡

- 図版第45 (1)友岡・調子地区調査地全景(北東から)  
(2)調子地区：E地区全景(北東から)
- 図版第46 (1)友岡A地区：1-Aトレンチ全景(南西から)  
(2)友岡A地区：1-Aトレンチ西壁土層(東から)  
(3)友岡A地区：1-Aトレンチ杭列(東から)
- 図版第47 (1)友岡A地区：1-Aトレンチ溝SD02(北から)  
(2)友岡A地区：15トレンチ全景(南から)  
(3)友岡A地区：15トレンチ南壁土層(北から)
- 図版第48 (1)友岡A地区：1-Bトレンチ全景(北から)  
(2)友岡A地区：1-Bトレンチ溝SD01(南から)  
(3)友岡A地区：1-Bトレンチ溝SD01断面(北から)
- 図版第49 (1)友岡A地区：2トレンチ全景(南東から)  
(2)友岡A地区：2トレンチ溝SD01全景(南東から)  
(3)友岡A地区：2トレンチ溝SD01部分(北西から)
- 図版第50 (1)友岡A地区：3トレンチ全景(東から)  
(2)友岡A地区：3トレンチ全景 完掘状況(東から)  
(3)友岡A地区：3トレンチ南壁土層部分(北から)
- 図版第51 (1)友岡B地区：4トレンチ全景(北から)  
(2)友岡B地区：4トレンチ西壁土層部分(東から)  
(3)友岡B地区：4トレンチ砂礫断割内土層部分(南から)
- 図版第52 (1)友岡C地区：6トレンチ調査前風景(北から)  
(2)友岡C地区：6トレンチ全景(西から)  
(3)友岡C地区：6トレンチ北壁土層現代盛土下部分(南から)
- 図版第53 (1)友岡C地区：7トレンチ調査前風景(北から)  
(2)友岡C地区：7トレンチ全景(西から)  
(3)友岡C地区：7トレンチ西壁土層(東から)
- 図版第54 (1)友岡D地区：8トレンチ全景(南から)  
(2)友岡D地区：8トレンチ北壁土層(南から)  
(3)友岡D地区：8トレンチ南壁土層(北から)
- 図版第55 (1)友岡D地区：8トレンチ西側溝断面(北から)  
(2)友岡D地区：8トレンチ西側溝平面(東から)

- (3)友岡D地区：8トレンチ南壁土層(北から)
- 図版第56 (1)友岡D地区：9トレンチ全景(西から)  
(2)友岡D地区：9トレンチ北壁土層部分(南から)  
(3)友岡D地区：9トレンチ北壁土層(南から)
- 図版第57 (1)調子E地区：調査前風景(南から)  
(2)調子E地区：10トレンチ全景 部分(南から)  
(3)調子E地区：11トレンチ全景(北から)
- 図版第58 (1)調子E地区：11トレンチ溝S D03(北から)  
(2)調子E地区：11トレンチ溝S D03内遺物出土状況(上が北)  
(3)調子E地区：11トレンチ溝S D03全景(北から)
- 図版第59 (1)調子E地区：12トレンチ全景(北から)  
(2)調子E地区：13・14トレンチ調査前風景(北から)  
(3)調子E地区：13トレンチ全景(東から)
- 図版第60 (1)調子E地区：13トレンチ溝S D03全景(南から)  
(2)調子E地区：13トレンチ柱穴列検出状況(東から)  
(3)調子E地区：14トレンチ全景(南から)
- 図版第61 (1)調子E地区：14トレンチ溝S D01部分(北から)  
(2)調子E地区：14トレンチ井戸S E03(北から)  
(3)調子E地区：14トレンチ井戸S E03内曲物検出状況(北から)
- 図版第62 (1)岸ノ下地区調査地全景(手前が岸ノ下地区、奥に上内田地区；南東から)  
(2)岸ノ下地区調査地全景(上が南西)
- 図版第63 (1)岸ノ下地区：1トレンチ完掘状況(南から)  
(2)岸ノ下地区：1トレンチ南壁土層(北から)  
(3)岸ノ下地区：1トレンチ暗渠状遺構(南から)
- 図版第64 (1)岸ノ下地区：2トレンチ完掘状況(北東から)  
(2)岸ノ下地区：2トレンチ畝状遺構(南から)  
(3)岸ノ下地区：2トレンチ畦畔状遺構(南から)
- 図版第65 (1)上内田地区調査地全景(上が南西)  
(2)尾流・西条地区調査地全景(上が南西)
- 図版第66 (1)上内田地区：1トレンチ全景(西南西から)  
(2)上内田地区：1トレンチ流路跡(東北東から)  
(3)上内田地区：1トレンチ流路跡土層(北から)
- 図版第67 (1)上内田地区：2トレンチ全景(北から)  
(2)上内田地区：2トレンチ流路跡(北から)  
(3)上内田地区：2トレンチ流路跡(南東から)

- 図版第68 (1)上内田地区：3トレンチ全景(南東から)  
(2)上内田地区：3トレンチ全景(南南東から)  
(3)上内田地区：3トレンチ竪穴式住居跡(北から)
- 図版第69 (1)上内田地区：4トレンチ全景(東から)  
(2)上内田地区：5トレンチ全景(南東から)  
(3)上内田地区：5トレンチ暗渠溝(北西から)
- 図版第70 (1)上内田地区：6トレンチ全景(北北東から)  
(2)上内田地区：6トレンチ流路跡(北から)  
(3)上内田地区：8トレンチ全景(北西から)
- 図版第71 (1)上内田地区：7トレンチ流路跡(東から)  
(2)上内田地区：7トレンチ流路跡内遺物出土状況(北から)  
(3)上内田地区：7トレンチ流路跡内遺物出土状況(北西から)
- 図版第72 (1)西条地区調査地全景(南西から)  
(2)西条地区：1・2トレンチ全景(南東から)  
(3)西条地区：3トレンチ掘立柱建物跡検出状況(北東から)
- 図版第73 (1)尾流地区：1トレンチ全景(南東から)  
(2)尾流地区：2トレンチ全景(東南東から)  
(3)尾流地区：2トレンチ南壁内土坑(北北東から)
- 図版第74 (1)尾流地区：3トレンチ全景(北東から)  
(2)尾流地区：4トレンチ全景(南東から)  
(3)尾流地区：4トレンチ土坑S K01、溝S D02(南から)
- 図版第75 (1)尾流地区：4トレンチ土器集積(北から)  
(2)尾流地区：4トレンチ土器集積(北から)  
(3)尾流地区：4トレンチ集石遺構(北東から)
- 図版第76 出土遺物(1)
- 図版第77 出土遺物(2)
- 図版第78 出土遺物(3)

# 1. <sup>おおがき</sup>大垣遺跡・<sup>いちのみや</sup>一の宮遺跡・<sup>なんばの</sup>難波野(条里制)遺跡 発掘調査概要

## 1. はじめに

大垣遺跡・一の宮遺跡・難波野(条里制)遺跡は、天橋立の北側、宮津市宇大垣・江尻・難波野ほかに所在する。このうち難波野(条里制)遺跡は、難波野条里制遺跡として周知されている遺跡である。しかし、今回の一連の調査では、条里制に関係する遺構は検出されず、複数の時代にわたる集落跡や墳墓遺構が検出されたため、関係機関と協議の上、難波野遺跡として報告することとした。

今回の調査は、京都府土木建築部の依頼により、同部が計画・推進する国道178号線府中道路新設改良事業(通称「府中バイパス」)に先だって、平成14年度から継続して実施している試掘調査および発掘調査である。

調査は、当調査研究センター調査第2課課長補佐兼調査第2係長奥村清一郎、調査第2係次席総括調査員伊野近富、同主任調査員松井忠春、同専門調査員石尾政信が担当した。

現地調査は、平成16年9月15日に着手した。難波野遺跡では、調査予定地の草刈作業の後、重機掘削を開始した。重機掘削の終了後に人力による掘削作業を行い、遺構・遺物の有無、基本的な層位の把握を目的として記録作業を実施した。また、難波野遺跡については、12月21日に関係者説明会を実施した。現地調査は、平成17年2月21日に終了した。調査面積は1,500㎡である。



第1図 掘削作業風景(南東から)

調査にあたっては地元自治会のほか、関係諸機関の御指導・御協力があつた<sup>(注1)</sup>。また、現地調査・整理作業には、地元住民の方々などの参加・協力があつた<sup>(注2)</sup>。記して感謝したい。

なお、発掘調査に係る経費は、全額、京都府土木建築部が負担した。



第2図 測量作業風景(南東から)

## 2. 位置と環境

大垣遺跡・一の宮遺跡・難波野遺跡は、日



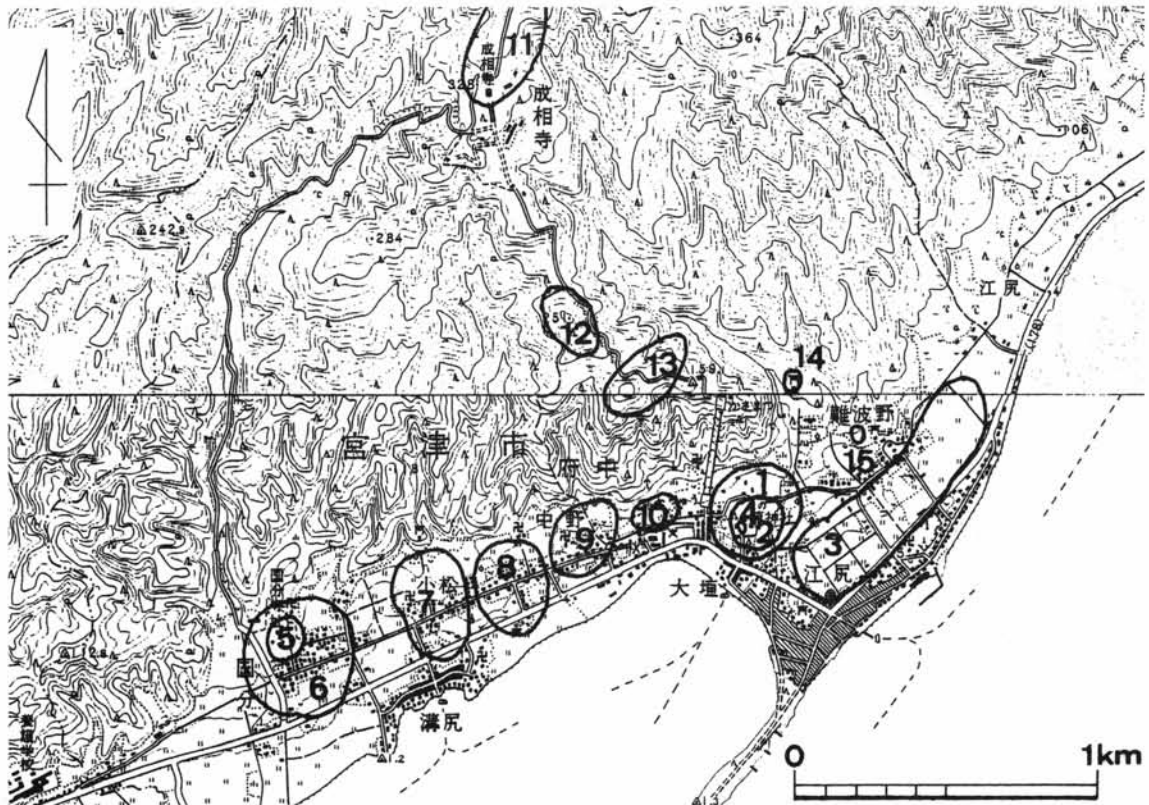
第3図 関係者説明会風景(南東から)

本三景の一つ天橋立の北側、成相山系と阿蘇海・宮津湾に挟まれた狭小な緩斜面上に立地している。

大垣遺跡・一の宮遺跡は、前者が後者を包括し、丹後一の宮である籠神社を中心に展開する奈良時代から中世にかけての集落遺跡と推定されている。ただ、籠神社周辺では弥生時代中期の遺物も採取されており(一の宮遺跡)、遺跡の成立は弥生時代中期まで、大きく

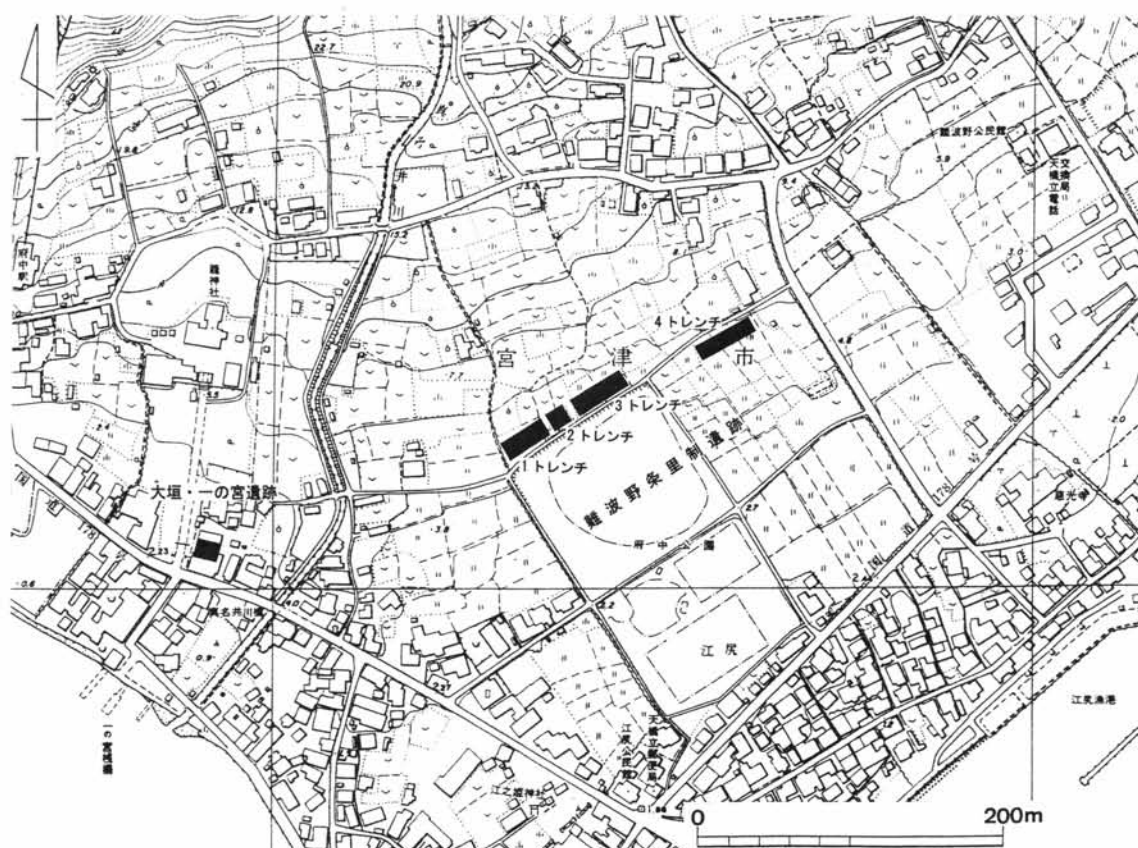
遡る可能性もある。なお、平成15年度に当調査研究センターが実施した同遺跡の調査では、国道178号線とほぼ平行する中世の溝や路面状遺構、柵列などを検出している。

難波野遺跡は、府中から国道178号線を伊根町方面へ進んだ左手、江尻集落の北西側に広がる。一帯の農道や水田畦畔を観察すると、およそ一町(約109m)四方の方形区画が連続して認められ、古代律令制に伴って設けられた条里制地割が踏襲されたものではないかと指摘されてきた。平成15年度に当調査研究センターが実施した一帯の試掘調査では、残念ながら方形区画が古代まで遡ることを確認することはできなかったが、奈良時代から中世の溝や土坑、柱穴などを検出すると



第4図 調査地および周辺主要遺跡分布図(国土地理院1/25,000日置・宮津)

- |           |             |                  |               |
|-----------|-------------|------------------|---------------|
| 1. 大垣遺跡   | 2. 一の宮遺跡    | 3. 難波野(難波野条里制)遺跡 | 4. 籠神社(籠神社経塚) |
| 5. 丹後国分寺  | 6. 国分遺跡     | 7. 小松遺跡          | 8. 安国寺遺跡      |
| 9. 中野遺跡   | 10. 慈光寺遺跡   | 11. 成相寺旧境内       | 12. 阿弥陀ヶ峰城跡   |
| 13. 今熊野城跡 | 14. 真名井神社経塚 | 15. 難波野千対地藏遺跡    |               |



第5図 大垣遺跡・一の宮遺跡・難波野遺跡トレンチ配置図(宮津市都市計画図1/2,500に加筆、縮小)

ともに、古墳時代から中世の大量の遺物が出土した。

阿蘇海沿岸域でも、宮津市字府中を中心とする国分から江尻、難波野にかけての一带は、成相山系から幾筋もの小河川が阿蘇海・宮津湾に注ぎ込み、扇状地が連なった平地部を形成している。この平地部も現在の国道178号線付近に形成された海岸段丘を境に、海に面した低地部と山麓の高台部とに大きく分かれる。うち、後者に相当する段丘面から背後に迫る丘陵裾部までの高台部は、大雨時に小河川沿いに発生する土石流などの危険はあるものの、比較的安定した地勢をなし、縄文時代から室町時代にわたる各時代の遺跡が濃密に分布している。その状況は第4図に示したとおりである。

当地が「府中」と呼ばれるのは、この地に丹後国府が置かれて以後のこととされるが、実際、丹後国府跡の所在地は諸説あるものの、いまだ明らかでない。その候補地の一つとして、また丹後国分尼寺跡の推定地として中野遺跡(第4図9)をあげる説もある。中野遺跡からは、奈良～室町時代にかけての遺構・遺物が検出されており、なかでも輸入陶磁器の出土点数の多さは阿蘇海周辺の遺跡では群を抜いていることが注目される。しかし、現状では、この遺跡を国府跡あるいは国分尼寺跡とするには決め手に欠いており、今後の調査と研究が期待される。

丹後国分寺跡は、宮津市字国分の地に礎石・基壇などが残されているが、この遺構群は創建当時のものではなく、『丹後国分寺再興縁起』に記された再建時(1326～1334)のものであり、創建時の遺構については確認されていない。

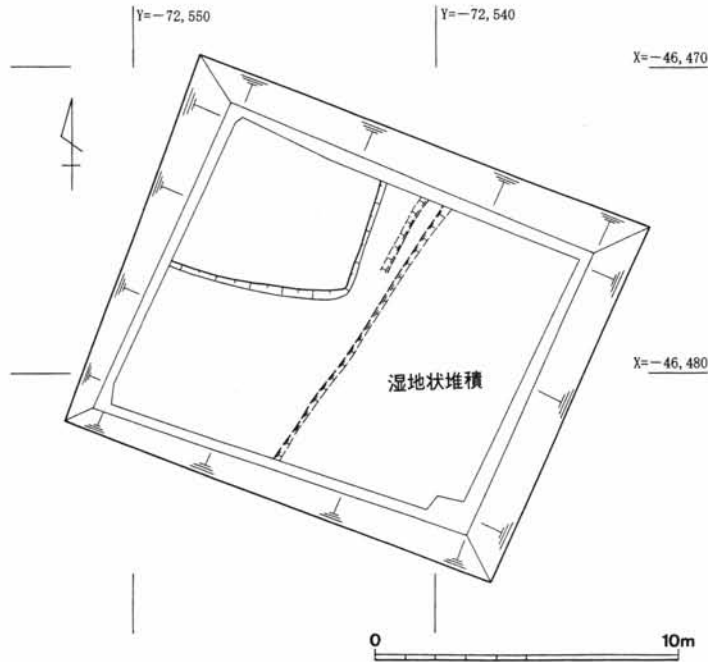


天橋立の東側の付け根、今回調査地の西方約200mの成相山麓には、丹後一の宮である籠神社が所在する。籠神社には国宝の海部氏系図のほか、多数の重要文化財が伝えられている。境内から発見された経塚出土品もその一つで、文治4(1188)年采女秋重などが法華経を納めたことを記す銘文を有する銅製経筒や銅鏡2面などがある。なお、今回の調査地付近では、籠神社経塚のほか、真名井神社経塚が近隣に所在する。

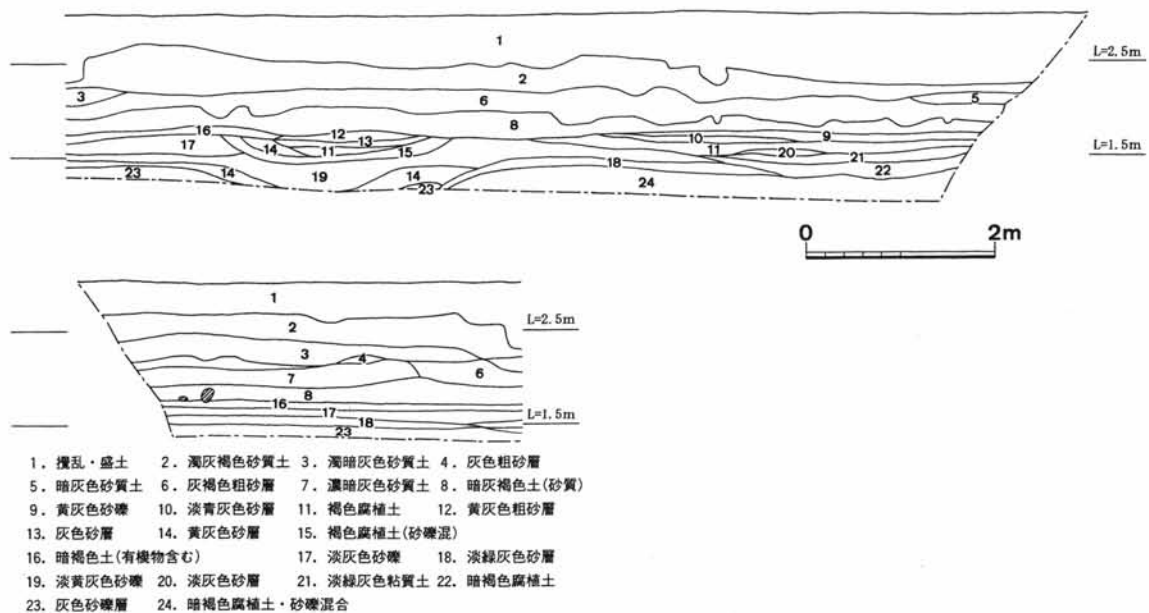
成相山中腹の標高330m付近には、慶雲4(704)年開山との寺伝をもつ山岳寺院の成相寺があり、現在も古本堂と呼ばれる地区を中心に堂坊の跡と思われる平坦面が多数みられる。それより南方

の府中の裏山には、阿弥陀ヶ峰城跡、今熊野城跡などの中世山城跡も所在する。

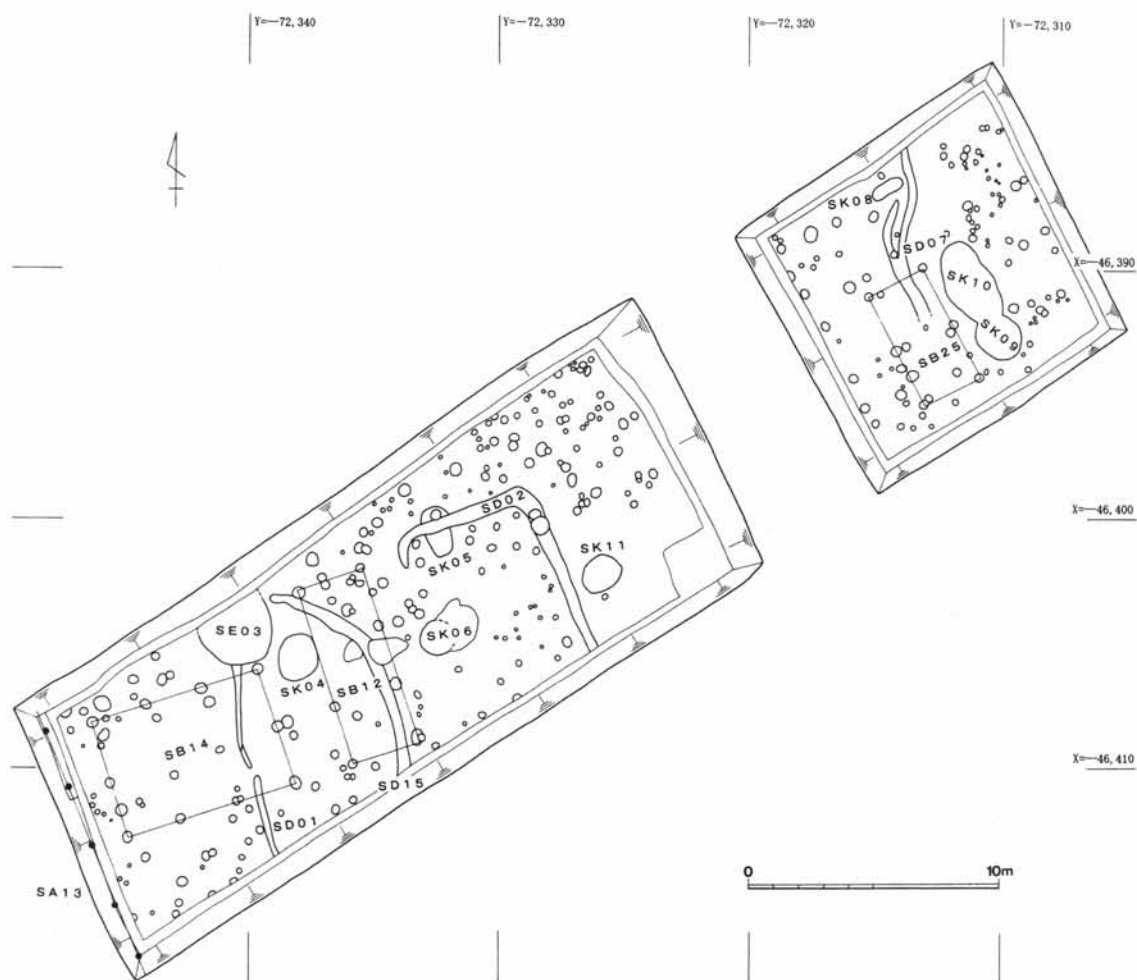
こうした遺跡以外に注目されるのが、雪舟等楊(1420~1506?)が描いた『天橋立図』である。天橋立を中心に当時の府中の様子が詳しく描かれている。この絵画資料に記されている地名は、現在も小字名にみることができ、中世の府中の様子を復原するうえで、大きな手がかりを与えてくれるものである。



第6図 大垣遺跡・一の宮遺跡平面図



第7図 大垣遺跡・一の宮遺跡土層断面



第8図 難波野遺跡1・2トレンチ平面図

### 3. 調査概要

調査の対象となった遺跡は、成相山系の今熊野から天橋立に向かう真名井川を境に、右岸に所在する大垣遺跡・一の宮遺跡と、左岸に展開する難波野遺跡に二分される。

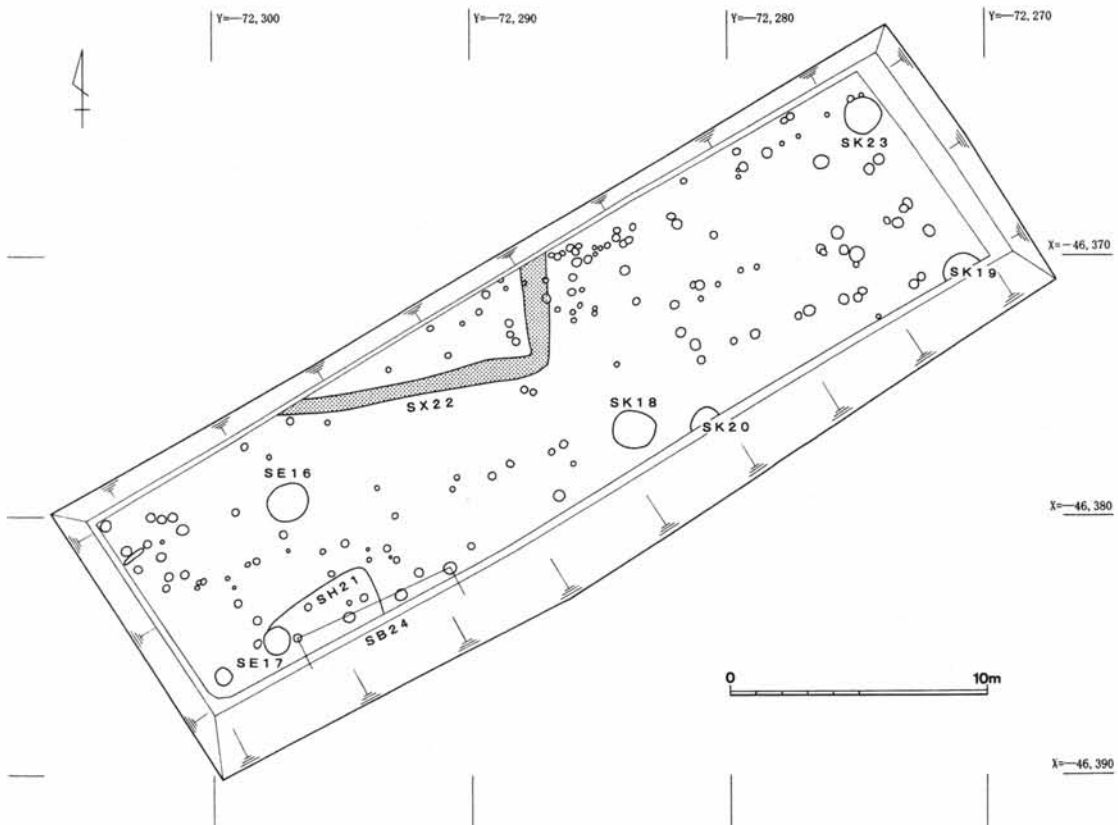
#### (1)大垣遺跡・一の宮遺跡

大垣遺跡・一の宮遺跡では、籠神社鳥居の東側、平成14年度の試掘調査で大量の木製品が出土した10トレンチに近接して、1か所のトレンチ(1トレンチ)を設定した。

1トレンチ 基本層序は攪乱・盛土の下に、砂質土・砂層・砂礫層が堆積している。トレンチ北西部でやや安定した砂礫堆積を検出した。東部は暗褐色腐植土・砂礫混合の湿地状堆積層を確認した。顕著な遺構は認められなかったが、腐植土などが堆積する湿地状堆積層から箸・曲物底板などの木製品、白磁椀、土師器皿・台付皿(器台)、渡来銭、桃・梅などの種子類など、多量の遺物が出土した。

#### (2)難波野遺跡

難波野遺跡は、真名井川が形成した扇状地の中央付近にあたる。平成15年度に実施した試掘調査の結果に基づき、府中グランドの北側で3か所のトレンチ、府中公園の東側で1か所のトレンチを設定した。西側から1～4トレンチと呼称する。各トレンチの概要は以下のとおりである。



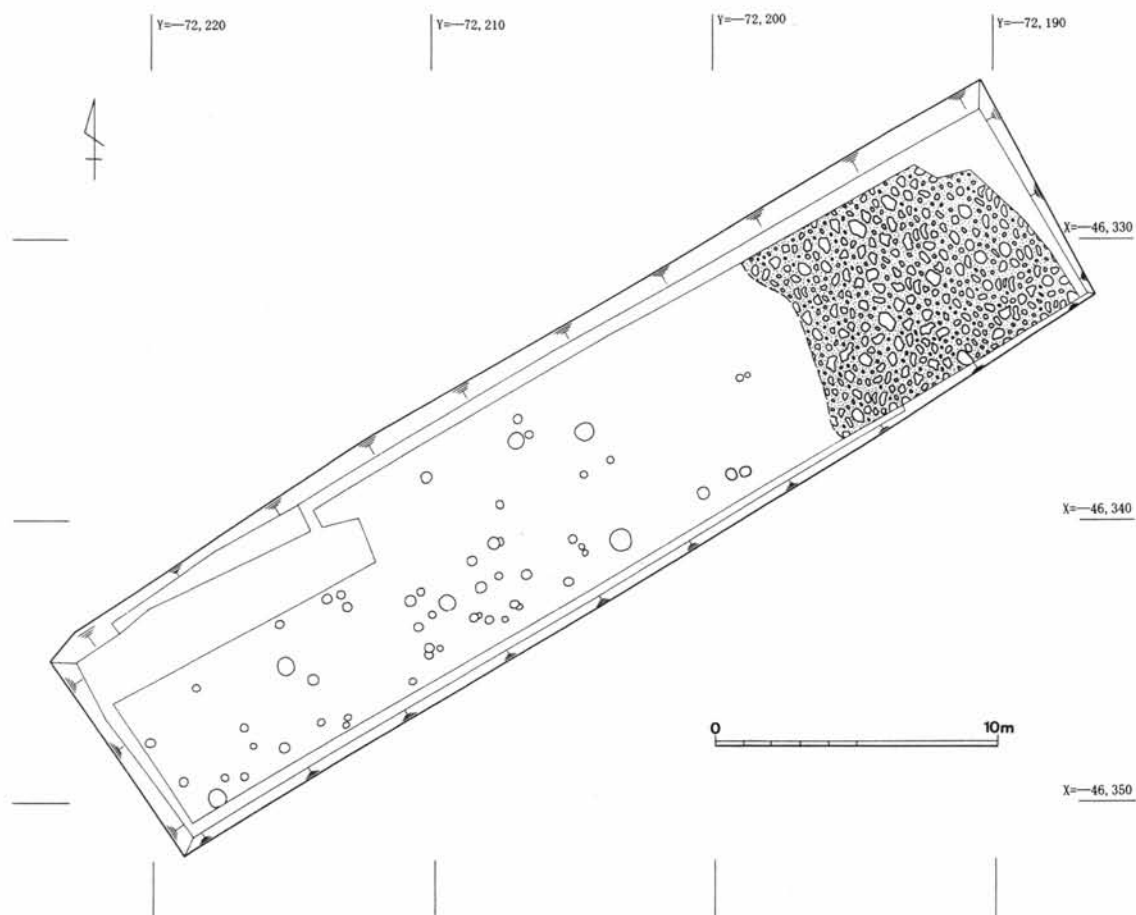
第9図 難波野遺跡3トレンチ平面図

1 トレンチ 幅12m、長さ30mのトレンチである。古墳時代中期を中心とした遺物包含層を掘り込んだ平安時代後期～中世の縦板組井戸 S E 03、掘立柱建物跡 S B 12・14のほか、多数の柱穴・溝・土坑などを検出した。暗褐色砂礫堆積層の数か所に土器が集中する場所がみられ、中心部では東西約2m、南北約1mの範囲に古墳時代の土器が集中していた。遺物包含層の下は、西部では、淡褐色～淡黄色褐色の砂層で起伏があり、上層との境界に古墳時代の土器が堆積していた。中央から東では、暗褐色砂礫層の下が20～50cmの礫を含む褐色砂礫でほとんど遺物を含まない、大きな礫は1トレンチ中央部より東、2トレンチにかけて見られるので、この範囲が古墳時代以前の土石流の中心部と推定される。

古墳時代の遺物包含層からは、土師器高杯などの多量の土器のほか、手づくね土器・管玉・小玉・有孔円盤(ボタン形)・紡錘車などが出土している。

2 トレンチ 幅12m、長さ12mのトレンチである。1トレンチと同様な遺物包含層があり、掘立柱建物跡 S B 25や平安時代後期～中世の多数の柱穴・土坑を検出した。褐色砂礫層面で古墳時代中期の土器が出土する溝 S D 07を検出した。トレンチ中央から南部の断ち割り調査の結果、暗褐色砂礫層の下は1トレンチと同様に大きな礫が堆積していた。

3 トレンチ 幅12m、長さ38mのトレンチである。1・2トレンチと同様に遺物包含層は西部で厚く堆積しているが、中央付近から東部にかけて薄くなる。平安時代後期～中世の遺構では、縦板組井戸 S E 16、石組井戸 S E 17、廃棄土坑 S K 19、掘立柱建物跡 S B 24などを検出した。古



第10図 難波野遺跡4トレンチ平面図

墳時代の遺構では竪穴式住居跡 S H21を検出した。また、方形貼石墓の一部と推定される「L」字状の貼石遺構(S X22)を確認している。今回の調査では、貼石遺構 S X22南部の断ち割りで、砂層・砂質土の下に幅4 m以上の周溝が存在することを確認したが、調査期間などの関係から、本遺構の詳細な調査は次年度に行うことになった。

4トレンチ 幅9 m、長さ38mのトレンチである。トレンチ中央部から西部で多数の柱穴を検出した。トレンチ東部では50cm以上の礫を含む土石流の堆積層を検出した。この土石流から古墳時代中期の遺物や奈良時代～中世の土器・渡来銭などが出土した。

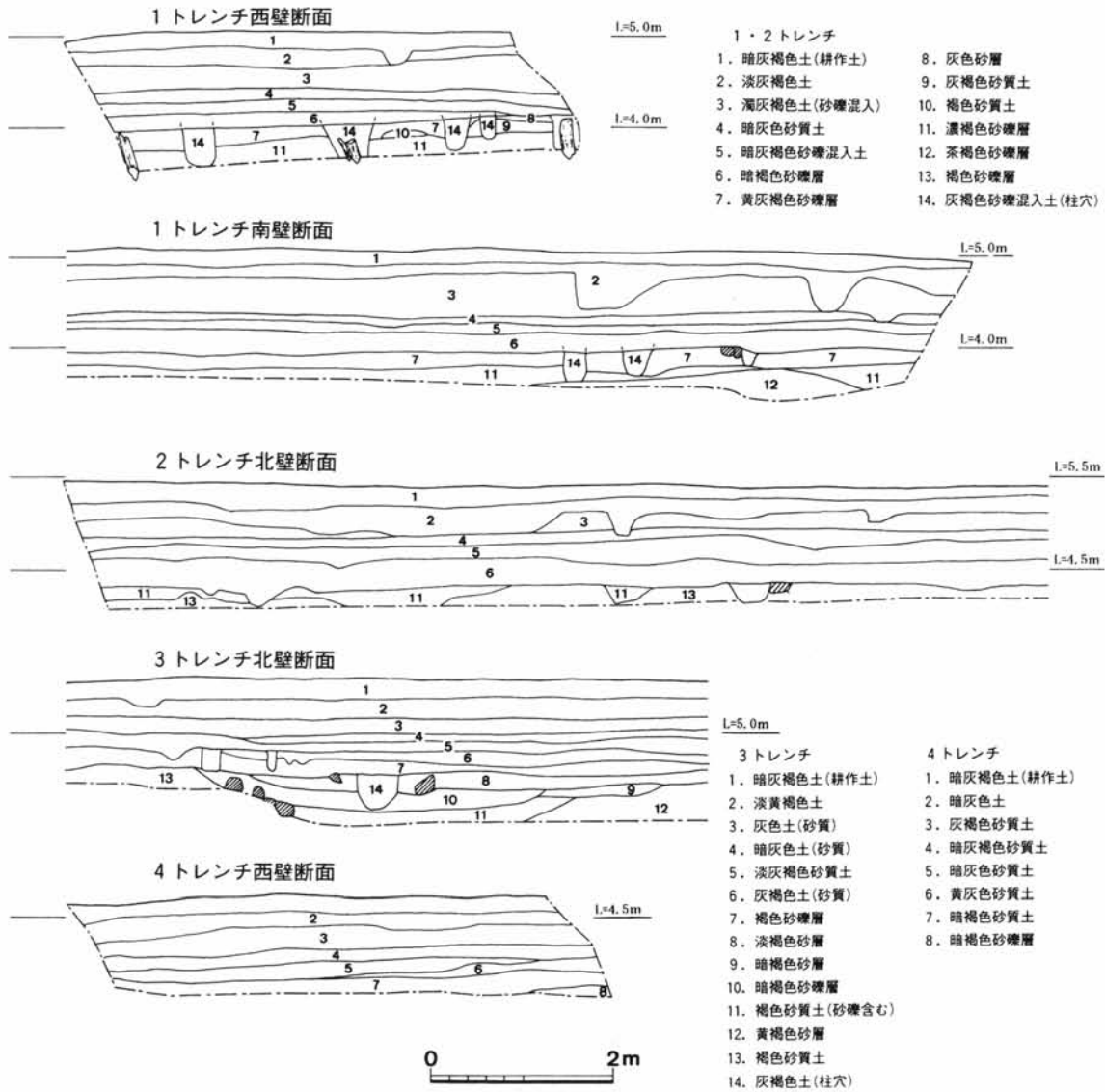
#### 4. 難波野遺跡の検出遺構(第8～10図)

##### (1) 平安時代～中世の遺構

溝 S D01 1トレンチで検出した北から南へ下がる幅約0.2m、深さ5 cm前後の砂堆積の溝である。溝の上面で土師器皿が出土した。

溝 S D02 1トレンチで検出した方形状にめぐる溝で、幅0.5～0.8m、深さ0.2m前後を測る。東辺溝の方位は、北から約20°西に振れている。12世紀後半～13世紀前半の土師器皿が出土した。

井戸 S E03 1トレンチで検出した直径約3 m、深さ約0.7mの円形掘形の中央部に、縦板組横棧止めの木製井戸枠を設置した井戸である。縦板と横棧の一部が残存しており、縦板の裏側に



第11図 難波野遺跡土層断面図

50cm前後の石が縦板を留める様に置かれていた。井戸枠内から黒色土器碗などの12世紀後半の土器が出土した。

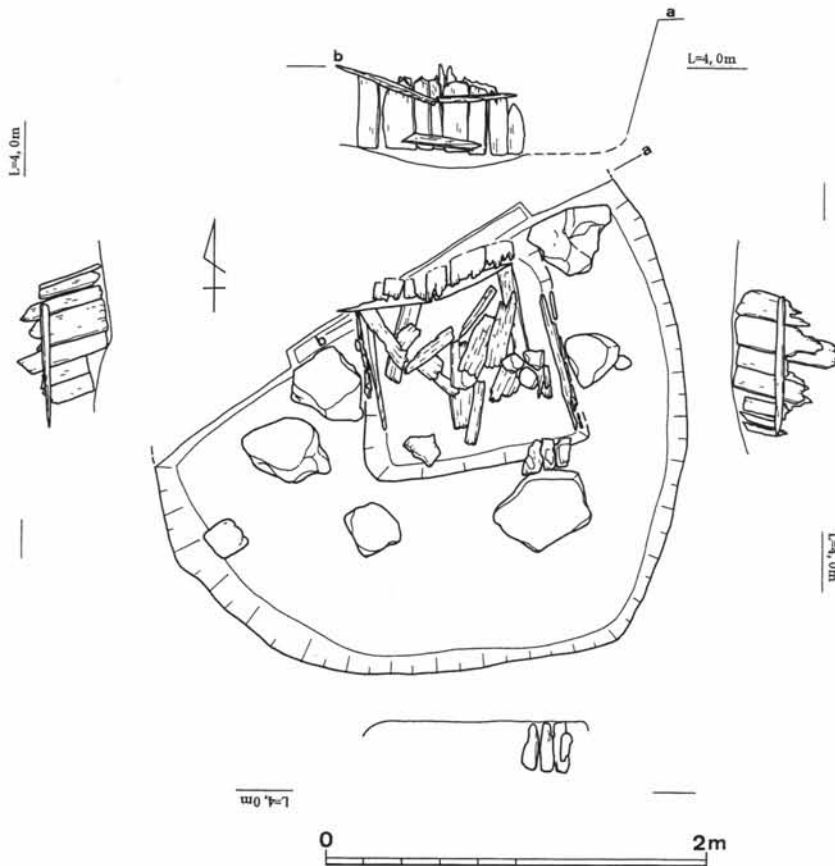
土坑 S K 04 1 トレンチで検出した径1.6~1.8m、深さ約25cmを測る円形土坑である。

土坑 S K 05 1 トレンチで検出した直径約1.9m、短径約1.1m、深さ約0.4mを測る土坑である。土師器片が出土した。

土坑 S K 06 1 トレンチで検出した直径約1.2m、深さ約0.5mを測る土坑である。東側に掘り直しと思われる土坑が連続する。土坑内に桶のたが状の木質がわずかに残存していたので、井戸の可能性はある。

溝 S D 07 2 トレンチで検出した北から南へ下がる砂堆積の溝である。南で幅約0.5m、深さ0.15mを測る。溝の途中で土坑 S K 08 付近からの溝が合流する。古墳時代中期の土器などが出土した。

土坑 S K 08 2 トレンチで検出した長さ1.4m、幅0.5mを測る長円形の土坑である。



第12図 井戸 S E 03 実測図

土坑 S K 09 2 トレンチで検出した長径3.5m、短径1.9m、深さ0.3mを測る長円形の土坑である。20cm前後の礫が多数堆積していた。

土坑 S K 10 2 トレンチで検出した直径約1.7m、深さ0.5mの円形土坑である。土師器片が出土した。

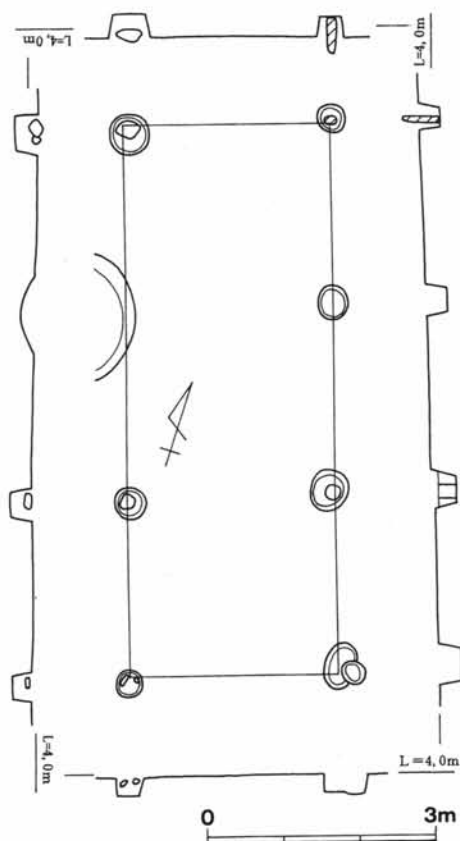
土坑 S K 11 1 トレンチで検出した径1.3m×1.6m、深さ0.5mの円形土坑である。礫が堆積していた。

掘立柱建物跡 S B 12 1 トレンチで検出した円形柱穴で、南北3間×東西1間の建物に復原できる。南北柱間は2.4m前後、東西柱間は2.7m前後を測る。北東隅の柱穴に柱根が残存していた。建物方位は、国土座標軸の北から約18°西に振れている。

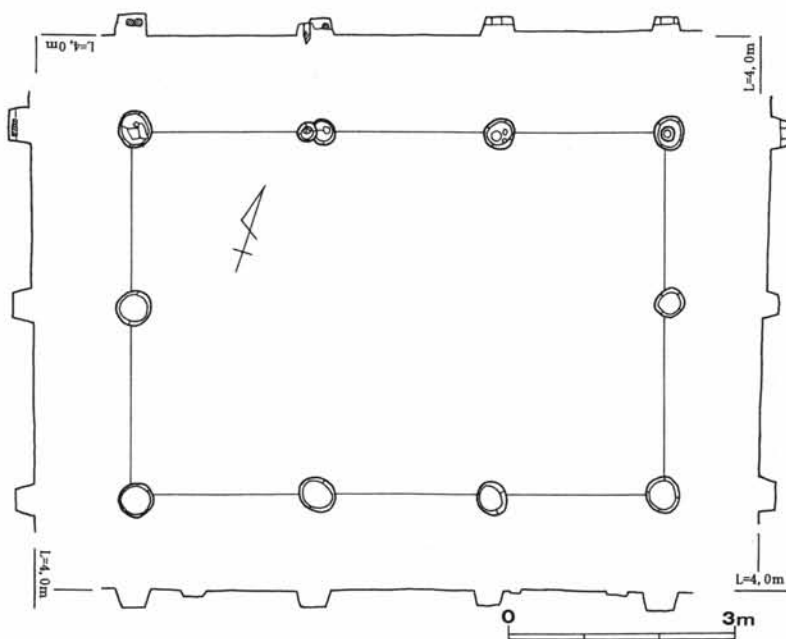
柵列 S A 13 1 トレンチ西壁で検出した南北方向に並ぶ柱列である。先端を尖らせた板状柱根が残存していたので、建物跡ではなく柵列と復原した。柱根が4か所と北端で柱穴1か所を確認した。柱間は2.5~2.3mを測る。方位は掘立柱建物跡 S B 13 とほぼ同じである。

掘立柱建物跡 S B 14 1 トレンチで検出した円形柱穴で、東西3間×南北2間の建物跡に復原できる。東西・南北柱間とも2.4m前後を測る。建物方位は北から西に約18°振れている。

井戸 S E 16 3 トレンチで検出した径1.4m×1.6mの円形掘形に、隅柱横棧止縦板組の井戸枠を据置いた井戸である。井戸枠の内法は約90cmを測る。縦板には幅40cm、厚さ6cmを測るものがある。井戸枠内から多数の木製品・土器類に混じり、竹の残欠が出土した。出土土器から12世紀



第13図 掘立柱建物跡 S B 12実測図



第14図 掘立柱建物跡 S B 14実測図

後半～13世紀前半に埋められたと思われる。

**井戸 S E 17** 3トレンチで検出した。直径約1m、深さ45cmを測る。底に円形に石を巡らせていたので石組井戸と思われる。

**土坑 S K 18** 3トレンチ中央で検出した径1.3m×1.6m、深さ0.3mの円形土坑である。中に礫が多く含まれる。土師器皿が出土した。

**土坑 S K 19** 3トレンチ北東隅で検出した直径約1.5m、深さ0.5mを測る廃棄土坑である。12世紀後半～13世紀前半の土器が出土した。

**土坑 S K 20** 3トレンチ中央で検出した直径約1.3m、深さ35cmを測る円形土坑である。

**土坑 S K 23** 3トレンチの北東で検出した直径約1.5m、深さ約0.3mを測る円形土坑である。礫が堆積していた。

**掘立柱建物跡 S B 24** 3トレンチで検出した円形柱穴で、東西方向に4か所の柱穴を確認し、建物は南方向に延びると推定される。柱間隔は2.25

mを測る。柱穴の2か所に柱根が残存していた。方位は、北から約26°西に振れている。

**掘立柱建物跡 S B 25** 2トレンチで検出した円形柱穴で、東西2間×南北3間の建物跡に復原できる。東西・南北とも柱間隔は2.45m前後を測る。柱方位は、北から約26°振れている。

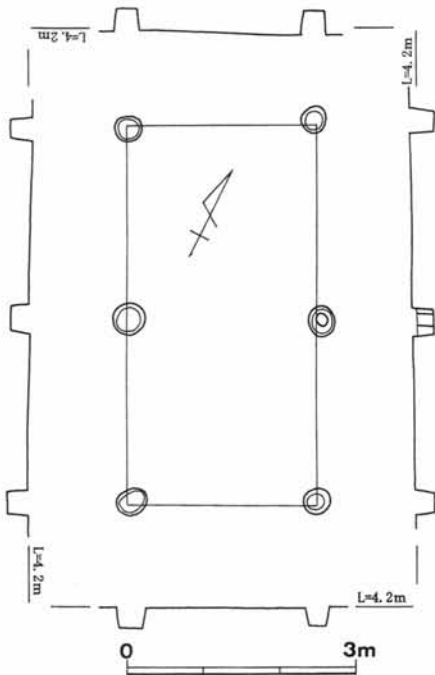
(2) 古墳時代以前の遺構

**溝 S D 15** 1トレンチ中央で検出した北から南へ下がる砂堆積の溝である。幅約0.4m、深さ5～15cmを測る。古墳時代の土器溜まりを分断している。古墳時代の土器が出土した。

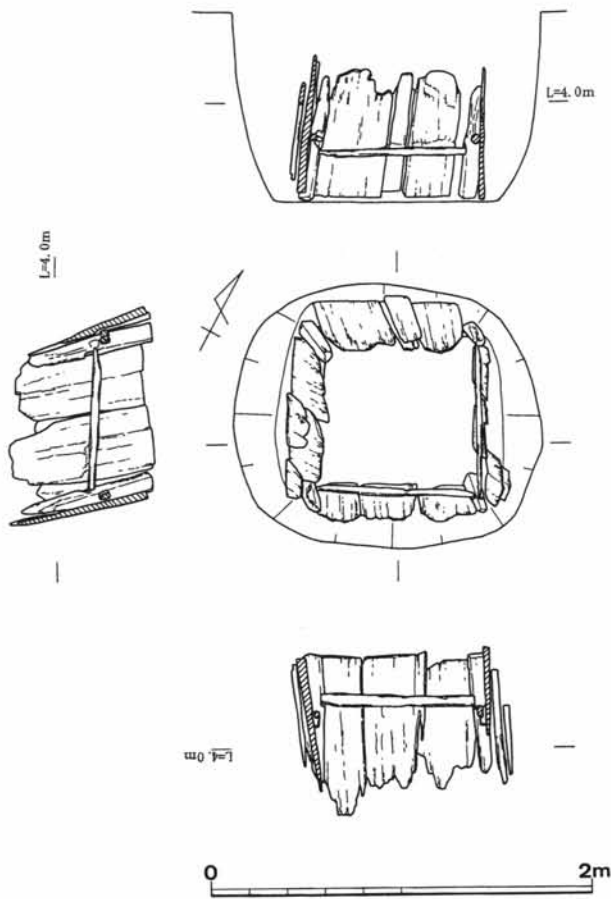
**竪穴式住居跡 S H 21** 3トレンチで検出した。西隅を井戸 S E 17で壊されているため不明なこ

ともあるが、1辺4 m以上の方形竪穴式住居跡と推定される。東辺と北辺に周壁溝を確認した。北辺で深さ約0.4 mを測る。主柱穴は不明である。床面に浅い溝が北隅から南に延びる。古墳時代中期の土器が出土した。

貼石遺構 S X 22 3 トレンチで検出した斜面に石を貼り付けた遺構である。貼石が、南東隅から東西・南北方向に延びることを確認した。規模は、東西方向で約16 m、南北方向で約4.3 mをそれぞれ測る。方形貼石墓の南東隅と推定される。貼石南辺の断ち割り調査で、周溝と推定される幅4 m以上の暗褐色砂礫層の堆積を確認できた。貼石周辺から古墳時代の土器とともに弥生時代中期の土器が出土した。



第15図 掘立柱建物跡 S B 25実測図



第16図 井戸 S E 16実測図

### 5. 出土遺物

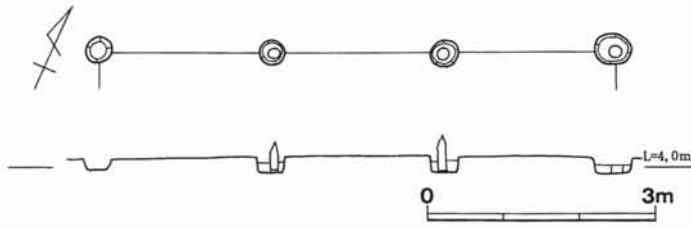
今回の調査ですべての調査トレンチから数量の差はあるが遺物が出土している。図示したのはその一部分である。以下、に簡単に記述する。

#### (1) 大垣・一の宮遺跡出土遺物(第19・20図)

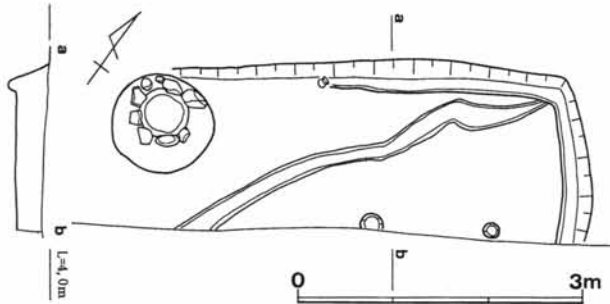
腐植土などが堆積する湿地状堆積層から、箸・曲物底板などの木製品、土師器皿・台付皿(器台)、青磁椀、渡来銭などが出土した。

1は扁平な底部から外上方に開く口縁部をもつ土師器皿で、湿地状堆積層の西側砂礫層から出土した。2・3は口縁部外面を1段横ナデする土師器皿であ





第17図 掘立柱建物跡 S B24実測図



第18図 竪穴式住居跡 S H23実測図

る。4～6は土師器皿で、底面糸切り底である。7～9は土師器碗の底面糸切り底である。10～15は、これまで台付皿と分類されていたものである。7のように扁平な皿部分に糸切り底の台が付くものを基準としていた。この形態のものは少数で、8のように皿部分の底が深いもの、12のように皿の機能をもたず、皿部分の底が台(脚)部分まで達するものもある。上面に別のものをのせる機能を重視した産物であろう。この形態のものをここでは土師器器台Aとした。大量に出土している。また、台

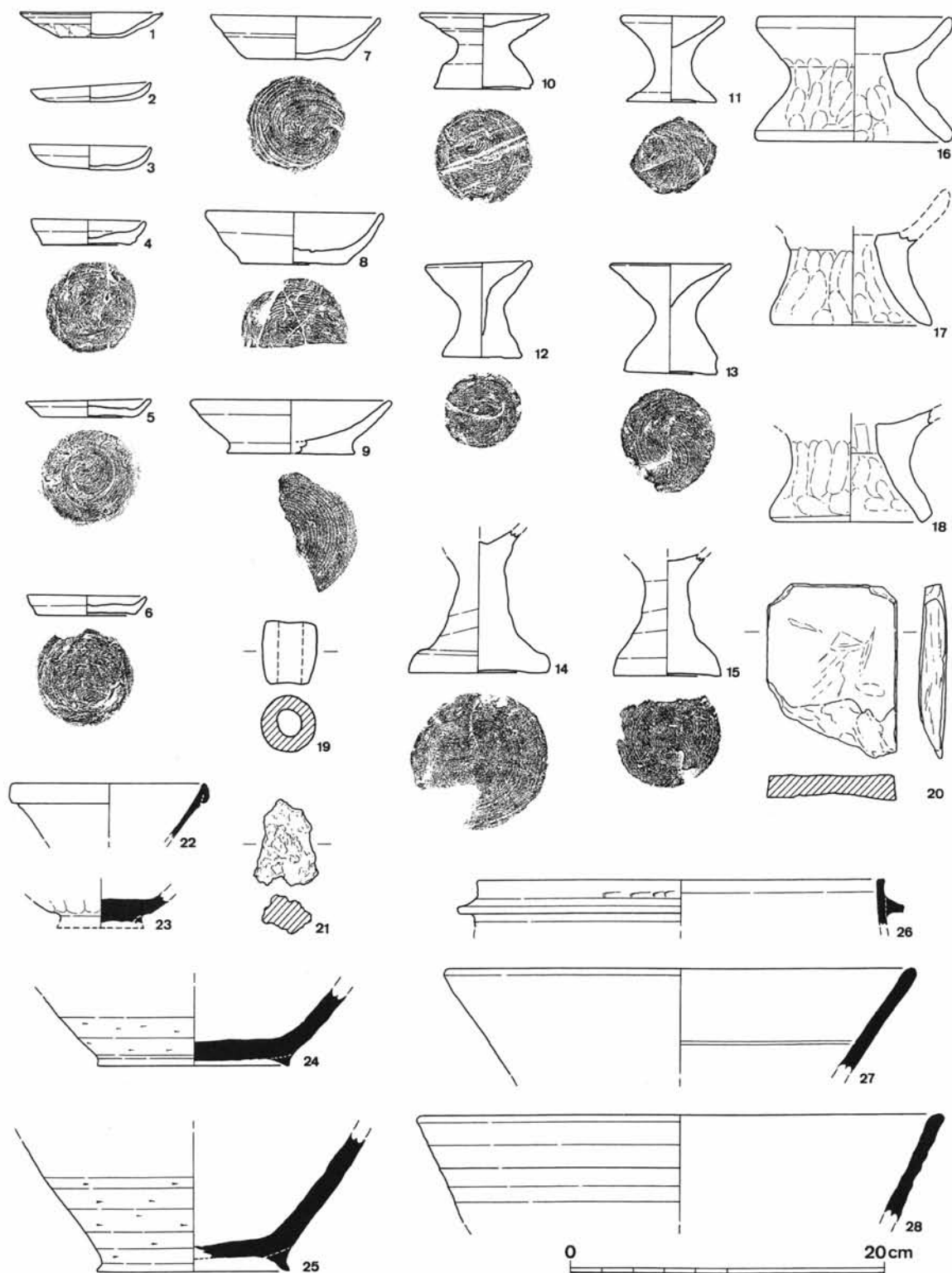
部の長いものもある(14・15)。いずれも淡褐色の胎土でロクロ成形である。底のない碗に台を付けたような形態のものを(16～18)土師器器台Bとした。16は口径12cm・器高8cmを測る。台部の内外面に指押さえ痕が明瞭に残る。19は滑石製の温石である。幅8.2cm、長さ11cmを測る。20は土錘である。体部径3.5cm、長さ4cmを測る。21は白磁碗の口縁部である。22は青磁碗の底部である。23は鉄滓である。24は土師器鍋である。25・26は、越前焼の練り鉢底部である。27・28は、越前焼の練り鉢口縁部である。2～27は湿地状堆積層から出土した。

木製品には次のものがある。29は曲げ物底板である。側面に側板を留めた孔が残り、断面にも留め孔がみられる。30～32も曲げ物底板である。33～35は折敷底板である。33・35には桜皮が残る。36は、糸巻き柁木状で十文字に組み合わされた中央を木釘で固定している。しかし、湾曲しているため把手の可能性もある。37～40は、用途不明である。40は板材に円形の孔がみられる。41はほぞ孔がみられる組み合わせ部材である。42は棒状製品である。43は長さ21.1cmを測る箸である。また、祥符通寶(1008年)が出土している。

## (2) 難波野遺跡出土遺物(第21～24図)

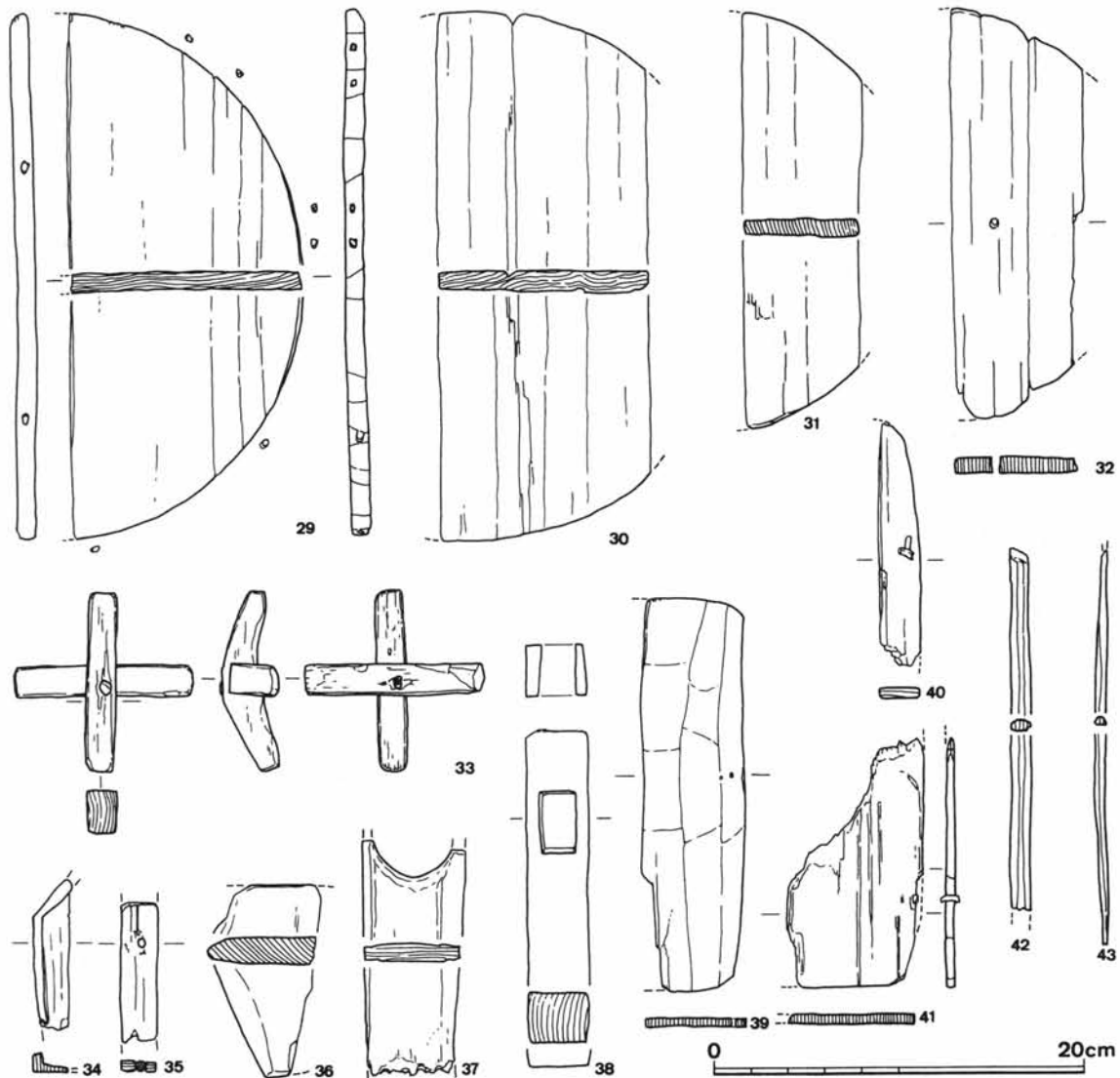
1～3トレンチの遺物包含層である暗灰褐色砂礫層から古墳時代～中世の遺物、暗褐色砂礫層から大量の古墳時代の遺物、若干の弥生土器などが出土している。出土遺構・出土地点を記さないものは、1トレンチ包含層から出土したものである。

44は、溝 S D02から出土した、口径12.8cm、器高3.5cmを測る土師器皿である。45～47は1トレンチ包含層から出土した、土師器皿である。45は口径11.5cm、器高2.7cm、47は口径12.4cm、器高3.1cmを測る。48は溝 S D02から出土した、口径8.1cm、器高1.5cmを測る土師器皿である。49・50は、1トレンチの柱穴から出土した土師器皿である。49は口径8.4cm・器高1.5cmを測る。51は、溝 S D01上面から出土した糸切り底の土師器皿で、口径8.6cm、器高1.5cmを測る。51・52



第19図 大垣遺跡・一の宮遺跡出土遺物実測図(1)

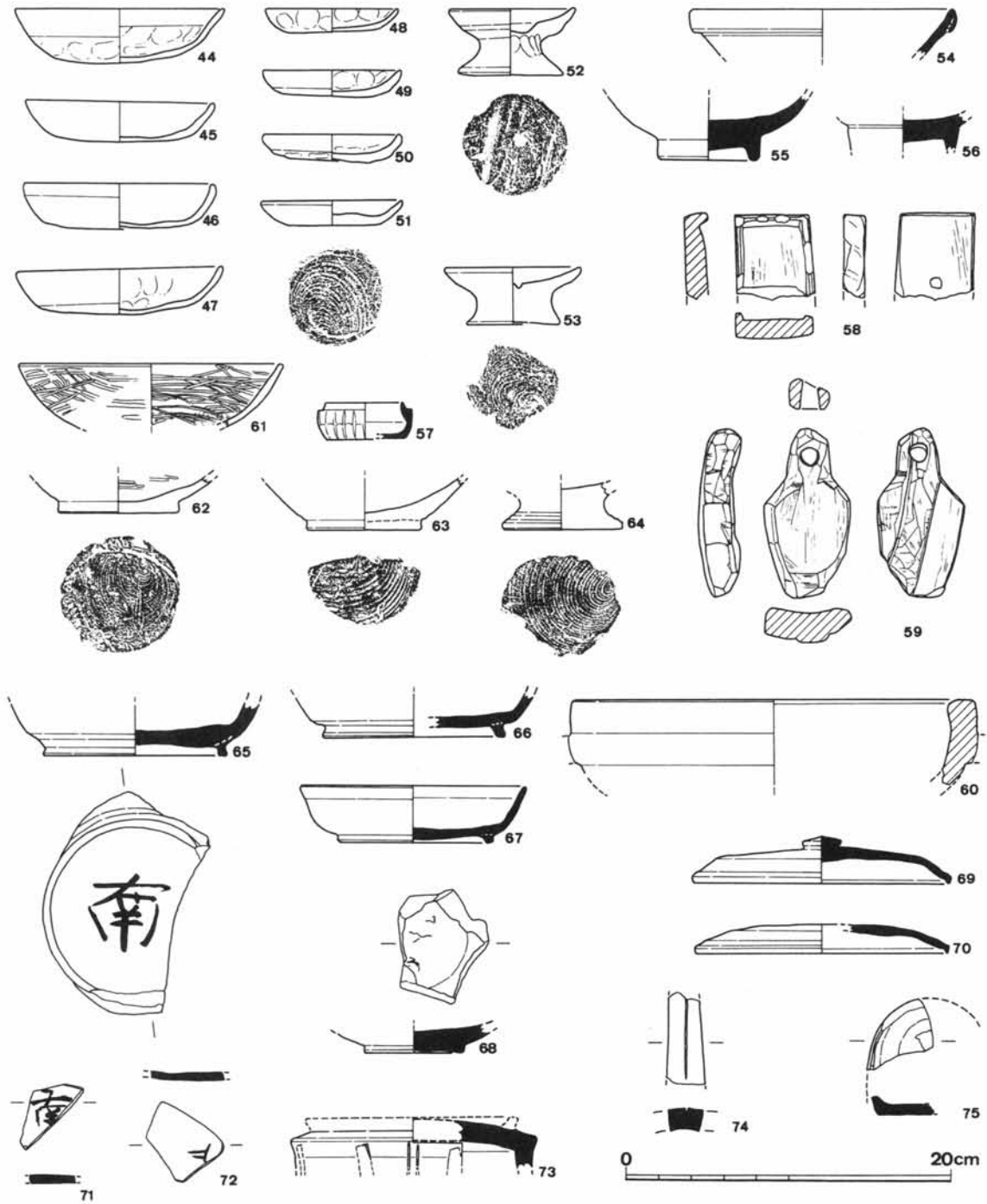
は土師器台付皿である。52は皿部内面に4か所の刺突窪みがあり、口径8.1cm、器高3.6cmを測る。54は白磁碗の口縁部で、口径16cmを測る。55は4トレンチから出土した青磁碗の底部である。55は白磁碗の底部である。57は白磁の盒子身である。58は滑石製のミニチュア硯である。裏面に方形の窪みがある。59は滑石製の石鍋を転用した温石である。片側をほぞ状に加工し、紐で吊り下げるための円形孔を穿つ。60は滑石製の石鍋である。



第20図 大垣遺跡・一の宮遺跡出土遺物実測図(2)

井戸S E 03木枠内出土土器(61~75) 61は内面黒色土器の椀口縁部である。口径15.8cmを測る。62・63は、内面黒色土器の底部である。糸切り底で、62は底径7.2cmを測る。64は土師器台付皿の底部である。これらは12世紀後半のものである。65は須恵器杯Bの底部で、底部外面に「南」と墨書している。底径11.1cmを測る。8世紀後半のものである。66も須恵器杯Bの底部である。67は4トレンチから出土した須恵器杯Bの底部である。68は須恵器底部で内面が平滑になり硯に転用されたと推定できる。69・70は、4トレンチ東端の土石流から出土した須恵器蓋である。69は口径15.8cm、器高2.9cmを測る。71は「南」と墨書された須恵器片である。72も墨書がある須恵器片である。73は須恵器円面硯で脚部に2本の線刻がある。74も須恵器円面硯の脚部である。75は小型の須恵器風字硯である。

井戸S E 16出土土器(76~80、82~91) 76・78は口径8cmの土師器皿、77の口縁部に油煙が付着し底部が回転ヘラ切り、78は底部糸切りである。79は口径14.8cm、器高2.8cmの土師器皿、82は口径8.7cm、器高4.8cmの台付皿で内面に刻み痕がみられ、83も口径9.4cm、器高4.3cmの台付皿で、

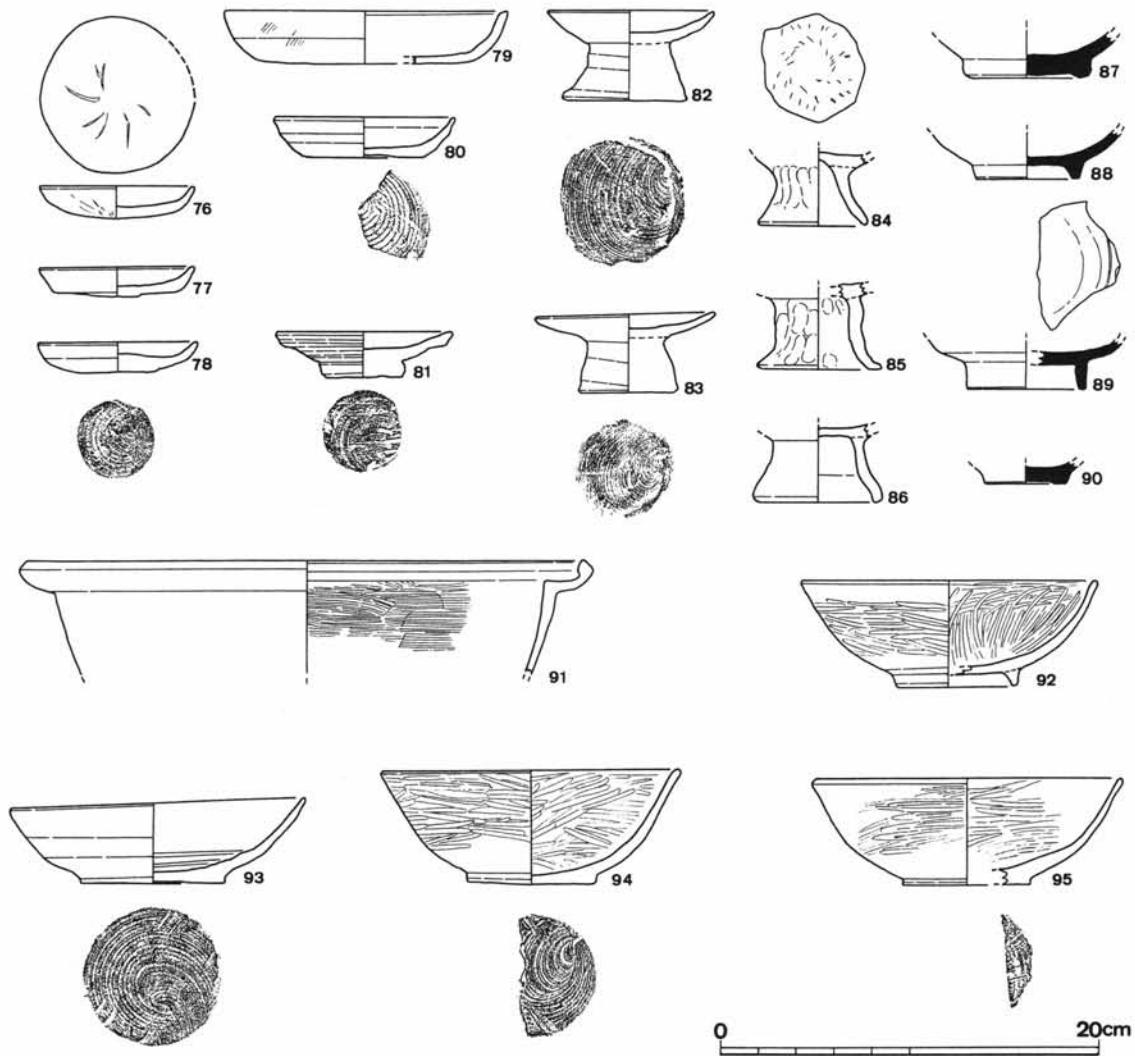


第21図 難波野遺跡出土遺物実測図(1)

皿部分の口縁部に油煙が付着する。84～86は、皿部分が欠けた台付皿の輪高台部分である。白磁碗の底部には高台の扁平なもの(87)、高台が断面三角形のもの(88)、やや高いもの(89)がある。90は扁平な白磁皿底部である。91は土師器鍋口縁部である。

81は土坑S K 18から出土した。ロクロ挽きで、底面糸切り底の土師器皿である。口径9.2cm、器高2.4cmを測る。胎土は緻密で明橙褐色を呈する。

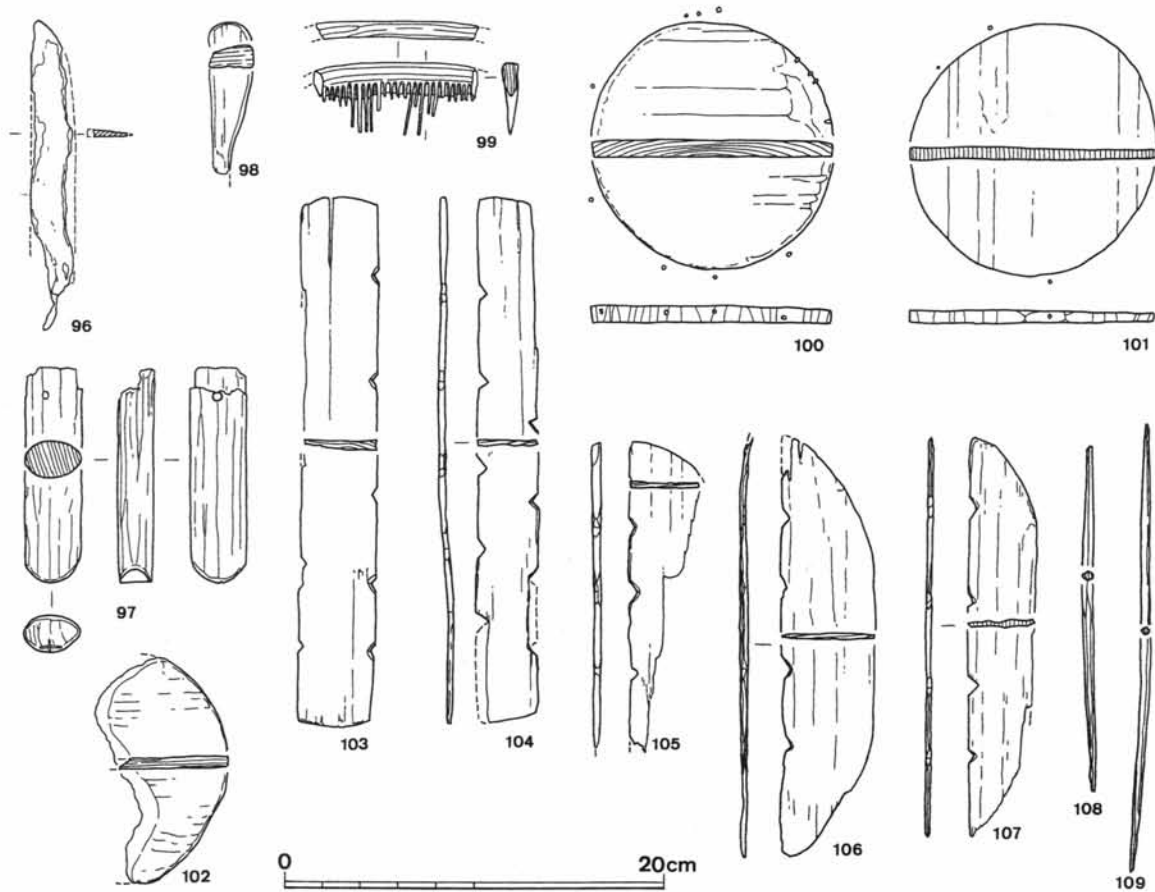
土坑S K 19出土土器には、内面黒色土器の碗のうち断面三角の輪高台が付くもの(92)、底部糸切りのもの(93～95)がある。93以外は、内外面を密に暗文を施す。80の土師器碗は底部糸切りで



第22図 難波野遺跡出土遺物実測図(2)

ある。75～95は12世紀後半～13世紀前期の遺物である。

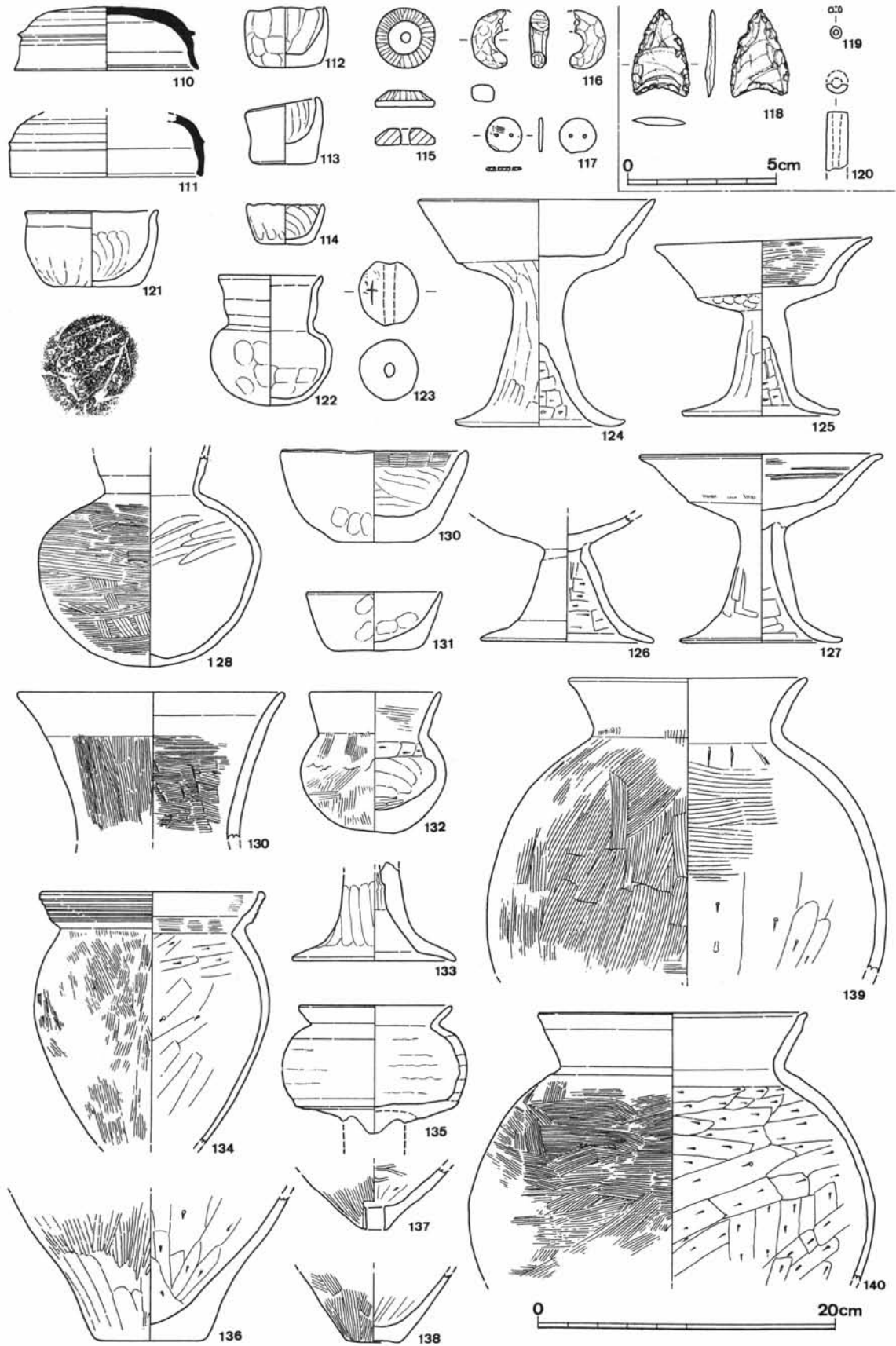
井戸S E 16出土木製品(96～110) 96は鉄製短刀の刃芯である。刃芯の残存長16.2cm、残存幅1.8cmを測る。97は短刀の柄で目釘孔があり長さ11.2cm、幅3cm、厚さ1.9cmを測る。98は用途不明製品である。99は横櫛である。100・101は曲げ物底板である。100は径12.7cm、厚さ0.9cmを測る。側面に側板を留めた目釘孔がみられる。103・104は用途不明木製品である。齋串に似ているが、両端が圭頭で側面からの切り欠きが左右対称でなく、切り欠きの間隔も不揃いである。103の切り欠きは片側5か所が確認でき、一部分欠損するが両側に5か所の切り欠きと推定される。104も同様と思われる。103は長さ27.6cm、幅5.1cm、厚さ0.2～0.5cmを測る。104は長さ27.4cm、幅3.3cm、厚さ0.35cmを測る。105～107も用途不明木製品である。半月状の形状で、片側の直線面に切り欠きをいれる。106は4か所の切り欠きがあり、長さ21.9cm、幅5cm、厚さ0.4cmを測る。103～107は、齋串に似ており井戸の祭祀に関連するものと思われる。また、竹筒残片が井戸S E 16から出土している。102は円盤の残欠である。108・109は両端を尖らせた箸である。109は長さ18.2cm、110は長さ23.5cmを測る。



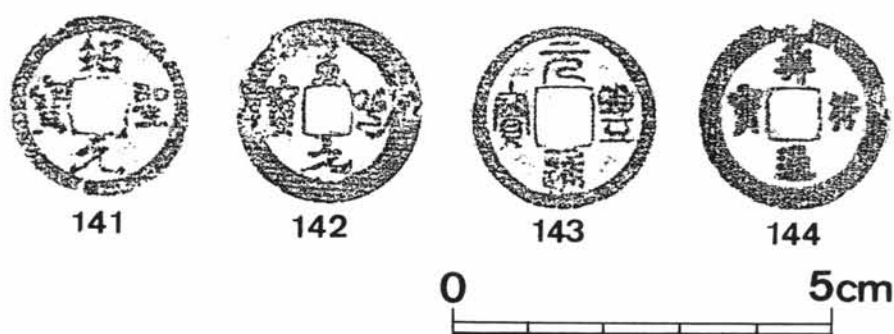
第23図 難波野遺跡出土遺物実測図(3)

このほか、1トレンチから紹聖元寶(1094年)と至道元寶(995年)が、4トレンチから元豊通寶(1078年)が出土している。

古墳時代以前の遺物(110~140) 110は須恵器杯蓋で、口径12.2cm、器高4.3cmを測る。胎土は精良で色調が暗灰色で灰色を呈す。111は溝SD15出土の須恵器杯蓋で、口径12.8cmを測り、胎土が精良で色調が淡青灰色を呈す。112~114は手づくね土器である。112は口径5cm、器高4cmを測り、胎土がやや粗く色調が淡褐色を呈す。113は口径4.4cm、器高4.4cmを測る。114は口径5cm、器高2.6cmを測り、3トレンチで出土した。115は径3.95cm、厚さ1.05cm、重さ24.6gを測る紡錘車である。116は頭部を欠損する土製勾玉である。残存長3.85cm、中央部の幅1.5cm、同厚さ1.1cmを測る。117は2か所に孔を穿つ有孔円盤である。径2.25~2.40cm・厚さ2.5mm前後、重さ2.72gを測る。118は長さ2.9cmの石鏃である。119は径4.3mm、厚さ1.5mm、重さ0.05gの小玉である。表面がやや風化して暗青灰色を呈す。120は残存長1.9cm、径7.3mm、重さ0.62gの管玉である。表面がやや風化して濁青灰色を呈す。115~120は1トレンチ中央部の土器集中部分に近接して出土している。121は土師器鉢で、底部に木の葉痕跡が残る。口径8.8cm、器高4.8cmを測り、胎土が良好で色調が明茶褐色を呈す。122は土師器小型壺で、口径6.8cm、器高8.6cmを測る。胎土がやや粗く色調が淡灰褐色を呈す。123は2トレンチから出土した高さ2.3cm、最大幅2cmを測る土錘である。124~127は土師器高杯である。124は口径16.8cm、器高15.1cmを測り、胎土がやや粗く色調が淡灰褐色を呈す。125は口径14.5cm、器高11.6cmを測り、胎土がやや粗く色調が淡



第24図 難波野遺跡出土遺物実測図(4)



第25図 大垣・一の宮・難波野遺跡出土渡来銭拓影

褐色を呈す。128は土師器直口壺の体部と推定され、体部径15cmを測る。129は土師器直口甕の口縁部と推定され、口径17.7cmを測る。130は土師器鉢で、口径12.3cm、器高6.2cmを測る。胎土はやや粗く3～5mmの白粒を含み、色調が明茶褐色を呈す。131は土師器鉢で、口径9cm、器高3.9cmを測る。胎土は精良で色調が淡茶褐色を呈す。132は土師器小型壺で、口径8.8cm、器高9.6cmを測る。胎土は精良で色調が淡茶褐色を呈す。133は土師器高杯の脚である。131～133は縦穴式住居跡S H21から出土した。134は、擬凹線口縁の弥生土器甕である。口径14.8cmを測り、胎土に褐色粒を含み色調が淡茶褐色を呈す。136は台付壺と推定され、135は、貼石遺構S X22の貼石の近接地から出土した弥生土器の底部である。底部内面をケズリ、外面をハケ調整し底部付近はナデる。胎土はやや粗く4mmの白粒を含み、色調が明茶褐色を呈す。弥生時代中期のものである。136は脚台を欠損する弥生土器鉢と推定される。137は溝S D07から出土した底部を穿孔した土師器甕底部と推定される。138は弥生土器底部と推定される。139は口縁部を開きぎみに「く」字に折り曲がる土師器甕である。140は口縁部を「く」字に折り曲げ、口縁端部引き上げる土師器甕である。121・130・139～140は、1トレンチ中央の土器集中地点から出土した。

## 5. まとめ

今回の調査で明らかになったことを列記し、まとめとしたい。

(1) 難波野遺跡では、地割りに係る溝など、条里制に関連する遺構を確認することはできなかった。しかし、平安時代後期～中世の井戸や建物跡、多数の柱穴を検出していること、1・2トレンチから出土した多量の奈良時代～中世の土器、4トレンチ検出の柱穴群などから、周辺に奈良時代～中世にかけての集落遺跡が展開していることが判明した。一帯の地形や遺物の散布状況などからみて、集落跡は西方の真名井川付近まで広がっている可能性が高い。

(2) 難波野遺跡の3トレンチでは古墳時代中期の縦穴式住居跡を検出し、1～3トレンチで多量の古墳時代の遺物が出土した。こうした点から周辺に同時代の集落跡が存在するものと推定される。また、出土遺物の中に、管玉・小玉・有孔円盤・土製勾玉・手づくね土器などが認められたことから、周辺にこの時期の祭祀に関連する遺構が存在していた可能性が高い。

(3) 現在の真名井川は、真名井神社西側の谷から籠神社の東側を通り阿蘇海に注いでいるが、中世以前には、真名井神社から府中公園を通り宮津湾に注ぐ最短距離を流れ、何度も氾濫を起し



ていたことが堆積層の観察から判明した。現在の真名井川は、意図的に流路を変更された可能性も考えられる。

(4) 難波野遺跡の1トレンチでは、奈良時代後期の墨書土器・円面硯・風字硯が出土していることから、一帯に識字層が居住していたと推定される。これらはほとんど磨滅しておらず、近接地から流されて堆積したもので、調査地点から上流(山側)の扇状地に、古代の官衙施設が所在していた可能性が高くなった。

(5) 宮津市において初めて方形貼石墓と推定される遺構が検出されたことは大きな成果であった。貼石墓は、京都府北部の6遺跡で検出例があり、次年度以降の調査が期待される。

(石尾政信)

注1 以下の関係諸機関・個人から御協力・御教示を得た。

京都府丹後郷土資料館・宮津市教育委員会・細川康晴・中畷陽太郎・東高志・原田三壽・佐藤晃一・加藤晴彦・椋平正盛(敬称略)

注2 調査参加者は、以下のとおり(順不同・敬称略)

作業員 岳崎巖・丸谷昭彦・桜井玲子・長谷川節子・中田由紀子・平田裕子・坂根宏則・井上喜代子・岡田代志乃・神南勝利・小林美里・岳崎伸子・平林徳江・牧野春生・丸谷隆・宮崎廣子・椋平克・山本邦男 調査補助員 小笠原順子 整理員 藤村文美・寺尾貴美子・村上優美子・丸谷はま子・春日満子

## 2. 先<sup>さきの</sup>ノ<sup>だん</sup>段遺跡発掘調査概要

### 1. はじめに

この発掘調査は、福知山市夜久野町(旧天田郡夜久野町)今西中地内において、平成17年一般府道小坂青垣線地域道路改良事業に先立ち、京都府土木建築部の依頼を受けて当調査研究センターが実施したものである。

先ノ段遺跡は、福知山市夜久野町今西中に所在する(第26図)。遺跡は、京都府遺跡地図<sup>(注1)</sup>には、弥生～古墳時代の土器片が分布する遺物散布地として登録されている。

今回の調査は、丘陵先端頂部の平坦地において、遺構の有無と遺跡の年代・性格などを確認するための試掘調査として実施した。調査は、当調査研究センター調査第2課課長補佐兼調査第2係長奥村清一郎、同調査員村田和弘が担当した。

調査は、対象地となる3地点において試掘トレンチを設定し、実施した。現地調査の期間は、平成17年12月13日～平成18年1月23日までである。調査面積は250㎡である。

調査にあたっては、京都府教育委員会・福知山市教育委員会(旧夜久野町教育委員会)ならびに地元自治会や地元住民の方々の御協力を得た。記して感謝したい<sup>(注2)</sup>。

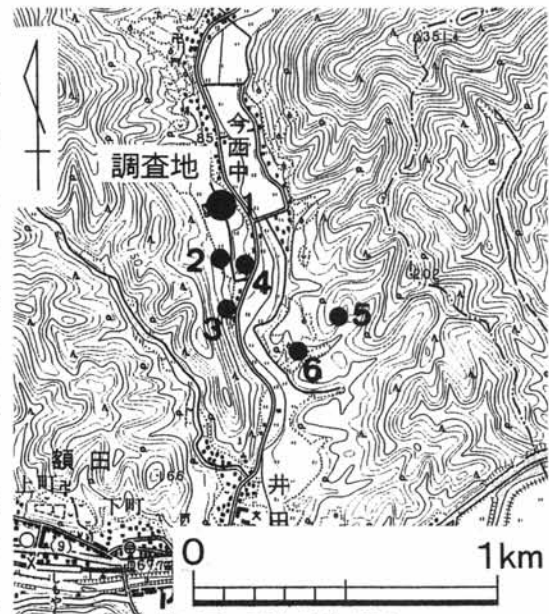
なお、発掘調査に係る経費は、全額、京都府土木建築部が負担した。

### 2. 位置と環境

先ノ段遺跡は、福知山市夜久野町今西中に所在する。夜久野町は丘陵の谷部に集落を形成しており、中央部には国道9号線やJR山陰本線が通じ、そして牧川が流れる。夜久野町今西中は、JR山陰本線下夜久野駅の北東側に位置し、牧川の支流である畑川に沿って形成されている集落である。畑川の西側には、平行して府道小坂青垣線が通っている。

先ノ段遺跡が所在する丘陵の頂部は、約20年前に一度耕地整理が行われており、旧地形は改変されている。そのため遺跡が立地する地形は、丘陵頂部の平坦地になっており、現在は耕作地などになっている。

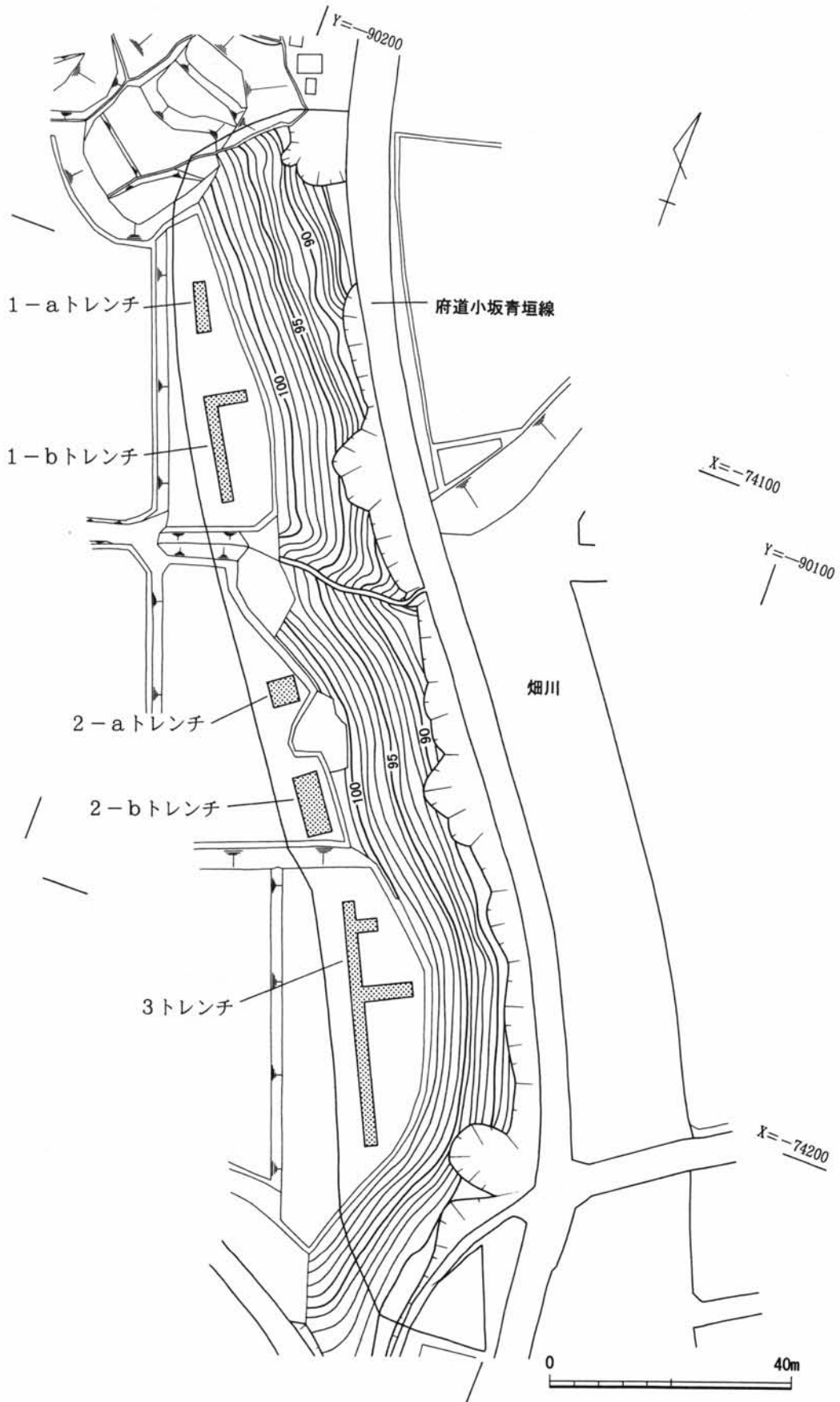
先ノ段遺跡は、弥生～古墳時代の土器片が分布



第26図 調査地位置図

(国土地理院1/25,000福知山西部)

- |          |           |
|----------|-----------|
| 1. 先ノ段遺跡 | 2. 先ノ段古墳  |
| 3. 小倉田遺跡 | 4. 小倉田古墳  |
| 5. 今西経塚  | 6. 別当稲泉遺跡 |



第27図 調査トレンチ配置図

する遺物散布地とされている。周辺の遺跡では、先ノ段遺跡の南側の丘陵裾部には先ノ段古墳や環頭大刀把頭などが出土した小倉田古墳が存在していたが、現在は残っていない。同じく先ノ段遺跡の南側には、弥生～古墳時代の遺物が散布する小倉田遺跡などが所在する。

また、畑川の東側の丘陵上には、今西経塚や別当稲泉遺跡などが所在する。このように畑川の両岸の丘陵裾部には、各時代の遺跡が点在している。

### 3. 調査概要

今回は、切土の対象となる丘陵頂部の平坦地3地点で、遺構の有無を確認するための試掘トレンチを設定し、調査を実施した(第27図)。

調査トレンチは、北から設定した順に1-aトレンチ、1-bトレンチ、2-aトレンチ、2-bトレンチ、3トレンチと呼称した(第29～31図)。

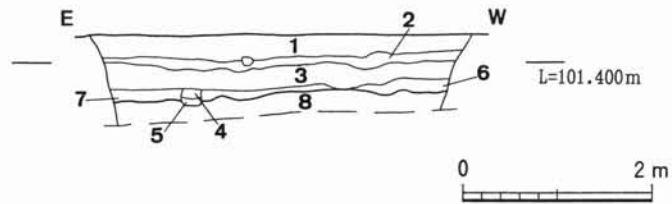
調査は、まず耕作土と床土を重機によって除去した後、遺構の有無を確認するため、人力による遺構精査を行った。基本的な層序は、1-aトレンチおよび1-bトレンチでは、上層から耕作土、床土、やや軟弱な岩盤層であった。2-aトレンチでは、耕作土、床土、礫を含む岩盤層であった。2-bトレンチでは、耕作土、床土、基盤土(造成時)、遺構を検出した淡茶褐色粘質土層であった(第28図)。3トレンチでは、耕作土、床土、大型の岩石や礫を含むやや軟弱な岩盤層であった。

遺構精査の結果、遺構を検出したトレンチは、2-bトレンチのみであった。このトレンチでは、現地表面から約0.7mの深さで安定した粘質土層が残存しており、この層の上面で遺構を検出した。そのほかのトレンチは、床土直下で岩盤層となっており、およそ20年前の耕地整理の際に削平された可能性が高い。1-aと1-bトレンチでの現地表面の標高は約101.4m、2-aと2-bトレンチでは約101.9m、3トレンチでは約99.4mを測り、2-aおよび2-bが最も高い状況である。2-bトレンチの遺構検出面の標高は、約101.2mであった。また、2-aトレンチと2-bトレンチでは、近接していながらも堆積状況が異なることから旧地形に起伏があった可能性が考えられる。

2-bトレンチでは、直径約20～30cmの円形の柱穴と、直径約40cmの土坑を検出した。そのうち6基の柱穴は、柱間が等間隔にならんでおり、南北方向に建てられた掘立柱建物であると考えられる。

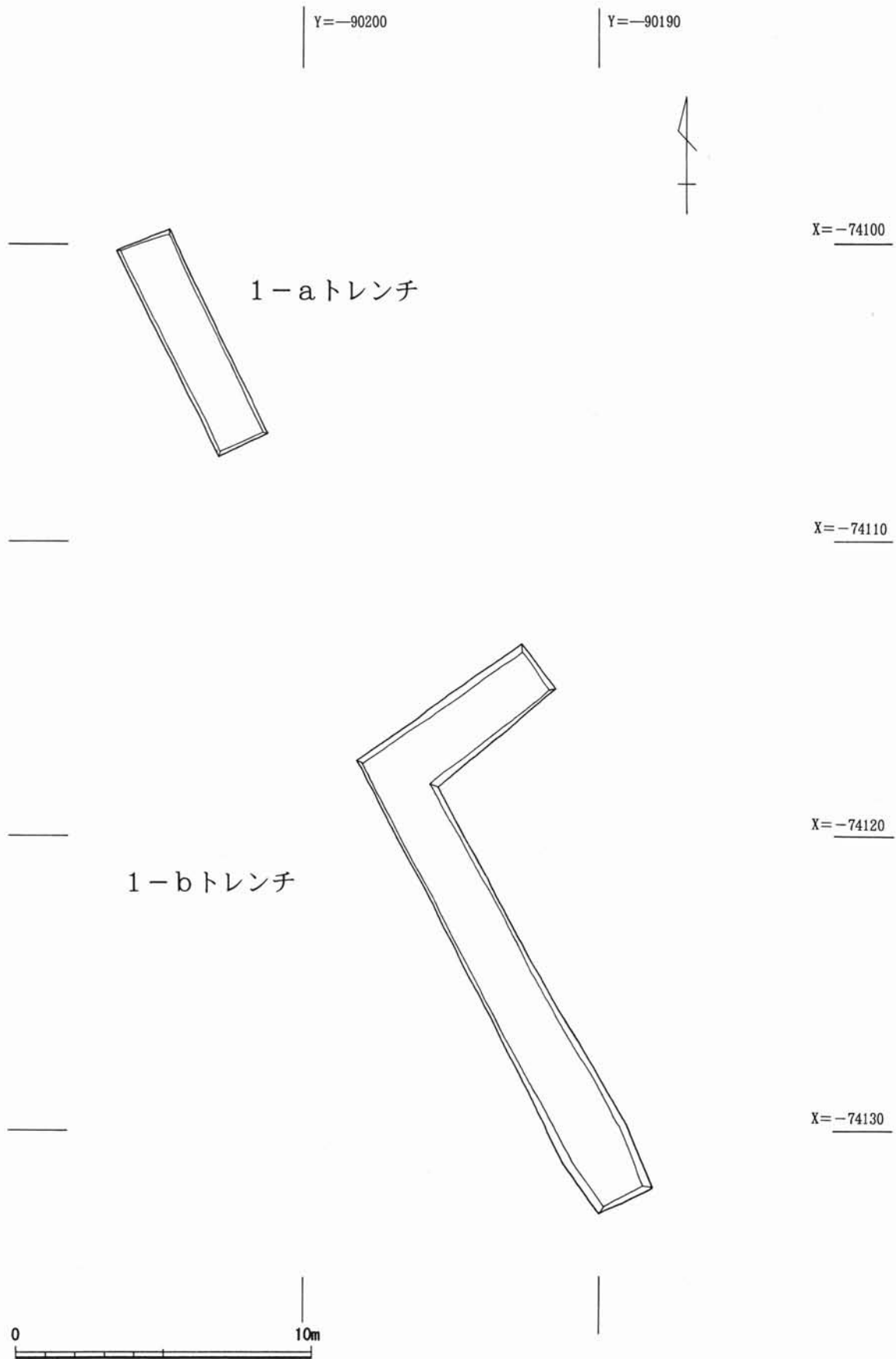
掘立柱建物跡 S B 01 直径約20～30cmの円形の柱穴6基以上で構成する掘立柱建物跡である(第32図)。規模は、南北6.4m以上(4間以上)、東

2-bトレンチ南壁面土層断面

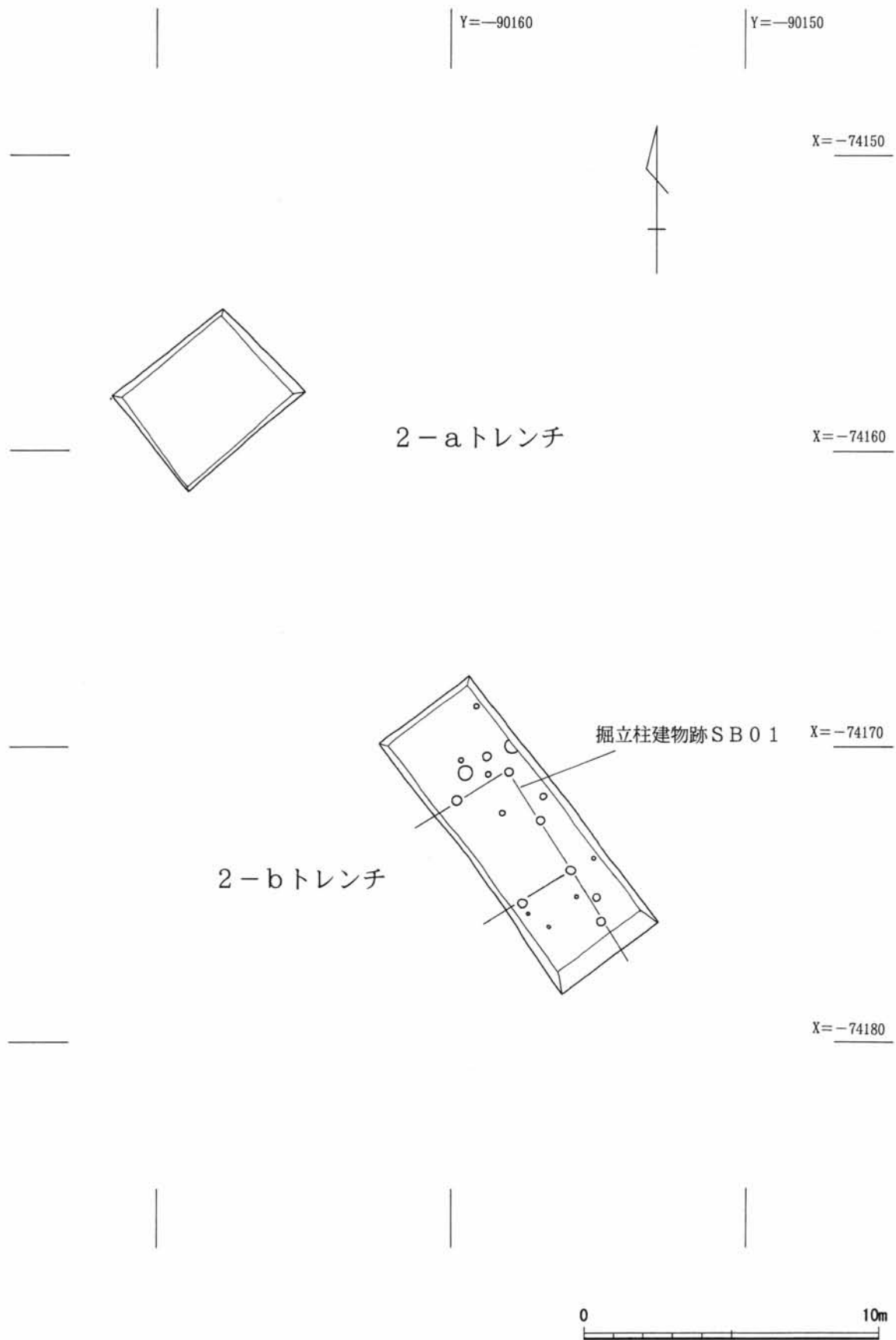


- |                  |                  |
|------------------|------------------|
| 1. 淡灰色粘質土(耕土)    | 5. 淡黄灰色粘質土       |
| 2. 淡黄灰色粘質土(床土)   | 6. 淡茶灰色粘質土       |
| 3. 淡茶灰色粘質土(礫混じり) | 7. 暗茶灰色粘質土(炭混じり) |
| 4. 暗灰色粘質土        | 8. 淡茶褐色粘質土       |

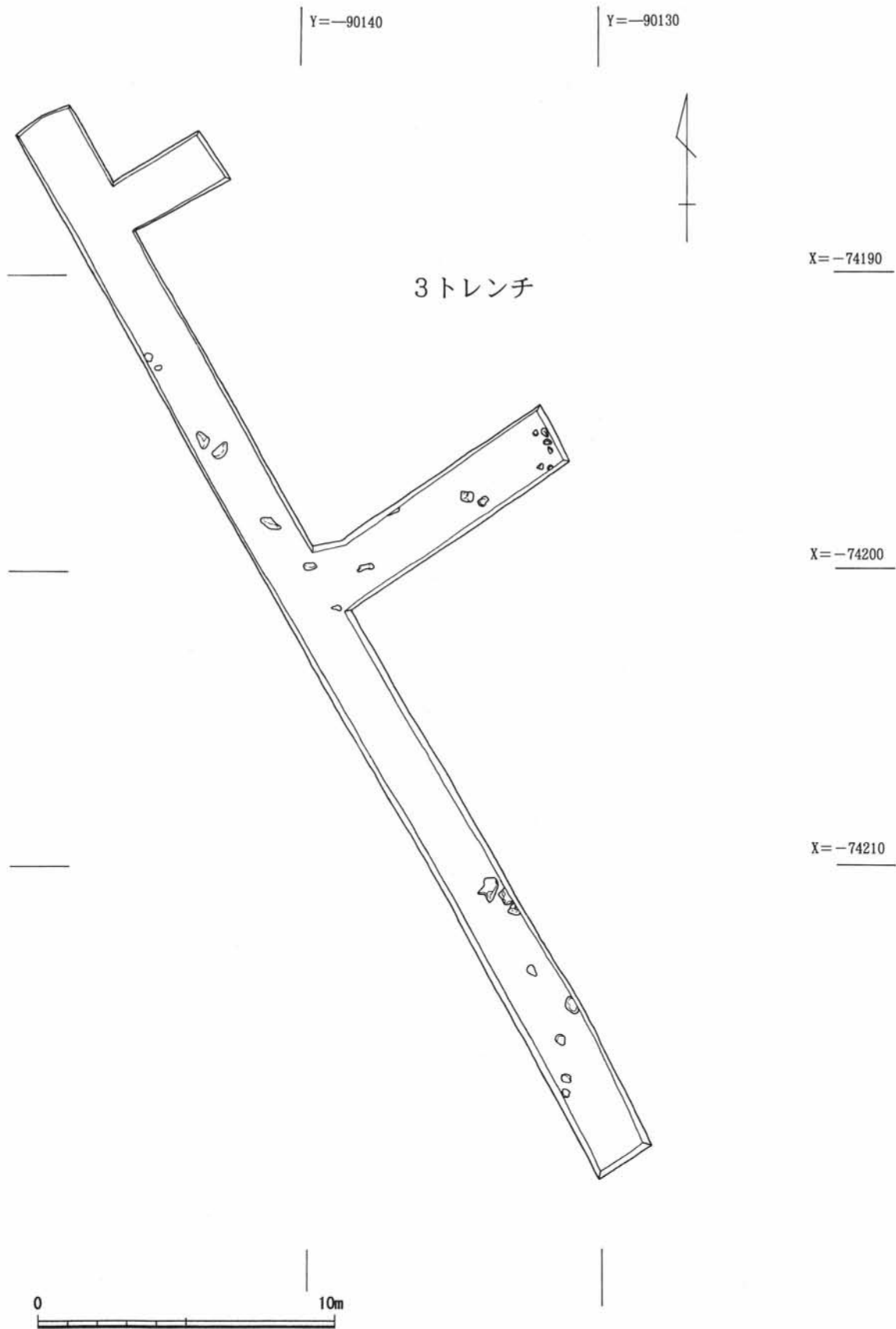
第28図 2-bトレンチ南壁土層断面図



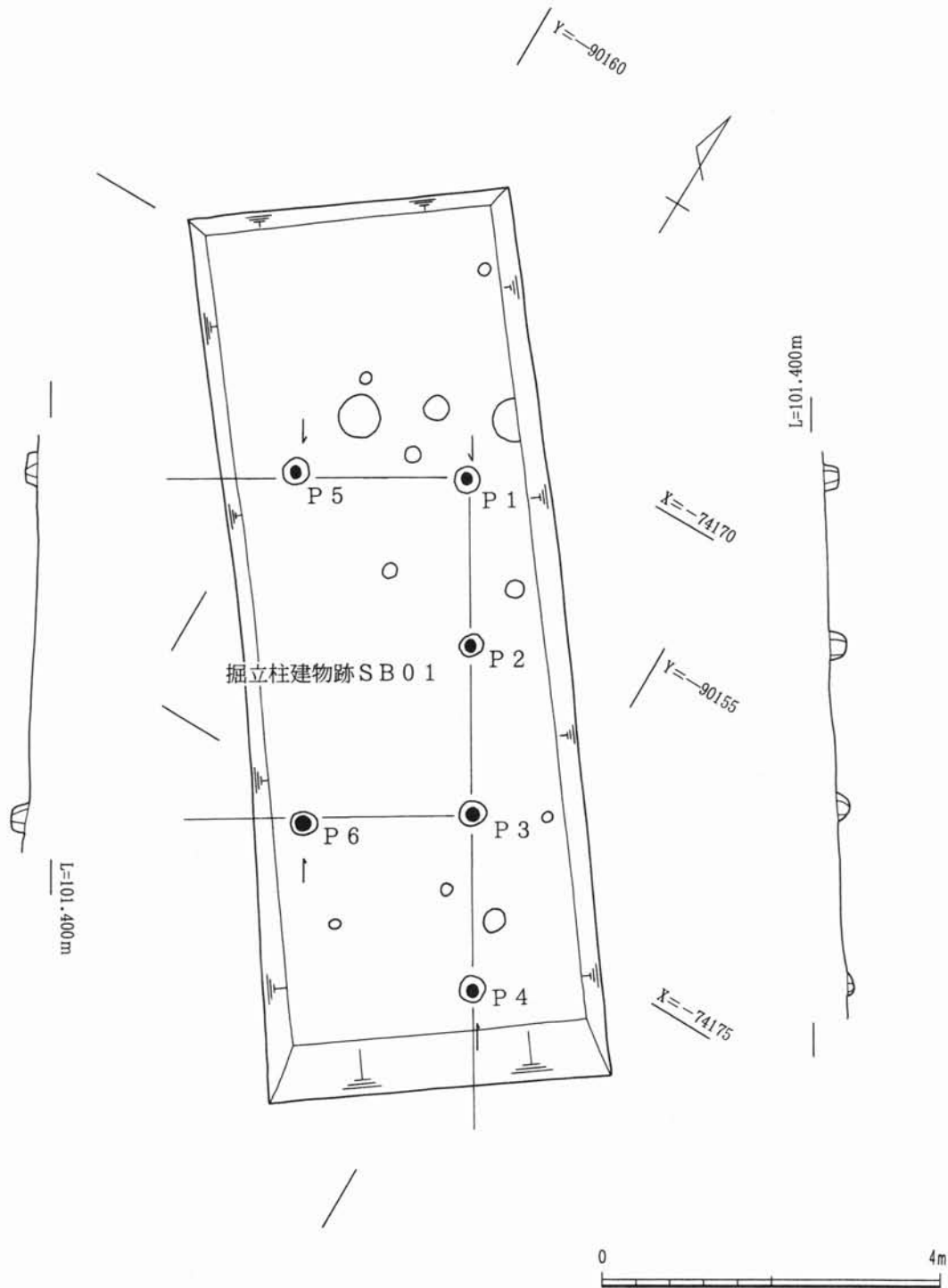
第29図 1地区トレンチ平面図



第30図 2地区トレンチ平面図



第31図 3地区トレンチ平面図



第32図 掘立柱建物跡SB01平面・断面図

西2.6m以上(2間以上)を測る。建物跡は、西側と南側にさらに広がっていることが予想されたが、調査地外であるため確認できなかった。柱穴からは、遺物は出土せず建物跡の所属時期については不明である。また、建物跡の柱穴や周辺で検出したピットなどの遺構の深さが約20cm前後と浅く、遺構面自体も削平を受けたものと予想される。このほかに検出したピットなどからも遺物は出土しなかった。



#### 4. ま と め

今回の試掘調査の結果、遺構が確認できたのは2-bトレンチであった。検出した遺構はピットや土坑、そして掘立柱建物跡S B01のみであった。そのほかのトレンチでは、床土直下で岩盤や礫層が確認され、遺構は検出できなかった。調査結果と現地地形から、20年ほど前に行われた耕地整理によって丘陵頂部は大きく削平されたものと考えられる。遺構を検出した2-bトレンチは、現状で最も高い位置に当たることから、辛うじて削平を免れたものと思われる。

検出した遺構は、掘立柱建物跡を構成する柱穴やピット、土坑などであるが、いずれからも遺物は出土していない。このことから、現段階では遺構の時期を判断することは難しい。しかしながら、検出した掘立柱建物跡の規模や柱穴の形状などからみて、従来、当遺跡が弥生～古墳時代にかけての遺跡と考えられていたことに反して、それよりも新しい時期(中世以降)の遺構である可能性を指摘しておきたい。

(村田和弘)

注1 京都府教育委員会『京都府遺跡地図(第3版) 第2分冊』 2002

注2 現地作業参加者 石原正直・大江一弘・岡本みつ子・皆谷徹・八瀬由香里・小島健之介  
整理員 稲垣あや子

備考 夜久野町は、平成18年1月1日に、福知山市・三和町・大江町と合併し、新「福知山市」となった。

### 3. おかの岡ノ遺跡第3次発掘調査概要

#### 1. はじめに

岡ノ遺跡は、福知山盆地の西部にある福知山城の南方に位置する遺跡である。これまでの調査によって弥生時代から中世にかけての集落遺跡であることが判明している。さらに、江戸時代には武家屋敷およびその周辺であったことも判明している。

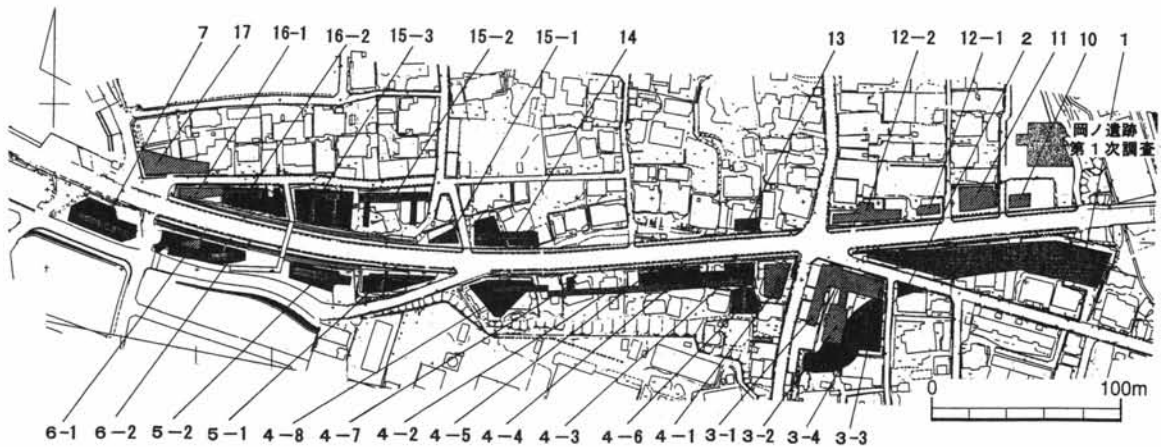
今回、国土交通省近畿地方整備局により国道9号の拡幅計画がなされたことにより、総延長東西500mを対象として、調査を実施した。対象となったのは、京都府福知山市東岡町から南岡町



第33図 岡ノ遺跡位置図(平成18年1月現在の市町村名)



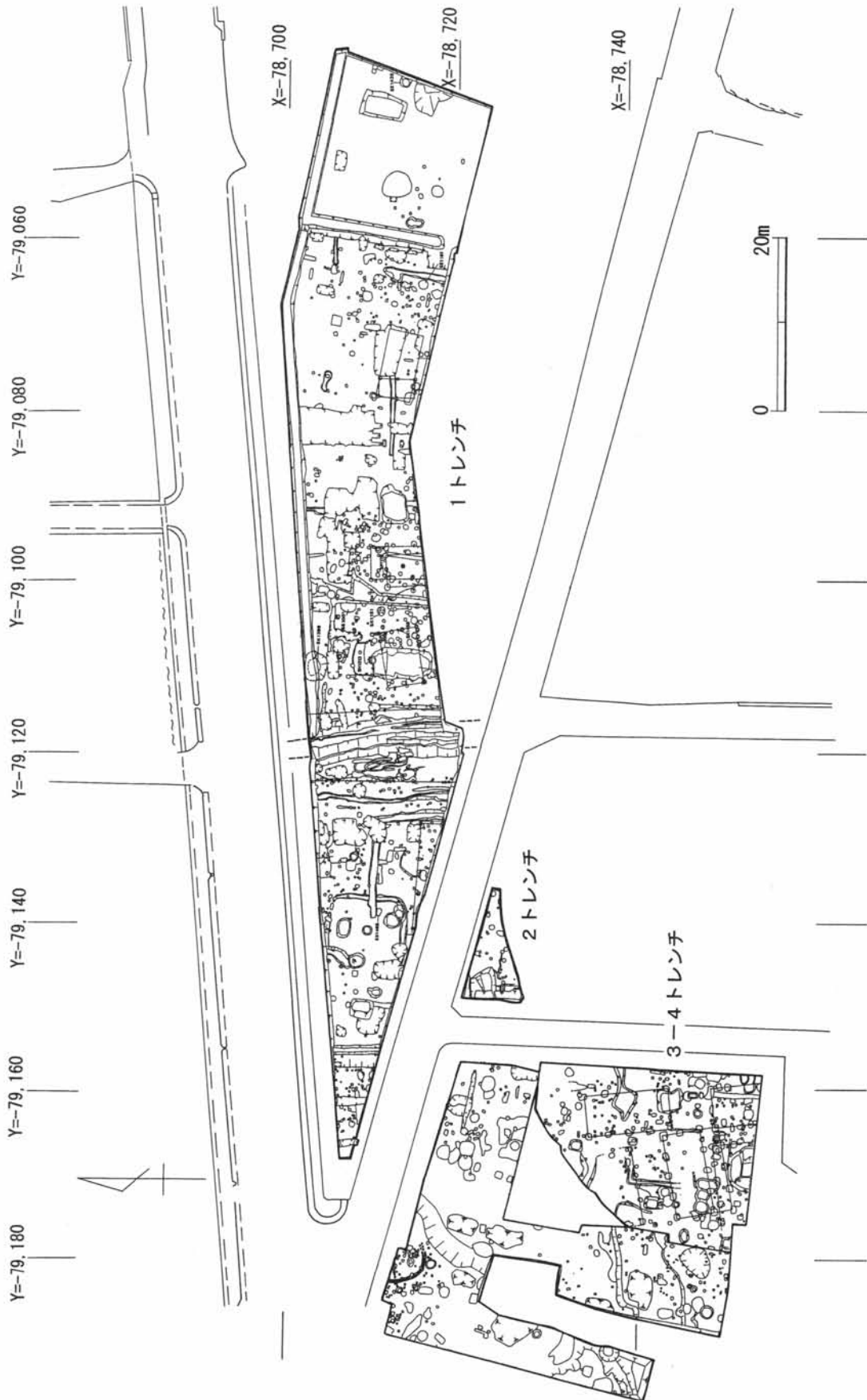
第34図 調査地位置図(国土地理院1/25,000福知山西部・東部)



第35図 調査区配置図(福知山都市計画図1/5,000を転載加筆)

内の3,980㎡である。

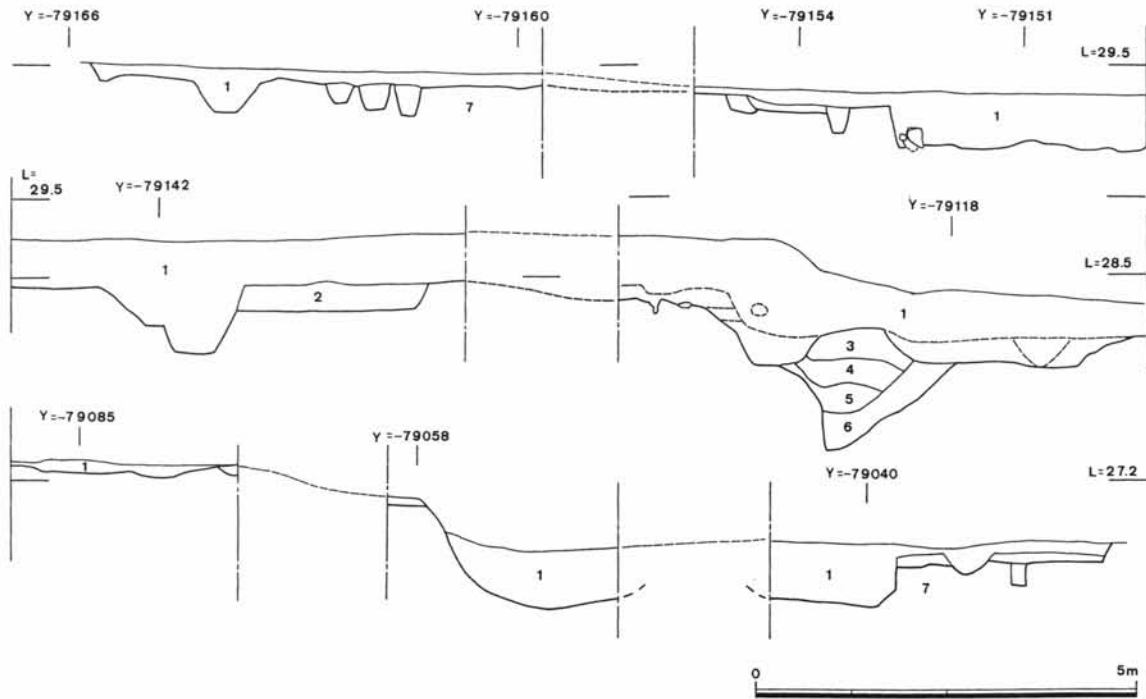
平成16年前半に試掘調査を実施し、年度後半に発掘調査を実施した。調査面積は3,980㎡である。試掘調査の成果については昨年度報告したので、今回は発掘調査分を報告する。なお、本概要の座標については、日本測地系を用いた。



第36図 発掘調査地(1～3トレンチ)平面図

付表1 平成15・16年度発掘調査概要一覧

平成15年度発掘調査			平成16年度発掘調査(2)				
地区名	調査面積 (㎡)	備考					
国道北地区	10tr	60	近世のピット・土坑	4-2tr	329	近世以降の土坑・溝	
	11tr	200	弥生時代後期の溝、近世ピット・土坑	4-3tr	19	ピット、弥生土器	
	12-1tr	45	近世の地境溝・東西方向の柱列・ピット	4-4tr	20	ピット、弥生土器	
	12-2tr	180	近世の地境溝・東西方向の柱列・ピット	4-5tr	23	近世以降の土坑・溝	
	16tr	80	弥生時代末の方形竪穴式住居跡・掘立柱建物跡	4-6tr	47	中世の土坑・溝	
	17tr	140	近世の地境溝・ピット	4-7tr	24	近世以降の土坑・溝	
	国道南地区	3-1・2・3tr	905	弥生時代後期の円形竪穴式住居跡、奈良・平安の柱穴、近世ピット・土坑	4-8tr	90	谷状地形、ピット
4tr		145	方形の土坑（古墳時代の竪穴式住居跡か？）	5-1tr	103	谷状地形、奈良・平安時代の須恵器・土師器甕	
6tr		30	時期不明のピット	5-2tr	128	谷状地形、ピット	
				6-2tr	84	弥生時代後期の方形竪穴式住居跡、柱列、ピット	
合計	1,785		7tr	119	中世の大溝、ピット		
平成16年度発掘調査(1)			小計	986			
			試掘合計	1,699			
地区名	調査面積 (㎡)	備考					
国道北試掘地区	13tr	62	谷状地形、溝、弥生土器	本調査地区	1tr	1,758	弥生時代の方形周溝墓・方形竪穴式住居跡・土坑、奈良・平安時代の柱穴、近世の掘立柱建物跡・堀跡・井戸・土坑
	14tr	133	ピット列、奈良・平安時代の土師器杯				
	15-1tr	72	近世のピット・土坑				
	15-2tr	207	近世以降の土坑、溝				
	15-3tr	150	古墳時代以降のピット				
	16-2tr	89	竪穴式住居跡、ピット列				
小計	713		小計	2,281			
			合計	3,980			



第37図 1トレンチ北壁土層断面図

1. 表土 2. 黒褐色(方形周溝墓埋土) 3. 暗褐色粘質土 4. 灰褐色粘質土  
5. 暗灰褐色粘質土 6. 暗褐色混礫土(3~6:堀SD1002埋土) 7. 黄色粘土(地山)

調査期間は、平成16年5月13日～平成17年1月28日である。

現地調査は、当調査研究センター調査第2課課長補佐兼調査第2係長奥村清一郎、同第2係次席総括調査員伊野近富、主任調査員戸原和人・松井忠春・中川和哉、専門調査員石尾政信、第3係主任調査員竹原一彦が担当した。

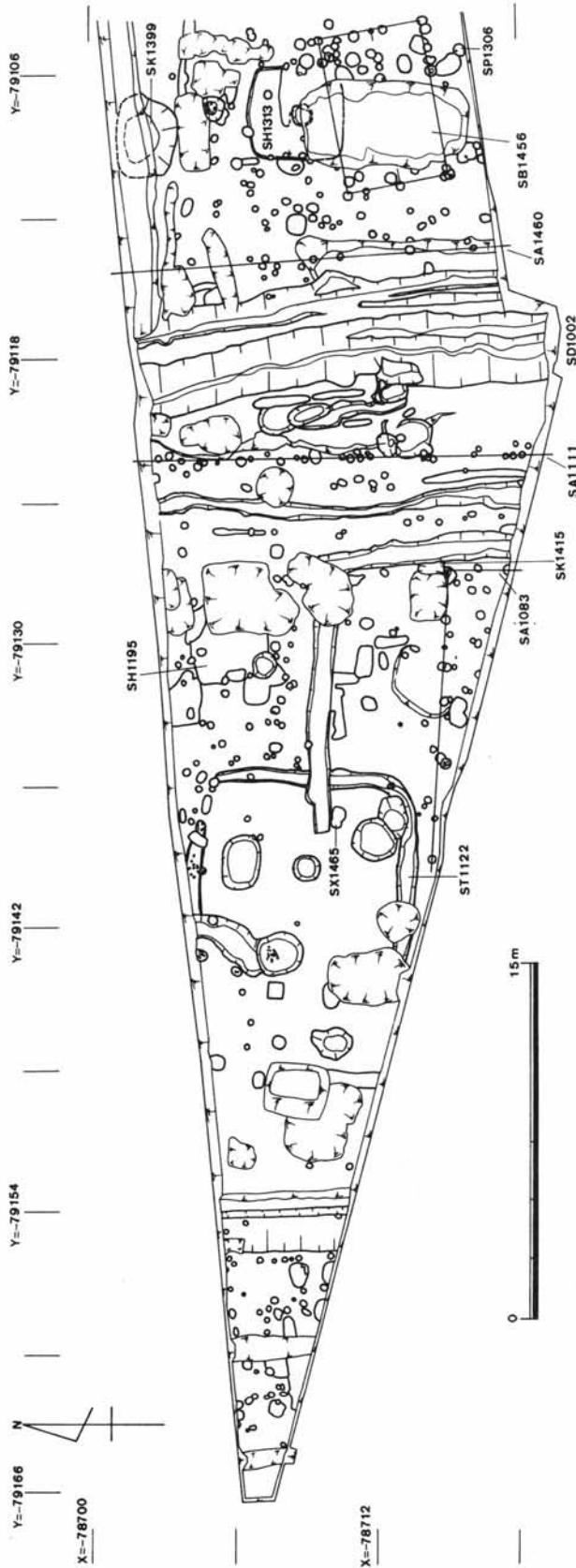
調査にあたっては、国土交通省近畿地方整備局福知山河川国道事務所・京都府教育委員会・福知山市教育委員会に多大の御指導、御助言を得た。また、現地作業では、南岡町、東岡町、緑ヶ岡町、北小谷ヶ丘町の各自治会の方々の御理解と御支援をいただいた<sup>(注2)</sup>。

なお、調査にかかわる経費については、全額、国土交通省近畿地方整備局が負担した。

## 2. これまでの調査

福知山市の市街地は東西に長い福知山盆地の西部に位置している。この盆地を形成した由良川は京都北部最大の川で、兵庫県側から流れてきた土師川と盆地の中央で合流する。この合流地点の西側に福知山城があった。城の本丸は南側から長く張り出した丘陵の先端に造営された。

今回の調査地は盆地の南部で、福知山城本丸から南方700～900mの地点にあり、南から張り出した丘陵上にある。岡ノ遺跡の第1次調査<sup>(注3)</sup>(第34図)は、平成14年度に福知山市教育委員会によって実施され、弥生時代の墓および古墳・奈良時代～中世にかけての集落遺跡が確認された。調査面積は550㎡である。



第38図 1 トレンチ西部平面図

第2次調査は、平成15年度に当調査研究センターが実施した。調査地は東から西に1～10地区を設定し、その中にトレンチを入れた。1地区1トレンチの場合と、複数トレンチの場合とがある。これは、今回の調査原因と同じ国道9号の拡幅に伴うもので、国道の南北両側に5か所のトレンチ(3・10・11・12-1、12-2)を設定し、調査した。その後、国道の南側で1か所のトレンチ(4-1トレンチ)を追加した。西端では、当初、標高約42mの地点で南北にそれぞれ1か所の試掘トレンチ(6・16トレンチ)を設定した。次いで北に1か所のトレンチ(17-1トレンチ)を追加した。

調査の成果としては、弥生時代の竪穴式住居跡・溝・柱跡、古墳時代の住居跡、平安時代の柱跡・土坑、中世の柱跡、近世の井戸・柱跡を検出した。

特に、3トレンチから出土した平安時代の緑釉陶器碗は京都市内で生産された、いわゆる洛北産の大振りなもので、京都市内以外では出土例の少ないものである。また、弥生時代中・後期の土器も多数出土した。

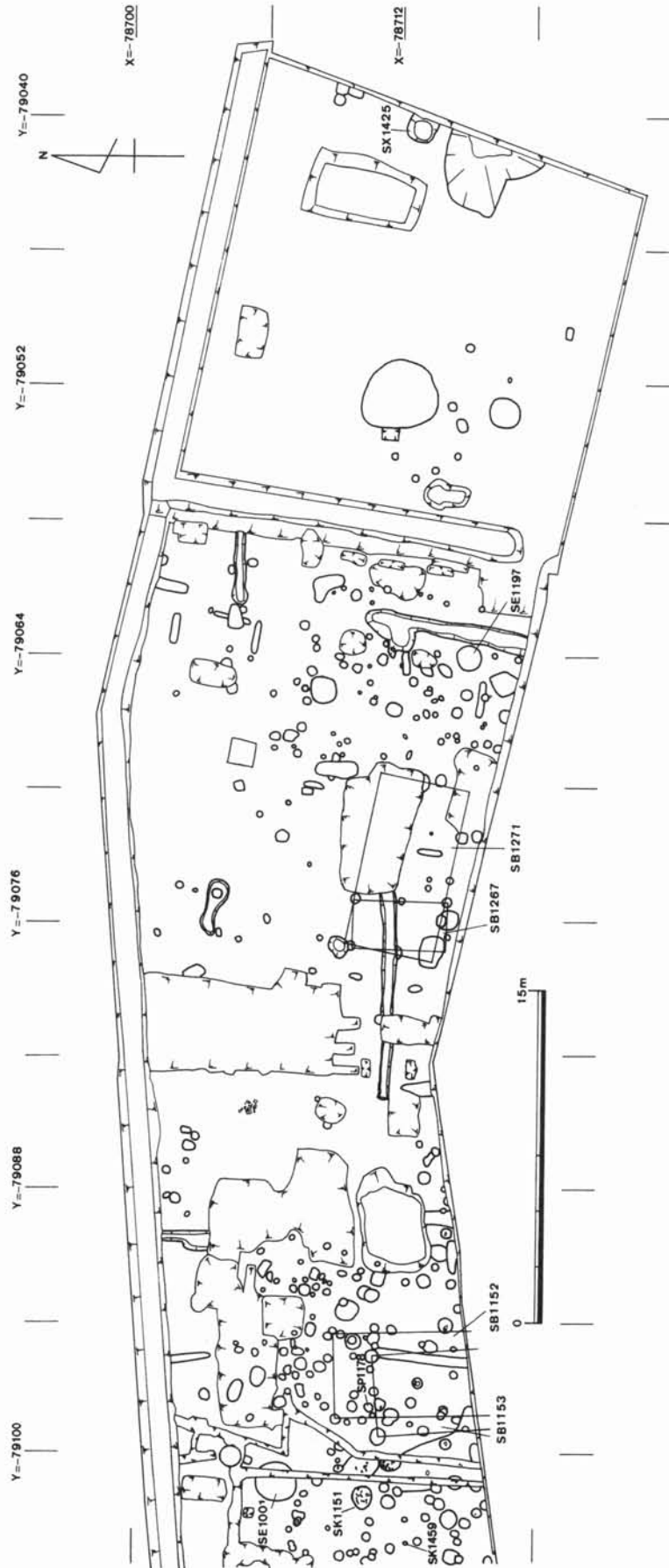
### 3. 調査概要

第3次調査のうち平成16年度前半に実施した試掘調査結果については、すでに報告した。概要を説

明すると、第34図のように国道9号の南側で、東から西にかけて4-2～8トレンチ、5-1・2トレンチ、6-2トレンチ、7トレンチの各トレンチを設定した。また、国道9号の北側で、東側から西にかけて13トレンチ、14トレンチ、15-1～3トレンチ、16-2トレンチを設定した。地区としては9地区で、トレンチとしては17か所をあげた。

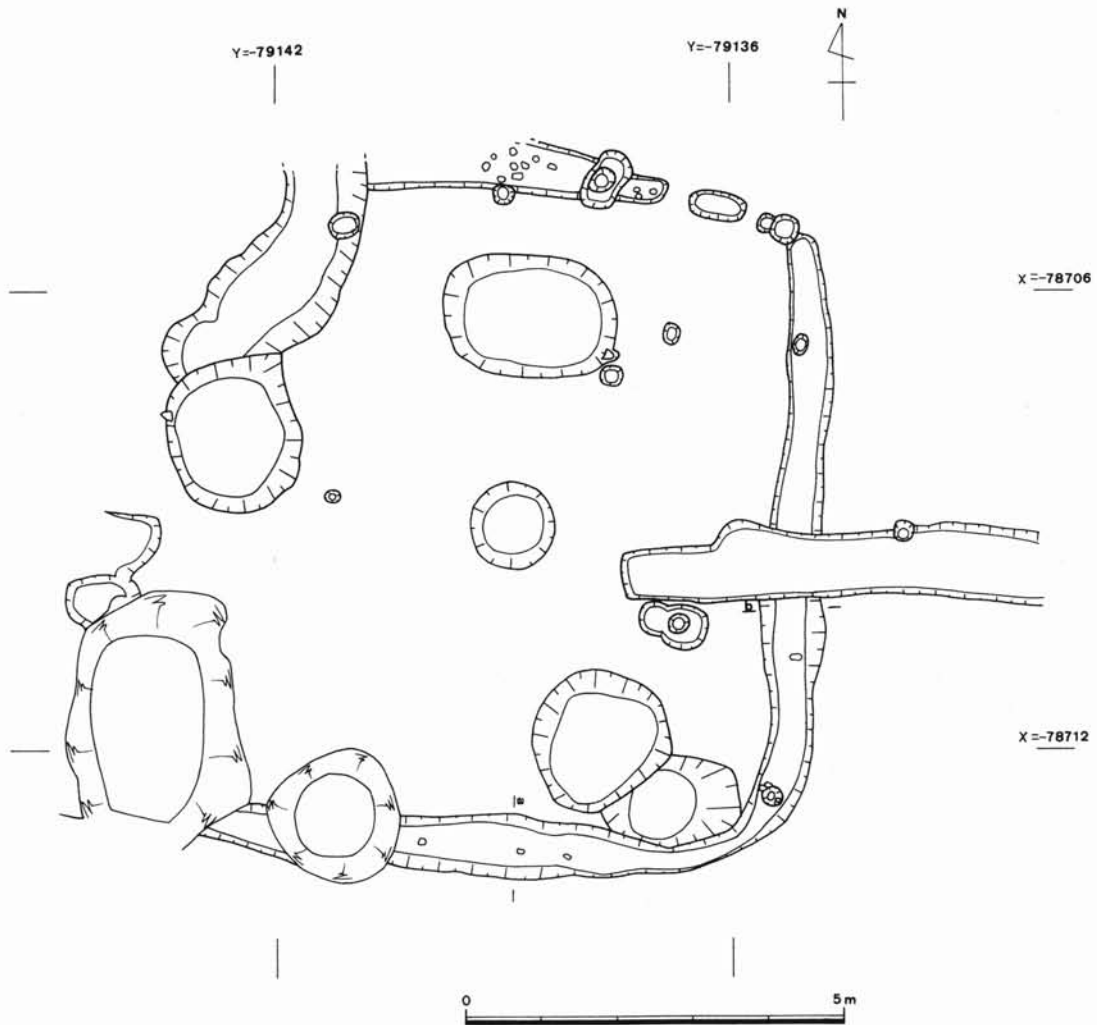
調査成果としては、標高の高い西部では7トレンチで中世の溝、6トレンチでは弥生時代の竪穴式住居跡を検出した。中央部では、古墳時代の遺物などを確認した。また、標高の低い東部でも4トレンチでは中世の土坑・溝を検出した。

次に平成16年度後半に本格調査を実施した1～3トレンチについて記したい。この3つのトレンチは近接して設定した。基本的には北へ延びる舌状台地の東端に位置し、その東方は急速に地形が下がる。1トレンチがもっとも北側で、中央南側

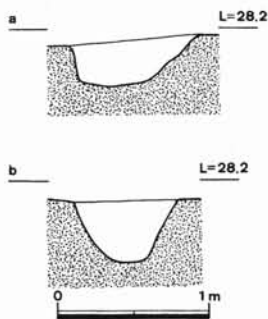


第39図 1トレンチ東部平面図





第40図 方形周溝墓 S T 1122



第41図 方形周溝墓 S T 1122土層断面図

に2トレンチ、その南西方向に3トレンチがある。

ここでは、1トレンチ土層について説明する。まず、西部の層序については、現地表面から0.15mで黄褐色の地山となる。ピットや溝がいくつか見つかったものの、基本的には削平が激しい(第37図)。トレンチ西端から13mで、遺構検出面が約1m(標高28.3m)下がる。これは、かつての敷地境に伴うもので、地面が削平された結果である。おそらく、往時は徐々に東に行くにしたがって地山が下がっていたと考えられる。堀 S D 1002の西側では、標高28mで黄褐色粘土の地山となる。その上に、黒褐色土が堆積しているが、この層から奈良時代～中世の遺構が検出さ

れる。堀 S D 1002の東側では標高27.4mで、黄褐色粘土の地山となる。トレンチの南部ではその直上に厚さ0.2mの黒褐色土が堆積している。トレンチ中央部分では黄褐色土の上に黒褐色土が堆積しており、この層から弥生時代～中世のピットが多数検出された。トレンチ西端から東へ75mの辺りから一段と削平が激しくなる。トレンチ東部、すなわち、トレンチ東端から西へ50mまでの区域は、近代に大きく削平されており、黒褐色土は遺存せず、灰褐色土の下はすぐ黄褐色砂

礫土となる。

この区画では遺構はほとんど削平されていたが、トレンチ東端中央部で、1か所遺構を検出したので、往時の面より1m以上削平されたわけではなさそうである。

(1) 1地区1トレンチ

1地区に長い台形状にトレンチを設定した。東西129m、西辺1.5m、東辺19.5mである。地山は西が高く(標高29.4m)、東に低く(標高26.1m)なっている。東西両端は削平が激しく、遺構の密度は低いものであった。中央部では多数のピットや土坑が検出され、トレンチを分断するように南北方向の堀が検出された。遺構の年代は、弥生時代から江戸時代まで多岐にわたる。

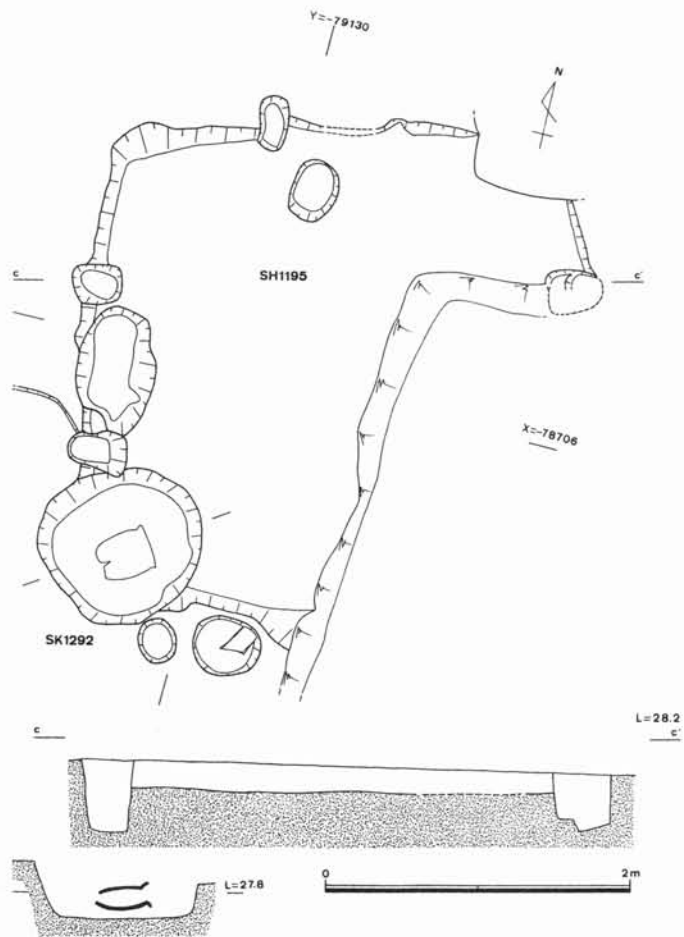
1) 弥生時代

方形周溝墓の周溝と考えられる溝SD1122がある。また、竪穴式住居跡SH1313やピットSP1178、SP1306などがある。おおむね、トレンチ西部から中央部に広がっている。なお、中世の包含層から、弥生時代あるいは縄文時代の石錘(第55図29)や叩石(第55図30)が出土した。

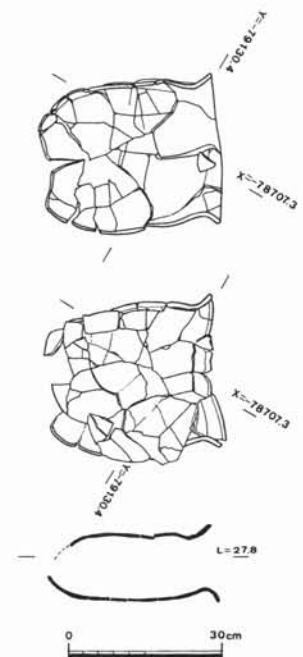
**方形周溝墓ST1122** トレンチの西部で検出された弥生時代の方形周溝墓である。現状は溝のみで、主体部はすでに削平されたらしく、検出されなかった。幅0.8m、深さ0.3~0.4mで、溝の断面はほぼ台形である。溝の方位はほぼ正方位である。弥生土器の底部小片が出土した。

**竪穴式住居跡SH1313** トレンチ中央部で検出された一辺4mの方形竪穴式住居跡である。南西部は攪乱によって削平されていた。遺存した北辺の深さは0.2mである。遺物が少なく詳細な時期は不明であるが、東辺中央から弥生時代後期に属する甕が出土した。

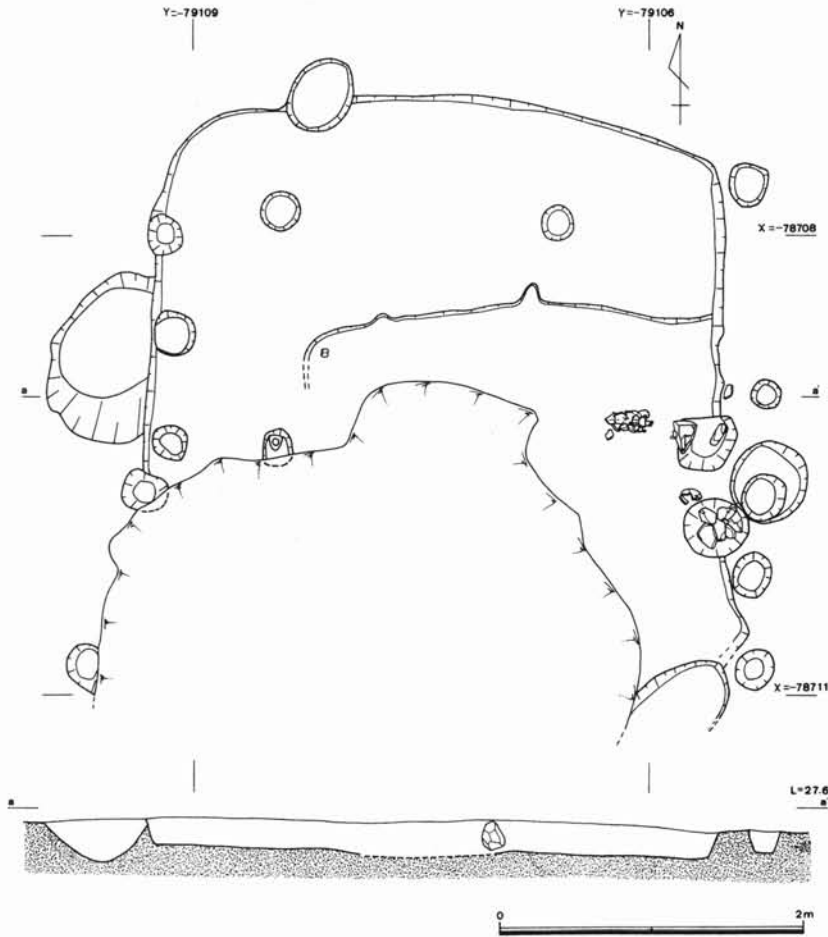
**ピットSP1178** トレンチ中央部で検出された円形ピットである。弥生時代後期の甕が横たえられた状態で出土した。直径は0.3mで、



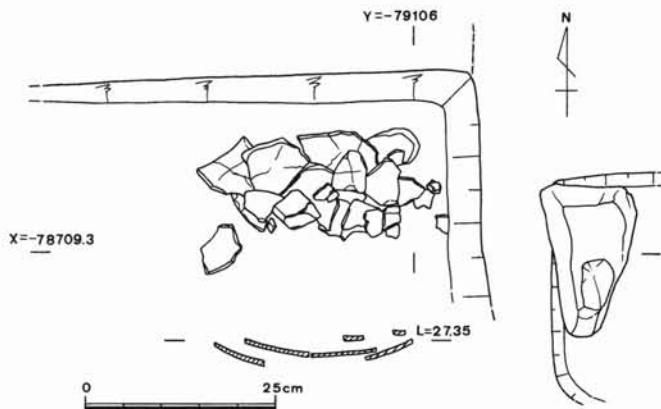
第42図 竪穴式住居跡SH1195、土坑SK1292実測図



第43図 土坑SK1292実測図



第44図 竪穴式住居跡 S H 1133実測図



第45図 竪穴式住居跡 S H 1133土器出状況図

深さは0.2mである。

ピット S P 1306 トレンチ中央部で検出されたピットである。直径は0.5mである。弥生時代後期の器台と台付鉢が出土した。

## 2) 古墳時代

竪穴式住居跡 S H 1195がある。また、遺物は堀 S D 1002から検出されたのでトレンチ中央部に遺構があった可能性がある。

竪穴式住居跡 S H 1195 溝 S D 1122の東側にある古墳時代後期の方形竪穴式住居跡である。3辺は攪乱坑により削平されていた

が、かろうじて遺存していた西辺は3.15mで、正方位を向いている。主柱穴は不明である。深さは0.2mである。遺物は須恵器杯身小片が出土した。

3) 飛鳥・奈良時代～平安時代前期  
土坑 S K 1292 竪穴式住居跡 S H 1195と重複した円形の土坑である。直径1m、深さ0.4mで、中央部に奈良時代の土師器甕1個体が据えられ

ていた。長胴タイプで、横置きされていたが、土圧により上位は下位に陥没していた。

土坑 S K 1425 トレンチ東端で検出した楕円形の土坑である。東部はトレンチ外である。南北は1.2mである。ここで、須恵器有耳壺が1個体分出土した。

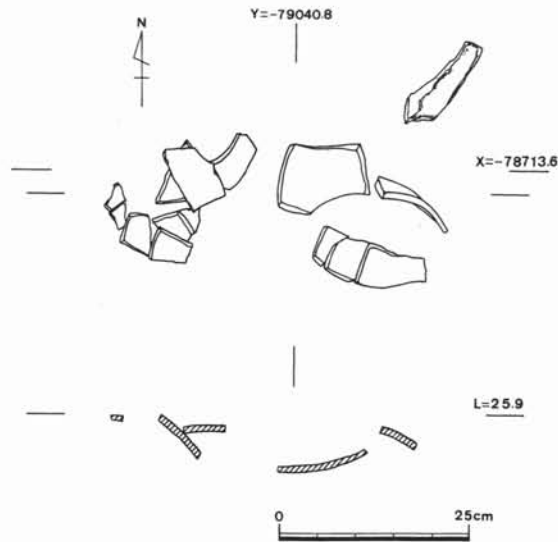
## 4) 鎌倉～室町時代

土坑 S K 1194 トレンチ中央部にある不定形の土坑である。鎌倉時代の瓦器椀や皿が出土した。

南端はトレンチ外である。南北5.7m、東西5.4mで、北部は幅狭く、南部は広がる。

このほか、掘立柱建物跡や柵が検出された。トレンチ西部から説明する。

**柵 S A 1083** 方形周溝墓 S T 1122の南側にある柵である。「L」字状に屈折しており、西端と南端はトレンチ外である。柱穴は円形で、直径は0.3mである。1.7~2.3mごとに柱を据えている。現状は東西13m以上、南北2.6m以上である。この柵の外側には、柵と同様に「L」字状に曲がる幅1mほどの溝がある。これらは敷地の範囲を示していると考えられる。方形周溝墓より新しいが、出土遺物が少なく時期は不明である。



第46図 土坑 S K 1425 遺物出土状況図

**柵 S A 1111** 柵 S A 1083の西側にある南北軸の柵である。直径は0.2~0.3mである。同地点に数個の柱穴があることから、幾度も立替が行われたことがわかる。すぐ西側には同方向の溝があり、東方には溝 S D 1002がある。これらは敷地境を示していると考えられる。

**柵 S A 1460** 堀 S D 1002の東側にある南北軸の柵である。柱穴の直径は0.3mで、前述した堀や柵と同軸なので、同じく敷地を区画するものと考えられる。

**掘立柱建物跡 S B 1456** トレンチ中央部にある2間×3間の東西棟である。柱穴は円形で、直径0.3~0.4mである。西から1間目の柱穴は攪乱坑により削平されている。

**掘立柱建物跡 S B 1153** 中世の土坑 S K 1413と重複し、それより新しい南北棟である。東西2間(西から2.1m、1.5m)、南北2間(1.95m等間)以上で、南端はトレンチ外である。柱穴は円形で直径0.4~0.7mである。

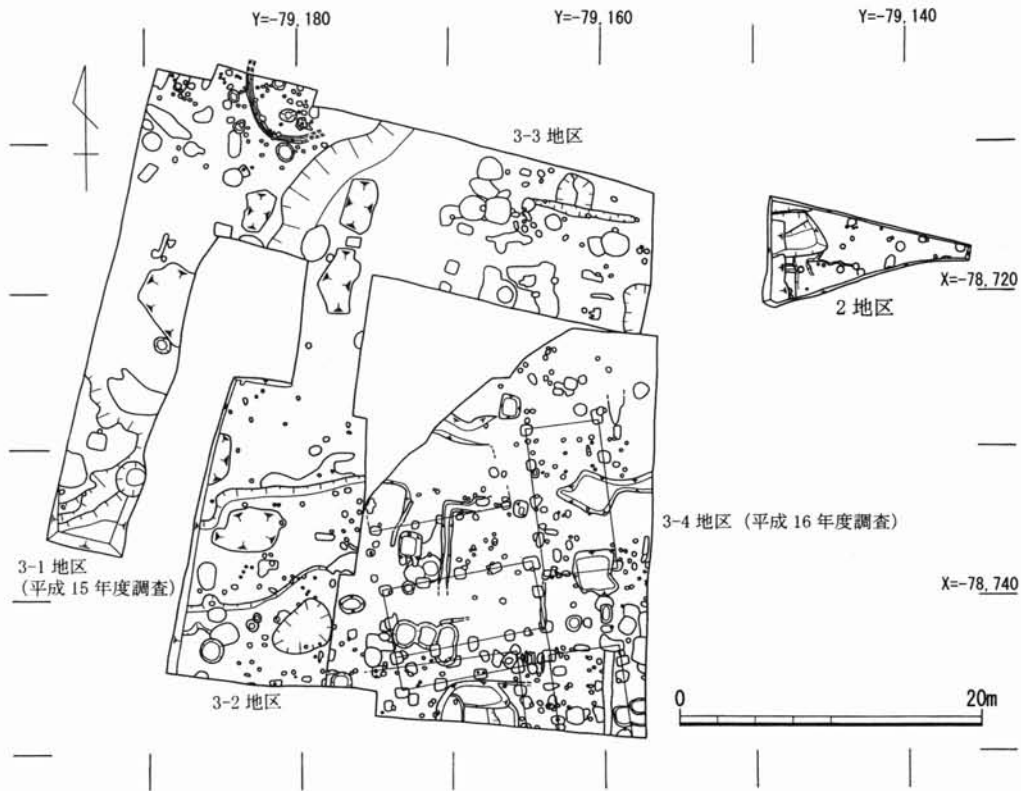
**掘立柱建物跡 S B 1152** 掘立柱建物跡 S B 1153と重複する南北棟である。東西2間(1.95m等間)、南北2間(2.4m等間)以上で、南端はトレンチ外である。

**掘立柱建物跡 S B 1267** トレンチ東部にある東西棟である。東西4間×南北2間で、柱間は2.1m等間である。柱穴は隅丸方形で、東西0.5m、南北0.4mである。

これらの掘立柱建物跡の年代については、出土遺物が少なく不明な点が多いが、層序から中世と考えられる。

### 5) 江戸時代

**堀 S D 1002** トレンチ中央部で検出された江戸時代前期の堀である。いわゆる薬研堀である。上面の幅2.3m、下面の幅0.6m、深さ1.2mである。最下面には幅0.2cmの蛇行した溝があり、この中には砂利が敷かれてあり、水が通る状態になっていた。土層の断面観察によれば、堀は西側から数回にわたって埋められていた。遺物は少なかったものの、下層で唐津皿や丹波播鉢などが



第47図 2・3地区遺構平面図

出土した。

**井戸 S E 1003** トレンチ西部にある江戸時代中期の円形の井戸である。直径1.1mである。井戸はこのほか中央部に井戸 S E 1001・1197があり、同時期、同様に素掘りの円形井戸である。

**土坑 S K 1151** トレンチ中央部にある円形の土坑である。唐津焼や中国製の白磁片などが出土した。

(伊野近富)

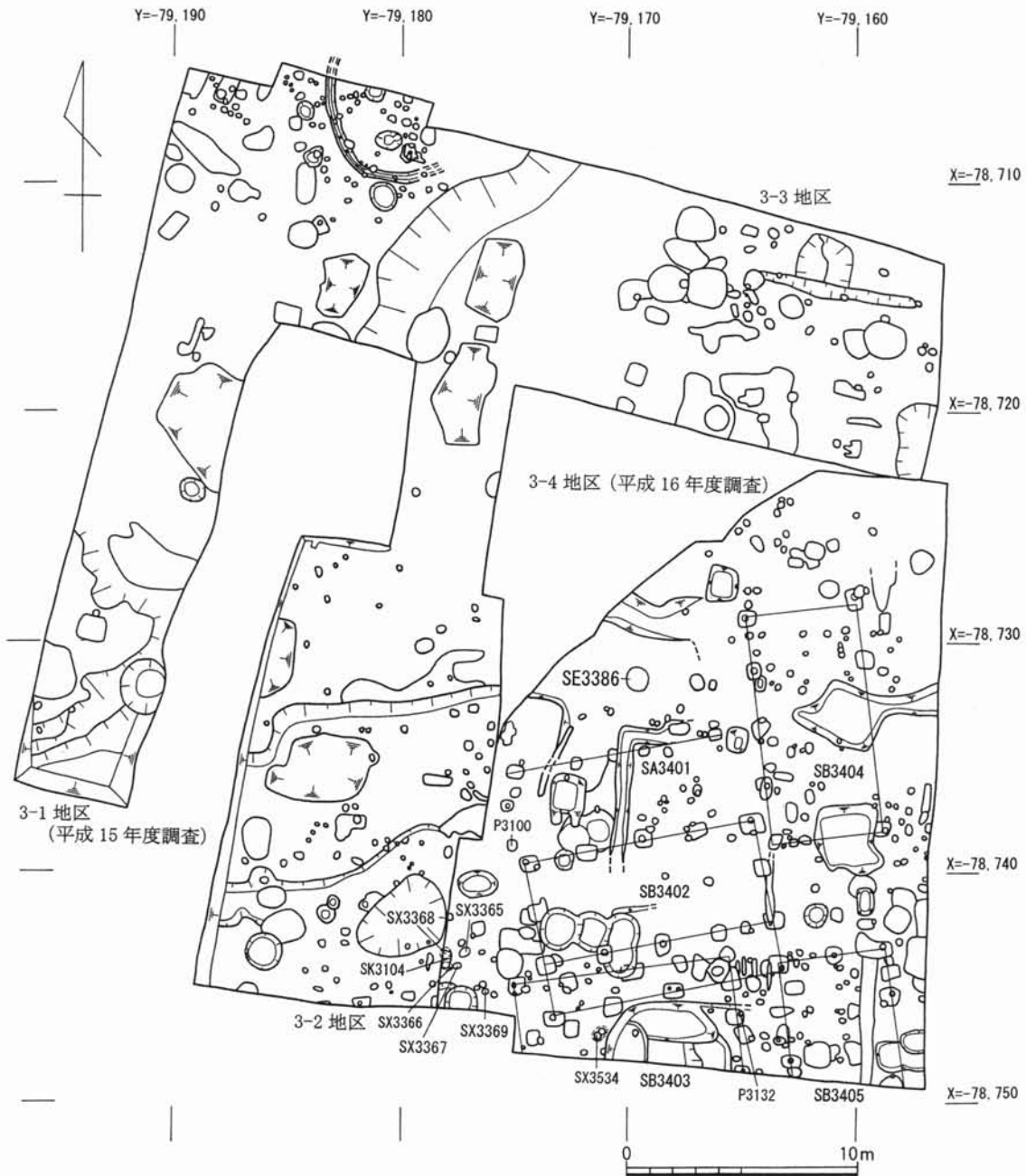
(2) 2地区(第47図、図版第32-1))

国道9号線の自衛隊前交差点で、5叉路による交通渋滞を解消するために計画されたアクセス道路のカーブにあたる2地区に狭小な2トレンチを設定した。西半部は、後世の攪乱を受けているが、直径約30~50cmの柱穴を30基ほど検出した。柱穴内からは奈良・平安時代の土師器が出土しているが、調査面積が狭く建物としてまとまっていない。

(2) 3地区

前年度(平成15年度)に調査した3-1~3-3トレンチに隣接して南東部に3-4トレンチを設定した。検出した遺構は、奈良・平安時代の掘立柱建物跡4棟、柵列1列、江戸時代の井戸1基、土坑と小ピット群である。

調査地の南よりでは、遺構を検出したベース面が、いわゆる丹波クロボクであり、埋土も同様の黒色粘質土であることから、遺構の掘形を明確にすることができなかった。このため、土器が集中して出土した範囲を「SX」の記号を付して記録し、遺物も同様にして取り上げた。掘立柱



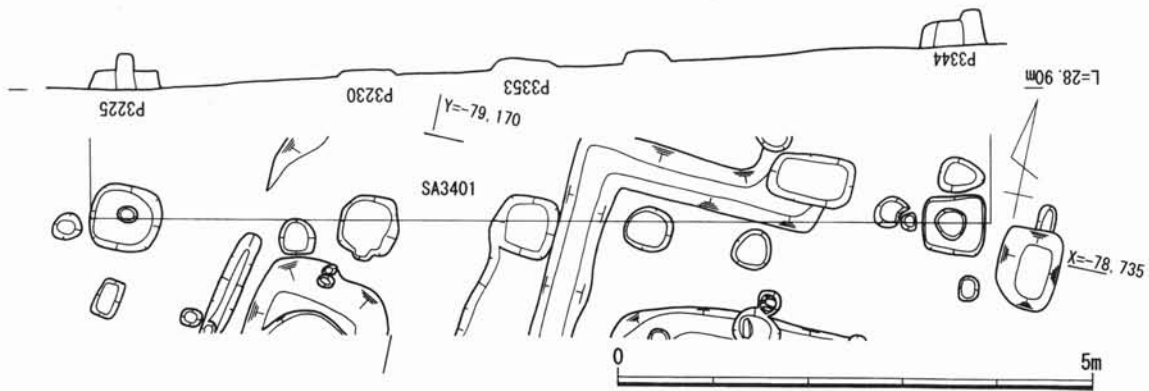
第48図 3-1～3-4 トレンチ遺構平面図

建物跡は、柱穴の切り合や2群に分かれる方位をもったまとりなどから2期に分類することができる。

1) 1期の遺構(第48図)

調査地の中央で東西4間、南北2間の南面に庇をもつ東西棟の掘立柱建物跡1棟(SB3402)と、その北側で建物跡に平行する柵(SA3401)である。これらの柱筋は座標の北に対して10.5°西に傾く。

柵SA3401 掘立柱建物跡SB3402(第49図)の北約4mで、掘立柱建物跡SB3402に並行する柱列である。柱穴は一辺約0.5~0.8mの方形掘形をもち、柱の直径は20~30cmで、検出した深さ



第49図 柵 S A3401実測図

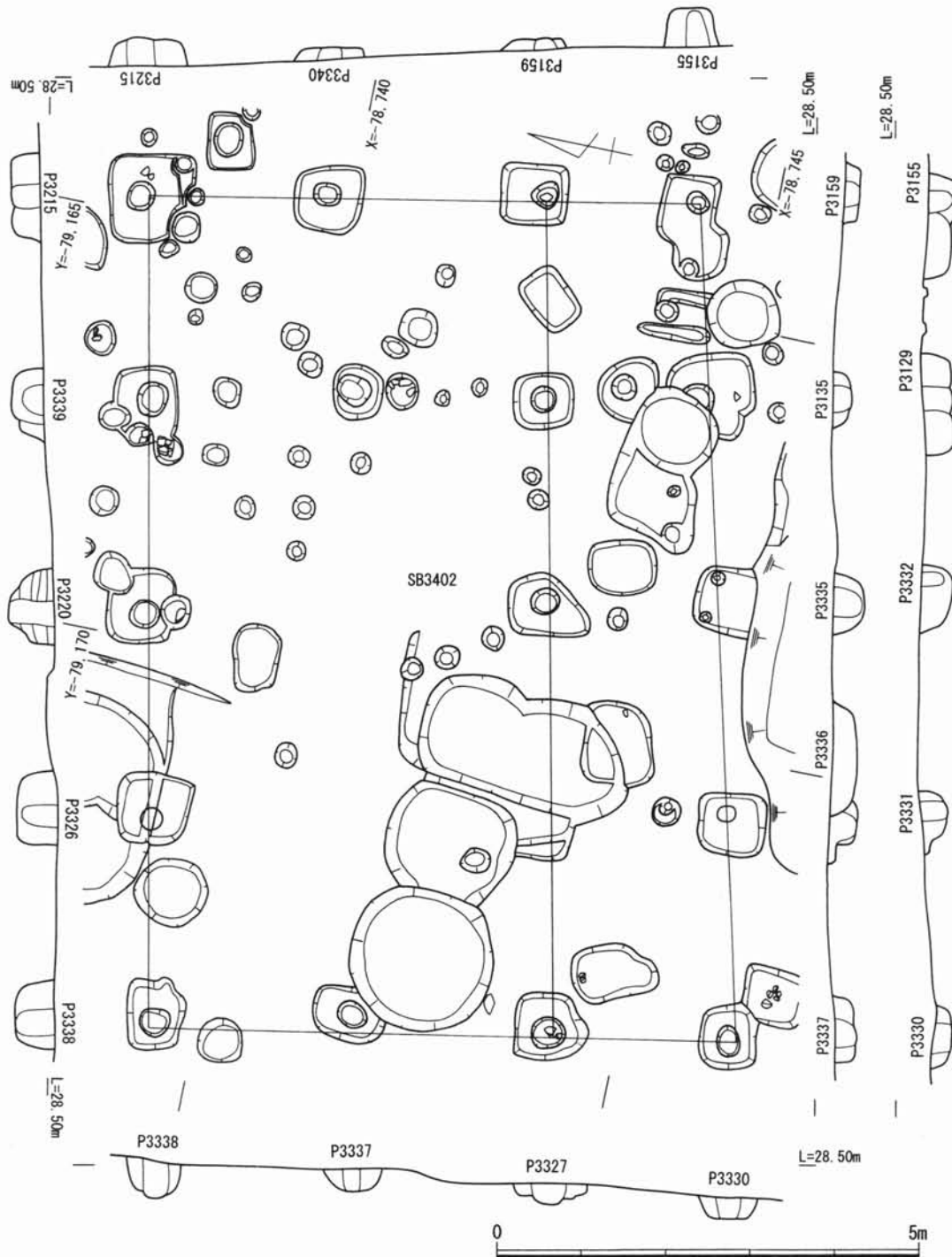
0.1~0.4mを測る。北および南に展開する柱を検出できなかったので掘立柱建物跡 S B3402に付属する柵と判断した。柱列は、西から P 3225、P 3230、P 3353、P 3344と並ぶ。P 3225は、東西76cm、南北70cmで、深さ38cmを測る。検出した柱の直径は20cmである。P 3230は、東西66cm、南北70cmで、深さ10cmを測る。P 3353は、東西66cm、南北70cmで、深さ13cmを測る。P 3344は、東西70cm、南北66cmで、深さ26cmを測る。検出した柱の直径は30cmである。

**掘立柱建物跡 S B 3402**(第50図、図版第32・33) 今回の調査地の中央で検出した。桁行10m(33尺)、梁間4.8m(16尺)を測る東西棟である。柱間は身舎で約2.4~2.6m(8~8.6尺)、庇で1.8~2.1m(6~7尺)を測る。柱穴は一辺約0.7~1.0mの掘形をもち、柱の直径は30~40cmで、検出した深さは北柱列で0.3~0.5m、南の柱列で0.2~0.3mを測る。

北平部の柱列は、西から P 3338、P 3326、P 3220、P 3339、P 3215と並ぶ。P 3338は、東西82cm、南北70cmで、深さ50cmを測る。検出した柱の直径は30cmである。P 3326は、東西90cm、南北86cmで、深さ48cmを測る。検出した柱の直径は30cmである。P 3220は、東西92cm、南北64cmで、深さ44cmを測る。検出した柱の直径は34cmである。P 3339は、東西74cm、南北62cmで、深さ34cmを測る。検出した柱の直径は34cmである。P 3215は、東西108cm、南北100cmで、深さ38cmを測る。検出した柱の直径は34cmである。

東妻部の柱列は、北から P 3215、P 3340、P 3159となる。P 3340は、東西86cm、南北80cmで、深さ16cmを測る。検出した柱の直径は26cmである。P 3159は、東西74cm、南北80cmで、深さ16cmを測る。検出した柱の直径は30cmである。南平部の柱列は東から、P 3159、P 3135、P 3335、P 3336、P 3327となる。P 3135は、東西68cm、南北70cmで、深さ22cmを測る。検出した柱の直径は30cmである。P 3335は、東西74cm、南北80cmで、深さ40cmを測る。検出した柱の直径は30cmである。P 3336は、東西(74)cm、南北(70)cmで、深さ30cmを測る。検出した柱の直径は30cmである。P 3327は、東西80cm、南北90cmで、深さ24cmを測る。検出した柱の直径は38cmである。

西妻部の柱列は、南から P 3327、P 3337、P 3338となる。P 3337は、東西60cm、南北90cmで、深さ28cmを測る。検出した柱の直径は30cmである。南庇部の柱列は、東から P 3155、P 3129、P 3332、P 3331、P 3330となる。P 3155は、東西84cm、南北74cmで、深さ50cmを測る。検出した柱



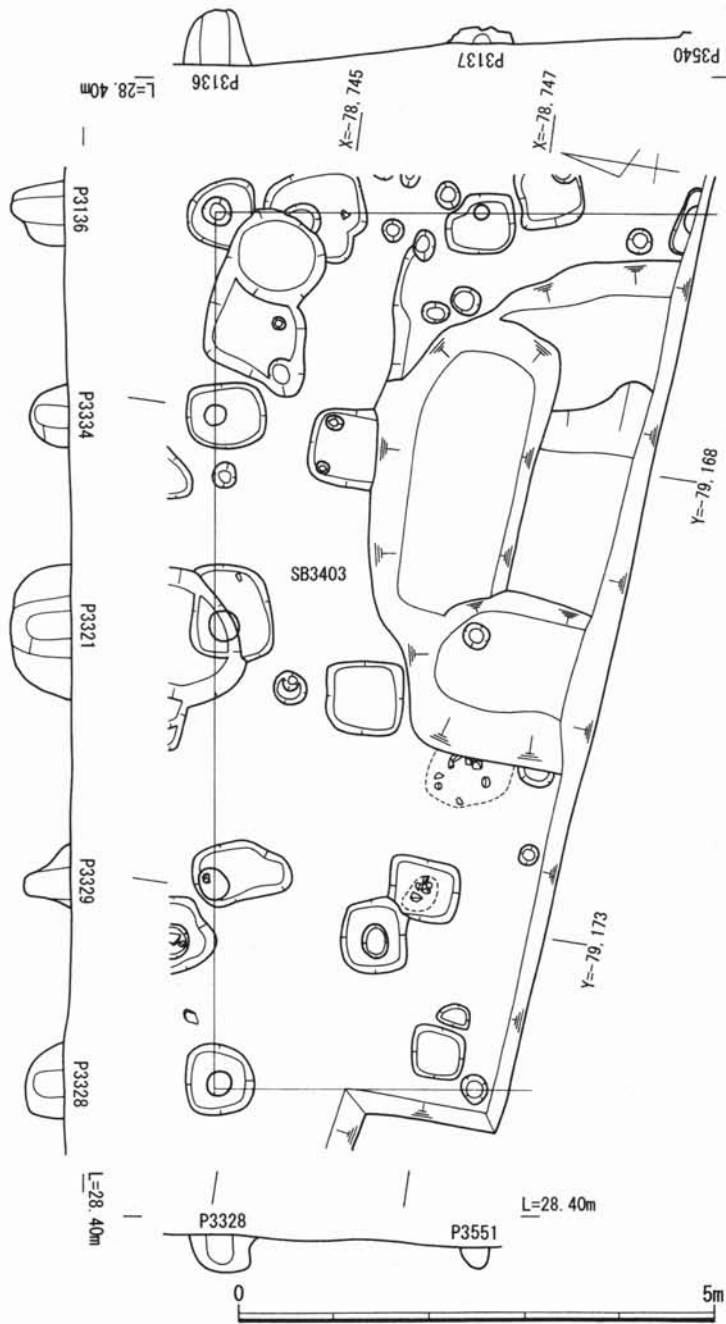
第50図 掘立柱建物跡 S B 3402実測図

の直径は28cmである。P 3129は、東西100cm、南北102cmで、深さ20cmを測る。検出した柱の直径は38cmである。P 3332は、東西80cm、南北(70)cmで、深さ40cmを測る。P 3331は、東西74cm、南北80cmで、深さ30cmを測る。P 3330は、東西70cm、南北70cmで、深さ24cmを測る。検出した柱の直径は30cmである。柱穴内から須恵器杯蓋・杯身や土師器杯身、土錘などが出土した。

2) 2期の遺構(第48図)

調査地の南端で東西4間、南北1間以上の東西棟の掘立柱建物跡(S B 3403)と北東部で南北4





第51図 掘立柱建物跡 S B 3403 実測図

は、東西100cm、南北88cmで、深さ65cmを測る。検出した柱の直径は30cmである。P 3334は、東西68cm、南北84cmで、深さ42cmを測る。検出した柱の直径は20cmである。P 3136は、東西76cm、南北70cmで、深さ58cmを測る。検出した柱の直径は30cmである。

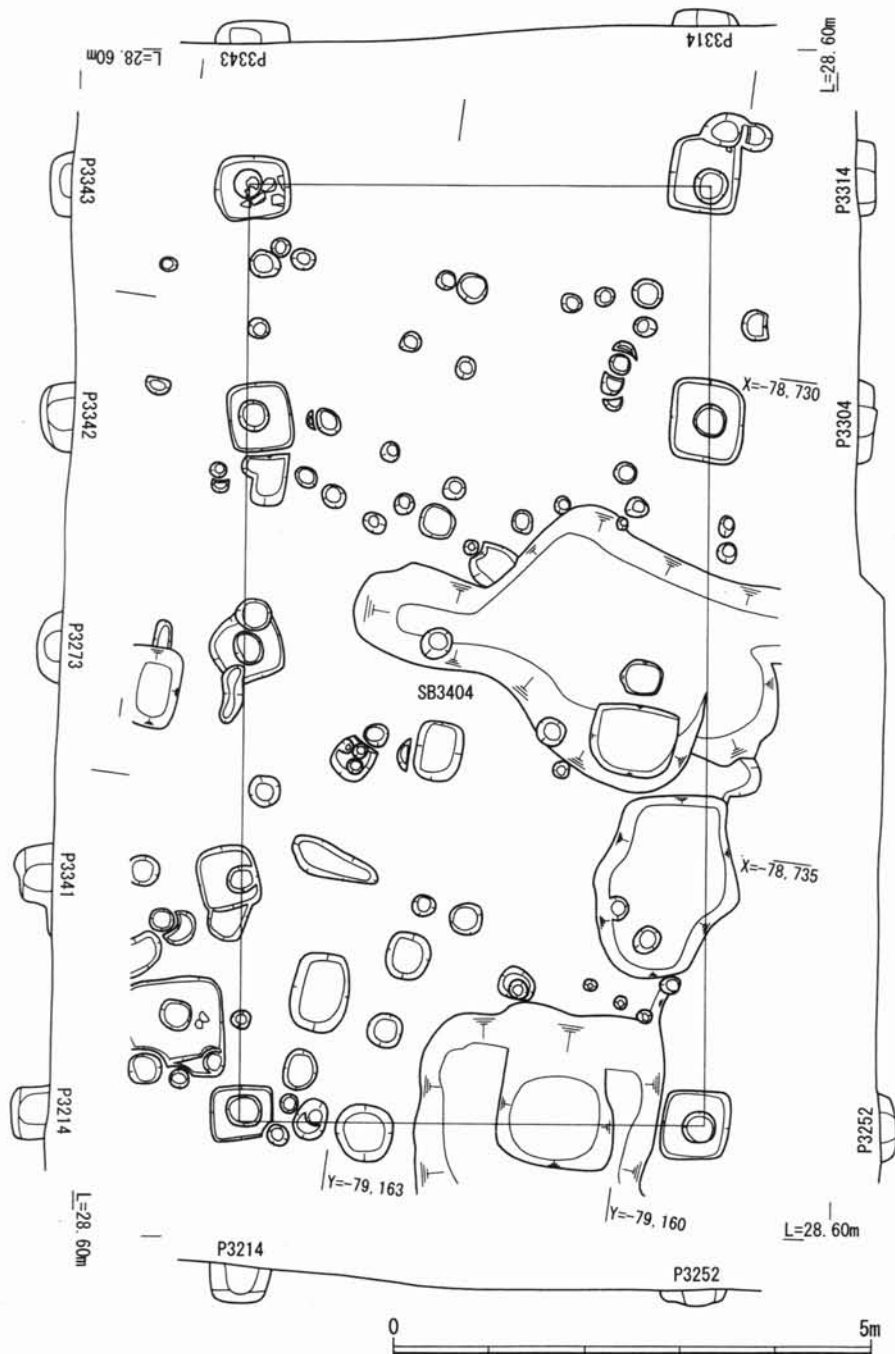
東妻部の柱列は、北から P 3136、P 3137、P 3540となる。P 3137は、東西64cm、南北74cmで、深さ20cmを測る。検出した柱の直径は18cmである。P 3540は、東西74cm、南北(20)cm以上で、深さ6cmを測る。検出した柱の直径は30cmである。

西妻部の柱列は、北から P 3328、P 3551となる。P 3551は、掘形を認識することができず、ベース面まで届いていた柱の痕跡のみを確認した。深さ22cmで、検出した柱の直径は30cmを測る。

間、東西2間の南北棟の掘立柱建物跡(S B 3404)、南東部で南北2間以上、東西2間の南北棟の掘立柱建物跡(S B 3405)を検出した。これらの柱筋は座標の北に対して7.0～7.5°西に傾く。

掘立柱建物跡 S B 3403(第51図、図版第33・34) 掘立柱建物跡 S B 3402の底部で重複して検出した。桁行9.0m(30尺)、梁間5.0m(16.6尺)を測る東西棟である。身舎の柱間は約2.4m(8尺)を測る。柱穴は一辺約0.7～1.0mの掘形をもち、柱の直径は20～30cmで、検出した深さは北柱列で0.4～1.0mを測る。

北平部の柱列は、西から P 3328、P 3329、P 3321、P 3334、P 3136となる。P 3328は、東西76cm、南北72cmで、深さ90cmを測る。検出した柱の直径は30cmである。P 3329は、東西68cm、南北100cmで、深さ48cmを測る。検出した柱の直径は30cmである。P 3321

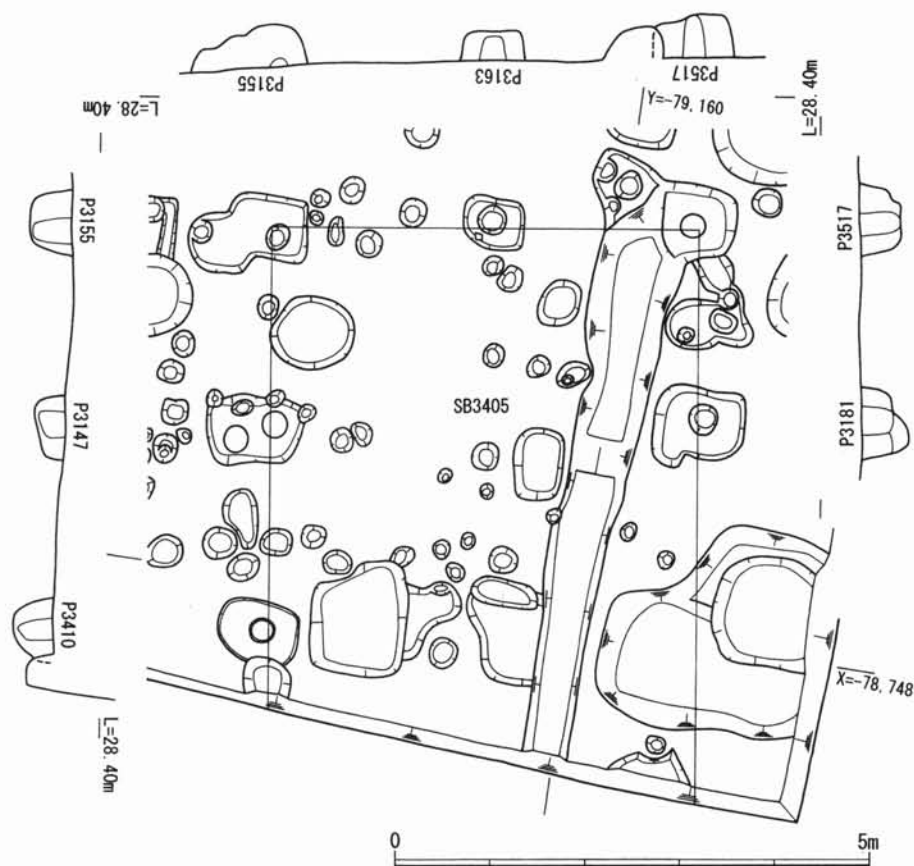


第52図 掘立柱建物跡 S B 3404実測図

建物の方位は北で $7.0^{\circ}$ 西に傾きをもつ。柱穴内から須恵器杯蓋・杯身、土師器杯身・鉢・甕などが出土した。

掘立柱建物跡 S B 3404(第52図) 掘立柱建物跡 S B 3403の北東で検出した。桁行9.8m(32.6尺)、梁間4.8m(16尺)を測る南北棟である。平部の柱間は約2.4m(8尺)を測る。柱穴は一辺約0.6~0.8mの掘形をもち、柱の直径は30cmで、検出した深さは北柱列で0.2~0.4mを測る。妻部の間柱は、攪乱などにより南北とも検出していない。

東平部の柱列は、北から P 3314、P 3304、1基攪乱により不明で、P 3252となる。P 3314は、



第53図 掘立柱建物跡 S B 3405実測図

東西75cm、南北80cmで、深さ20cmを測る。検出した柱の直径は36cmである。P 3304は、東西78cm、南北84cmで、深さ20cmを測る。検出した柱の直径は34cmである。P 3252は、東西70cm、南北70cmで、深さ20cmを測る。検出した柱の直径は34cmである。

西平部の柱列は、北からP 3343、P 3342、P 3273、P 3341、P 3214となる。P 3343は、東西82cm、南北68cmで、深さ24cmを測る。検出した柱の直径は34cmである。P 3342は、東西68cm、南北70cmで、深さ38cmを測る。検出した柱の直径は34cmである。P 3273は、東西76cm、南北70cmで、深さ26cmを測る。検出した柱の直径は32cmである。P 3341は、東西64cm、南北64cmで、深さ38cmを測る。検出した柱の直径は34cmである。P 3214は、東西66cm、南北64cmで、深さ40cmを測る。検出した柱の直径は28cmである。建物の方位は北で7.0°西に傾きをもつ。柱穴内から土師器杯身が出土した。

**掘立柱建物跡 S B 3405**(第53図) 掘立柱建物跡 S B 3403の東で検出した。桁行3 m以上、梁間4.8 m(16尺)を測る南北棟である。柱穴は一辺約0.6~0.8mで、平部の柱間は約2.0~2.1m(6.6~7尺)を測る。妻部の柱間は約2.1m(7尺)を測る。

北妻部の柱列は、西からP 3155、P 3163、P 3517となる。P 3155は、東西84cm、南北68cmで、深さ44cmを測る。検出した柱の直径は26cmである。P 3163は、東西64cm、南北54cmで、深さ30cmを測る。検出した柱の直径は30cmである。P 3517は、東西96cm、南北80cmで、深さ46cmを測る。

東平部の柱列は、北からP3517、P3181で、以南は攪乱により削平されている。P3181は、東西98cm、南北70cmで、深さ36cmを測る。検出した柱の直径は30cmである。

西平部の柱列は、北からP3155、P3147、P3410となる。P3147は、東西100cm、南北66cmで、深さ32cmを測る。検出した柱の直径は30cmである。P3410は、東西86cm、南北64cmで、深さ41cmを測る。検出した柱の直径は30cmである。

建物の方位は北で7.5°西に傾きをもつ。柱穴内から須恵器杯蓋や土師器杯身が出土した。

S X 3365～3369 調査地の西南部で検出した土器の集中的に出土する地点である。ベース面が黒色粘質土であり、埋土も同様の黒色粘質土であることから、遺構の掘形を明確にすることができなかつた。

### 3) そのほかの遺構(第48図)

井戸 S E 3386 調査地の北西部で素掘りの井戸 S E 3386を検出した。直径約1m、深さ3m以上を測る。湧き水により崩落の危険が生じたため途中で掘削を断念した。埋土から陶磁器や瓦が出土した。江戸時代中期に属するものと思われる。

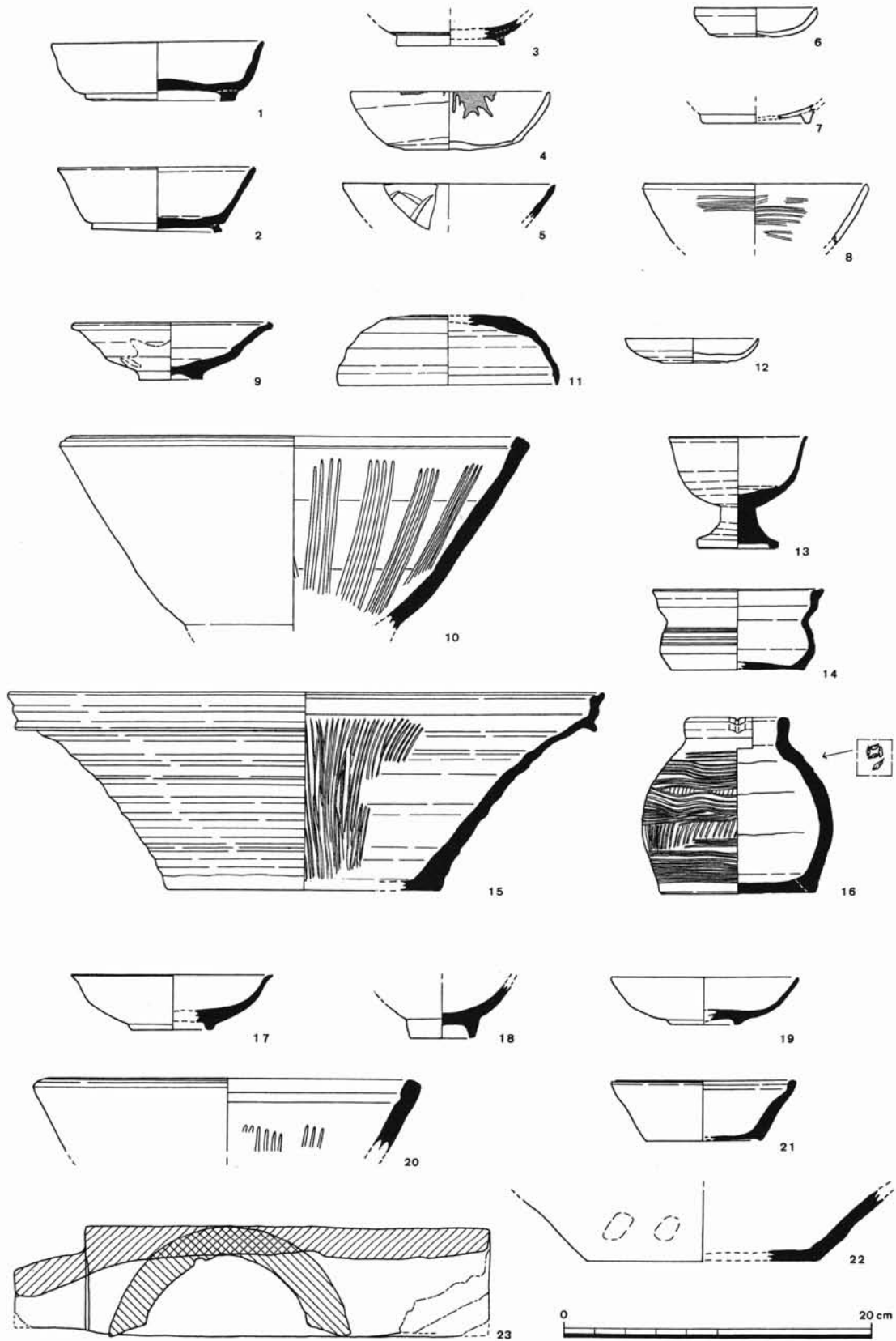
(戸原和人)

## 4. 出土遺物(第54～56図、図版第37・38)

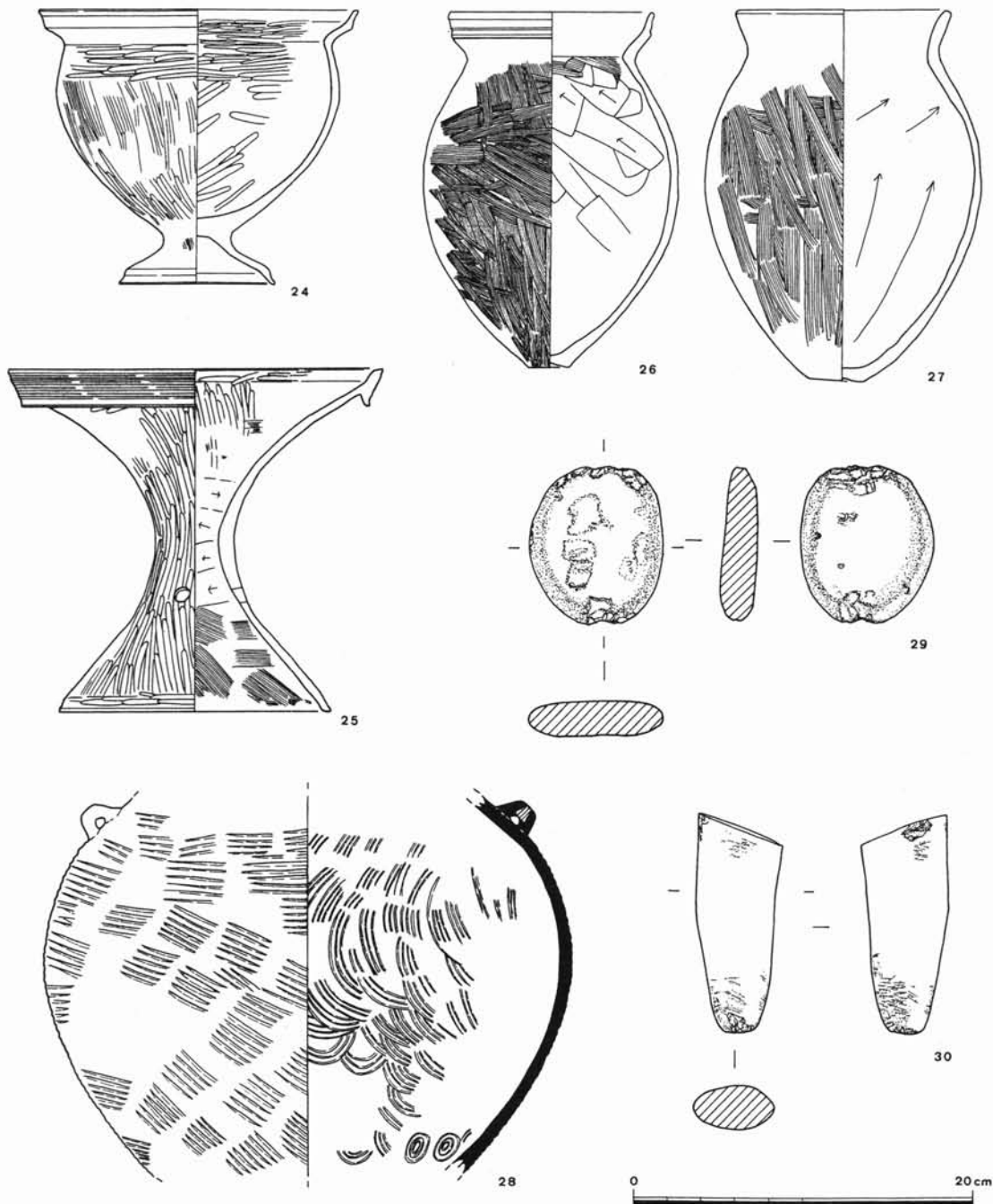
### (1) 1 トレンチ

出土遺物には、石器をはじめ、弥生土器、土師器、須恵器、緑釉陶器、唐津、瓦などがある。

1・2は須恵器杯身である。1はトレンチ西部にある土坑S K 1415で出土した。2はトレンチ西部にある竪穴式住居跡S H 1195で出土した。奈良時代に属する。3は緑釉陶器碗である。トレンチ西部の包含層から出土した。平安時代である。4は土師器皿である。トレンチ西部にある土坑S K 1465で出土した。口径12.8cm、器高3.8cmで、口縁部には煤が付着している。奈良～平安時代に属する。5は竜泉窯系の鎬蓮弁文青磁碗である。トレンチ西部の包含層から出土した。中国宋代に属する。6は瓦器皿である。トレンチ中央部にある土坑S K 1151より出土した。鎌倉時代に属する。7は瓦器碗である。トレンチ中央部にある土坑S K 1459より出土した。鎌倉時代に属する。8は瓦器碗である。トレンチ西部の包含層から出土した。内外面ともミガキを施す。口縁部は直線的で鎌倉時代の丹波型に属する。9～12は堀S D 1002より出土した。9は唐津皿である。江戸前期に属する。10は丹波播鉢である。4条の条線を施したもので、口縁端部内面に1条の沈線を施す。11は須恵器杯蓋である。古墳時代後期に属する。12は黒色土器皿である。平安時代後期に属する。13～16はトレンチ東部の井戸S E 1197から出土した。13は白磁高台付小碗である。14は丹波小鉢である。外面は褐色で内面は茶色である。15は丹波播鉢である。内部には全面にすり目を施す。色調は薄茶色である。16は小壺である。外面には粗いヘラ描き文を施す。上半部には緑灰色釉、下半部は褐色である。外底面は粘土板そのままである。17～22はトレンチ中央部の井戸S E 1001より出土した。17は陶器皿である。18は磁器碗である。19は磁器皿である。20は丹波播鉢である。内面の所々にすり目を施す。21は陶器杯である。22は陶器鉢である。23は土



第54図 1 トレンチ出土遺物実測図(1)

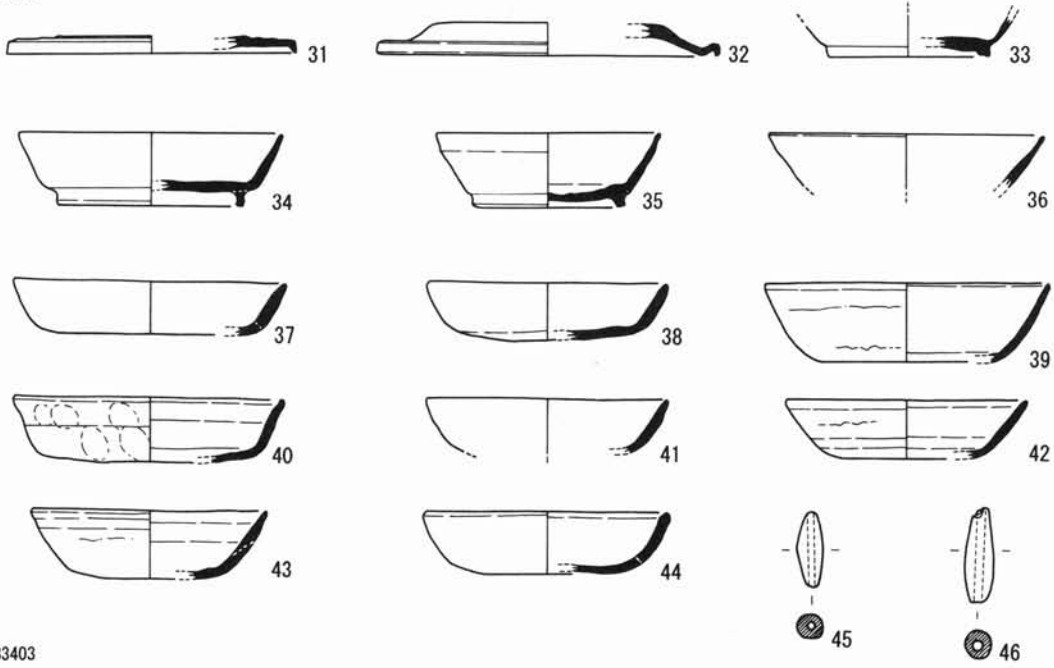


第55図 1トレンチ出土遺物実測図(2)

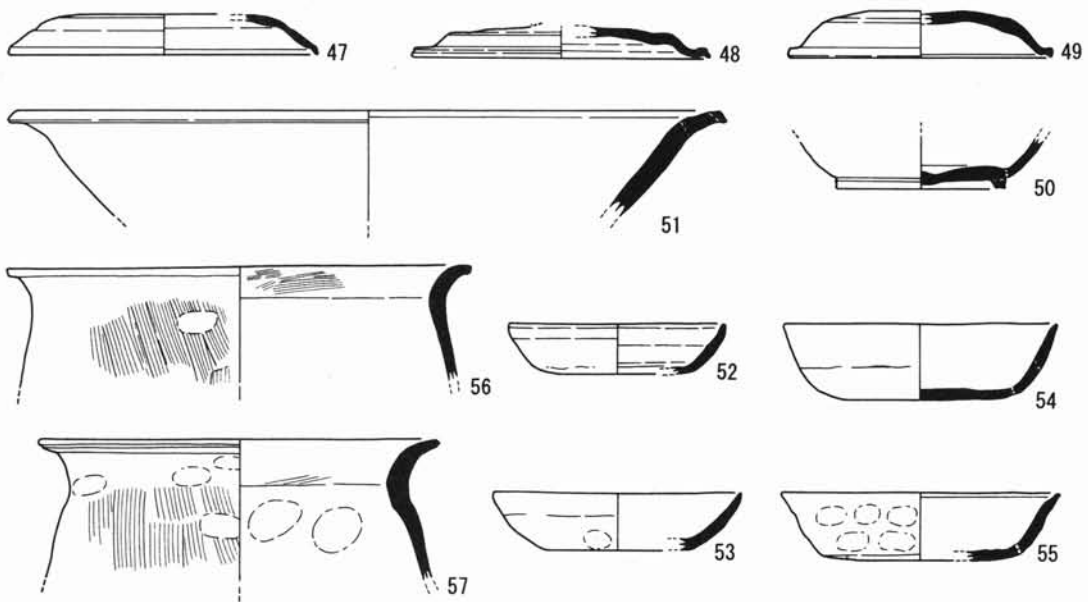
坑S K1399より出土した。24は台付鉢である。25は器台である。いずれも内外面にミガキを施す。弥生時代後期に属する。26はS P1178より出土した弥生時代後期の甕である。外面にハケメ、内面にケズリを施す。27は竪穴式住居跡S H1313より出土した弥生時代後期の甕である。外面にハケメ、内面にケズリを施す。28は土坑S K1425より出土した須恵器壺である。外面に叩目、内面に同心円文を施す。29は包含層より出土した石錘である。楕円形の細い両端を少し打ち欠いている。30は包含層より出土した叩石である。先端に敲打痕がある。

(2) 3トレンチ

SB3402



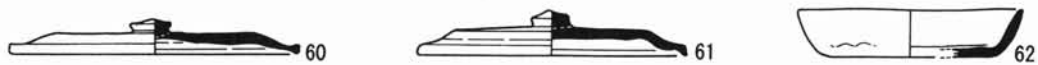
SB3403



SB3404



SB3405



第56図 3トレンチ出土遺物実測図

31～46は、掘立柱建物跡S B 3402からの出土である。31・32は須恵器杯蓋である。いずれもつまみ部を欠損しているが、31はP 3331出土で口径15.4cm、残存高1cmを測る。32はP 3327出土で口径18.0cm、残存高1.7cmを測る。33～36は須恵器杯身である。33・35はP 3215出土である。35は口径12.0cm、器高4.0cmを測る。34はP 3330出土で口径14.0cm、器高4.0cmを測る。36はP 3331出土で、口径14.5cmを測る。37～44は土師器杯身である。いずれの土器も粘土紐による成形の後、ナデ調整を施すのみで指おさえの後をとどめるものもある。37・38はP 3338出土である。37は口径14.4cm、器高2.8cmを測り、38は口径12.5cm、器高3.0cmを測る。39はP 3220出土である。口径15.0cm、器高4.1cmを測る。40～43はP 3327出土である。40は口径14.1cm、器高3.3cmを測る。外面に2段の指押さえを施し、口縁端部内面に沈線を施す。41は口径13.7cm、器高3.0cmを測る。42は口径12.6cm、器高3.1cmを測る。43は口径12.3cm、器高3.7cmを測る。44はP 3330出土で、口径12.9cm、器高3.3cmを測る。45・46は土錘である。45はP 3220出土である。最大径1.4cm、器高4.0cmを測る。46はP 3339出土である。最大径1.6cm、残存高4.9cmを測る。

47～55は、掘立柱建物跡S B 3403からの出土である。47～49は須恵器杯蓋である。47・48はつまみ部を欠損しているが、49はつまみをもたない器種と考えられる。47はP 3334出土で口径16.4cm、残存高2.1cmを測る。48はP 3136出土で口径15.8cm、残存高1.6cmを測る。49は口径13.9cm、器高2.4cmを測る。50・56はP 3321出土である。50は須恵器杯身である。56は土師器甕で口径24.6cm、残存高6.0cmを測る。51・55・57は、P 3329出土である。51は土師器鉢で口径37.2cm、残存高5.7cmを測る。55は土師器杯で口径14.5cm、器高3.6cmを測る。57は土師器甕で口径20.9cm、残存高7.5cmを測る。52・53は、P 3328出土の土師器杯身である。52は口径11.4cm、器高3.7cmを測り、53は口径13.1cm、器高3.0cmを測る。54はP 3403出土で口径14.3cm、器高4.0cmを測る。55はP 3329出土で口径14.5cm、器高3.6cmを測る。外面に2段の指押さえを施し、口縁端部内面に沈線を施す。58・59は掘立柱建物跡S B 3404からの出土である。いずれもP 3403出土で、58は口径13.1cm、器高2.9cmを測る。59は口径13.6cm、器高3.8cmを測る。

60～62は、掘立柱建物跡S B 3405からの出土である。60・61は須恵器杯蓋である。P 3163出土で、60は口径15.2cm、器高1.9cmを測る。61は口径14.2cm、器高2.4cmを測る。62はP 3155出土の土師器杯身である。口径11.8cm、器高2.0cmを測る。

(伊野近富)

## 5. まとめ

今回の調査の概要をまとめると、以下のとおりである。

まず、第1トレンチでは、弥生～江戸時代までの遺構を検出した。弥生時代の遺構には、竪穴式住居跡や方形周溝墓があり、集落と墓が近接して営まれたことが分かったが、出土遺物が少なく同時期かどうかは不明である。古墳時代以降、中世にも断片的に遺構が確認され、人々の生活の場となったことが判明したものの、広範囲に利用されることはなかったようである。この地が大きく変貌するのは近世初頭である。堀をはじめ、井戸、溝、ピットを検出したことにより、福



知山城の城下町の一角を形成していたことが明確となった。

1・3地区で検出した奈良・平安時代の遺構は、今回の調査で初めてその存在が明らかになった。掘立柱建物跡は、柱穴の切り合や2群に分かれる方位をもったまどまりや出土遺物などから2期に分類することができる。昨年度調査を行った3-1地区から3-2地区にかけての丘陵裾の地形を、3-2地区中央部で南に向かって削り出しを行い、南から東にかけて宅地の範囲を確保しており、2期の建物と柵列がこれに並行している。

1期の建物では、庇を付した掘立柱建物跡が検出されていることから、有力者の居宅の可能性も考えられる。ただ調査範囲ではそのごく一部を確認したにとどまり、調査地の南および東に同時代の遺構がさらに広がっているものと考えられる。今後の周辺部での調査に期待したい。

(伊野近富・戸原和人)

注1 伊野近富「岡ノ遺跡第2・3次」(『京都府遺跡調査概報 第113冊』 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 2005

注2 調査参加者 八瀬由香里・小島健之介・李添錚・上阪哲司・植山映・木村祐樹・孫玉深・山岡匠平・塩瀬久善・黒田洋一郎・村上恵理・三好ひとみ・渡邊節子・坂本由美・足立美和・小林末広・水巻一・赤井淳・豊嶋健司・矢持隆・塩見豊・村上悦夫・芦田和彦・熊谷義憲・公手勤・足立章・井尻隆夫・坪倉英一・足立義一・大泉栄・吉田太一・伊木正・津田茂・光田忠夫・池田孝夫・藤岡孝一・梅原長一・塩見孝司・西田一

注3 永谷隆夫「Ⅲ. 岡ノ遺跡」(『福知山市文化財調査報告書第42集』 福知山市教育委員会) 2002

注4 戸原和人「岡ノ遺跡第2次」(『京都府遺跡調査概報 第111冊』 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 2004

## 4. 長岡京跡右京第856次(7ANNM-6地区)・

### ともおか 友岡遺跡発掘調査概要

#### 1. はじめに

今回の調査は、石見下海印寺線地方道路交付金(街路)事業に係わる事前調査として京都府土木事務所の依頼を受けて実施した。調査対象地は、長岡京市友岡西山16-1に所在する。長岡京の条坊復原によると、右京七条三坊九・十町(新条坊では十一・十二町)にあたり、西三坊坊間小路と七条条間南小路が想定される位置にあたる。また、縄文時代から中世にかけての集落跡である友岡遺跡の範囲にも含まれ、これまでの周辺の調査では、飛鳥～鎌倉時代にかけての遺構・遺物が多数見つかっている。

現地調査は、当調査研究センター調査第2課調査第3係長石井清司、主任調査員戸原和人が担当した。調査面積は430㎡である。現地調査の期間は、平成17年8月2日～10月12日までである。調査にあたっては、京都府教育委員会・長岡京市教育委員会・(財)長岡京市埋蔵文化財センター・地元自治会、近隣住民の方々の御協力・御指導を得た。

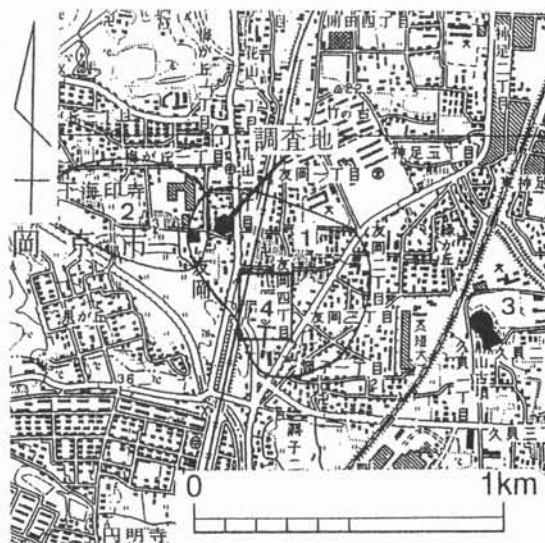
なお、調査に係る経費は、全額、京都府土木建築部が負担した。

#### 2. 調査概要

調査地は、平成16年度に当調査研究センターが行った長岡京跡右京第829次調査<sup>(注1)</sup>のA・B地区の中間に位置する(A-2・B-2地区)。また、昭和57年度に、(財)長岡京市埋蔵文化財センターが実施した長岡京跡右京第118次調査<sup>(注2)</sup>が本調査地の中央部にある(第58図)。今回の調査の結果では、これまでの調査と同様に平安時代末～鎌倉時代の土坑、溝、柱穴などを検出した。

##### (1) A-2地区(第58図)

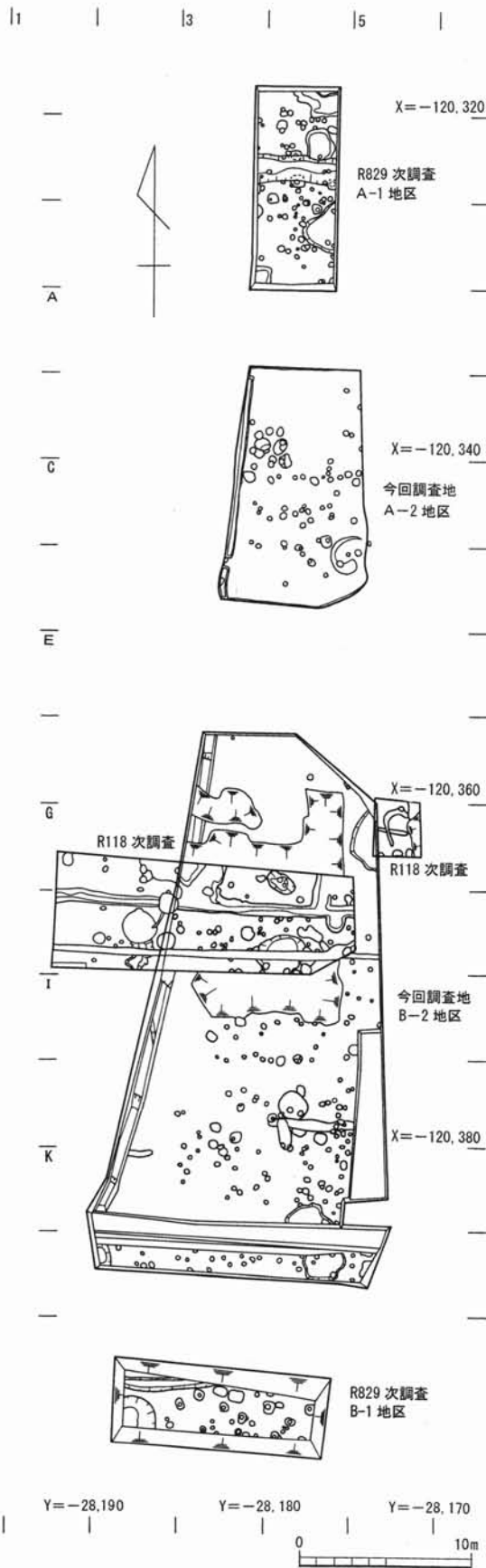
調査地の北西寄りでは土坑、南半部で建物の柱を据えるための柱穴を検出した。土坑内からは土師器皿や瓦器碗の破片などが出土している。柱穴P85651は、調査地の中央南よりで検出した。長軸50cm、短軸35cm、深さ35cmを測る。埋土内からは



第57図 調査地および周辺主要遺跡位置図

(国土地理院1/25,000京都西南部・淀)

- |          |          |
|----------|----------|
| 1. 友岡遺跡  | 2. 伊賀寺遺跡 |
| 3. 恵解山古墳 | 4. 鞍岡廃寺  |



第58図 調査地平面図

高台付きの土師器皿が出土した。そのほかの柱穴からも瓦器碗の破片などが出土した。これらの出土遺物から土坑や柱穴の時期は、平安時代末～鎌倉時代頃と判断している。

(2) B-2 地区(第59図)

調査地の旧地形は北西から南東にむけて下がっており、北半部は調査の直前まで建っていた建物の基礎によって削平されていた。検出した遺構には、調査地南東部で3基の土坑、近世以降と考えられる東西方向の溝2条と調査地南半部を中心に分布する柱穴がる。3基の土坑や柱穴の多くは、出土遺物から平安時代末～鎌倉時代頃と考えられる。

土坑 S K 85601(第60図) 東南の角で検出した。平面が不定形な円形状で、直径約3.0m、深さ約0.3mを測る。埋土の中からは、土師器皿、瓦器碗、瓦質の三脚付き羽釜などが出土した。

土坑 S K 85602(第60図) 土坑 S K 85601の南で検出した。直径約2.4m、深さ約0.3mを測る。埋土の中からは、土師器皿、瓦器碗、無釉陶器、緑釉陶器などが出土した。

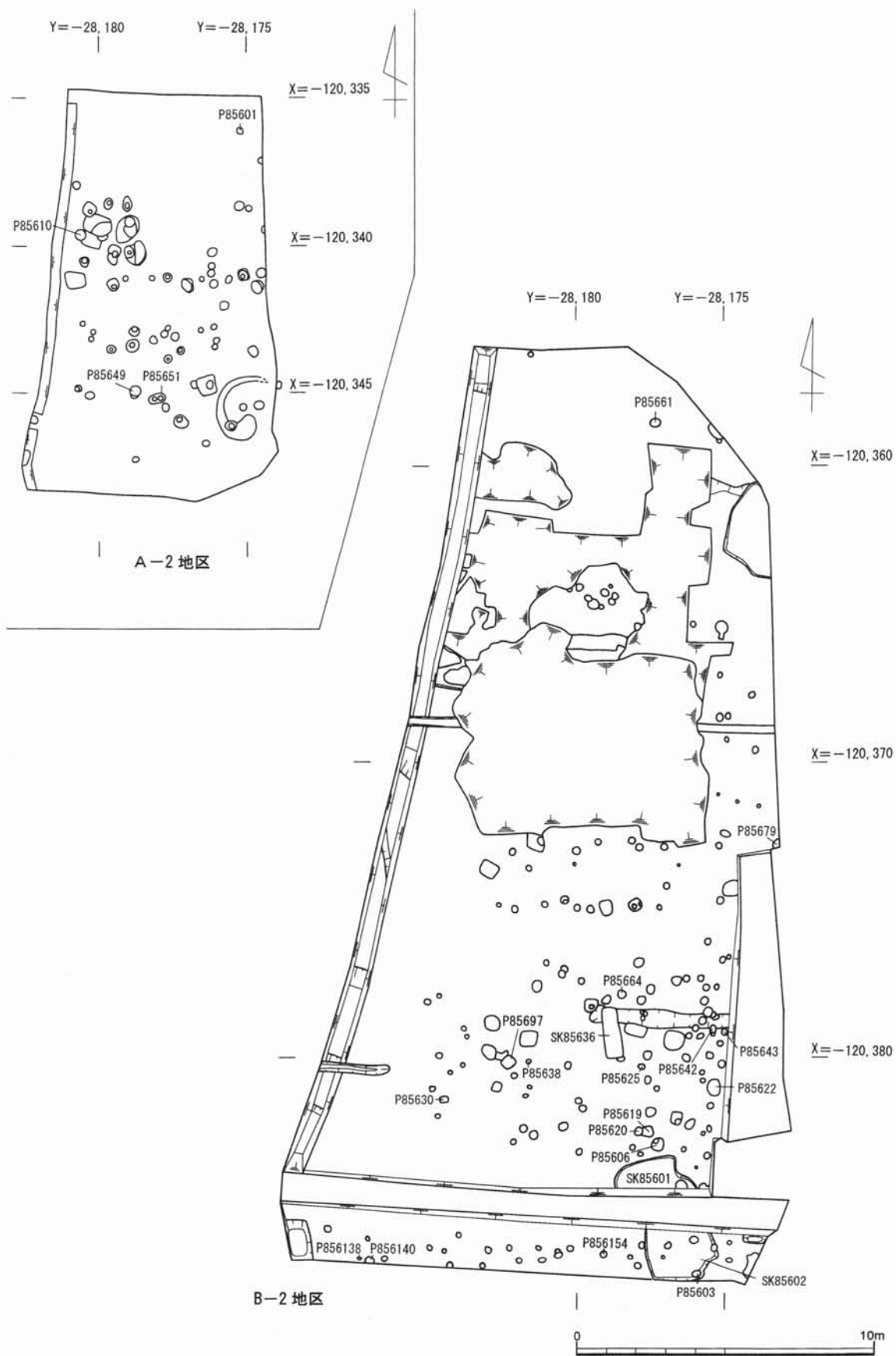
土坑 S K 85636(第60図) 南半部の中央よりで検出した。平面長方形で0.6m×1.8m、深さ0.2m以上を測る。南北方向に主軸をもつ。埋土の中からは、土師器皿、瓦器碗、瓦質の鍋などが出土した。

柱穴 P 85603(第60図) 土坑 S K 85602に接して検出しており、ほぼ同じ時期の遺物が出土した。埋土の中からは、中国製の青白磁が出土した。

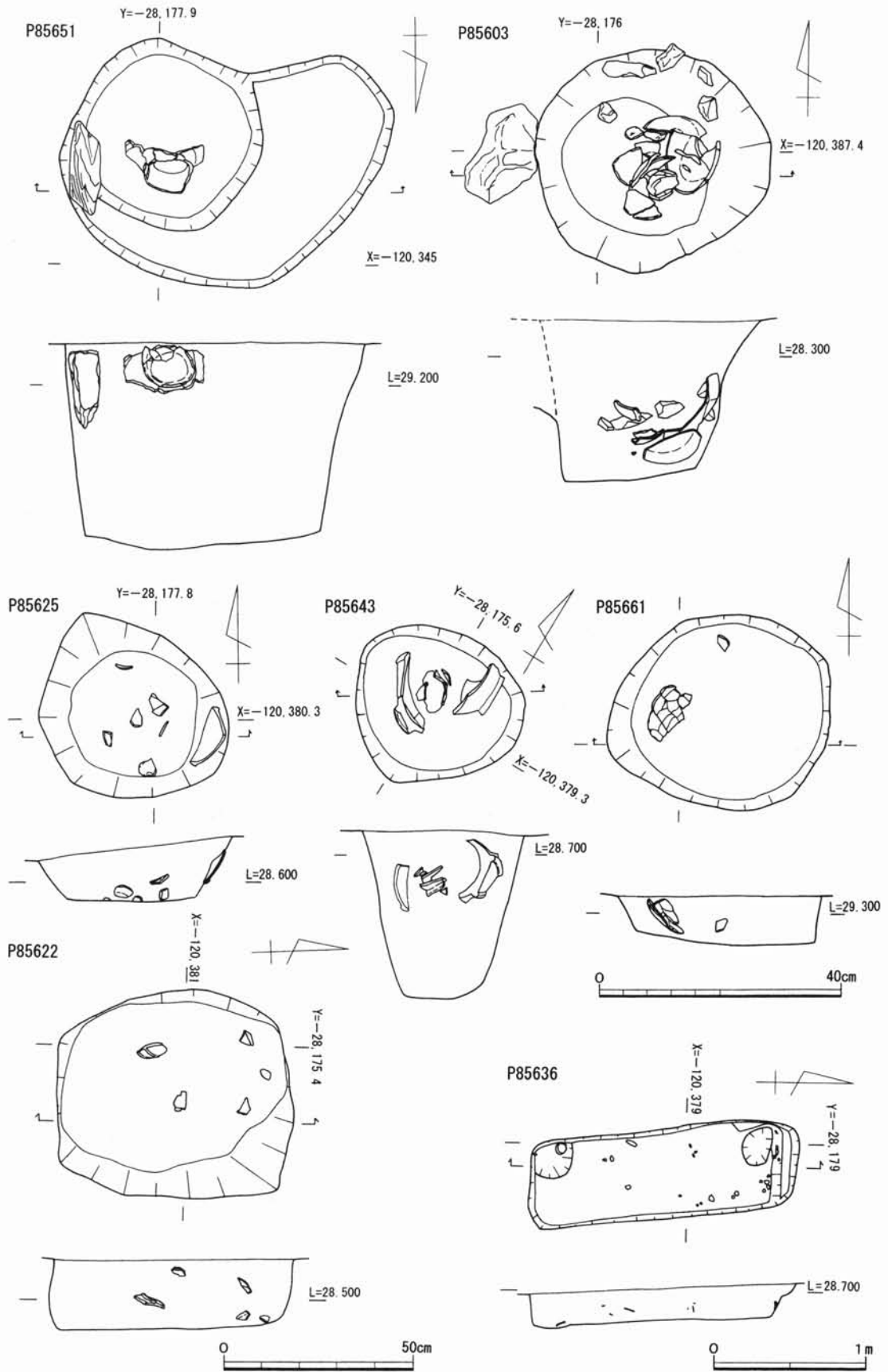
柱穴 P 85625(第60図) S K 85636の南東で検出した。埋土の中からは、土師器皿とともに破碎された中国製の白磁碗が出土した。

柱穴 P 85643(第60図) 調査地の東よりで検出した。埋土の中からは、土師器皿とともに破碎された中国製の白磁碗が出土した。

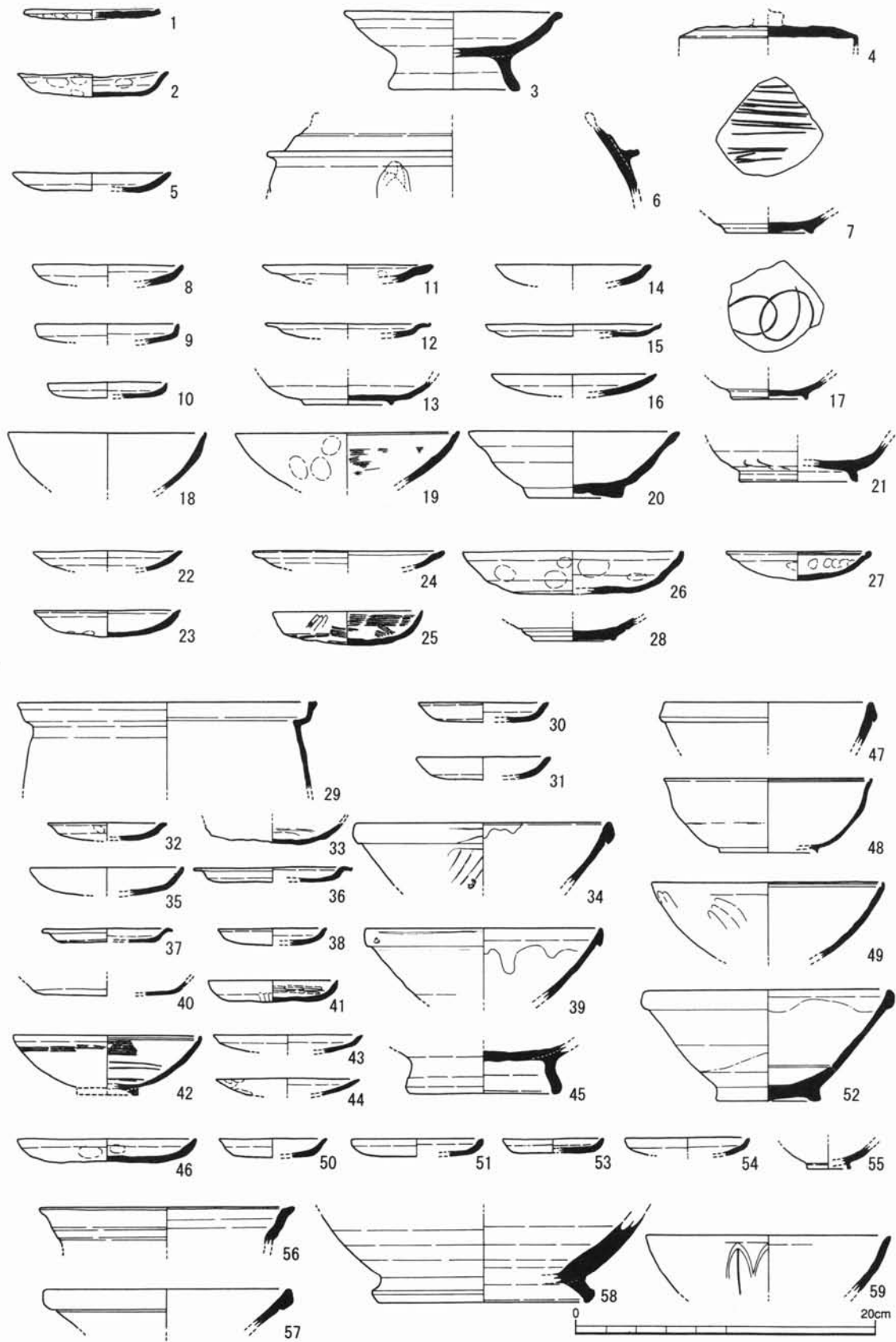
柱穴 P 85661(第60図) 調査地の北よりで検出した。埋土の中からは、瓦器碗が出土した。



第59図 検出遺構平面図



第60図 検出遺構実測図



第61図 出土遺物実測図

柱穴 P 85622(第60図) 調査地の南東よりで検出した。埋土の中からは、緑釉陶器が出土した。このほか遺物包含層から青磁椀、白磁椀、須恵器の壺などが出土した。

### 3. 出土遺物(第61図)

A-2地区から出土した遺物(1~4)には、土師器皿(1・2)・高台付皿(3)、包含層から出土した須恵器蓋(4)などがある。1は柱穴 P 85649、2は柱穴 P 85610、3は柱穴 P 85651、4は包含層中からそれぞれ出土した。3は口径14.5cm、器高8.3cmを測る。

B-2地区からの出土した遺物(5~59)には土師器では皿(26)、高台付皿(45)・椀(49)などがあり、瓦器では皿(25)・椀(7・17~19・42・48)、瓦質三脚付羽釜(6)・鍋(29)がある。須恵器の出土は少なく、古墳時代の杯片や甕(56)・壺(58)などがわずかに出土しているのみである。陶磁器では、無釉の椀(20)、近江系と考えられる緑釉の椀(21)・灰釉陶器(55)がある。貿易陶磁器では、青白磁(28)、白磁椀(34・39・47・52・57)と、龍泉窯系の鎬蓮弁青磁椀(59)が出土している。5~7は土坑 S K 85601から出土した。8~21は土坑 S K 85602から出土した。20は口径14.0cm、器高4.3cmを測る。22~28は柱穴 P 85603から出土した。28は11世紀後半から12世紀にかけての製品で、高台径5.5cmを測る。29・30は土坑 S K 85630から出土した。31は土坑 S K 85636から出土した。32~34は柱穴 P 85619から出土した。35は柱穴 P 85679、36は柱穴 P 85638、37は柱穴 P 856140、38・39は柱穴 P 85625、40・42は柱穴 P 85664、43・44・52は柱穴 P 85664、46・47は柱穴 P 85606、48は柱穴 P 85679、49は柱穴 P 85642、50・51は柱穴 P 85654、45・53~59は包含層中からそれぞれ出土した。52は12世紀後半の製品で、口径16.1cm、器高7.5cmを測る。

### 4. まとめ

今回の調査地点は、長岡京の条坊復原では、西三坊坊間小路と七条条間南小路の存在が想定されていたが、調査の結果、長岡京期に関連する遺構は検出できなかった。調査地周辺における長岡京の造営状況については、今後の課題と言わざるをえない。また、12世紀後半以降~14世紀前半と思われる土器とともに多数の柱穴が確認された。これまでの周辺部での調査でも、平安時代末~鎌倉時代にかけての遺構・遺物が多数検出されており、今回の調査地の南東250mに所在する飛鳥時代創建と考えられている友岡廃寺の存続時期と寺域の範囲を含めた検討が必要である。

(戸原和人)

調査参加者 木村悟・木村涼子・久米政代・黒慶子・杉江貴宏・内藤チエ・馬場さやか・前川敬子

#### 参考文献

竹原一彦「長岡京跡右京第829次・友岡遺跡発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報 第115冊』(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 2005

木村泰彦・續伸一郎「長岡京跡右京域の調査 右京第118次(7ANNM地区)調査概報」(『長岡京市埋蔵文化財センター年報』昭和57年度 (財)長岡京市埋蔵文化財センター) 1983

## 5. 京都第二外環状道路関係遺跡 平成16年度発掘調査概要

### 1. はじめに

国土交通省近畿地方整備局は、京都西南部の交通事情の改善のため、京都第二外環状道路の建設を計画した。同道路は、大山崎町から長岡京市域を北上し、京都市域に至るものである。長岡京市域には古代の都である長岡京跡が広範囲に所在しており、しかも、縄文時代から中世にいたる集落遺跡も多数分布している。今回の調査は、同道路の建設に先立ち、影響を受ける遺跡の実態を明らかにするために実施したものである。

平成16年度の調査は大きく4地区で実施し、南から友岡・調子地区、岸ノ下地区、上内田地区、尾流・西条地区で調査を行った(第62図)。当初計画では、友岡・調子地区での試掘調査とそれを受けての面的調査が予定されていたが、同地区の試掘調査の結果、遺構・遺物の分布が希薄であることが判明し、一部分の拡張調査に留まった。そのため、国土交通省、京都府教育委員会、当調査研究センターが協議し、新たに岸ノ下地区、上内田地区、尾流・西条地区での試掘調査を追加実施することとなった。

友岡・調子地区は、長岡京市友岡川原・六本木、調子八角に所在し、長岡京跡では右京八条三坊四～六町、九条三坊一・二町(旧条坊呼称では、右京八条三坊町二～四町、七・八町)に位置する。同地区には、縄文～鎌倉時代の集落跡である友岡遺跡に隣接している。

この地区の一連の調査は、長岡京跡右京第825次調査として実施した。調査の結果、友岡・調子地区は、中世以前には小泉川旧流路およびその氾濫原にあたっており、中世以後に田畑として土地利用が開始されたことが判明した。その中でも、現調子集落に近接した位置で平安時代に遡る溝が検出されたことは、小泉川の流路の変遷とともに、当該時期の集落が存在する可能性を示すものである。

岸ノ下地区は、長岡京市下海印寺岸ノ下13-1ほかに所在し、長岡京跡では、右京八条四坊一町、西三坊大路(旧条坊呼称では右京七条四坊三町、西三坊大路)に位置する。同地区には、古墳時代後期～鎌倉時代の集落跡である伊賀寺遺跡の範囲内に位置する。長岡京跡右京第840次調査として実施した。調査の結果、中世以前には小泉川旧流路およびその氾濫原にあり、中世以後に田畑として利用されたことが判明した。

上内田地区は、長岡京市下海印寺上内田53ほかに所在する。長岡京跡では、右京七条四坊五・十二町、西四坊坊間小路(旧条坊呼称では右京七条四坊七・十町、西四坊坊間小路)に位置する。長岡京跡右京第841次調査として実施した。同地区は、岸ノ下地区と同じく、伊賀寺遺跡の範囲に含まれている。調査の結果、古墳時代の集落跡と同時期の流路跡、時期不明の流路跡などが分





第62図 調査地位置図(国土地理院1/25,000西南部・淀を基に作成)

1. 奥海印寺遺跡 2. 下海印寺遺跡 3. 西山田遺跡 4. 伊賀寺遺跡 5. 友岡遺跡 6. 鞆岡廃寺  
7. 長岡京跡

(A:尾流地区 B:西条地区 C:上内田地区 D:岸ノ下地区 E:友岡地区 F:調子地区)

付表2 各地区調査概要一覧

大字	調査回数	地区	トレンチ	調査種別	調査面積 (㎡)	概要
友岡調子	右京第825次	A地区	1-1	試掘	55	中世段階の溝を検出
			1-2	試掘	80	
			1-A	本調査	155	
			1-B	本調査	400	
			2	試掘	230	既存建物のため攪乱著しく、わずかに中世段階の溝を検出
			3	試掘	125	中世段階の溝を検出
			15	試掘	50	
		B地区	4	試掘	105	小泉川旧流路内堆積土砂確認
			5	試掘	-	家屋現存のため未調査
		C地区	6	試掘	95	小泉川旧流路内堆積土砂を確認
			7	試掘	80	小泉川旧流路内堆積土砂を確認
		D地区	8	試掘	50	中世段階の包含層と近世以降の西国街道の路面・側溝を確認
			9	試掘	80	小泉川旧流路内堆積土砂を確認
		E地区	10	試掘	100	小泉川旧流路内堆積土砂を確認
11	試掘		110	中世段階の自然流路とそれに平行する人工の溝を検出		
	拡張		300			
12	試掘		80	小泉川旧流路内堆積土砂を確認		
13	試掘		95	中世段階の溝を確認		
14	試掘 拡張	40 230	中世段階の溝と平安時代の溝を検出			
下海印寺	右京第840次	岸ノ下地区	1	試掘	160	小泉川旧流路内堆積土砂を確認
			2	試掘	200	近世以降の耕作土
	右京第841次	上内田地区	1	試掘	100	古墳時代流路跡を確認
			2	試掘	45	古墳時代流路跡を確認
			3	試掘	60	古墳時代竪穴式住居跡状の土坑を確認
			4	試掘	90	古墳時代流路跡を確認
			5	試掘	45	土坑1・暗渠溝1を検出
			6	試掘	30	古墳時代流路跡を確認
			7	試掘	60	古墳時代流路跡を確認
			8	試掘	60	小泉川旧流路内堆積土砂を確認中
	右京第842次	西条地区	1	試掘	40	奈良・平安時代の掘立柱建物および古墳～古代の包含層を確認
			2	試掘	65	
			3	試掘	95	
		尾流地区	1	試掘	75	縄文土器片を含む堆積土
2			試掘	110	弥生時代後期～古墳時代初頭の土坑。縄文土器片を含む包含層	
3			試掘	95	顕著な遺構なし	
4	試掘	240	弥生～奈良・平安時代の土器片多数出土。古墳時代溝・土坑、時期不詳ピット、弥生～古墳時代の流路跡			

布していることを確認した。

尾流・西条地区は、長岡京市下海印寺尾流8ほか、西条4ほかに所在し、長岡京跡では、右京七条四坊十四町、西京極大路(旧条坊呼称では右京七条四坊十六町、西京極大路)に所在する。縄文時代を主体とする<sup>しもかいんじ</sup>下海印寺遺跡の範囲内にあり、長岡京の祭祀場として著名な<sup>にしやまだ</sup>西山田遺跡に隣接する。長岡京跡右京第842次調査として実施した。調査の結果、弥生時代から古代にいたる集落跡、弥生～古墳時代に至る旧小泉川流路の一部を検出した。

現地調査は、当調査研究センター調査第2課調査第3係長石井清司、主任調査員竹原一彦・増田孝彦・岩松保、専門調査員竹井治雄、調査第2係主任調査員松井忠春が担当した。

現地調査は、平成16年7月5日～平成17年2月25日までの期間を要した。

総調査面積は4,030㎡である(付表2)。現地調査および整理作業には、多くの方々の参加を得た。<sup>(注)</sup>記して感謝したい。本調査概要は、現地担当者がそれぞれ執筆し、文末に文責を記した。

なお、今回の調査・整理作業に係わる経費については、全額、国土交通省近畿地方整備局が負担した。

(岩松 保)

## 2. 各地区の調査概要

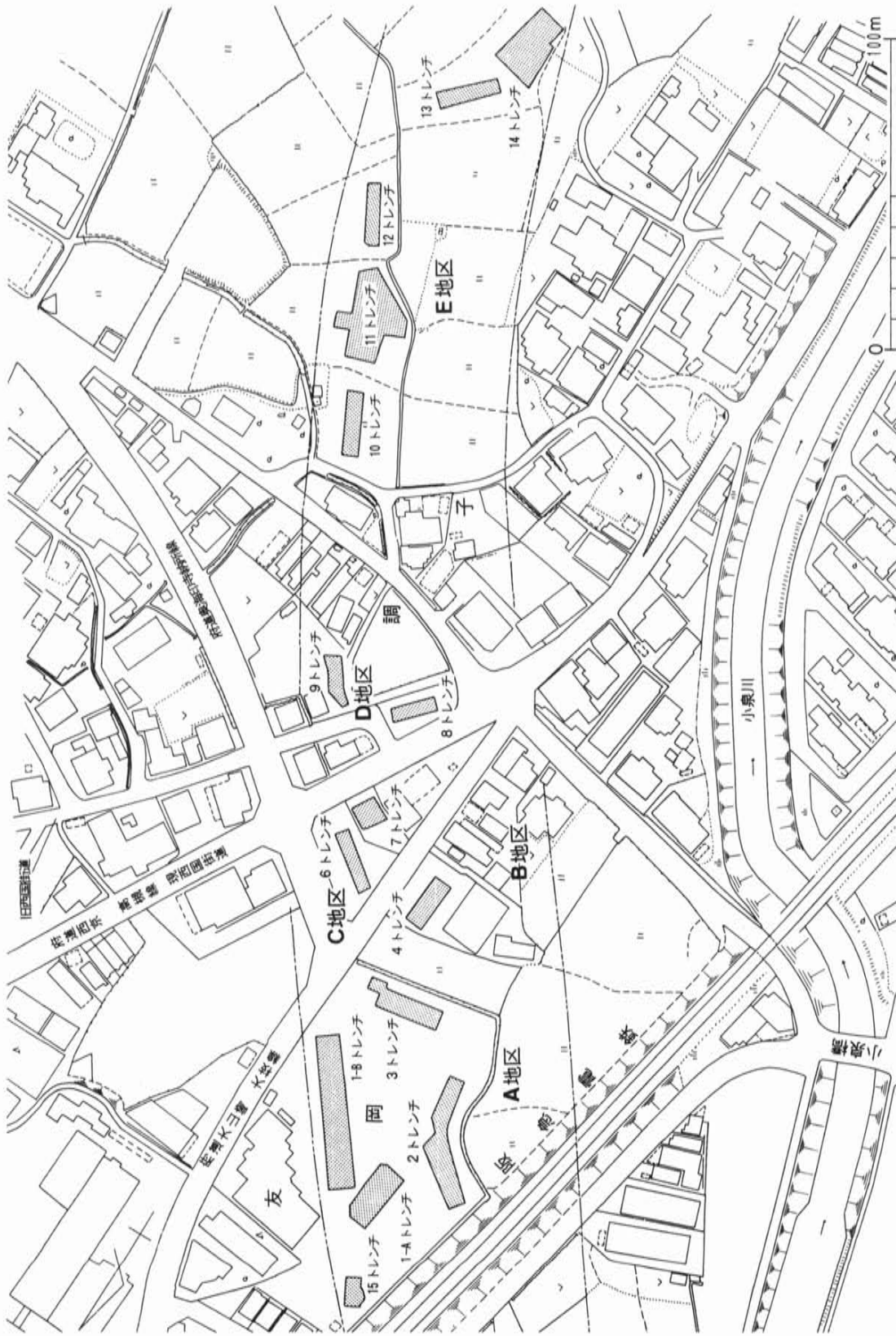
### (1) 友岡・調子地区〔長岡京跡右京第825次〕

友岡・調子地区は、長岡京市友岡川原・六本木、調子八角に所在し、長岡京跡では右京八条三坊四～六町、九条三坊一・二町(旧条坊呼称では、右京八条三坊町二～四町、七・八町)に位置する。同地区には、縄文～鎌倉時代の集落跡である友岡遺跡も所在している。また、中世以後に重要な街道となる西国街道が中央を横切るため、それに関連する遺構の検出も期待された。

友岡地区では盛土、整地された現況から段丘上(台地)の縁辺部、小泉川の旧流路にあたるものと思われる。調子地区では水田・畑地の畦の形態および地形図からも前述の旧流路にあたるものが予想された。調査対象地は総長約400mの長い区間にわたるため、北からA～E地区の5小地区に分割して、地区名の呼称とした。阪急電鉄と府道大山崎大枝線間の北半をA地区、南半をB地区(以上友岡地区)、府道大山崎大枝線と府道檜原高槻線の間をC地区、府道檜原高槻線と府道奥海印寺納所線の間をD地区、府道奥海印寺納所線以南の田畑をE地区とした(以上調子地区；第63図、図版第45-1)。

友岡A地区では1-1・1-2・2・3・15トレンチの試掘トレンチを設定した。1-1・1-2トレンチにおいて遺構・遺物を確認したため、その全容を明らかにするために試掘トレンチを拡張し、1-A・1-Bトレンチとした。友岡B地区では4・5トレンチの2本の試掘調査を行う予定であったが、5トレンチについては、調査の準備が整わなかったため、今年度は調査を実施していない。

調子C地区では6・7トレンチを設けて試掘調査を実施した。調子D地区には、旧西国街道上に位置する8トレンチと、街道に近接する位置に9トレンチを設定した。これらのトレンチでは、旧小泉川の氾濫原および流路跡と想定される厚く堆積した砂礫層を確認しただけで、顕著な遺構・遺物は認められなかった。調子E地区では10～14トレンチを設定し試掘調査を行った(図版第45-2)。11トレンチでは溝、流路跡、14トレンチでは中世以前と思われる南北方向の溝などが検出されたことにより、その広がり性格などを把握するために11・14トレンチを拡張し、調査を実施した。調査の結果、各トレンチから平安時代後期から近世の溝、土坑、井戸などの遺構や遺物を検出した。また、小泉川の旧流路も部分的であるが、確認することができた。



第63図 友岡・調子地区トレンチ配置図

友岡・調子地区の現地調査は、平成16年7月5日～平成17年2月25日までを要した。この地区の一連の調査は、長岡京跡右京第825次調査として実施した。

(岩松 保・竹井治雄)

①A地区(第64～67図、図版第46-(1))

調査区はプール跡地でかなり造成された更地であり、標高24m前後の調査地は、東から西へ傾斜している。現況では丘陵(段丘)、沖積地、傾斜変換点であるかは判別することが困難であった。トレンチ設定については、調査区の段丘上と思われる東側に1-1・1-2トレンチ、西側(沖積地)に、南側に3トレンチ、調査区北端に15トレンチを設定した。その結果、1-1トレンチでは溝状遺構、1-2トレンチでは、トレンチの北西隅から溝か土坑か判別できない遺構が検出された。このため、その全容を明らかにするために1-A・1-Bトレンチの拡張トレンチを設定した。

各トレンチの層序は概ね、地表下1～1.3mまで現代の盛土が堆積し、以下、厚さ15cmの茶灰色泥土(耕作土)と灰黄色土(床土)が互層を為し、60～80cm程堆積する。この時期は、総て近世に属する。さらにこの下層には厚さ10cmの暗灰褐色粘砂質土、灰褐色粘砂質土があり、中世の遺物が多く含まれる。この下層から茶灰色砂礫をベースとする遺構が検出された。茶灰色砂礫は厚さ20～60cm、2トレンチでは砂層が堆積し、調査当初は、段丘礫の崩落したものと思われたが、中世初頭段階の土石流に似た小泉川の氾濫によるものと考えに至った。砂礫の下層は黄白色、淡い青灰色シルト層が堆積し、低位段丘層、無遺物層と思われる。

検出した遺構は、水田あるいは畑に伴う溝、流路や自然流路などがある。これらは、15トレンチを除く各トレンチから出土し、人工物が大半を占める。

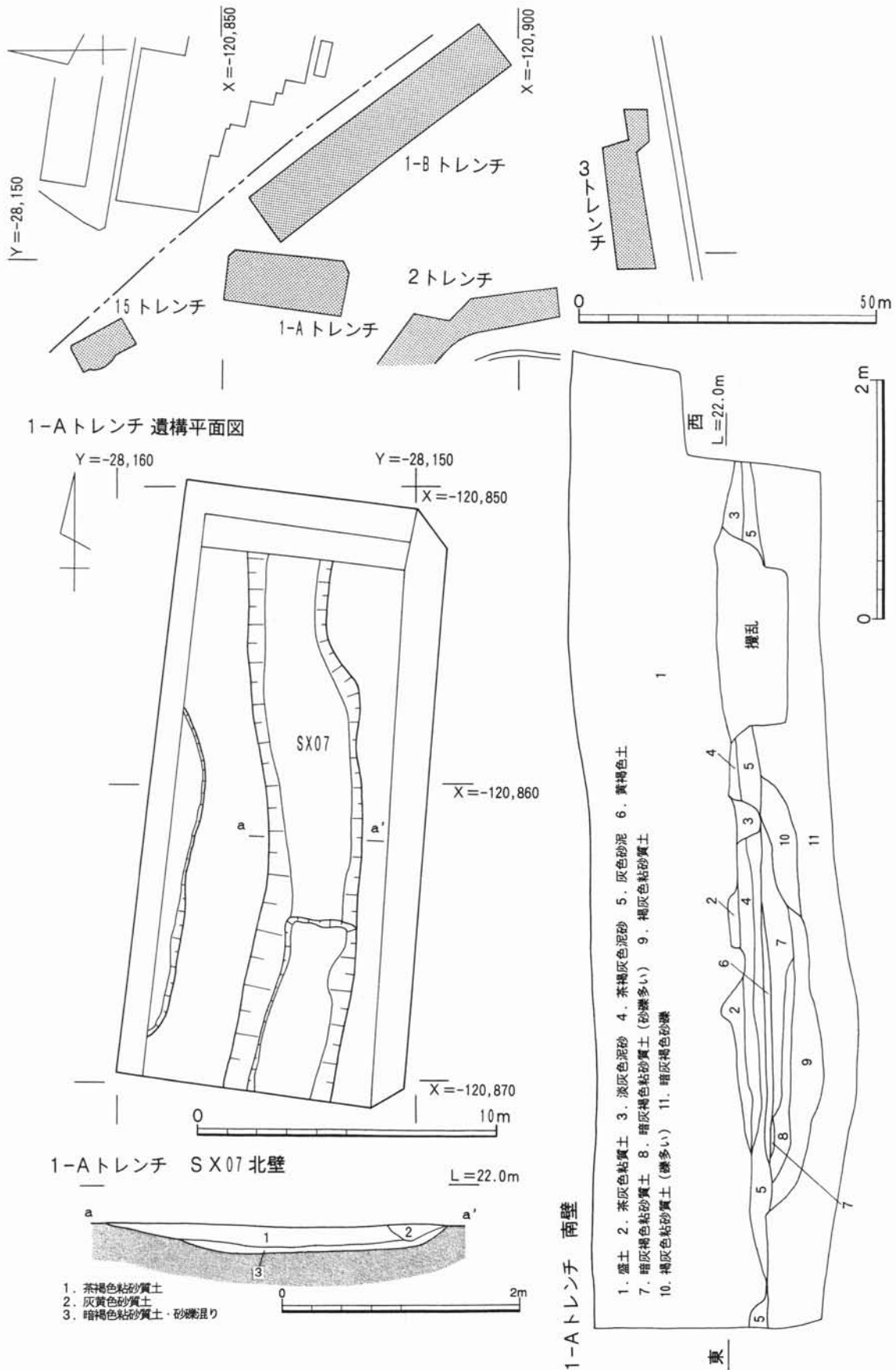
1) 1-Aトレンチ(第64図、図版第46-(1)～(3)・47-(1))

1-2トレンチの不明な遺構を解明するために、20m×10mの南北に長いトレンチを設定した。その結果、流路跡S X07、プールに関連する溝、杭列などを検出した。

層序は、地表下1.2mの盛土以下、近世の旧耕作土2～5層が薄く堆積するのは現代の造成の影響と思われる。6～10層はS X07の堆積土である。土層図の「攪乱」はプールの溝の断面で、この中にコンクリート、人頭大の礫があった。11層の粘土質混じりの砂礫は、旧小泉川の氾濫により段丘を削りながら堆積したものと思われる。

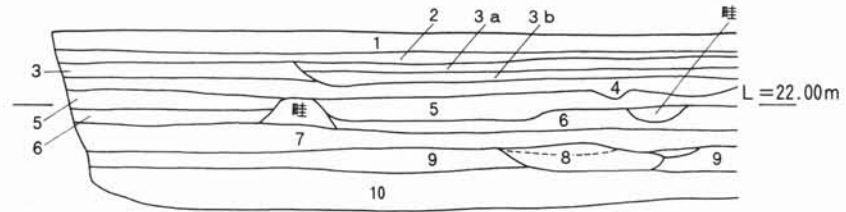
S X07はトレンチ中央で検出した幅3.0～3.5m、深さ0.3～0.5m、南北方向の流路である。溝の断面は皿状を呈し、堆積土は上層では茶褐色土の単一層で、人工的に埋まったものと思われる。下層では滞水時による青灰色粘土質、泥土があり、流水時の痕跡である砂質土および砂層の互層である。流路の形態はやや蛇行するが、旧地図の南北方向の地境線と一致し、農業用水路と思われる。

流路内の南半では底を一段掘り下げ、幅2.7m、深さ0.3m、断面皿状を呈する土坑状の窪みがあった。堆積土は茶褐色粘質土、泥土、腐植土が堆積しており、中世陶器、土師器、瓦器などが含まれる。時期は中世～近世と思われる。この遺構の性格については、泥水、ゴミ溜あるいは取

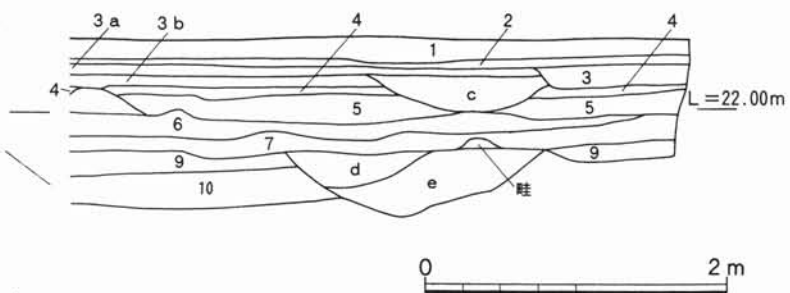
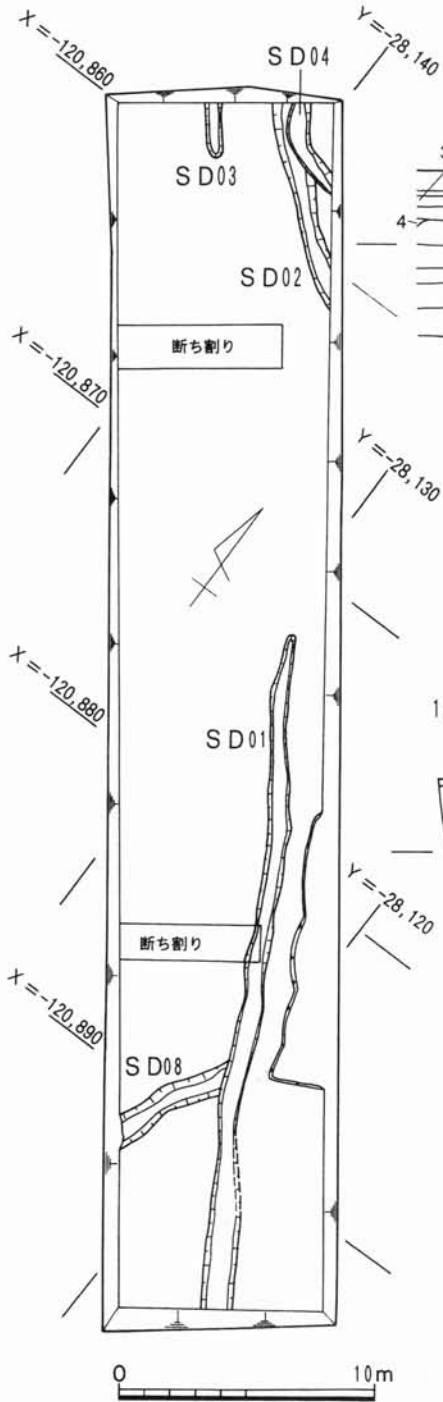


第64図 友岡A地区トレンチ配置図、1-Aトレンチ検出遺構平面図・南壁土層図

1-Bトレンチ北壁

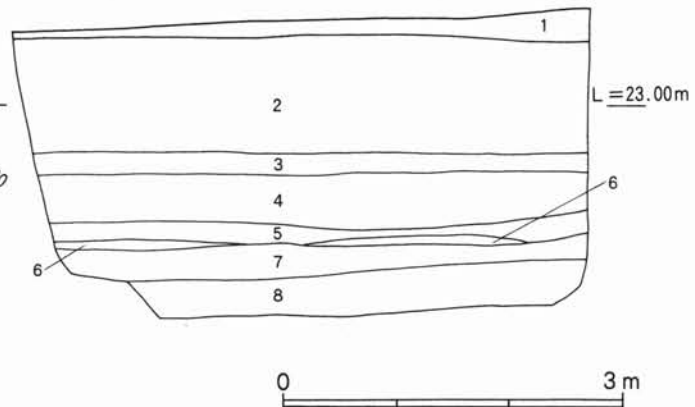


1-Bトレンチ遺構平面図



- 1. 旧耕作土 (暗黒灰色泥土) 2. 床土 (明黄褐色土) 3. 緑灰色泥土 (耕作土)
- 4. 明灰黄色土 (床土) 5. 茶灰色泥土 (耕作土) 6. 灰黄色土 (床土) 7. 暗灰褐色粘砂質土
- 8. 淡緑灰色砂 9. 灰褐色粘砂質土 10. 暗褐色砂礫 3a. 3とほぼ同質 3b. 緑灰黄色土
- c. 灰色泥土 d. 灰黄色砂質土 e. 灰黄色砂質土 (礫多い) (床土)
- f. 暗茶灰色砂質土 g. 明橙褐色土 (マンガ)

15トレンチ南壁



- 1. 表土 2. 盛土 (現代攪乱) 3. 旧地表 (整地) 4. 現代盛土
- 5. 黒灰色泥土 (旧耕作土) 6. 床土 7. 淡灰色泥土 8. 褐色砂礫

第65図 友岡地区1-Bトレンチ検出遺構平面図・北壁土層図、15トレンチ南壁土層図

水施設などと考えられる。

## 2) 1-B トレンチ(第65・66図、図版第48-(1)~(3))

1-1 トレンチの溝状遺構の規模、性格を明らかにするために9m×50mの南北に長大なトレンチを設定した。その結果、溝状遺構は溝SD01として明らかとなった。さらに、溝SD02~04・08などの素掘り溝が検出された。

層序は、地表下1.3mの盛土以下、3~18層は耕作土(泥土)、床土との互層が厚さ0.6~0.8mに及び、近・現代の影響が少ないものと思われる。この互層は中世近世の水田および畑地で、これに関連する畦、溝である。20・21層の暗灰褐色粘砂質土は、古墳時代から中世にいたる土師器、須恵器、瓦器などの土器類が多く含まれる。23層は鉄分やマンガンなどの沈殿物と思われる。24層の砂礫からは、遺物はみつかっておらず旧小泉川の堆積物と思われる。

溝SD01はトレンチ南半部で約30mにわたってやや蛇行気味に検出された北北西~南々東方向の溝である。溝幅は0.3~0.5m、深さ0.2~0.4mを測り、断面は椀状を呈する。堆積土は茶褐色粘質土であるが、下位にしたがって砂質土が増し、僅かに滞水による還元色が認められる。時期については、第66図19層下層から検出されたこと、瓦器椀、皿が出土することから中世と考えられる。この遺構の性格については、トレンチ中央部で溝は途切れることから水田一枚分の畦道に沿う排水溝、あるいは畑の畝状溝と思われる。

溝SD02はトレンチ北東隅で約9mにわたって湾曲気味に検出された北西~南東方向の溝である。溝幅は0.6~0.9m、深さ0.3~0.5mを測り、断面は深い皿状を呈する。堆積土は第65図d・e層灰黄色砂質土で下位では砂礫が多く堆積する。時期については、第65図7層下層から土師器、須恵器、瓦器などが多く出土していることから、中世の初め頃と思われる。遺構の性格については、溝底面に流水の痕跡があり、小川のようなもので、地境溝が想像される。

溝SD03はトレンチ北端部で検出された素掘り溝である。溝幅は0.3m、深さ0.1mを測り、断面は浅い皿状を呈する。堆積土は暗灰褐色砂質土で水田に伴う溝である。時期については、第63図9層を切り込んでいることから中世に属する。

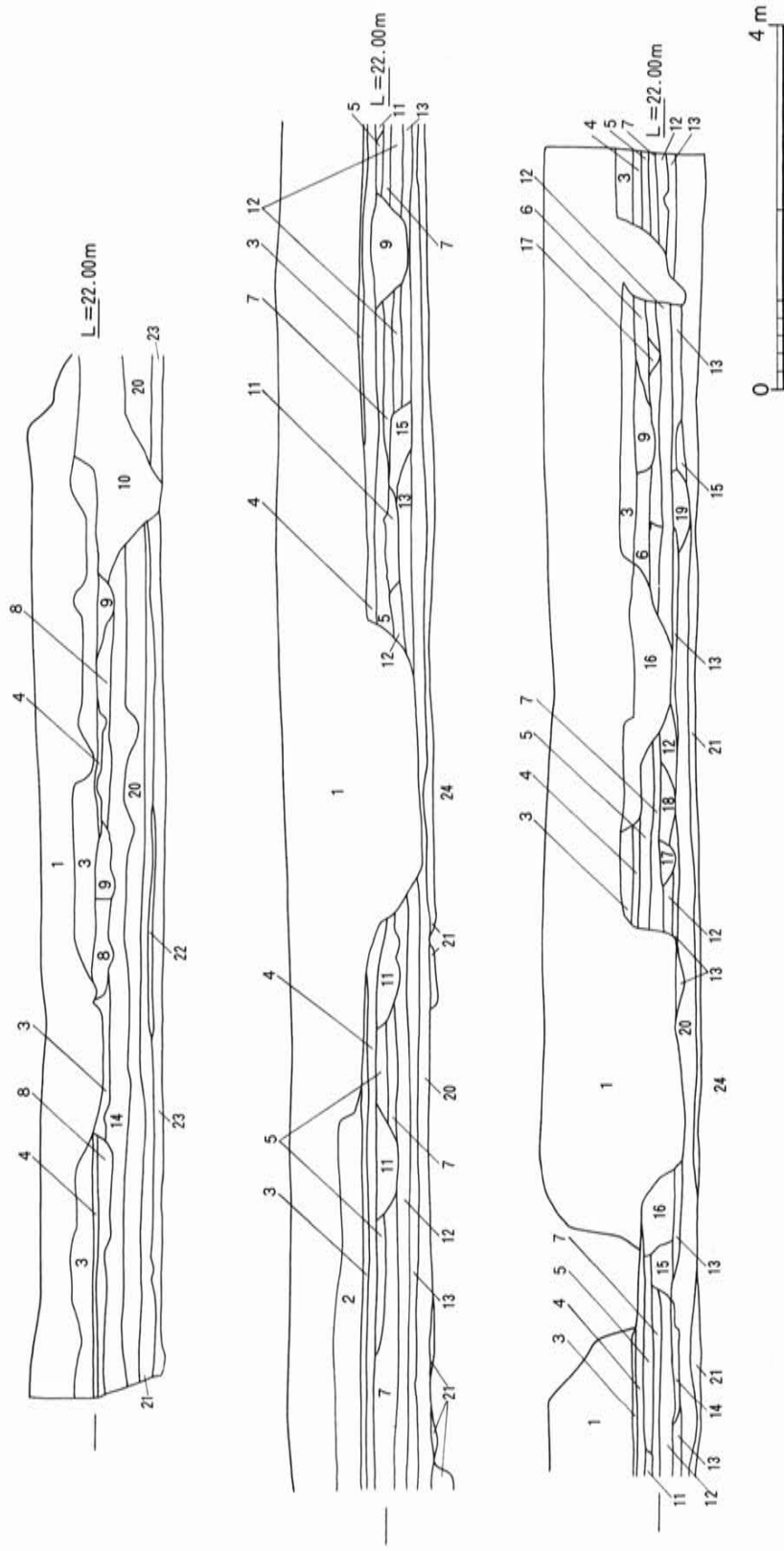
溝SD04はトレンチ北東隅の溝SD02の上層から円弓状に検出された溝である。溝幅は0.5~0.9m、深さ0.2~0.4mを測り、断面は深い皿状を呈する。堆積土は第65図C層、灰色泥砂、泥土が混合層である。氾濫により埋没したものと思われる。時期については、出土遺物は瓦器などがあるが第4層北壁土層図の3-aの下から出土していることから、近世に属する。

溝SD08はトレンチ南半で検出した、自然の窪地である。堆積土は小砂礫および砂がラミナの様相を呈することから、北から南方向の氾濫によって形成されたものと推察される。時期については2層の下位より検出された22層に相当することから、平安時代末期から中世頃と思われる。

## 3) 2 トレンチ(第67図、図版第49-(1)~(3))

調査対象地の西側に8m×40mの「く」の字形のトレンチを設定した。トレンチ北半分はプールのコンクリート製の基礎、排水管および、その基礎工事による埋土などがあり、中世および近世の地層のほか、大きく削平を受けており、遺構・遺物は全くなかった。

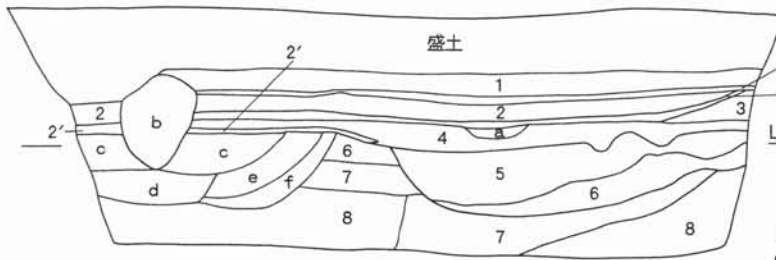




- 1. 盛土 2. 旧表土 3. 暗黒灰色泥土(旧耕作土) 4. 明黄灰色土(赤土) 5. 緑灰色泥土(耕作土) 6. 4と5の混合層
- 7. 明黄灰色土(赤土) 8. 5と7の混合層 9. 溝 10. 現代溝 11. 淡黄灰色粘質土 12. 茶灰色泥土(耕作土) 13. 黄灰色土(赤土)
- 14. 12と13の混合層 15. アザ 16. 撥乱 17. 赤沼溝 18. 黄灰色泥土(溝) 19. 淡灰色粗砂(赤沼溝) 20. 暗灰褐色粘砂質土
- 21. 灰褐色粘砂質土 22. 淡緑灰色砂 23. 明暗褐色土(マンガン) 24. 暗褐色砂

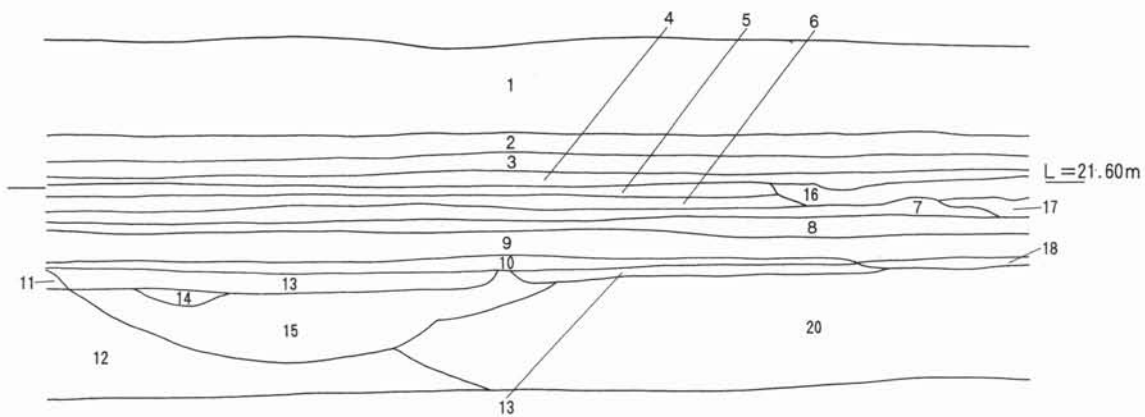
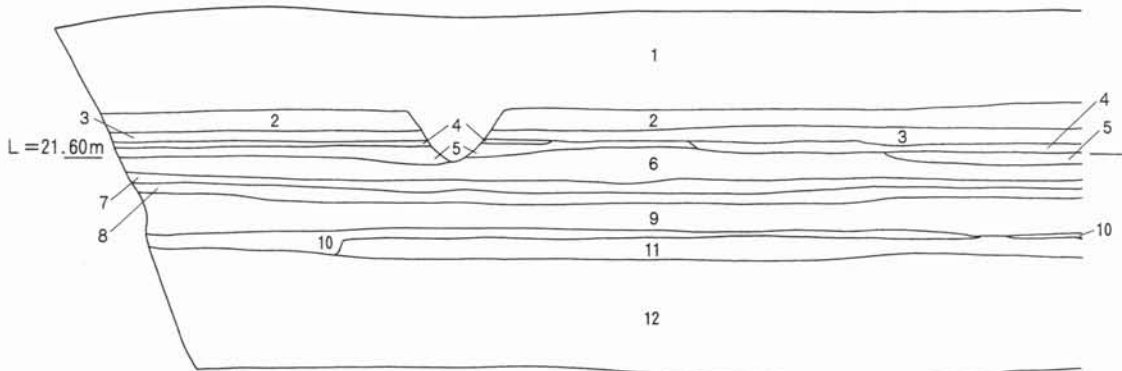
第66図 友岡地区1-Bトレンチ西壁土層図

2 トレンチ南壁



- 1. 暗灰色粘土 (旧耕作土)
- 1'. 明橙色粘質土 (床土)
- 2. 淡緑灰色泥土 (旧耕作土)
- 2'. 明黄褐色粘質土 (旧床土)
- 3. 淡灰色砂泥と黄色土 (旧床土)の累層 (旧耕作土)
- 4. 淡褐灰色砂泥 (旧耕作土)
- 4'. 黄褐色粘質土 (旧床土)
- 5. 灰褐色砂礫 (粗砂含む)
- 6. 明灰黄色砂 7. 明黄白色シルト
- 8. 暗灰褐色砂礫
- a. 淡灰色粘砂質土 (素掘り溝)
- b. 現代溝 c. 茶褐色粗砂 (粘質土含む)
- d. 灰黄色砂質土 e. 明灰黄色粘砂質
- f. 明黄灰色粘質土、シルト含む

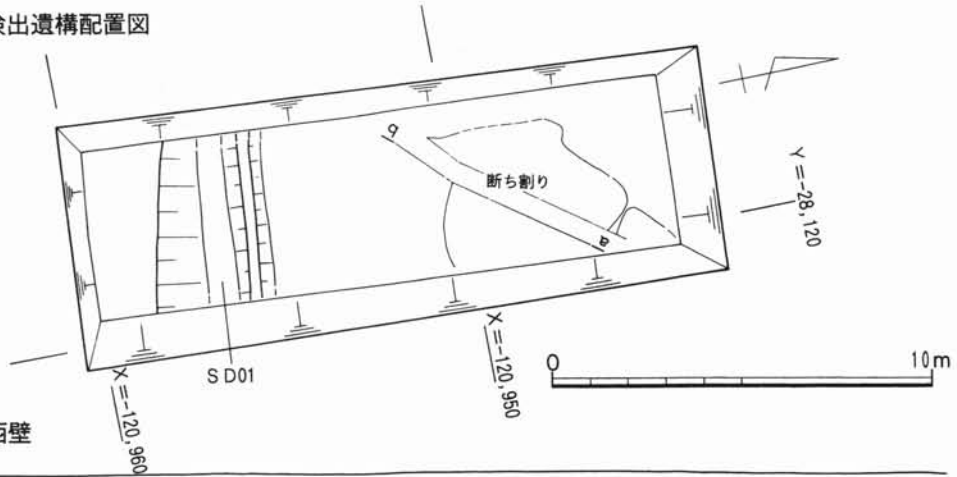
3 トレンチ南壁



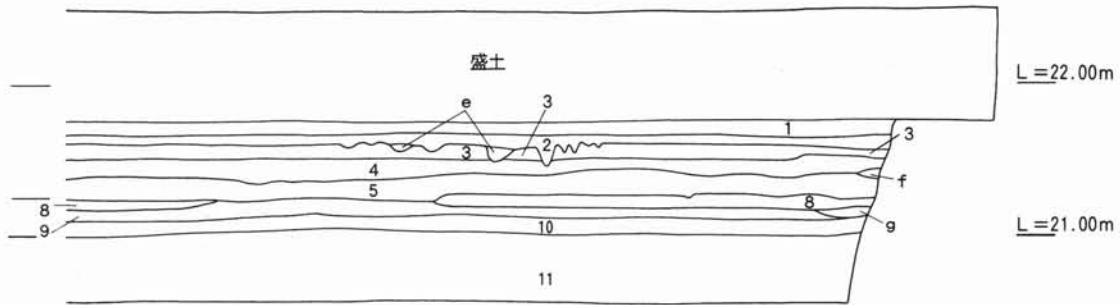
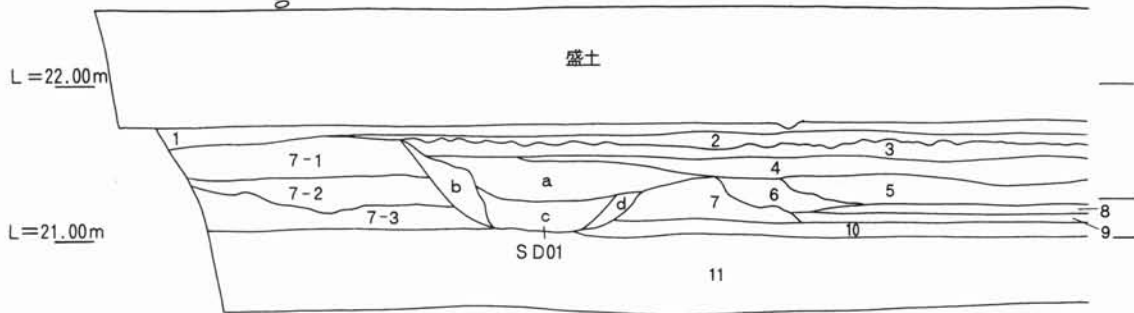
- 1. 地土
- 2. 暗灰色土 (耕作土)
- 3. 黄色斑混淡灰色土
- 4. 明黄褐色土
- 5. 淡灰色土
- 6. 淡黄灰色土 (灰・黄・灰の互層)
- 7. 淡明褐色土
- 8. 淡明茶色土
- 9. 茶灰色土
- 10. 明黄褐色土
- 11. 淡黄茶色土
- 12. 淡茶灰色砂礫 (径3~50cmの石多く混じる)
- 13. 淡茶灰色土
- 14. 淡茶灰色砂質土
- 15. 淡黄茶色砂
- 16. 黄灰色土 (黄色土灰色の互層)
- 17. 淡灰色砂礫 (洪水)
- 18. 黄色斑混茶褐色土 (固い)
- 19. 明黄灰色砂質土 20. 灰白色砂

第67図 友岡地区2 トレンチ南壁土層図・3 トレンチ南壁土層図

4 トレンチ検出遺構配置図

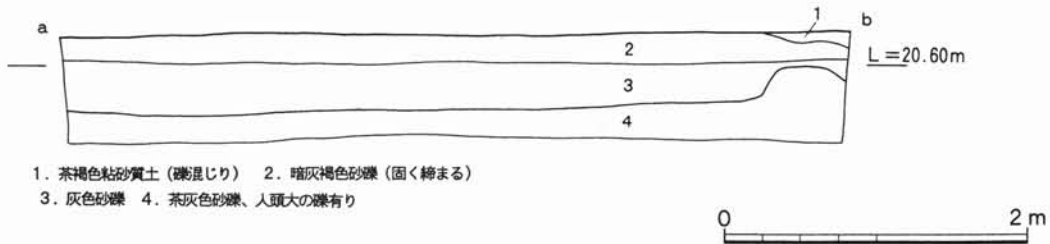


4 トレンチ西壁



1. 暗灰色泥土 (現代耕作土) 2. 灰黄色粘質土 (床土) 3. 黄褐色粘質土 (腐植質混じり) 4. 黄褐色粘質土 (小礫混じり) 5. 黄褐色粘質土 (小礫混じり)  
 6. 黄褐色粘質土 (小礫混じり) 7. 灰色砂礫 (固く締まる、泥土・粘質土を含む) 7-1. 大礫が多い 7-2. 砂粒、粘質土が多い 7-3. 小礫が多い  
 8. 黄褐色粘質土 (小礫混じり) 9. 暗茶褐色砂質土 10. 茶褐色粘質土 11. 砂礫  
 (溝) a. 黄褐色土 b. 黄褐色土 (大礫混入) c. 黄褐色土 (腐植質混じり) d. 黄褐色土 (小礫混じり)  
 e. 淡灰色泥土 f. 灰色泥土 g. 淡緑灰色泥土

断割内 (南東壁)



1. 茶褐色粘質土 (礫混じり) 2. 暗灰褐色砂礫 (固く締まる)  
 3. 灰色砂礫 4. 茶灰色砂礫、人頭大の礫有り

第68図 友岡地区4 トレンチ検出遺構配置図・西壁土層図・断ち割り内土層図

トレンチ南半分は僅かに溝状遺構、畦道などが検出された。層序は、地表下0.6mの盛土以下、1～4層まで近世耕作土が堆積する。5・6層は幅が確認できない溝状遺構であるが規模は不明である。土層図中央の6・7層は畦道と思われる。溝S D01は畦に接しており、水田に伴う水路と思われる。溝の堆積土は、土層図c～f層は粘質土、砂質土が主成分であり、人為的に埋められたものと思われる。時期については1-Aトレンチの堆積状況と類似することから、近世に属するものと思われる。8層は小泉川の氾濫による砂礫堆積と考えられる。

#### 4) 3トレンチ(第67図、図版第50-(1)～(3))

調査対象地の南側に6m×20mの東西に長いトレンチを設定した。層序は地表下0.6mの盛土以下、2～9層は耕作土、床土の互層をなし、中世・近世の水田・畑地であると思われる。この互層の中には、洪水・滞水によって堆積した16・17層があった。旧小泉川の氾濫による12・15・20層が堆積し、10・11層は陸化した痕跡である。この層から南北方向の素掘り溝が数本0.5m間隔で平行して検出された。溝幅は0.3～0.4m、深さ0.1m、断面皿状を呈し、堆積土は14層淡茶灰色砂質土である。規模、形状から畑地の畝溝と思われる。時期については、13層下層から出土したことにより中世に属するものと思われる。

#### 5) 15トレンチ(第65図、図版第47-(2)・(3))

調査地の北角に設定したトレンチである。基本層序は地表下2.1mまで現代の盛土で、厚さ0.2mの旧耕作土(黒灰色泥土：6層)、厚さ0.3mの淡灰色泥土(7層)、厚さ0.3mの褐色砂礫(8層)、青灰色シルトの順に堆積する。褐色砂礫は旧小泉川の氾濫によるもので、青灰色シルトは低位段丘の堆積層である。遺構は全くなかった。

### ②B地区

#### 4トレンチ(第68図、図版第51-(1)～(3))

6m×17mの南北に長いトレンチを設定した。層序は地表下0.8mまで現代の盛土である。以下、旧表土(1層)、耕作土・床土の互層は溝S D01の上層(2～4層)、下層(5～10層)に大きく分けられる。上層は粘質土が多く水田であり、下層は砂質土が主成分であるため畑地と思われる。6・7層は粘土質と砂礫混ぜ合わせた固い土壌であるため、溝S D01縁の畦道と思われる。トレンチ南端の7-1～3層は砂礫を主成分にして粘質土が礫の隙間にあり、固くしまっており、7層と類似し、人為的に積み上げたものと推測される。

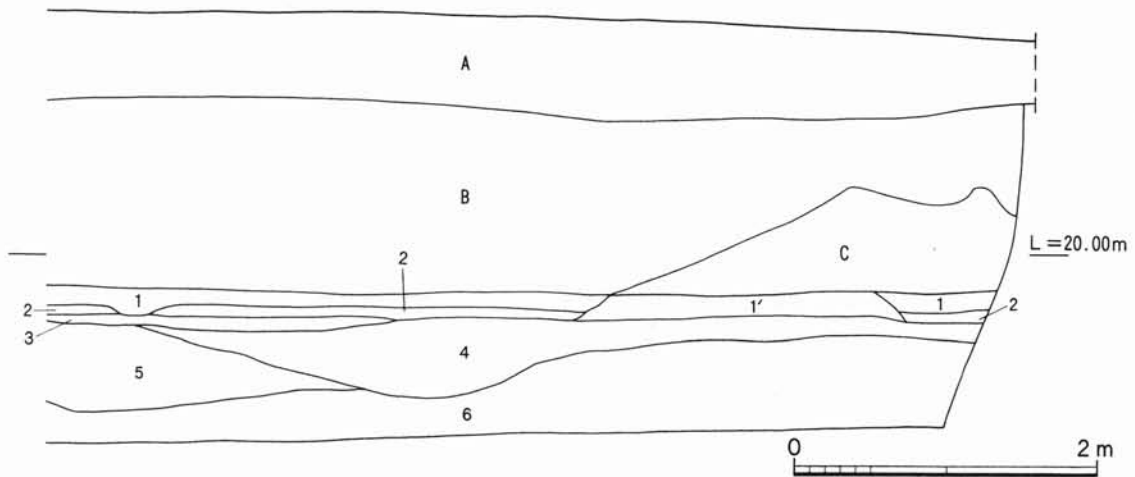
溝S D01はトレンチ南半部で検出された素掘りの東西溝である。溝幅2.0～2.3m、深さ0.9m、断面椀状を呈し、堆積土はa～d層である。a層は黄褐色土で埋土である。c層は長い期間の流水痕跡が認められ、b・d層は7層および7-1～3層が崩落した土壌である。時期については中世から近世に属するものである。この遺構の性格については、農業用水路か、あるいは、この溝の南側では水田が営まれていないことから、道路側溝もしくは、宅地を区画する溝とも推察される。

### ③C地区(第69図)

#### 1) 6トレンチ(第70図、図版第52-(1)～(3))



9トレンチ南壁(西半)



1. 暗青灰色泥土(旧耕作土) 1'. 暗青灰色泥土(礫混じり、固く締まる) 2. 暗褐色泥土(砂粒混じり、床土、固い)  
 3. 明緑灰色粘質土 4. 赤褐色砂礫 5. 明茶褐色砂礫 B'. 淡緑灰色砂(大礫(人頭大)多い) A. 表土 B. 現代盛土  
 C. 黄褐色粘砂質(白色礫ふくむ、固く締まる)

第69図 友岡C・D地区トレンチ配置図

調査地の北側に4 m×20mの東西に長い試掘トレンチを設定した。層序は地表下1.5mまで現代の盛土である。3～8層は厚さ0.4m前後の耕作土(水田)、床土の互層であり、近世に属する。9～13層は0.4～0.6mの耕作土(水田・畑地)と砂礫・砂層の互層であり、この砂礫は複数の洪水による堆積物である。時期については中世・近世に属するものである。14層は拳大・人頭大の灰色砂礫で構成され、小泉川の旧流路であろう。

2) 7 トレンチ(第70図、図版第53-(1)～(3))

調査地は、ガソリンスタンド跡地でコンクリートの床が残存しており、地下に埋設されているガソリタンクの位置を確認し、その部分を避けて9.5m×10mのトレンチを設定した。その結果、地表下1.5mまで現代の盛土、建物の基礎(コンクリート製)である。以下、厚さ0.3mの旧耕作土(4層：暗灰色泥土)、厚さ0.6m以上の砂礫層(5・6層)が堆積し、6 トレンチから連続する砂礫層である。遺構、遺物は全くなかった。

(竹井治雄)

④D地区(第69図)

D地区は、西国街道に面した調査区である。西国街道は、近世以後に京都と西国の諸国とを結ぶ重要な街道であり、その成立の時期や街道の賑わいが発掘調査により明らかになるものと期待された。ここでは、8・9 トレンチの2か所の試掘坑を設定した。

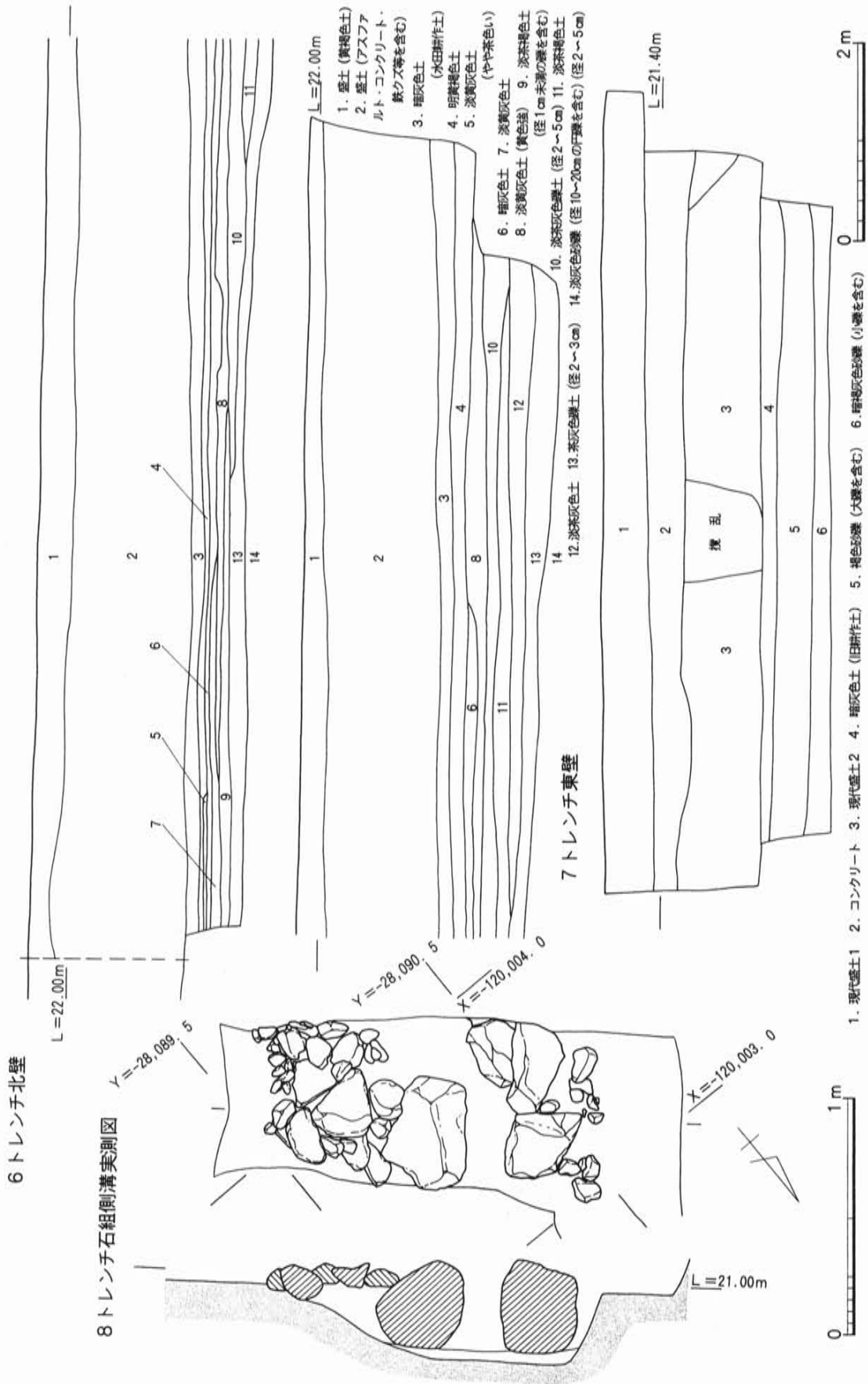
1) 8 トレンチ(第70・71図、図版第54-(1)～(3)・55-(1)～(3))

このトレンチを設定した一筆の現状は宅地跡であるが、実際には旧西国街道の路面上に位置している。旧西国街道と同じ方向に、4 m×13.5mのトレンチを北東から南西方向に設定した。トレンチはやや西側に寄せて設定したため、路面の本体部分は、トレンチの東側に位置している。調査により、数次にわたる旧西国街道の西側溝と路面を確認した。

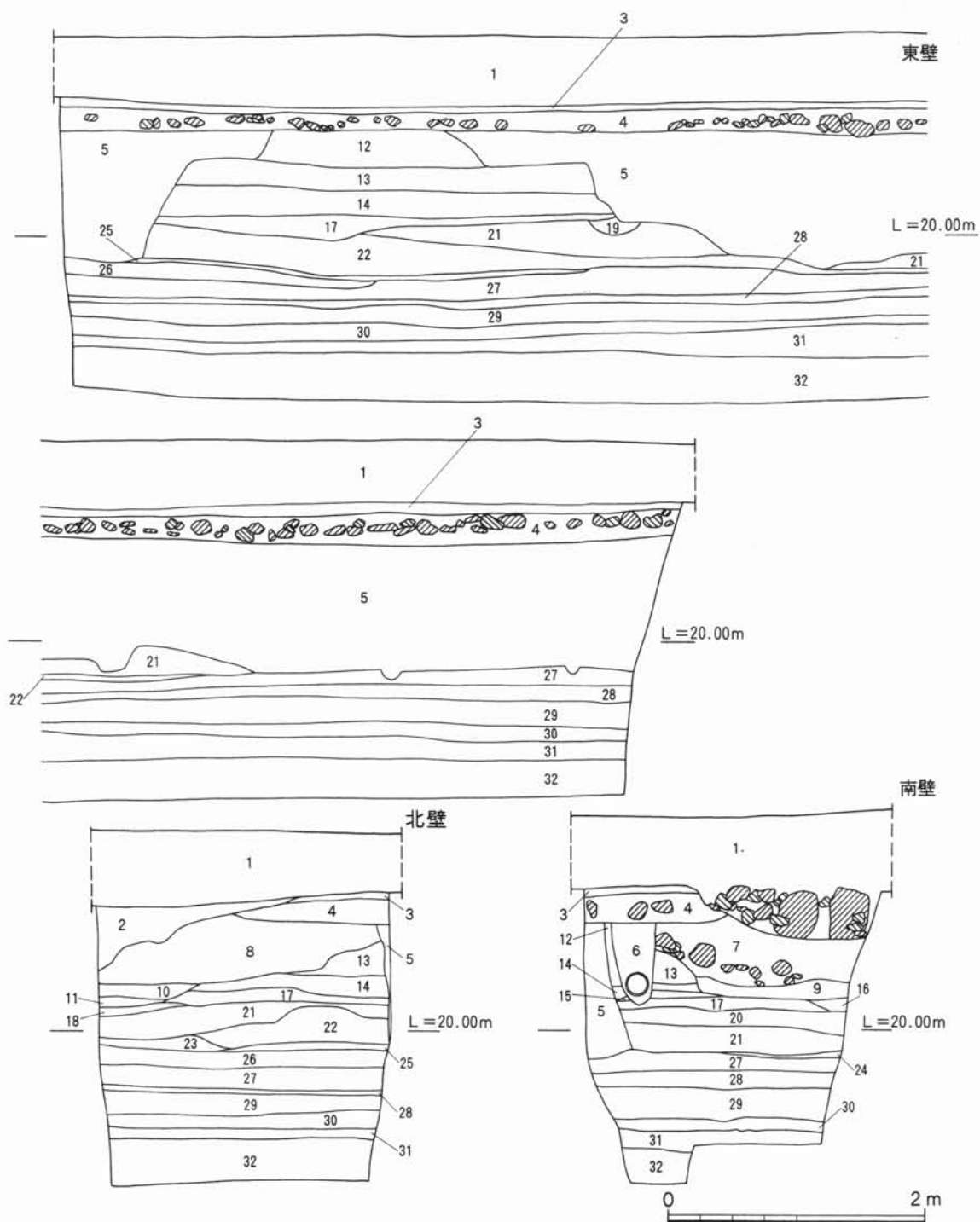
土層の観察により、4～5時期の西国街道の路面が、土砂を盛り上げて作られているのが確認できた。路面と判断されるのは、3層アスファルト上面および下面、4層下面、13層上面、17層上面、22層下面である。特に17層上面や13層上面、3層下面の路面は、土砂を土手状に盛り上げ、ただけのもので、側溝を改めて掘削するものではない。西側溝は、現代の整地土下で検出した石組溝、7～9層の下面、16層下面がある。石組溝およびその溝底は、3層アスファルト上面および下面、4層下面段階の側溝に、7～9層の下面は13層上面の路面、16層下面は17層上面の路面に相当する側溝と判断される。

路面を形成する際に盛り上げた整地土や側溝内からは、遺物は出土しなかった。路面が盛り上げ始められているベースとなる27層からは染付片(混じり込みの可能性あり)や瓦器・中国製陶磁器片が出土し、少なくとも、近世以後に西国街道の路面が盛り上げられて、整備・利用されている状況が認められた。32層より下は旧小泉川の河川内堆積であり、A・E地区での調査によると、中世段階以前の河川堆積である。中世以前の西国街道については、小泉川旧流路と判断される砂礫層が分布しているため、その存否も含めて不明である。

2) 9 トレンチ(第69図、図版第56-(1)～(3))



第70図 調子地区8トレンチ東壁・北壁・南壁土層図



1. 現代整地土
2. アスファルト (路面1; 現代)
3. 淡黄灰色土 (路面1整地土)
4. 淡黄灰色土 (拳大の礫)
5. 淡茶灰色土 (径3~5cmの石礫)
6. 淡茶褐色砂礫土 (土管理設)
7. 淡灰色砂礫 (路面2整地土)
8. 淡黄灰色砂質土 (路面2整地土)
9. 淡暗灰色粘質土 (水田耕作土)
10. 暗灰色土 (耕作土)
11. 淡明褐色土 (床土)
12. 淡黄灰色土 (固い; 路面2整地土)
13. 淡茶灰色土 (石礫を含まない精良な土; 路面3整地土)
14. 淡明茶灰色土
15. 淡茶黄色土
16. 明黄灰色土 (路面4埋土)
17. 明黄褐色砂礫混土 (固い; 路面4整地土)
18. 淡黄褐色土
19. 淡茶灰色土 (溝か?)
20. 淡明茶灰色土 (石礫を含まない良質な土; 路面4盛土)
21. 明黄褐色砂質土 (路面4盛土)
22. 淡明茶灰色土 (路面4盛土)
23. 茶色斑混淡灰色土
24. 淡茶褐色砂混土
25. 淡灰色混明黄褐色土 (礫を少量含む; 路面5整地土か?)
26. 淡明茶灰色土 (礫を少量含む; 路面5盛土か?)
27. 淡茶灰色土
28. 淡灰色砂質土 (路面整地土か?)
29. 茶色斑混淡灰色砂質土
30. 淡灰色砂礫
31. 淡灰色砂礫 (黄色混じり)
32. 灰色~茶黄色砂礫 (径3~20cmの礫を多く含む)

第71図 調子地区6トレンチ北壁土層図・7トレンチ東壁土層図・8トレンチ石組側溝実測図



旧西国街道の東に設定したトレンチで、西国街道東側溝および街道に面した町家の検出が期待された。

短辺5m、長辺17mの不定形のトレンチを設定して調査を行ったが、地表下1.6mまで現代の盛土であり、その下位で旧耕作土を確認した。この耕作土の直下は、小泉川旧流路内堆積の砂礫となっており、中世以前の堆積になるものと判断された。

このように、近世段階の町家を想定できるような遺構や整地土・堆積層は全く確認できなかった。これはおそらく、小泉川の氾濫原に位置しているため、居住域として土地利用できるほどには安定していなかったためと想定される。

(岩松 保)

#### ⑤ E地区(第72図、図版第57-1))

調子地区の調査地の現況は南東方向に低くなる水田、畑地が営まれており、旧小泉川およびそのほかの遺構、遺物の有無を確認するため、試掘調査を実施した。その結果、11・14トレンチについては、拡張して本調査を行った。

各トレンチの層序は地表下約0.5mまで、黒色泥土、淡灰色泥土、黄灰色粘質土が数層の互層を為し、水田、畑地の痕跡である。時期は中世～近世である。なお、この互層の間には、厚さ5cm前後の砂礫層、砂層が堆積し、複数回の氾濫跡が確認できた。

13・14トレンチでは、中近世の耕作度土の互層以下、厚さ10cmの褐灰色粘砂質土があり、中世および平安時代後期の遺物が含まれる。さらに暗茶褐色砂礫、褐灰色砂礫は厚さ0.3～0.6m堆積し、須恵器、土師器などが出土し、瓦器など中世の遺物を含まない。10～11世紀頃の旧小泉川の氾濫によって堆積したものと考えられる。これが旧小泉川の本流の一つであるかは今回の調査では結論できなかった。以上のことから検出された遺構は、総て近世～中世および平安時代末期に属するものであり、溝・井戸・柱穴などがある。

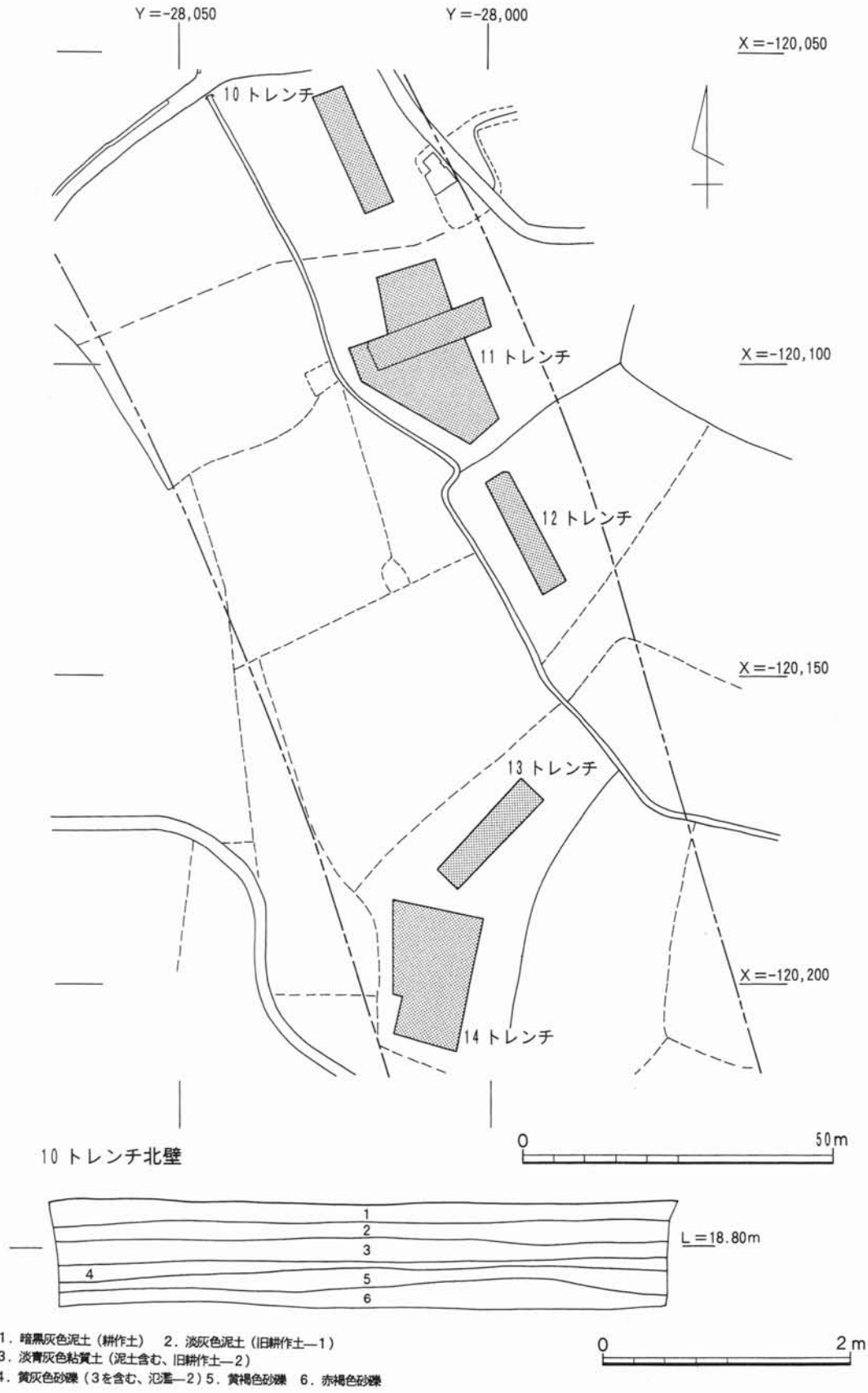
#### 1) 10トレンチ(第72図、図版第57-2))

対象地の北端に一筆分の現水田に5m×20mの南北に長い試掘トレンチを設定した。厚さ0.3～0.4mの現代の耕作土、床土の直下に黄灰色砂礫が堆積する。床土から検出された遺構には南北方向の素掘り溝(暗渠排水溝)、足跡、耕運機の歯などがあり現代に属する。黄灰色砂礫から須恵器、土師器の小片が出土した。旧小泉川の流路跡である。

#### 2) 11トレンチ(第73図、図版第57-3)・58-1)～(3))

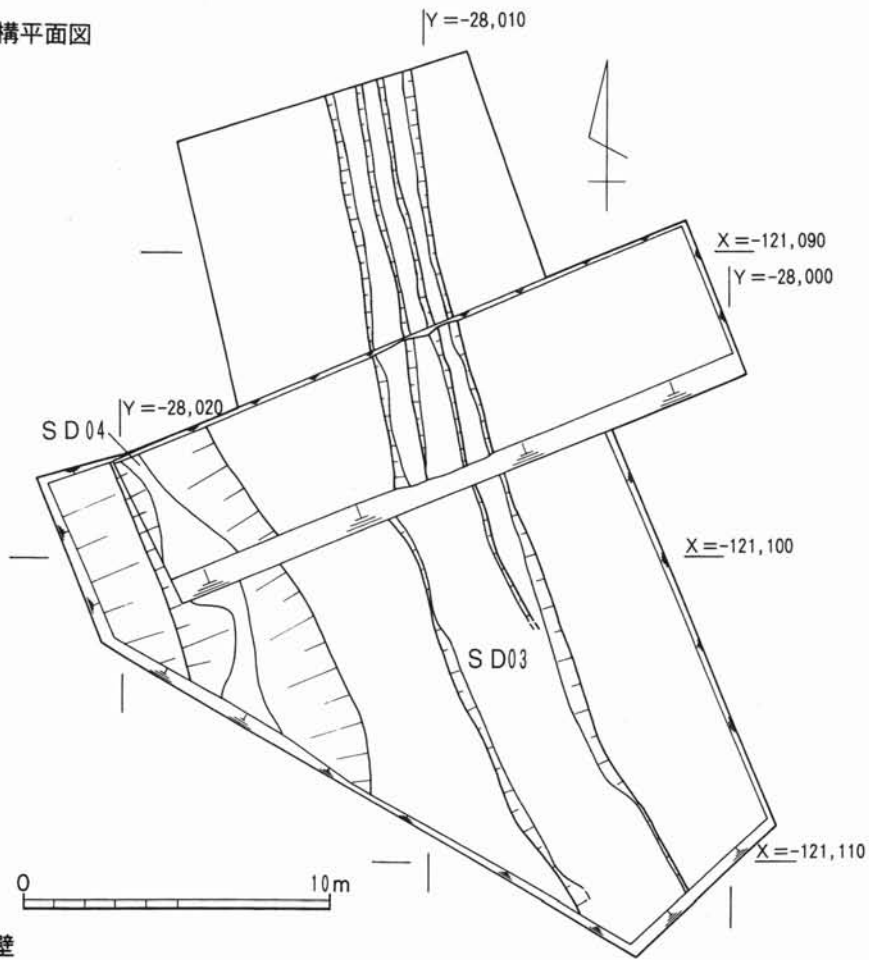
東西に長い試掘トレンチ(5m×20m)を設定した。調査の結果、トレンチ中央と西端の2か所で南北方向の溝状遺構を検出した。この溝状遺構の規模・形状や性格の全容を明らかにするために試掘トレンチをさらに北側へ10m、南側へ最大16mにわたって拡張を行った。その結果、11トレンチについては、調査の範囲、排土置き場などを考慮して、最終的には掲示したトレンチ配置図(第72図)の形状になった。

調査の結果、検出した遺構は溝SD03、大溝SD04がある。また、溝の上層では中近世の耕作土があり、畦や小規模の素掘り溝などを確認(第73図南壁土層図)した。

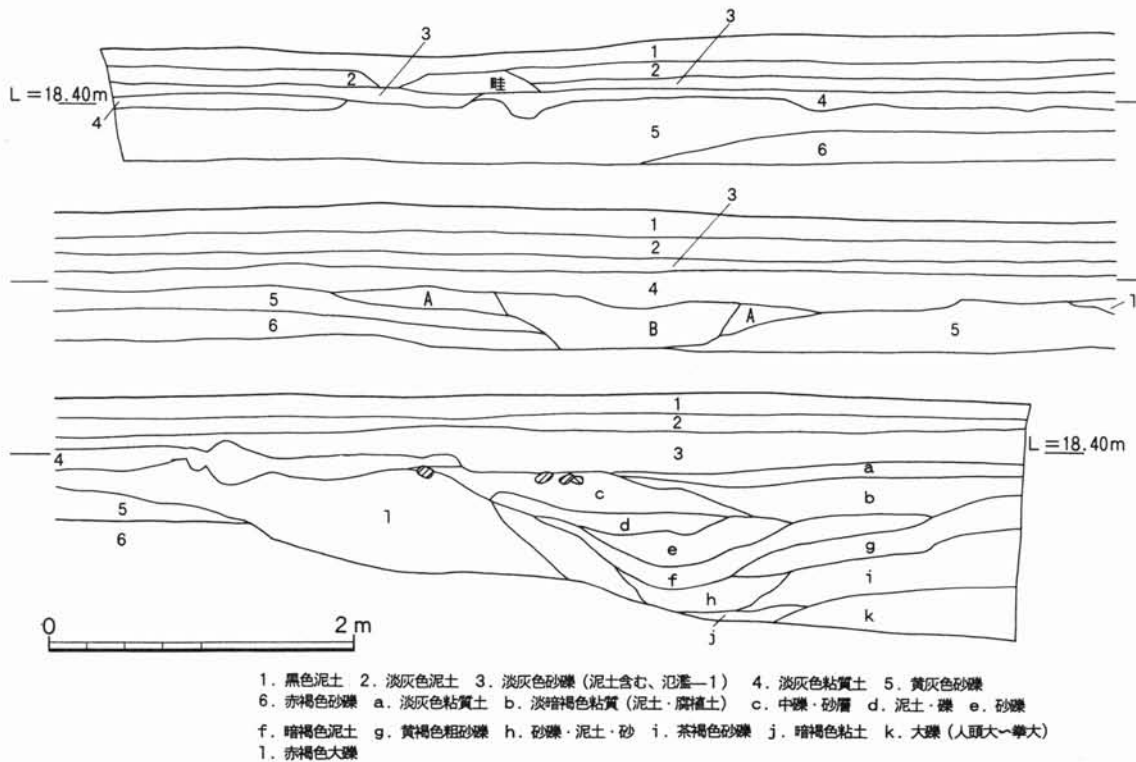


第72図 調子E地区トレンチ配置図・10トレンチ北壁土層図

11 トレンチ遺構平面図



11 トレンチ南壁



- 1. 黒色泥土 2. 淡灰色泥土 3. 淡灰色砂礫（泥土含む、氾濫—1） 4. 淡灰色粘質土 5. 黄灰色砂礫
- 6. 赤褐色砂礫 a. 淡灰色粘質土 b. 淡暗褐色粘質（泥土・腐植土） c. 中礫・砂層 d. 泥土・礫 e. 砂礫
- f. 暗褐色泥土 g. 黄褐色粗砂礫 h. 砂礫・泥土・砂 i. 茶褐色砂礫 j. 暗褐色粘土 k. 大礫（人頭大～拳大）
- 1. 赤褐色大礫

第73図 調子地区11トレンチ遺構平面図・南壁土層図

溝S D03・04などの基盤層である5・6層は人頭大から拳大の円礫が主成分で、旧小泉川の流路跡であり、k・1層はこの旧流路の最終末の堆積物である。時期については、平安時代後期に属するものと思われる。

大溝S D04は、厚さ0.5mの第73図1～3層の近世の耕作土、床土の下層から検出された溝である。溝幅は5m以上、深さ1.4m、断面は「U」字形を呈し、北西から南東方向を示し、トレンチ西側の現在の畦道(細い用水路)に平行している。溝の堆積土はa～j層である。淡灰色粘質土、淡灰色泥土、淡暗褐色粘質土、青灰色粘土の間層に砂礫、砂があり、互層を為している。複数回の滞水、流水、氾濫を繰り返した痕跡が認められた。出土した遺物は、瓦器椀、近世陶器、木製板材などがあった。この遺構の性格については旧小泉川の本流ではなく、支流の一つであり、農業用水路としての役割があったものと推察される。

溝S D03は、トレンチ中央部で検出されたやや湾曲する南北方向の溝である。第73図4層の淡灰色粘砂質土の近世層下層から出土した。溝の断面は段皿を呈し、いわゆる2段掘りに穿たれている。溝幅は外側4m、深さ0.1m、内側3m、深さ0.3mを測り、断面は逆台形を呈する。堆積土は、土層図(A・B)淡黄灰色粘質土・茶褐色粘砂質土であり、溝の廃棄時に人為的に埋められたものと推測する。トレンチ南半では近世段階の大規模な氾濫により削平を受けており、不明確である。出土遺物は、平安時代後期に属するあまり磨耗を受けていない土師器皿、黒色土器椀などがある。

### 3) 12トレンチ(第74図、図版第59-(1))

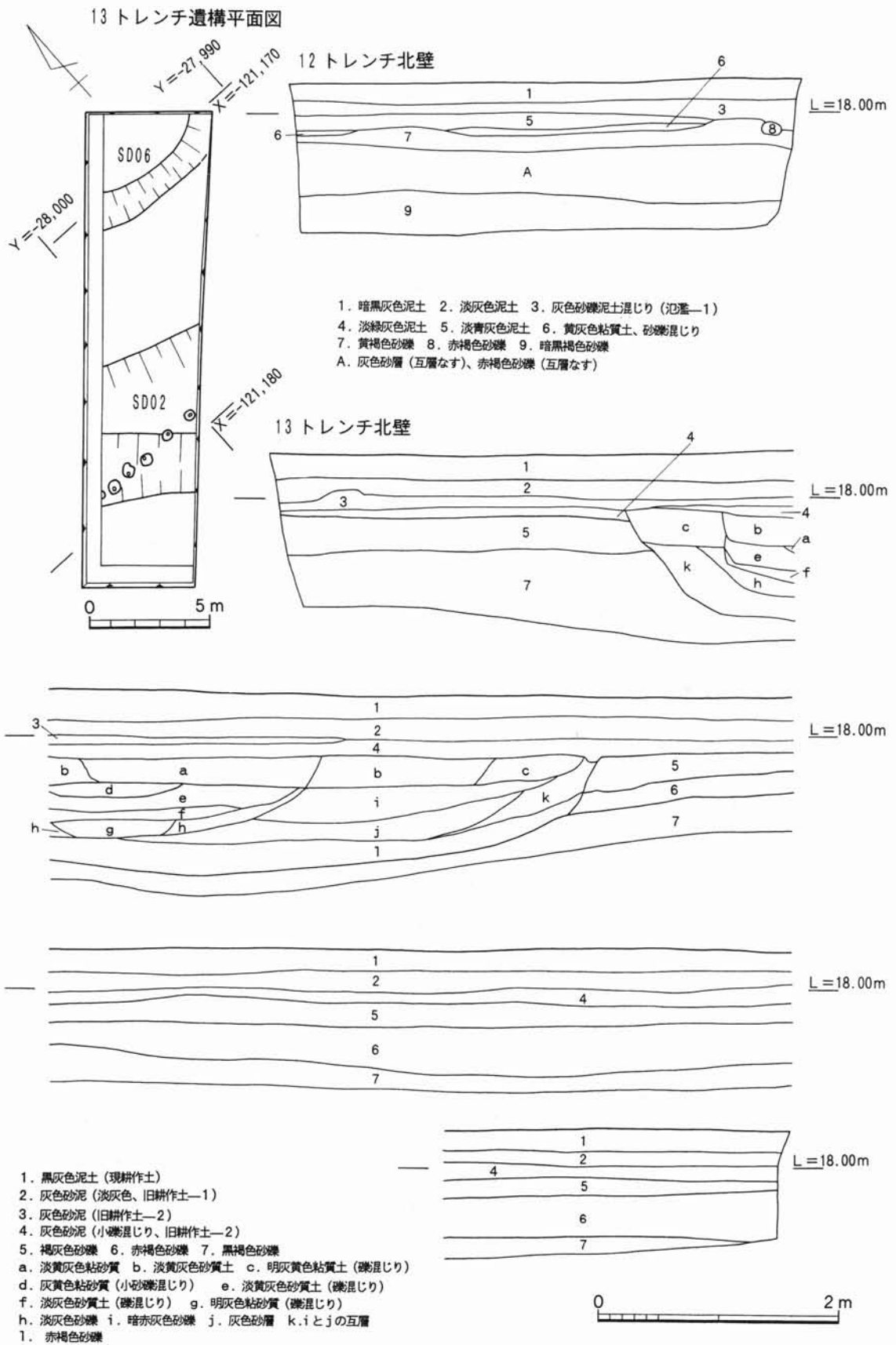
11トレンチの溝S D03の続きを検出することを目的に南北に長い試掘坑4m×20mを設定した。層序(第74図北壁土層図)は1～5層まで耕作土、床土、砂礫、砂が堆積する。検出遺構には幅0.2～0.3mの南北・東西方向の素掘り溝があり、近世～中世段階の水田の規模などの変遷が窺える。9層の直上のA層は北西から南東方向にかけて深く(0.2～0.6m)堆積し、氾濫時に伴うもので遺構と認定することはできない。出土遺物は、土師器、須恵器などの磨耗した細片が多く出土した。

### 4) 13トレンチ(第74図、図版第59-(2)・(3)・60-(1)・(2))

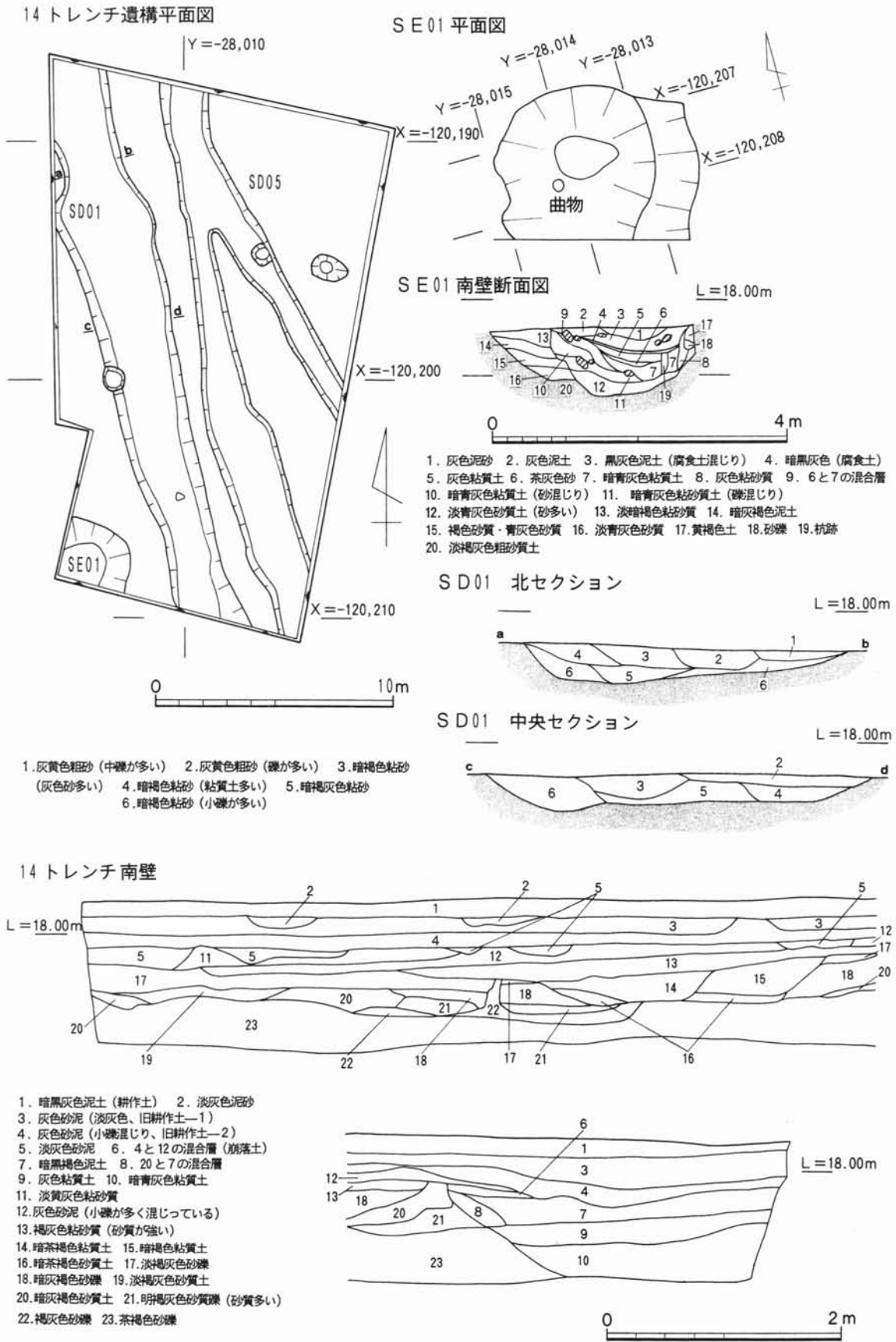
現代の水田下0.4mまで水田の互層(1～4層)が堆積し、以下、5～7層は砂礫が堆積する。出土遺物は土師器、須恵器などがあり、瓦器など中世の遺物は含まない。この砂礫は小泉川の氾濫によるものである。この礫直上ではトレンチ東半部では砂層があり、さらに中世、近世段階に数回の氾濫があったことが確認できた。

溝S D02は、トレンチ西半部で5層褐灰色砂礫を切り込んで検出された溝である。溝幅4m、深さ0.6m、断面は皿状を呈し、堆積土は上層でa～h層黄灰色土が主成分で、下層では灰色砂質土、淡灰色砂層である。出土遺物は土師器、須恵器などの細片があり、中世段階ごろには埋没したものと思われる。この溝は、トレンチ西側の比高差約1.4mの畦畔に平行しており、規模や堆積状況からみて、水量の多い農業用水路に利用された小川の景観が想像される。

柱列は溝S D02の上層から検出された。柱穴は約0.4mの不整形な円形を呈し、柱の痕跡は直



第74図 調子地区12トレンチ北壁土層図、13トレンチ遺構平面図・土層図



第75図 調子地区14トレンチ遺構平面図・土層図

径10cmである。柱間寸法は0.8～1.4mと不等間である。時期については、中世か近世か不明であり、その性格は、溝S D02に伴うものでなく、柵状のものであろう。

溝S D06は、弓状に曲がる東西方向の素掘り溝である。幅2～3m、深さ0.1mを測り、断面は浅い皿状を呈している。埋土は砂層である。この溝は5層の砂礫上層から検出されており、5層は洪水時の堆積過程の最終段階にできた窪地であると考えられる溝S D06は、弓状に曲がる東西方向の素掘り溝である。幅2～3m、深さ0.1mを測り、断面は浅い皿状を呈し、堆積土は砂層である。5層の砂礫上層から検出された溝と思われたが、5層が洪水時の堆積過程の最終段階にできた窪地である。

5) 14トレンチ(第75図、図版第59-(2)・60-(3)・61-(1)～(2))

調査対象地の南端に4m×12mの東西に長い試掘トレンチを設定した。その結果、トレンチ中央では南北方向の溝状遺構、西端では井戸と思われる遺構が検出された。この遺構の規模、時期、性格などを明らかにするために試掘トレンチの北側へ18m拡張を行った。

基本層序は、第75図の1～13までの中世耕作土の堆積状況が13トレンチとほぼ同じ状況である。以下、17～21層までの砂質土および砂層が厚く堆積する。この層は平安時代後期の氾濫によるものである。なお溝S D01の東側で平面的に確認したわけではないが、22層の褐灰色砂礫は17・18・21層を突き抜け垂直に立ち上がる。これは、地震による「噴砂」(液状化現象)の痕跡であると思われる。検出した遺構は井戸、溝などがある。

井戸S E01はトレンチ南西隅で検出した。井戸の掘形は方形を呈し、一辺2.4m、深さ1.1mを測る。井戸側、井桁などの施設はなく、素掘りの井戸である。井戸内は第75図の1～12層まで黒灰色泥土、灰色泥土青灰色粘質土がレンズ状に堆積しており、徐々に埋没したことが確認できた。13～16層は井戸側を設定する際の埋め戻し土である。遺物は、3層の黒灰泥土から曲物(木製酌)、磁器(染付)、7層の暗青灰色粘質土から瓦器皿などが出土した。性格については、遺物、層序から、つい最近まで使用されていた野井戸と思われる。

溝S D01は、トレンチの西半部で約20mにわたって検出されたほぼ直線的にのびる北々西から南々東方向の溝である。溝幅3.0～3.8m、深さ0.3～0.5mを測り、断面皿状を呈する。堆積土は14層の暗茶褐色粘質土、15層の暗褐色粘質土であるが、間層に砂、小砂礫のラミナがあり、流水の痕跡が認められた。出土遺物は土師器、須恵器、黒色土器などがあり、概ね、平安時代末に属するものと思われる。

溝S D05は、調査地全域にみられる平安時代後半に広範囲に氾濫し土砂が移動してできた自然の窪地である。方向は溝S D01と同様、北々西から南々東方向である。堆積土は18～22層の砂層、小砂礫層の互層であり、短期間に形成されたものと思われる。19層の淡灰褐色砂質土が最終の堆積物である。出土遺物は、須恵器、土師器などがある。

⑥小結

今回の試掘調査は友岡地区、調子地区の2か所で実施し、遺構、遺物の検出状況に応じて4か所でトレンチを拡張した。その結果、友岡地区では、現況では判別が困難な段丘縁辺部の調査地

であったが、溝などの遺構・遺物が発見できた。一方、調子地区では、小泉川の旧流路の範囲、堆積時期、陸化した後の土地利用についての成果を得ることができた。このように、友岡・調子地区は、旧小泉川の氾濫原にあっており、大半のトレンチで顕著な遺構・遺物を検出できなかった。各トレンチは、現地地表下50～70cmの厚さで田畑に伴う整地土が堆積しており、その下位には砂礫が堆積していた。田畑の整地土内には、瓦器片・輸入陶磁器片が混じり、中世以後に田畑として利用されたものと推測される。重機・人力により下層の砂礫を大きく断ち割り、小泉川の流路内堆積の土砂と判断される砂礫が厚く堆積しているのを確認した。砂礫内からは、弥生～平安時代の土器片が出土しており、基本的には、中世以後に、調子・友岡地区の土地利用が開始されたことを裏付けている。

その中でも、友岡地区で検出した1-Bトレンチ溝SD01、1-AトレンチSX07は排水溝、用水路など農業関連の施設と思われる。SX07が昭和30年代の地図にみられる南北方向の地境線とほぼ一致することは農業用水路の以外の用途を考察する資料と思われる。溝SD02は出土遺物の様相から近隣に人々の生活域があったかもしれない。この遺構群は総て中世以降現代まで連綿と水田・畑地として利用されていた。これ以前は、段丘縁辺部にあたるが、平安時代後期に旧小泉川の拳大から人頭大の砂礫が大量に短時間のうち激しく堆積したことが判明した。

また、調子地区にあたるE地区では平安時代に遡る溝を確認した。この時期にまで遡る遺構の確認は、友岡・調子地区では初めてである。この遺構の近傍には、調子集落があり、この時期にまで遡る遺構が調子集落の周辺に存在する可能性が高い。

さらに、11トレンチの大溝SD04は西側の肩部が検出されていないため正確な溝幅は確定しないが、大溝と呼ぶに相応しい堆積状況を示している。泥土、粘質土が互層をなし、複数回の氾濫の堆積がみられ、用水路として利用されたものと想像される。なお、溝の方向は現在の近接する畦と平行している。溝SD03は残りの良い北半部をみるかぎり、直線的に2段掘りの形態から人の手による開削されたものであろう。そして、氾濫により廃棄時には後の土地利用のため、丁寧に埋め戻されたものと推察される。溝SD01は平安時代後期に堆積した旧小泉川の砂礫層を開削された溝である。溝は西側が0.5m高く、現在の畦道の方向とほぼ平行する。この溝の性格は水田と生活域とを区画するものであり、両者が利用する機能を有するものと思われる。

友岡地区全域は旧小泉川の砂礫上に水田、畑地が中世以降現代まで営まれてきたが、複数回の水害、氾濫跡がみられた。小泉川は急峻であり、増水時には砂礫などを河道に残さず、低いところ(水田)に押し流すといわれている。今回の調査で実感した。

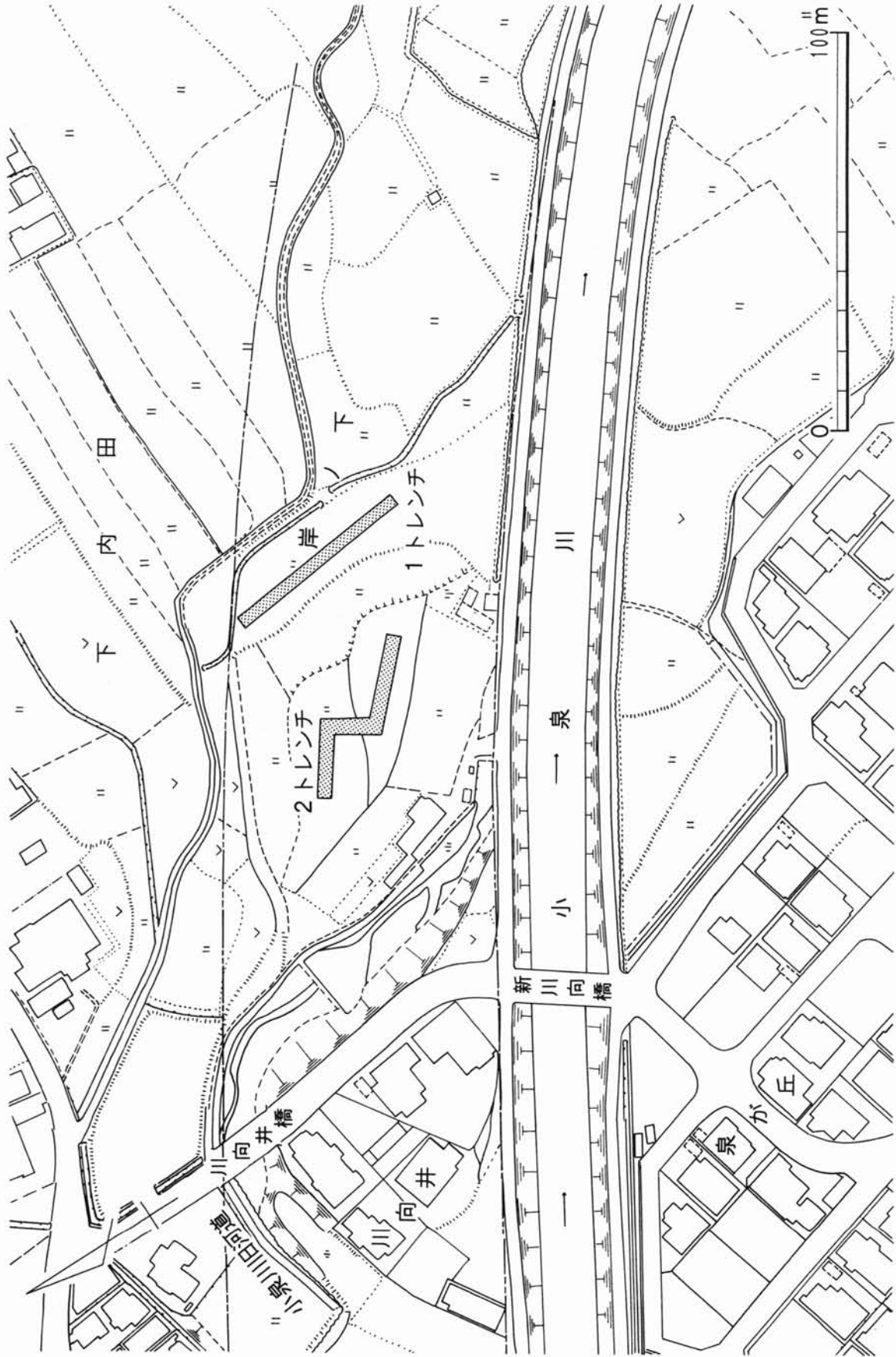
(竹井治雄)

## (2)岸ノ下地区〔長岡京跡右京第840次(7ANOKT-1)・伊賀寺遺跡〕

岸ノ下地区は、長岡京市下海印寺岸ノ下13-1ほかに所在し、長岡京跡の条坊では、右京八条四坊一町、西三坊大路(旧条坊呼称では右京七条四坊三町、西三坊大路)に位置する。同地区には、古墳時代後期～鎌倉時代の集落跡である伊賀寺遺跡が所在する。

第二外環関係遺跡で昨年度に実施した右京第799次調査の下海印寺地区の北側にあたる地区で





第76図 岸ノ下地区トレンチ配置図

ある。昨年度の下海印寺地区の試掘調査結果をまとめると、東側の崖面より上は段丘が分布しており、この段丘上では瓦が投棄された溝や柱穴、弥生時代の柱穴などを検出し、広範囲に遺構が包含されていることが推定された。また、遺構は確認できていないが、縄文土器片、石器剥片が包含層中より出土しており、縄文時代の遺構が遺存している可能性も認められた。一方、崖面の下は小泉川の氾濫原にあたり、段丘側面を攻撃して浸食している様子が窺えた。この氾濫原では中世以後現代に至る田畑耕作土を確認しただけである。中世以後に安定的に耕地として利用されていることから、人的な土地利用が開始されたものと判断された。その背景として、中世以後に小泉川の河道が固定され、氾濫に対する人的な管理が進められたものと推定された。

岸ノ下地区の試掘対象地の周辺には民地が残っており、重機の進入路が確保できないため、人力による掘削・埋め戻しを行った。調査対象地内に1・2トレンチの2本の試掘トレンチを設定し調査を実施した(第76・77図、図版第62-(1)・(2))が、両トレンチにおいて顕著な遺構・遺物は検出できなかった。

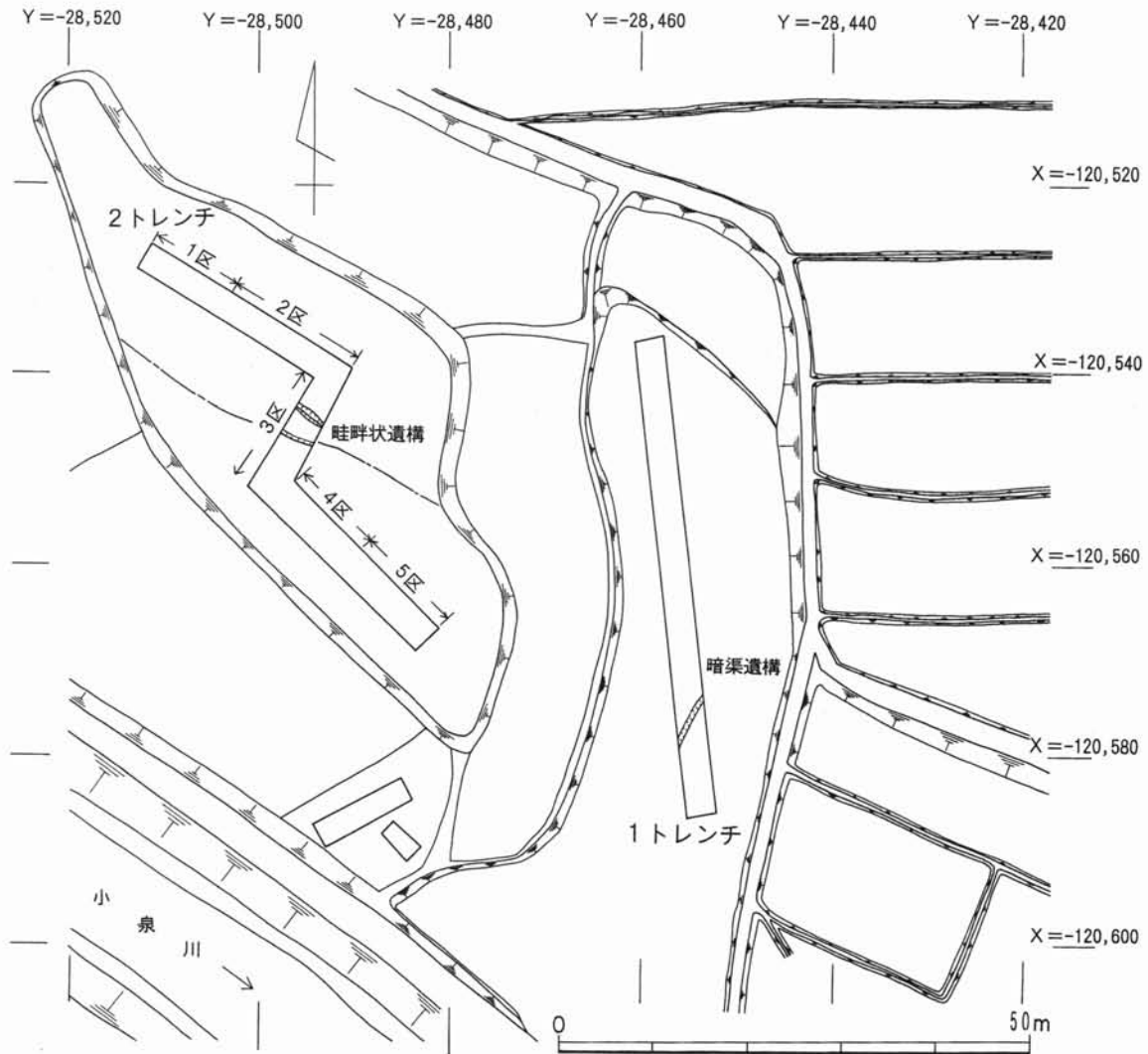
本調査地区は、旧小泉川の旧河道が小字川向井から北東方向に大きく蛇行して、小字下内田で東南方向に円形を描く、その地点に存し、小字下内田の河岸段丘からは一段低地に位置する。

現地調査は、平成16年11月16日～平成17年2月14日までを要した。同調査は、長岡京跡右京第840次調査として実施した。

(岩松 保)

#### 1) 1トレンチ(第78・79図、図版第63-(1)～(3))

現在水田として利用されており、東北側は段差をもって一段高くなって、小字下内田の段丘面に続く。段直下には現農業用水路が小泉川に向かって東南方に設けられている。小泉川旧河道の東辺部に相当する水田面の高さは、南・北側では大差なく、水平に近い。本トレンチの規模は南北50m、東西3mで、水田を東・西に分断するかのよう南北方向に斜走する、細長いトレンチである。調査は周辺地での諸般の事情から、人力により掘削した。基本的層序は南壁のそれを基準とし、現在の水田耕作土である濃灰色土と床土の淡灰色粘質土の下には薄黄褐色土である旧耕作土や旧床土の薄褐色粘質土が堆積していた。部分的にはトレンチ中央部で褐色砂礫土や薄褐色砂礫土が横たわっている。その下位は20～30cmの厚さで淡黄褐色砂質土や灰白色粘質土がトレンチ南半部全体に拡がっている。これは現代の水田耕作土が調査地全体に及ぶことは当然として、旧耕作土などは南半部に展開することは、北半部に向かって徐々に高くなっており、あるいは段差をもって水田が営まれていたのが、大きく削平されたものと類推できる。各耕作土から土師器・須恵器・緑釉陶器や磁器などの小片が出土し、時期的には長岡京期～江戸時代に属する。底面は北に向かって高くなり、トレンチ全体は粘土塊を含んだ砂礫が拡がり、洪水の様相を呈し、小泉川の旧河道に相当する。トレンチ南半部で確認した暗渠排水遺構(第79図、図版第63-(3))は、全長約6m、幅40～50cmを測り、トレンチ東・西両外側に伸長する。深さはごく浅く10～15cmで、溝内には大小の礫を充填させている。無遺物であるが、層序から江戸時代に比定できよう。結果、このトレンチでは、条坊などに関連する遺構はなく、仮に遺構が存在していた場合で

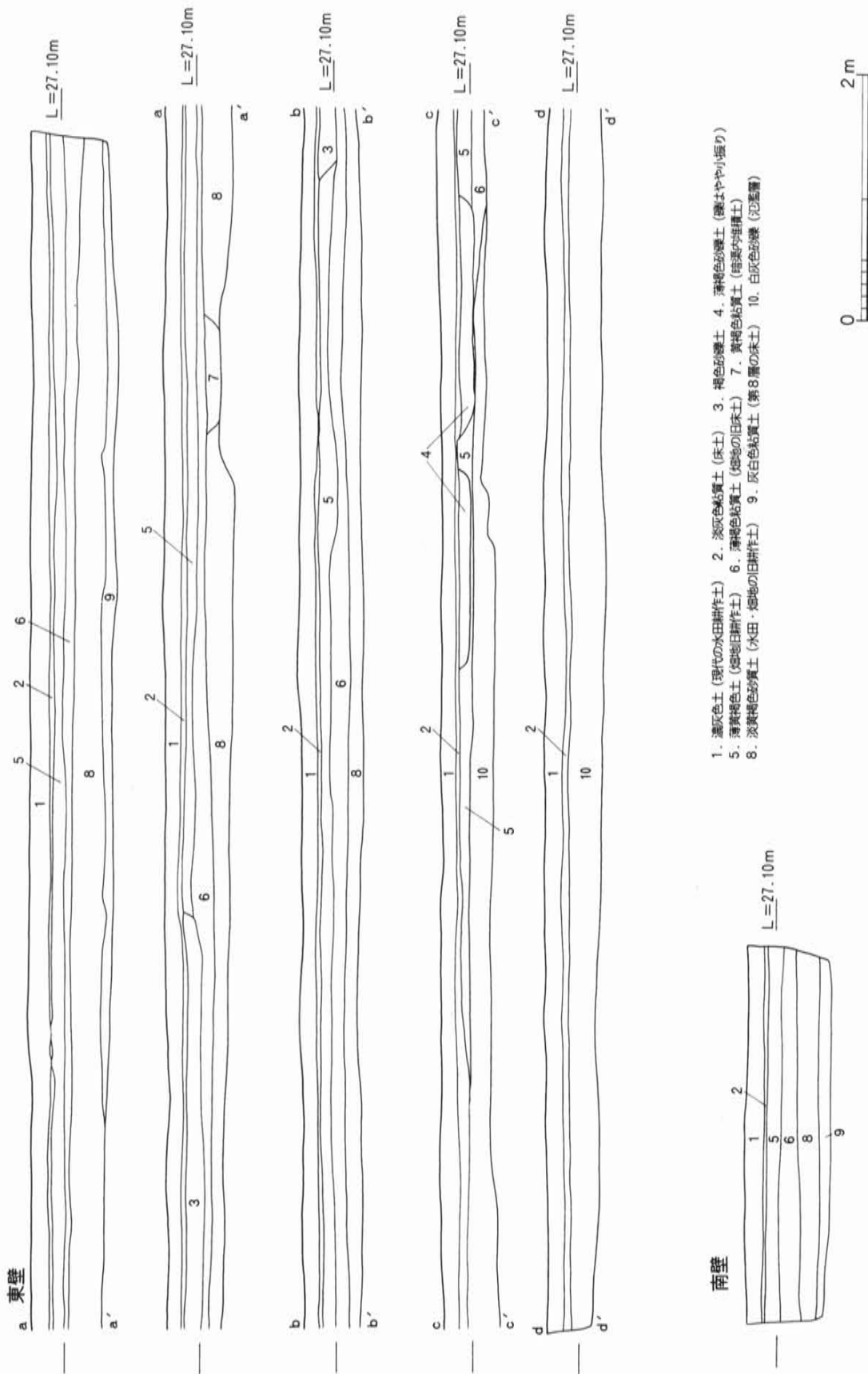


第77図 岸ノ下地区検出遺構平面図

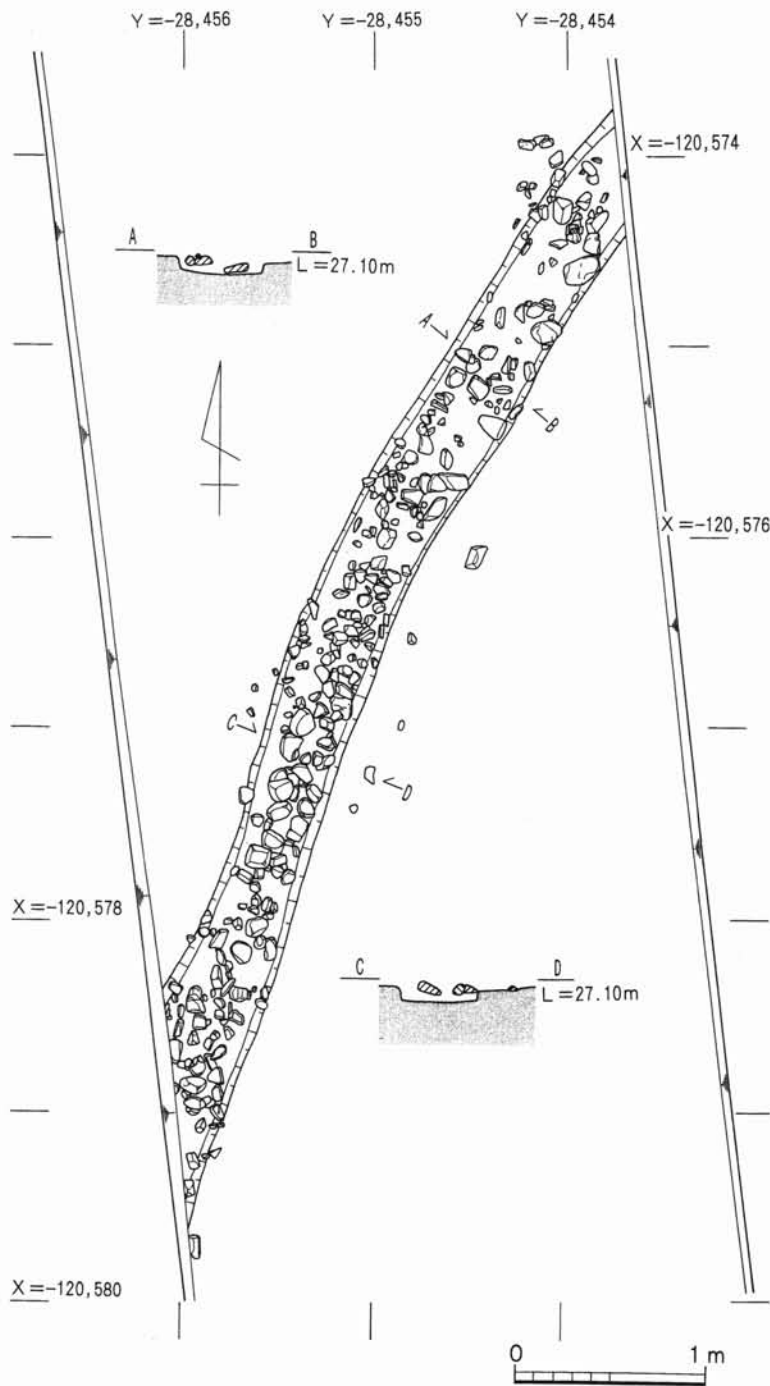
も、いち早く小泉川の大規模氾濫により削平されたり、あるいは近世以降の耕地拡大に伴う掘削工事で消失したと考えられる。

2) 2トレンチ(第80～82図、図版第64-(1)～(3))

小泉川の旧河道が二分して残存した形状で、一段小高くなって、まるで中島のようなものである。元来は2枚の田畑があって、南・北に中央東西稜線で小段差をもっていた。3m幅のトレンチを、調査地全体を観察できるように屈曲線状に長さ55mにわたって設けた。1トレンチ同様に、南壁層序を基本とする。現代の耕作土である濃灰色土とその床土(緑灰色土)、旧耕作土の薄褐色土と、それ以下は砂や礫の互層となる。その間、各耕土直下、床土直上には、大概トレンチに並行して20～30cm幅の畝状の高まりが南北方向に調査地全面にわたって縦走する。最高2～3cmで、北側に向かって徐々に低くなり不明瞭になる。部分的には交叉するところも数か所検出しているので、数回にわたって同一文化面での畑作や水田耕作が営まれたと推測できる。耕作土中から土師器・須恵器・磁器・陶器などの小片が出土し、平安～江戸時代に属する。さらに下位の砂・砂礫から磨耗した須恵器・土師器・緑釉陶器・瓦器・土馬などが出土している。



第78図 岸ノ下地区1トレンチ東壁・西壁土層図



第79図 岸ノ下地区1 トレンチ暗渠排水遺構実測図

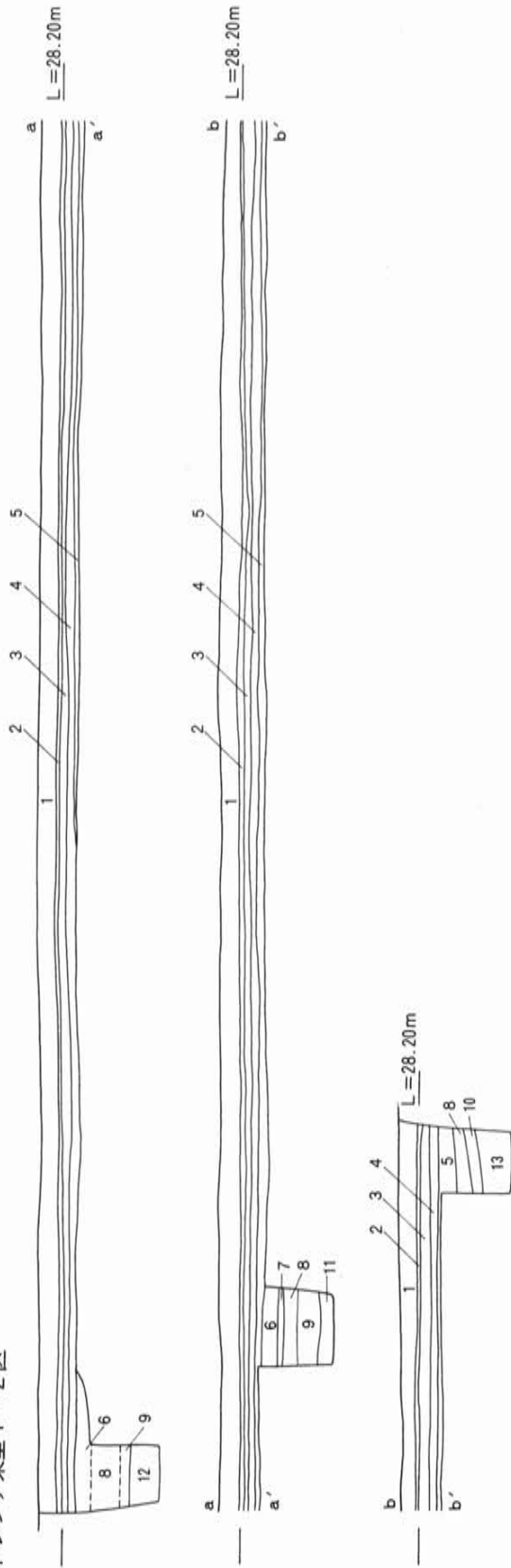
調査地中央部の東西方向のトレンチで拳大の川原石を利用して積み上げた畦畔状遺構(第82図、図版第64-(3))を検出した。この遺構は、薄黄褐色砂質土を幅約3m、深さ約50cmの規模で一度に掘り込み、東側を大形の礫の混入した砂礫土で固め、西側を「U」字形の側溝に作り出している。その側溝の西辺壁を拳大の川原石で少なくとも5段以上、面を合わせて丁寧に積み上げていた。さらにその後補修ないし改修したかのように、小形の川原石を緩斜面を造成するように貼り付けていた。この石組み遺構の裏込め土に相当する薄黄灰色砂礫土内から丹波系甕の体部片が1点出土したにすぎず、即断はむずかしいが、少なくとも江戸時代以降の構築物である可能性が高い。また、この石組み遺構の西辺が現地形を緩慢に蛇行した低い隆起部と位置が一致しており、田畑をある時期に画するために築造されたと考えられる。

### 3) 小結

両トレンチの調査結果を概観した。しかし、今回の調査地が長岡京跡右京八条四坊一町の北東部に比定されているが、条坊などに関連する遺構は全く確認できなかった。これは本地域が小泉川の旧河道上であることと相関しているものと考えられる。人的遺構ではないにしても、遺物と氾濫に伴う砂礫のもつ旧河道の様相は、今後の歴史地理学にも貴重な資料を提供したものと言えよう。

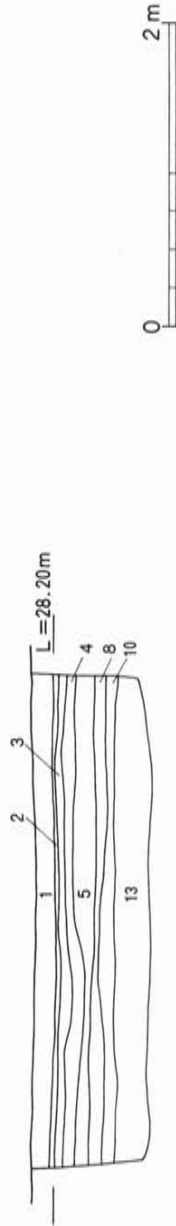
(松井忠春)

2トレンチ東壁1・2区



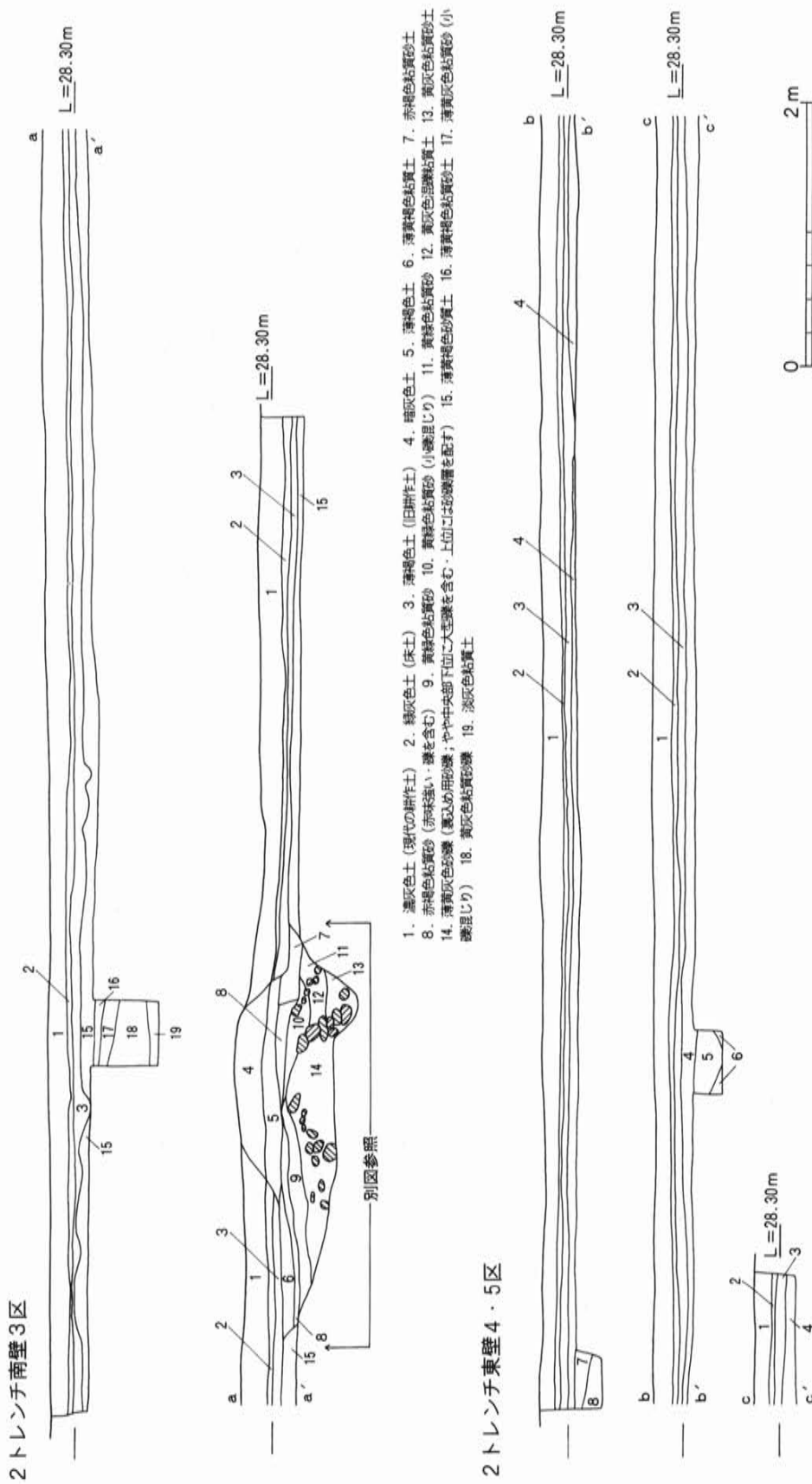
- 1. 濃灰色土(現代の耕作土) 2. 緑灰色土(床土) 3. 薄褐色土(旧耕作土) 4. 薄黄褐色砂質土 5. 黄灰色粘質砂 6. 赤褐色砂礫 7. 灰色砂(粗い)
- 8. 灰色砂礫 9. 灰色粘質砂 10. 灰色砂 11. 灰色砂礫 12. 茶褐色砂礫 13. 黄灰色粘質砂

2トレンチ断割1南壁

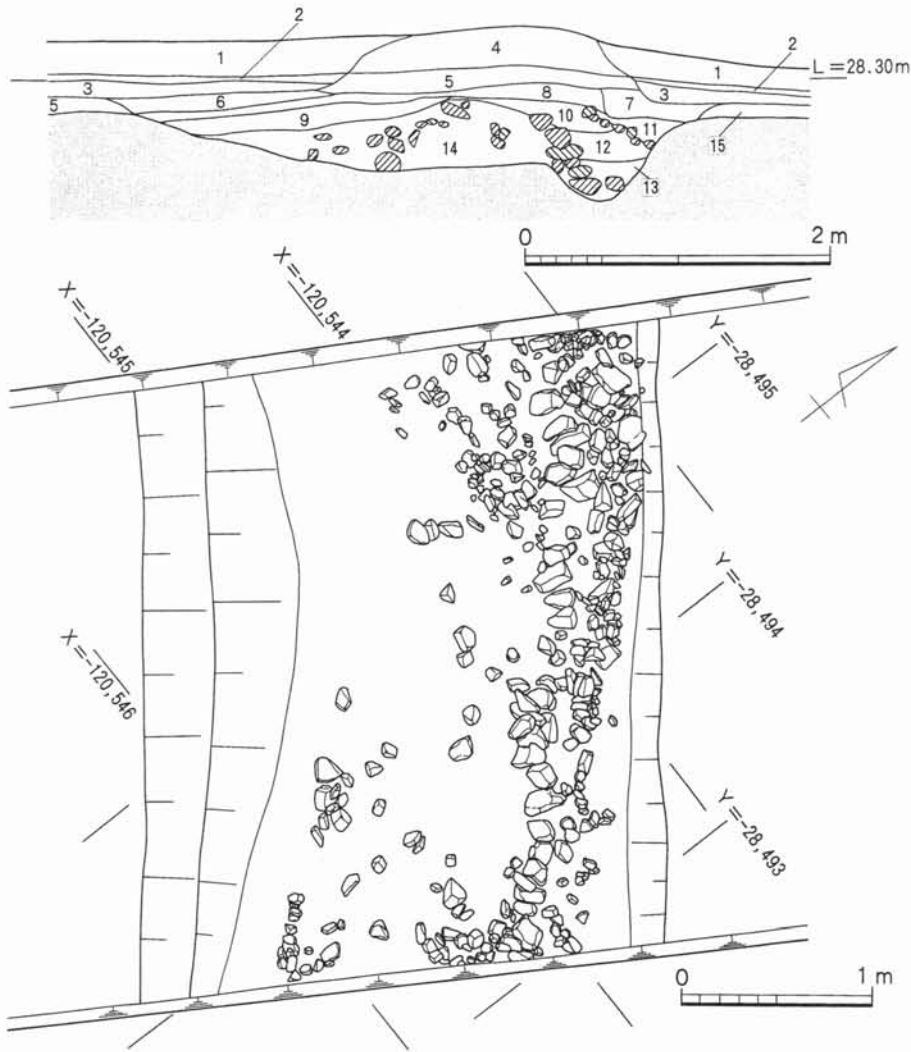


- 1. 濃灰色土(現代の耕作土) 2. 緑灰色土(床土) 3. 薄褐色土(旧耕作土) 4. 薄黄褐色砂質土 5. 黄灰色粘質土(赤鉄粉を含む) 8. 灰色砂礫
- 10. 灰色砂 13. 黄灰色粘質砂(レンズ状に砂礫層を含む)

第80図 岸ノ下地区2トレンチ東壁1・2区、断ち割り1南壁土層図



第81図 岸ノ下地区2トレンチ東壁1・2区、断ち割り1南壁土層図



1. 濃灰色土 2. 緑灰色土 3. 薄褐色土 4. 薄黄褐色砂質土 5. 赤褐色粘質砂土 6. 薄黄褐色粘質土 7. 赤褐色粘質砂  
 8. 黄緑色砂質砂 9. 黄灰色土 10. 黄灰色混礫粘質土 11. 黄灰色粘質砂 12. 黄褐色砂礫土 (礫を含む)

第82図 岸ノ下地区2 トレンチ畦畔遺構実測図

(3) 上内田地区〔長岡京跡右京第841次(7ANOKD-2)・伊賀寺遺跡〕

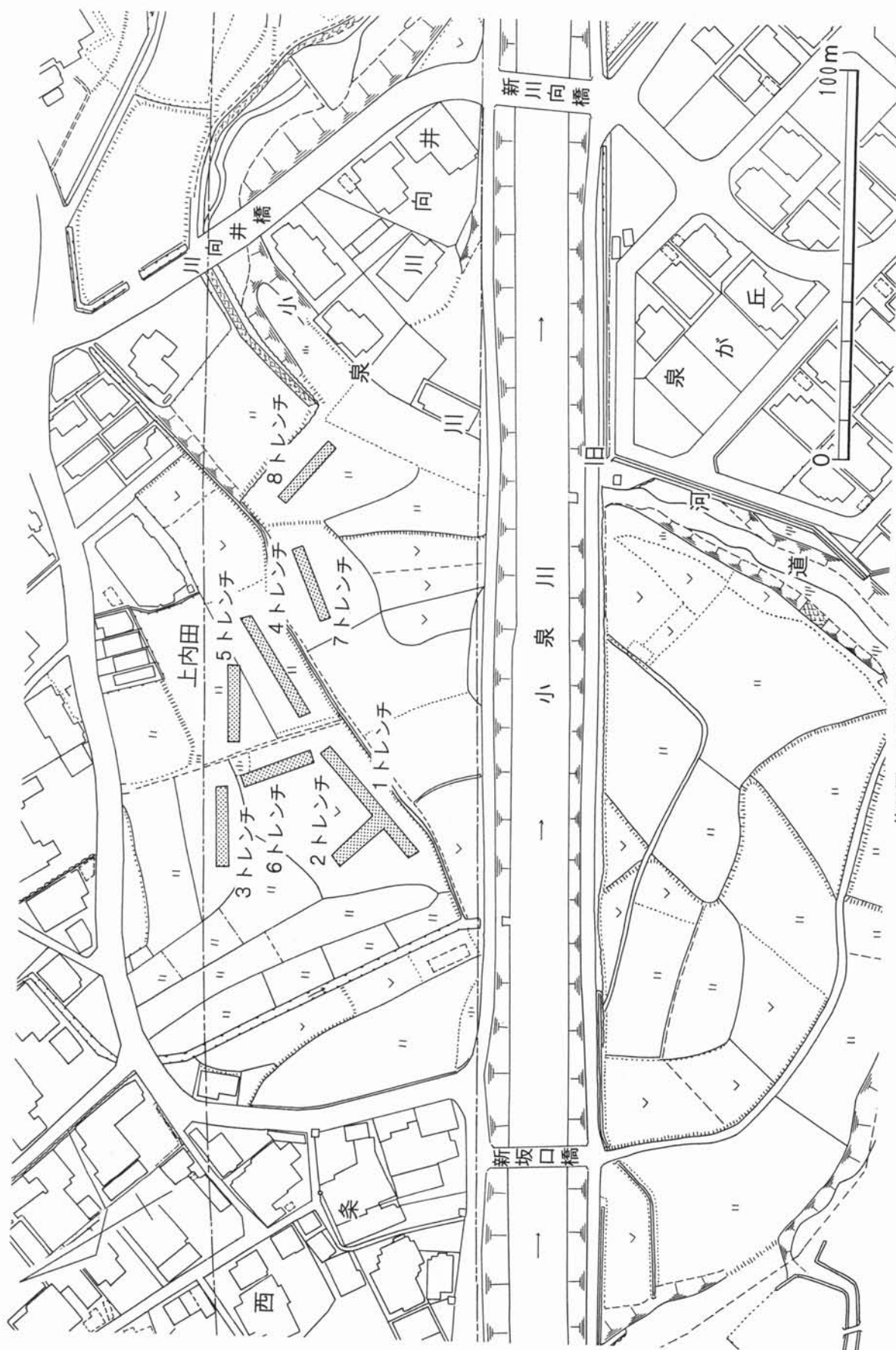
上内田地区は、長岡京市下海印寺上内田53ほかに所在し、長岡京跡の条坊では、右京七条四坊五・十二町、西四坊坊間小路(旧条坊呼称では右京七条四坊七・十町、西四坊坊間小路)に位置する。同地区は、伊賀寺遺跡の範囲に含まれている。この地区の試掘調査は長岡京跡右京第841次調査として実施し、平成16年12月2日～平成17年2月25日までを要した。

上内田地区の調査対象地では重機の進入路が確保できないため、人力により上土の除去、包含層の掘削を行い、調査終了後には、人力により埋め戻しを行った。

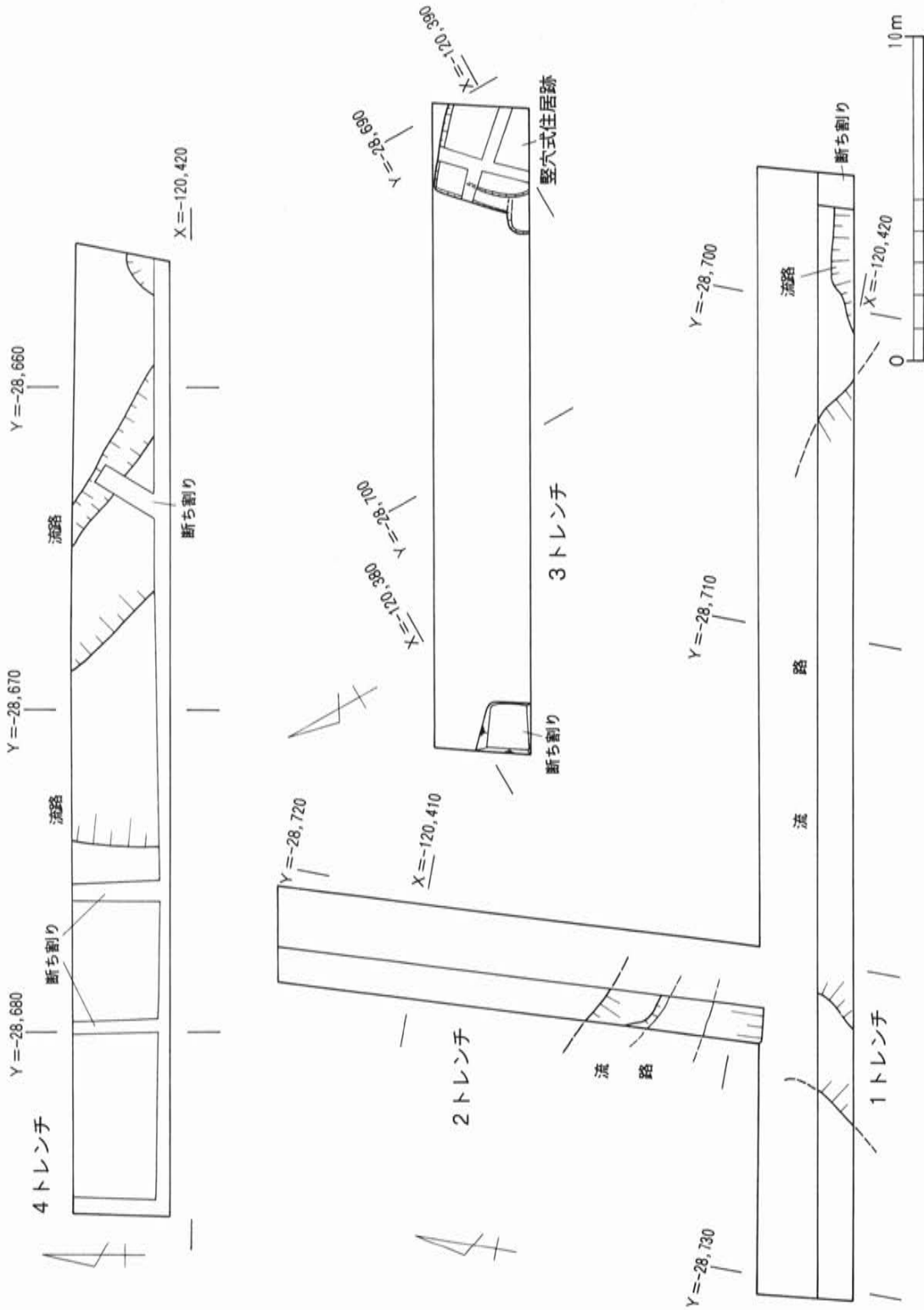
対象地は、北から南に張り出す段丘の縁辺に位置している(第83図、図版第65-(1))。対象地の面積は約5,000㎡で、全域に8か所の試掘トレンチを設定し、計490㎡の試掘調査を実施した。

1) 1 トレンチ(第84・85図、図版第66-(1)～(3))





第83図 上内田地区トレンチ配置図



第84図 上内田地区1～4トレンチ検出遺構平面図

調査対象地の西南部に、3 m×35 mトレンチを東西方向に設定した。1層の暗灰色土(現耕作土)下には、6層の黄褐色土、8層の明淡褐色土、9層の淡灰色土(茶色斑混)、10層の淡茶灰色土といった旧耕作土・旧床土関連の土砂がほぼ水平に40~50 cmの厚さで堆積し、その下に11層の淡灰色礫土(固い)が約5 cmの厚さで堆積する。これより下位は河川内で堆積したと判断される層序である。11層の淡灰色礫土(固い)の下位では、中央付近で、幅22~23 cm程度、深さ約1 mの落込みを確認した(18~23層)。埋土には古墳時代の遺物が含まれ、その時期以降の自然流路と判断される。また、トレンチの東端付近でも灰色砂礫を主体とする流路内埋土と判断される層序を確認した(12~17層)。西端部および中央部の一部を断ち割りし、下位の層序の堆積を観察した。西端部の層序でみると、褐色礫(径3~5 cm)、灰色砂礫が堆積しているが、遺物の出土はなく、礫の詰まりも密であり、古墳時代以前に自然流路内で堆積した砂礫と判断された。

#### 2) 2 トレンチ(第84・86図、図版第67-(1)~(3))

3 m×15 mのトレンチをほぼ南北方向に設定し、1 トレンチと「ト」の字形になるように配した。地表下には、現耕作土の1層暗灰色土、床土の2層淡白灰色土があり、その下には3層茶色混淡灰色土、4層淡茶灰色土といった、旧耕作土と判断される土が約20 cm堆積している。その下には6層の淡灰色礫土(固い)が薄く堆積し、それより下位の層序が河川内堆積層と判断された。6層の下位では、トレンチの南側、1 トレンチとの接合部近くで、幅5 m程度の流路跡を確認した(7~14層)。1 トレンチの中央で確認した流路跡と同様、古墳時代の遺物が若干混じるものである。1 トレンチの自然流路の延長部分もしくは、そこに流れ込む支流の可能性が想定されるが、試掘トレンチの幅が狭いため、いずれであるのかは確定できなかった。15~20層はこの流路より古い段階の流路内堆積であるが、試掘トレンチの中では遺物の出土をみていない。

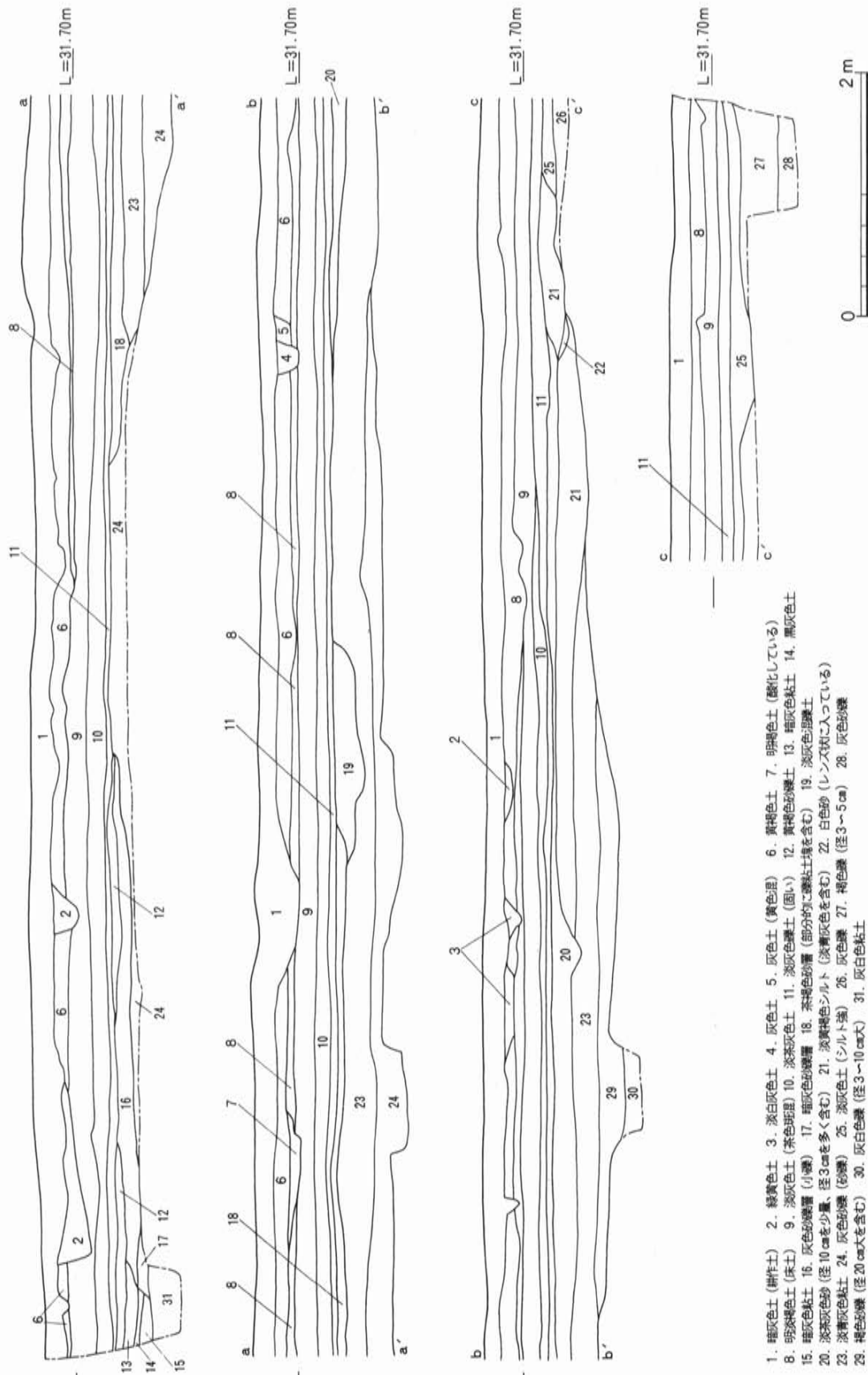
#### 3) 3 トレンチ(第84・86図、図版第68-(1)~(3))

調査対象地内の北辺に設定したトレンチで、南側の6 トレンチと比べて、約70 cmの高所に位置している。3 m×20 mの範囲で調査した。

1~7層は現耕作土・床土および旧耕作土・旧床土関連の土層で、これらの下位には地山と判断される明褐色砂礫(9層)が拡がっていた。この層をベースにして、黒灰色土(8層)を埋土とする3~4か所の色調の違いが認められた。このうち、トレンチの東南部では、一辺3 m程度の方形を呈した遺構が検出できた。深さ約15 cm程度で、埋土には土師器片が混じっており、形状・規模から、竪穴式住居跡と判断される。この遺構の西辺には、土坑が重複している。このトレンチでは竪穴式住居跡と判断される遺構を確認したことから、このトレンチの南側の段差は、段丘崖を利用して作られたものと判断される。

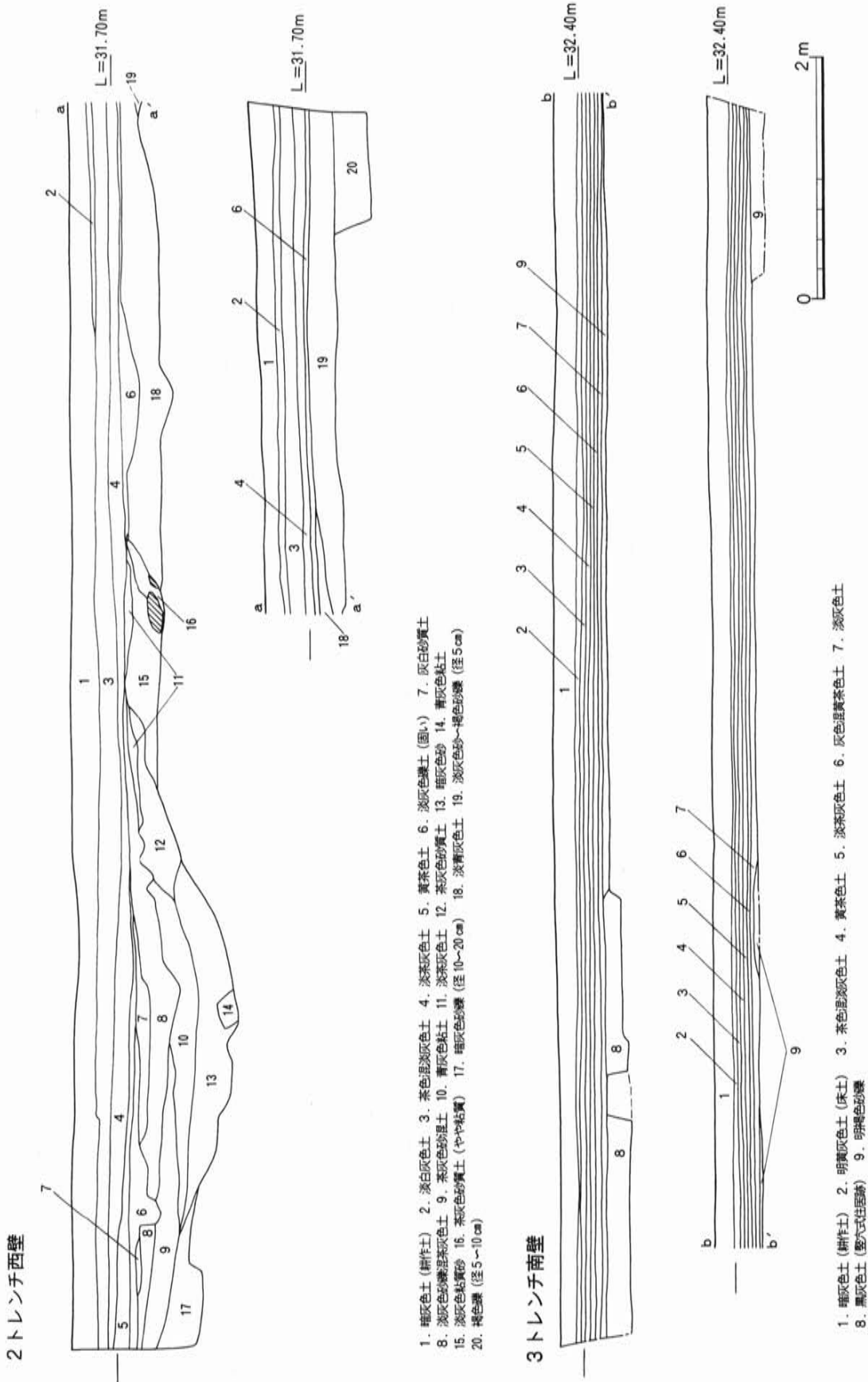
#### 4) 4 トレンチ(第84・87図、図版第69-(1))

1 トレンチの東側に設定したトレンチで、3 m×30 mの範囲を調査した。トレンチ内には、1・2層が現耕作土・床土で、3~7層および16層がいわゆる包含層で、これより下位が流路内堆積と判断される砂・砂礫・シルト層である。3層の淡黄褐色土中より瓦器・須恵器が、6層の黄褐色礫混土中よりは須恵器が、7層の黄色混茶褐色土中よりは土師器甕片が出土している。

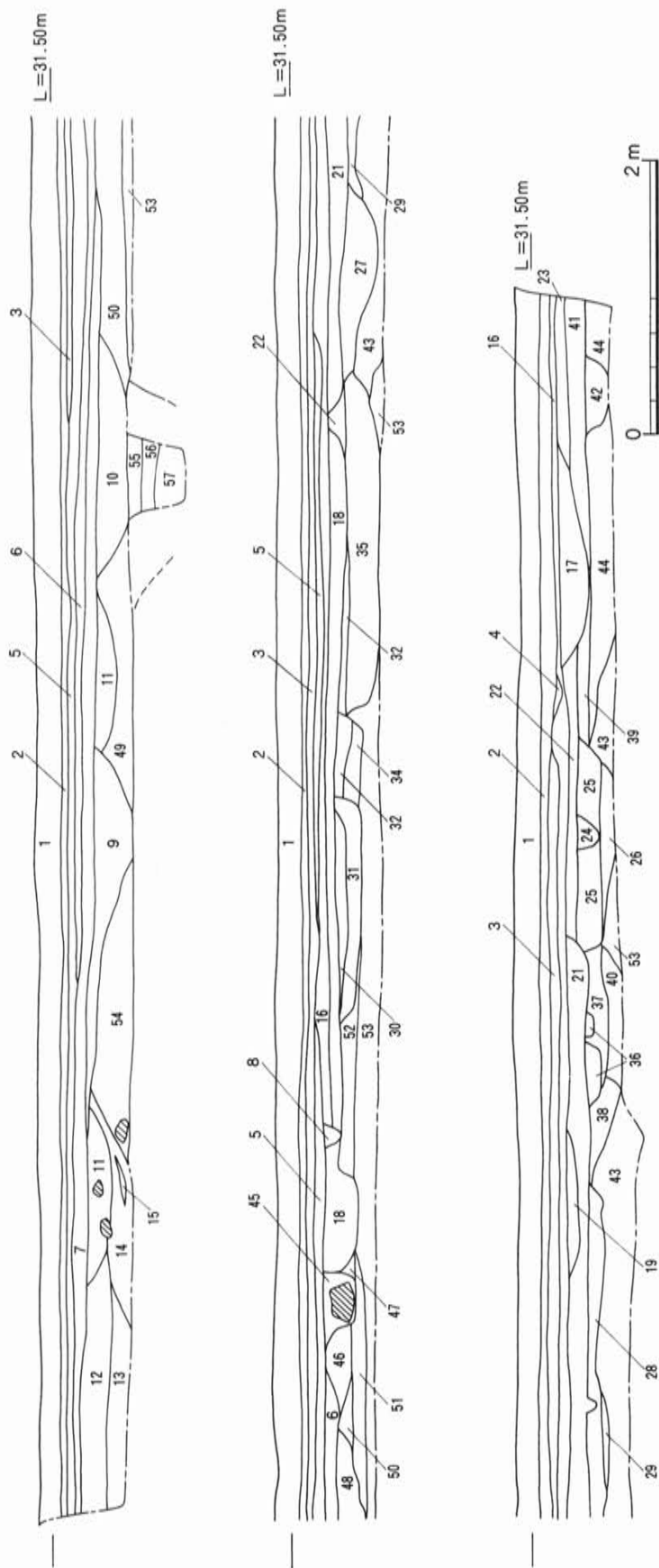


- 1. 暗灰色土(耕作土) 2. 緑黄色土 3. 淡白灰色土 4. 灰色土 5. 灰色土(黄色混) 6. 黄褐色土 7. 明褐色土(酸化している)
- 8. 明淡褐色土(床土) 9. 淡灰色土 10. 淡灰色礫土 11. 淡灰色礫土(固い) 12. 黄褐色砂礫土 13. 粗灰色粘土 14. 黒灰色土
- 15. 暗灰色粘土 16. 灰色砂礫層(小礫) 17. 暗灰色砂礫層(部分的に礫粘土塊を含む) 18. 茶褐色砂礫層(部分的に礫粘土塊を含む) 19. 淡灰色泥礫土
- 20. 淡褐色砂(径10cmを少量、径3cmを多く含む) 21. 淡黄褐色シルト(淡褐色を含む) 22. 白色砂(レンズ状に入っている)
- 23. 淡黄灰色粘土 24. 灰色砂礫(砂礫) 25. 淡灰色土(シルト混) 26. 灰色礫(径3~5cm) 27. 褐色礫(径3~10cm) 28. 灰色砂礫
- 29. 褐色砂礫(径20cm大を含む) 30. 灰白色礫(径3~10cm) 31. 灰白色粘土

第85図 上内田地区1トレンチ南壁土層図



第86図 上内田地区2トレンチ西壁土層図・3トレンチ南壁土層図



- 1. 暗灰色土(耕作土) 2. 明黄褐色土 3. 淡黄灰色土 4. 淡黄灰色土 5. 淡灰色珪质黄褐色土 6. 黄褐色砂质土 7. 黄色混赤褐色土
- 8. 明黄褐色土 9. 暗灰色砂质土 10. 灰白色礫(径3~10cmの尸礫) 11. 茶褐色砂礫 12. 茶褐色砂礫(流路) 13. 茶褐色砂质土 14. 淡茶灰色土
- 15. 茶褐色砂 16. 淡灰色土 17. 黄褐色土 18. 淡灰色珪质黄褐色土 19. 淡黄褐色土 20. 黄褐色シルト 21. 黄褐色シルト 22. 黄褐色砂质土
- 23. 暗黄褐色土 24. 黄灰色土 25. 茶褐色砂 26. 茶褐色砂质土 27. 暗黄灰色土 28. 淡灰色シルト 29. 淡灰白色シルト 30. 黄色混淡灰色砂质土
- 31. 黄褐色砂礫 32. 淡灰色土 33. 黄色珪质淡灰色土 34. 淡灰色砂质土 35. 淡灰色砂~砂礫(径3cm) 36. 茶灰色砂质土 37. 暗灰色シルト
- 38. 茶灰色砂礫(砂礫大) 39. 茶灰色砂质土 40. 灰白色砂礫(径3cm) 41. 黄褐色砂礫(径1~3cm) 42. 黄褐色土(水の浸み込みか?) 43. 茶灰色砂
- 44. 淡灰色粘土 45. 明黄褐色土 46. 黄褐色土 47. 淡灰色砂质土 48. 灰白色砂礫(径3cm未満) 49. 灰白色砂礫 50. 淡茶灰色砂质土 51. 淡黄褐色土
- 52. 淡茶灰色砂质土 53. 黄灰色シルト~淡灰色シルト 54. 暗黄褐色砂礫(堅いものガベース) 55. 淡黄褐色砂 56. 茶灰色砂礫 57. 茶灰色礫

第87図 上内田地区4トレンチ南壁土層図

このトレンチでは、1・2トレンチなどで確認できたような中世段階の整地層と判断される淡灰色砂礫(径5cmの礫を含む：固い)に相当する土層が認められないことと、中世以前の包含層が認められることから、中世以前には陸化していたものと判断される。そのため、遺構の検出は認められなかったが、古墳時代の段階で生活面の一部をなしていたものと判断される。

土層の観察により、古墳時代以前の数度にわたる流路の分布を確認したが、調査範囲が狭いこともあり、詳細は不明である。これらの流路内からは、土師器甕の体部が完形に近い状況で出土した。近傍から廃棄されたものと推測される。このトレンチで確認できた流路跡は、その方向から、6・7トレンチの流路跡に繋がるものと判断される。

5) 5トレンチ(第88・89図、図版第69-(2)・(3))

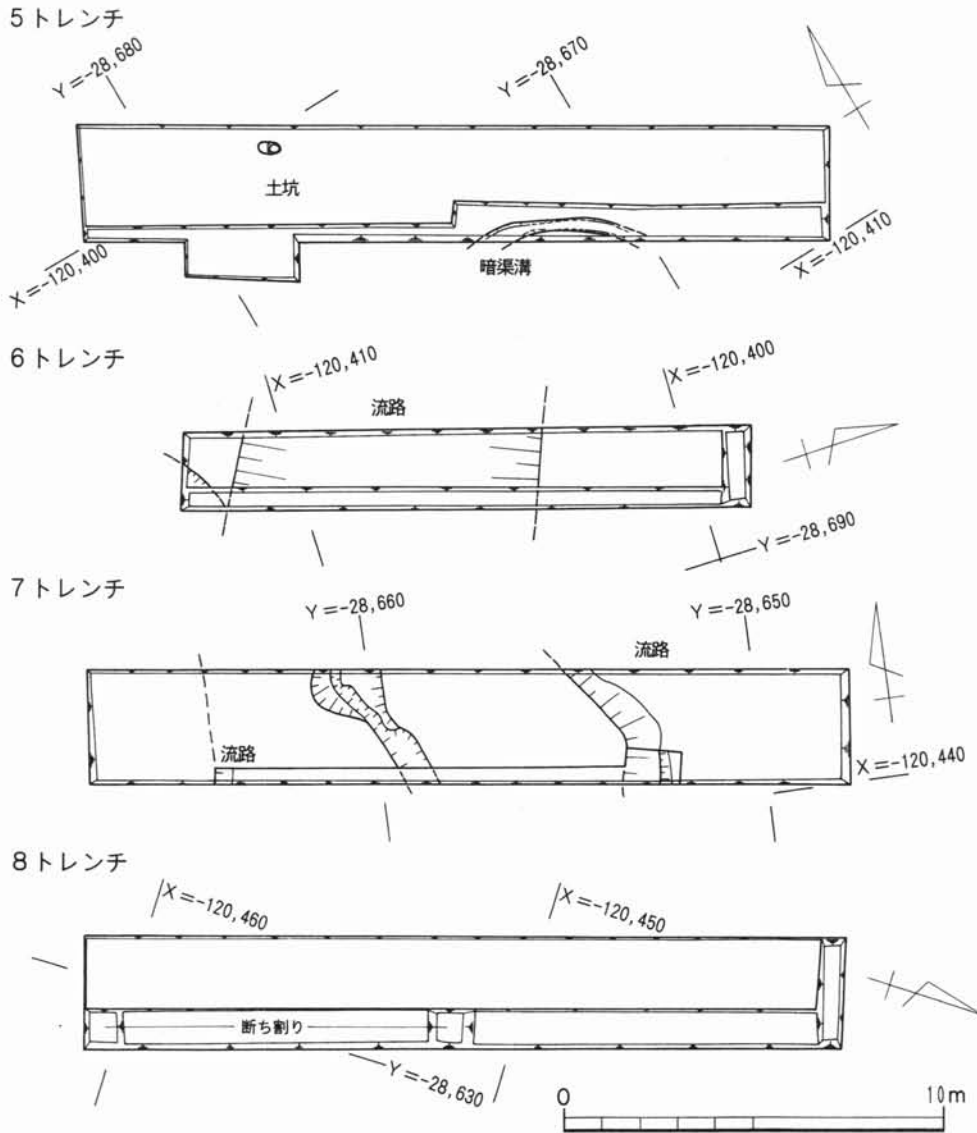
3トレンチの南東側、段丘に近い位置に3m×20mの調査区を設定して、遺構の検出に努めた。1層耕作土(暗灰色土)と2層灰白色土・3層明黄褐色土を除去すると、9層の黄茶色土となり、この9層が地山と判断される。南東部分では、耕作土下に5層の灰色砂礫を盛り上げた旧畦畔(高さ約25cm)が認められ、その西側の斜面部分には暗黄褐色土(4層)が堆積している。

地山上面では土坑1と時期不詳の暗渠溝1を検出した。土坑は30cm×50cmで、暗灰色土を埋土とするが、遺物の出土はなく、時期は不詳である。暗渠溝はトレンチの南壁土層で認めた遺構で、平面的にはやや彎曲しているが、トレンチの方向にはほぼ平行していること、南壁に沿って設定したサブトレンチ内にはほぼ収まるため、その大部分とサブトレンチの掘削により消失してしまった。検出高はわずかに20cm程度であった(図版第69-(3))。断面の観察では、深さ約50cmで、断面箱形を呈しており、ほぼ垂直に掘られている。幅は約30cmである。埋土は暗黄褐色礫混じり土(6層：径3～10cmの礫)が入っており、底面に暗褐色砂(7層)が薄く堆積している。遺物の出土はなく、時期不明である。

他のトレンチでは、現耕作土の下位には数枚の旧耕作土・床土が堆積しているのに対して、このトレンチでは現代の耕作土を1枚認めただけである。これは、上位の堆積土が大きく削平を受けたためと判断される。また、南側の4トレンチとは異なり、流路内堆積砂礫が明瞭に認められず、地山と判断される9層も安定している。以上のことから、4トレンチと5トレンチの間に段丘崖面があったのが、5トレンチ周辺は段丘が大きく削り取られたことにより、現地形では段丘崖が観察されないものと推定される。

6) 6トレンチ(第88・89図、図版第70-(1)・(2))

3トレンチと1トレンチの間に設定したトレンチで、2m×15mのトレンチを南北に設定した。このトレンチでは、現地表下約50cmにわたって、1層耕作土(暗灰色土)、2層床土(明黄褐色土)、3層淡灰色土、4層淡灰色土(茶褐色砂混)が堆積していた。3・4層は旧耕作土と判断され、数度にわたって、田畑の土が盛り上げられたものと考えられる。その下位には、5層の淡灰色砂礫(径5cmの礫を含む：固い)が約5cmの厚さで堆積しており、これを取り除くと、河川内堆積層地山と判断される13層明黄褐色砂質土、14層の明黄褐色砂礫となる。この14層を切り込んで、約7mの長さにあたって、深さ約60cmの流路跡を確認した(7～9層)。遺物の出土はなかった。この



第88図 上内田地区5～8トレンチ検出遺構平面図

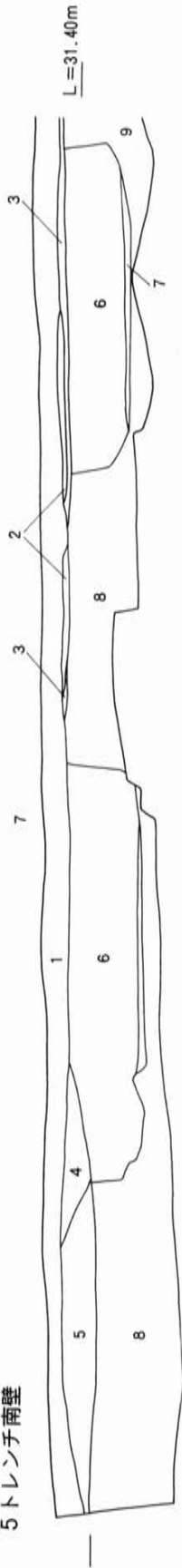
流路跡の最下層である9層の淡茶灰色粘土には植物質が多く含まれていた。この下位の11層黄灰色砂・12層灰白色粘土は、その流路以前の自然流路内堆積層と判断された。7～9層の流路は、北西から南東方向にのびており、その方向から、4・7トレンチの流路跡と同一のものと判断される。また、このトレンチの南端部分には、10層の褐色砂を埋土とする、南側を下る流路の肩部が観察された。

7) 7トレンチ(第88・90図、図版第71-(1)～(3))

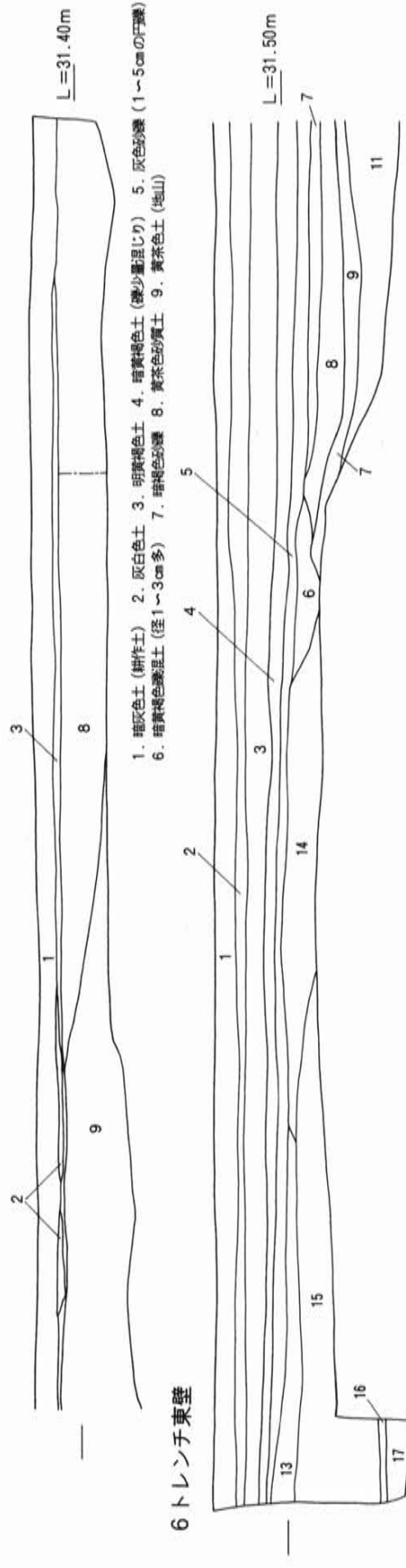
3m×20mのトレンチを東西方向に設定した。西半の土層は、現耕作土(暗灰色土)の下に2層の明黄褐色土、3層の淡灰白色土～淡灰色土が堆積し、その下位に7層の淡灰色礫混土(固い)が薄く堆積している。この層に相当する土層は、他のトレンチでも認められ、おそらく、田畑に土地利用する段階に、地盤改良のために整地したものであろう。7層の淡灰色礫混土の下には、13層の黄色混淡灰色砂質土や14層の淡灰色砂質土～黄色斑混淡灰色砂質土といった、河川内堆積と思われる、やや柔らかい砂質土が堆積している。この14層は、後述の流路跡の埋土の一部となっ



5 トレンチ南壁



6 トレンチ東壁

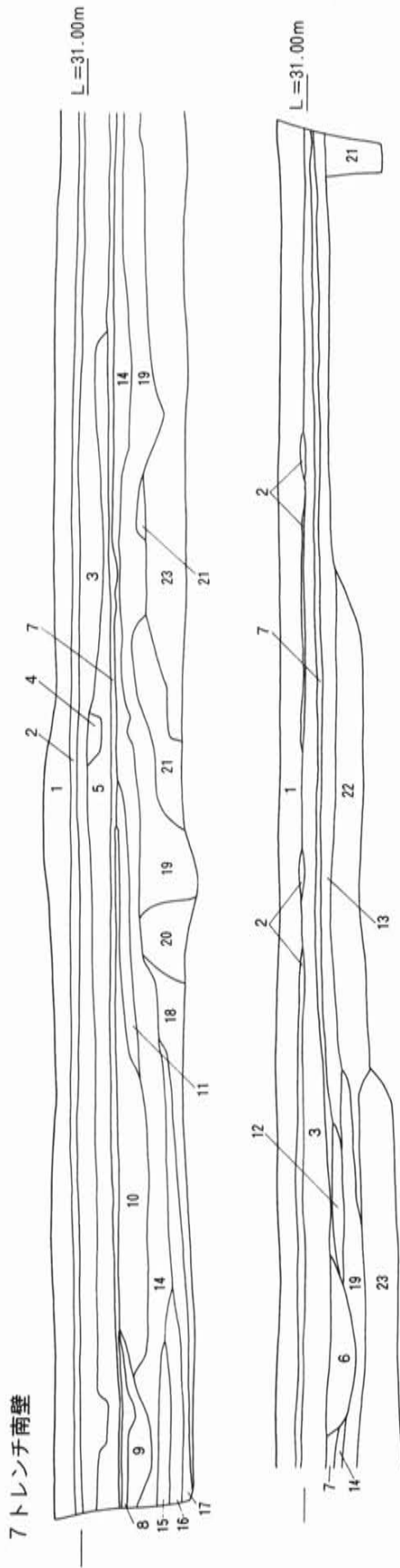


1. 暗灰色土 (耕作土) 2. 灰白色土 3. 明黄褐色土 (少量湿じり) 4. 暗黄褐色土 (少量湿じり) 5. 灰色砂礫 (1~5cmの円礫)  
6. 暗黄褐色凝滞土 (径1~3cm多) 7. 暗褐色砂礫 8. 黄褐色砂質土 9. 黄茶色土 (地山)

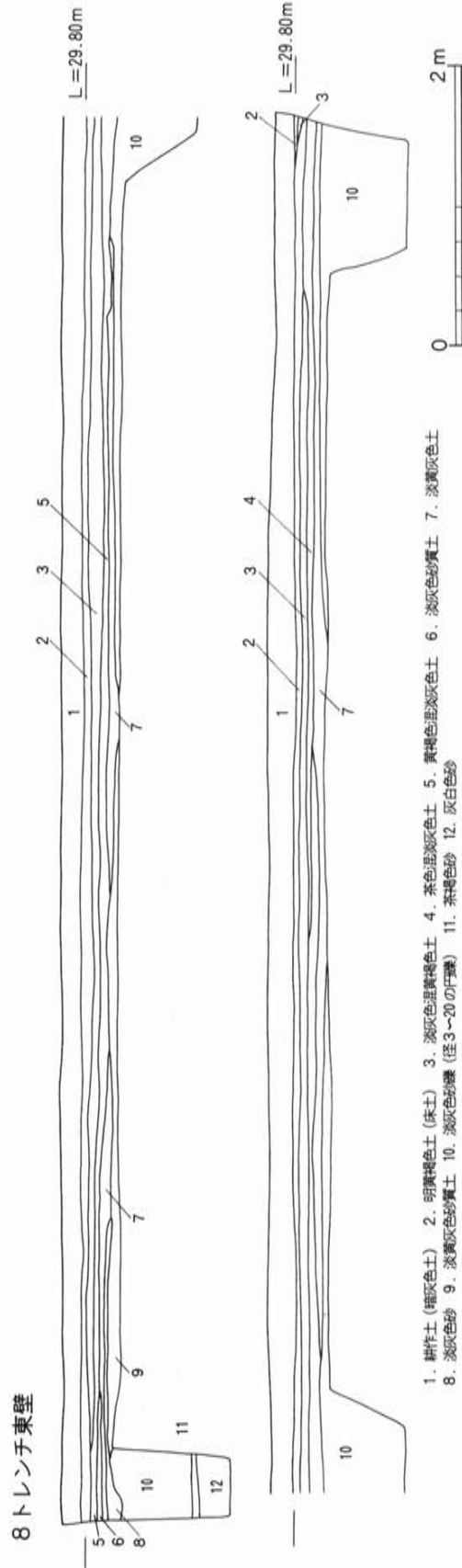
1. 暗灰色土 (耕作土) 2. 明黄褐色土 3. 淡灰色土 4. 淡灰色土 (茶褐色砂混) 5. 淡灰色砂礫 (径5cmの礫、固)  
6. 淡黄灰色粘土 (径10cm程度の礫を含む) 7. 淡黄灰色粘土 (砂混) 8. 淡黄灰色粘土 (植物質含) 9. 淡黄灰色粘土 (植物質含) 10. 褐色砂 (軟・溶跡)  
11. 黄灰色砂 12. 灰白色粘土 13. 明黄褐色砂質土 14. 明黄褐色砂礫 15. 灰色砂礫 (径3~10cm) 16. 灰色砂 17. 白灰色砂



第89図 上内田地区5トレンチ南壁土層図・6トレンチ東壁土層図



1. 耕作土 (暗灰色土)
2. 明黄褐色土
3. 淡灰白色土~淡灰色土
4. 明黄灰色土
5. 淡明灰色土
6. 灰色砂礫 (河跡)
7. 淡灰色礫混土 (固い)
8. 淡灰色土
9. 灰色砂
10. 黄褐色多量淡灰色砂質土
11. 茶褐色少量淡灰色砂質土
12. 黄色班泥淡灰色砂質土
13. 黄色班泥淡灰色砂質土
14. 淡灰色粘質土~黄色班泥淡灰色砂質土
15. 淡灰色砂 (粗い)
16. 淡褐色粘土 (土器、木が多い)
17. 暗灰色粘土 (土器、木が多い)
18. 淡褐色砂
19. 淡灰白色粘質土~淡灰色砂
20. 明黄褐色砂
21. 暗灰色砂
22. 淡灰色~淡褐色砂 (粗砂)
23. 褐色砂 (硬質) ~灰色砂 (粗い)



1. 耕作土 (暗灰色土)
2. 明黄褐色土 (床土)
3. 淡灰色混黄褐色土
4. 茶色混淡灰色土
5. 黄褐色混淡灰色土
6. 淡灰色砂質土
7. 淡黄灰色土
8. 淡灰色砂
9. 淡黄灰色砂質土
10. 淡灰色砂礫 (径3~20の円礫)
11. 茶褐色砂
12. 灰白色砂

第90図 上内田地区7トレンチ南壁土層図・8トレンチ東壁土層図

ている。

トレンチの東半部で、南北方向の流路跡を検出した。流路は東側を下る西肩部を確認しただけで、東肩部はトレンチ内で検出できていない。深さは約50cmである。17層の暗灰色粘土が流路内埋土の最下層で、この土層中に多くの須恵器・土師器、自然木(一部加工あり)が堆積していた(図版第71-(1)~(3))。これらの遺物は、この近辺で廃棄された状況であった。須恵器はTK47型式に属するものである。流路は北西方向にのび、4・6トレンチで検出した流路と同一のものになる可能性がある。

#### 8) 8トレンチ(第88・90図、図版第70-(3))

7トレンチの東南方向に位置し、現地標高で約1.2mの高低差を有した低地に位置する。上内田地区の中で最も低所にあり、現地表の水田の区画や現地表の高低差から、ある時点の小泉川の旧河道であることが窺える。

3m×20mのトレンチを設定し、60㎡の調査を行った。現地表面より約40cmにわたって、耕作土および床土と判断される土層(7層)が堆積しており、その下位で小泉川流路内堆積と判断される淡灰色砂礫を確認した。トレンチの北端・南端・中央部の3か所を断ち割って、遺構面の有無を確認した。約80cmの深さまで掘削したが、淡灰色砂礫(径3~20cmの円礫を含む)が約60cmの厚さで堆積しており、その下位には、茶褐色砂、灰白色砂が堆積していた。総て河川内堆積の砂礫・砂層判断された。淡灰色砂礫層より第100図115の土師器皿が出土した。

#### 9) 小結

3トレンチから5トレンチにあたる調査対象地北側は、試掘調査の結果、段丘上に位置しているものと推測された。出土遺物から、この段丘上に、古墳時代中期末~後期初頭の集落跡が分布しているものと推定される。この集落跡に南接する位置は氾濫原となっており、ある段階にはこの近辺にまで小泉川の本流が流れ込んでいたものと復原できる。また、その本流に向けて、数条の流路が流れ込んでおり、その流路に、土器や廃材を遺棄していたのであろう。

1・2・6・7トレンチでは、旧耕作土下に、固く締まった礫混じりの灰色土が認められ、この層序より下位は、自然流路内の堆積砂礫と判断される層序に大別できる。固く締まった礫混じりの淡灰色土が広範囲に分布すること、この上位では耕作土が安定的に盛り上げられていることから、それ以前の河川氾濫原を田畑として土地利用する時点で、地盤を固めるためになされた整地土と判断される。この層中には瓦器片が混じり、中世以後に、田畑としての土地利用が開始されたものと判断される。

#### (4)尾流・西条地区〔長岡京跡右京第842次(7ANOSJ-1・7AN00R-2)・下海印寺遺跡第21次〕

尾流・西条地区は、長岡京市下海印寺尾流8ほか、西条4ほかの所在し、長岡京跡では、右京七条四坊十四町、西京極大路(旧条坊呼称では右京七条四坊十六町、西京極大路)に所在する。縄文時代を主体とする下海印寺遺跡の範囲内にあり、長岡京の祭祀場として著名な西山田遺跡に隣接する。

西条地区は現在の西条地区の集落がある段丘上に位置しており、現在の道路を挟んで約2mの



第91図 尾流・西条地区トレンチ配置図

崖面下が尾流地区である(第91図、図版第65-(2))。尾流地区は、現在の小泉川に隣接した位置である。

現地調査は、平成16年10月25日～平成17年1月27日までを要した。長岡京跡右京第842次調査、下海印寺遺跡第21次として実施した。

#### ①西条地区

西条地区は小泉川の北西側の微高地に位置しており、「T」字形にトレンチを設定した。東から西に1、2トレンチ、南側に3トレンチとした。1・2トレンチの間には排水側溝があるため、分割して設定した(第91・92図、図版第72-(1))。

##### 1) 1トレンチ(第92図、図版第72-(2))

柱穴状の土坑5基と東側に下る緩傾斜面もしくは流路状遺構を確認した。この緩傾斜面もしくは流路は、西側の平坦面より約25cm低くなっており、内部には暗茶褐色土が堆積している。埋土より古墳時代の須恵器・土師器小片が出土している。この溝もしくは緩傾斜面内には、柱穴は穿たれていない。柱穴状土坑はトレンチの西側で検出したが、調査範囲が狭いため、柱の並びなどについては不明である。柱穴状土坑は一辺50～70cmの隅丸方形から円形を呈しており、深さは25～40cmを測る。半割を行って断面を観察したが、柱当たりは確認できていない。埋土は茶褐色砂混土～茶褐色土である。これらの柱穴内からは、古墳時代の土師器・須恵器小片が出土しており、それらに混じって土坑SK15より第100図112の須恵器杯B片が出土している。

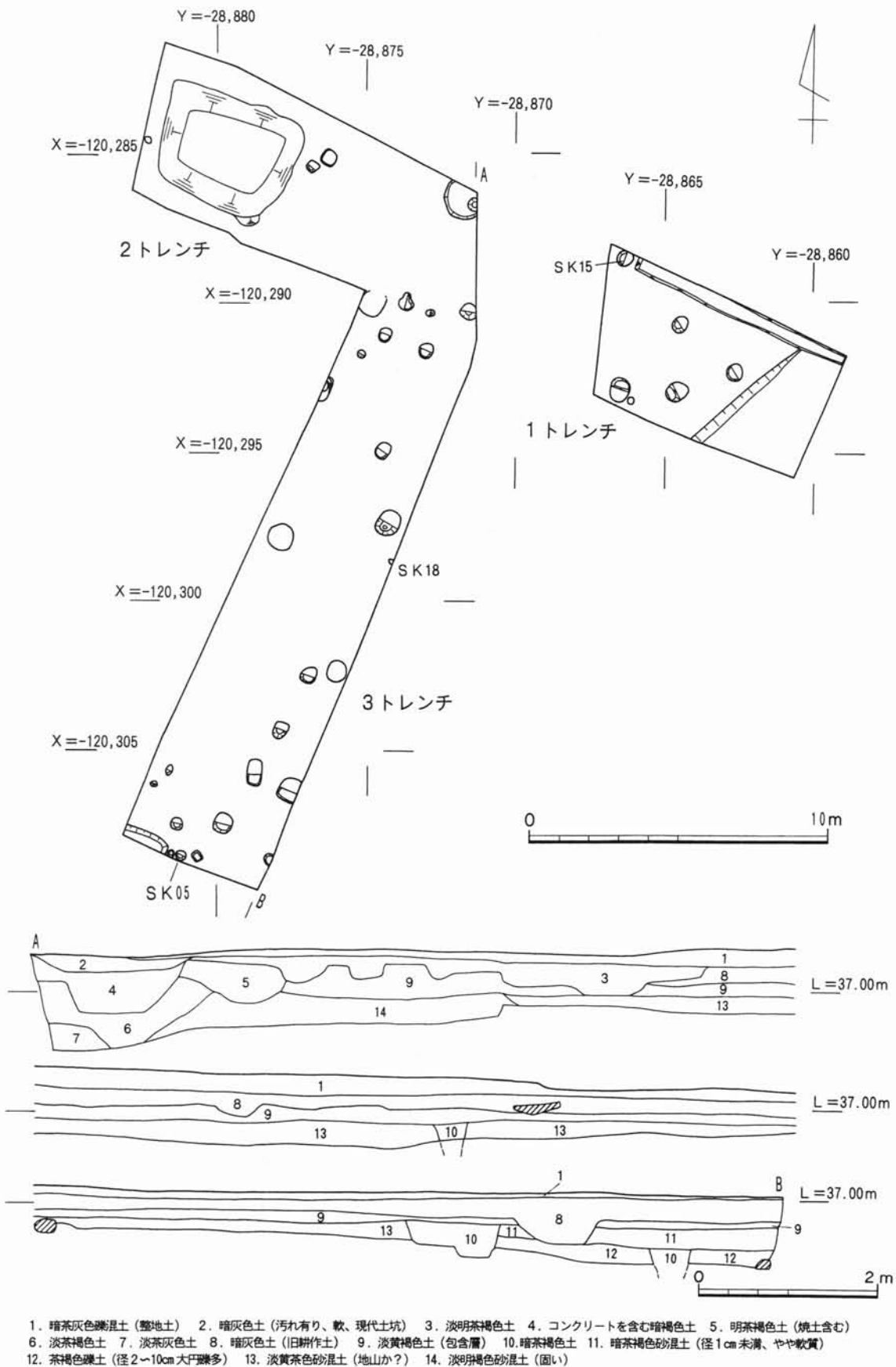
##### 2) 2トレンチ(第92図、図版第72-(2))

西端の一部で重機による断ち割りを行い、下層の層序を確認した。GL-約1.5mで、黄褐色～淡灰色砂礫となり、人頭大の石も含まれていた。遺物の出土もみなかったため、段丘を形成する砂礫層と判断した。そのため、14層の淡明褐色砂混土上で遺構の検出に努めた。北東角で、現代のゴミ坑が調査面にまで達していた(第92図：東壁土層4～7層)。それ以外に、数基の遺構状の土色・土質の違いを確認したが、内部からの遺物の出土はみられず、遺構であるのかどうか、確認できなかった。また、3トレンチの9層に相当する層からの遺物の出土は、3トレンチと比べて、極めて少なかった。

##### 3) 3トレンチ(第92図、図版第72-(3))

表土下7層までが現代の整地土およびゴミ穴であり、8層が旧耕作土となり、以下、攪乱を受けていない層序である。8層の旧耕作土(暗灰色土)の下が9層の淡黄褐色土で、弥生時代～古代の土器を含む包含層である。この下面で、柱穴や土坑などの遺構を検出した。遺構検出面は、南に向かうにつれて、ゆるやかに下り、南端付近の約4mの範囲は地形が急激に下り、その傾斜面に11層の暗茶褐色砂混土と12層の茶褐色礫土が堆積している。両層からは、弥生土器片や古墳時代の土器片が、9層と比べて多く出土する。13層の淡黄茶色砂混土は段丘礫と判断され、この上面で遺構を検出している。現時点では、地山と判断している。最南端では、地表下0.8mで段丘礫となっており、北半と比べて約50cm低くなっている。

遺構は、暗茶褐色土を主体としており、13層上面と12層上面で検出した。北で東に約30°振れ



第92図 西条地区検出遺構平面図・3トレンチ東壁土層図

る方位を有する柱穴列が検出され、掘立柱建物跡と判断される。東側に拡がる様相を示す。柱穴からの遺物の出土は少なく、弥生土器から古墳時代の土師器小片が出土し、それらに混じって、土坑S K05からは中国製白磁片が、土坑S K18からは布目瓦(平瓦)片が出土している。これらの柱穴は、柱の並びは認められない。西条地区の遺構の時期は不明であるが、大きくは、古墳時代の遺構と奈良・平安時代の遺構群が分布しているものと思われる。また、弥生土器片が後述の尾流地区でも多く出土しているので、近辺にこの時期の集落跡が存在している可能性が高い。

## ②尾流地区

尾流地区は現小泉川に面しており、西条地区より道路を隔てて約1～3m低い位置にある。菩提寺橋から西川橋にかけての約140mの間に、4か所の試掘坑を設けて調査を実施した。川上側から1～4のトレンチ名を付した(第91図)。調査面積は、4トレンチを合わせて520㎡である。

### 1) 1トレンチ(第93図、図版第73-(1))

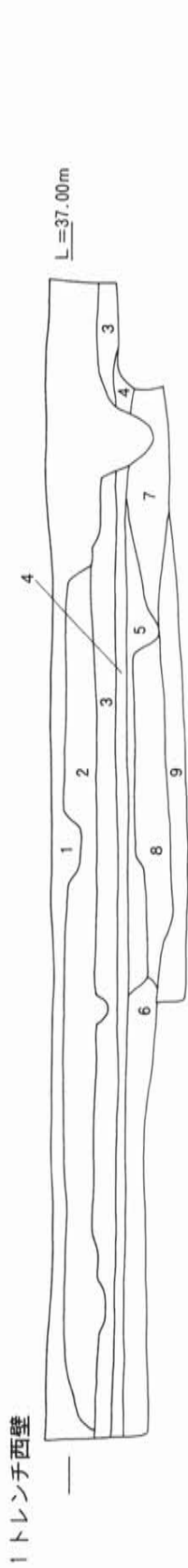
1トレンチは8.5m×9mの方形にトレンチを設定した。現地表下、1・2層が現代の整地土であり、3層が旧耕作土の暗灰色土で、床土として4層の明褐色土、5層の明黄灰色礫混土、6層の黄灰色土混褐色礫が整地されている。地表下約1mまでの深さまで掘削した。これらの層序からは、中世以後現代までの陶磁器類が出土している。この下には、7層の褐色礫混土(礫の径3～5cm)、8層の黄灰色土・シルト、9層の淡茶灰色土・シルトが堆積しているが、層序は不規則で、土質・礫の混じり具合ともに、河川内堆積と判断されるものであった。平面的には、トレンチ中央で、東西方向に筋状の黄灰色土・シルト層(8層)が溝状に堆積しており、この下層の9層とともに、縄文土器と思われる土器細片が含まれる。調査地の北東側の段丘上を中心に分布する下海印寺遺跡から流され、再堆積した土器片と判断される。遺構は全く認められなかった。

### 2) 2トレンチ(第93図、図版第73-(2)・(3))

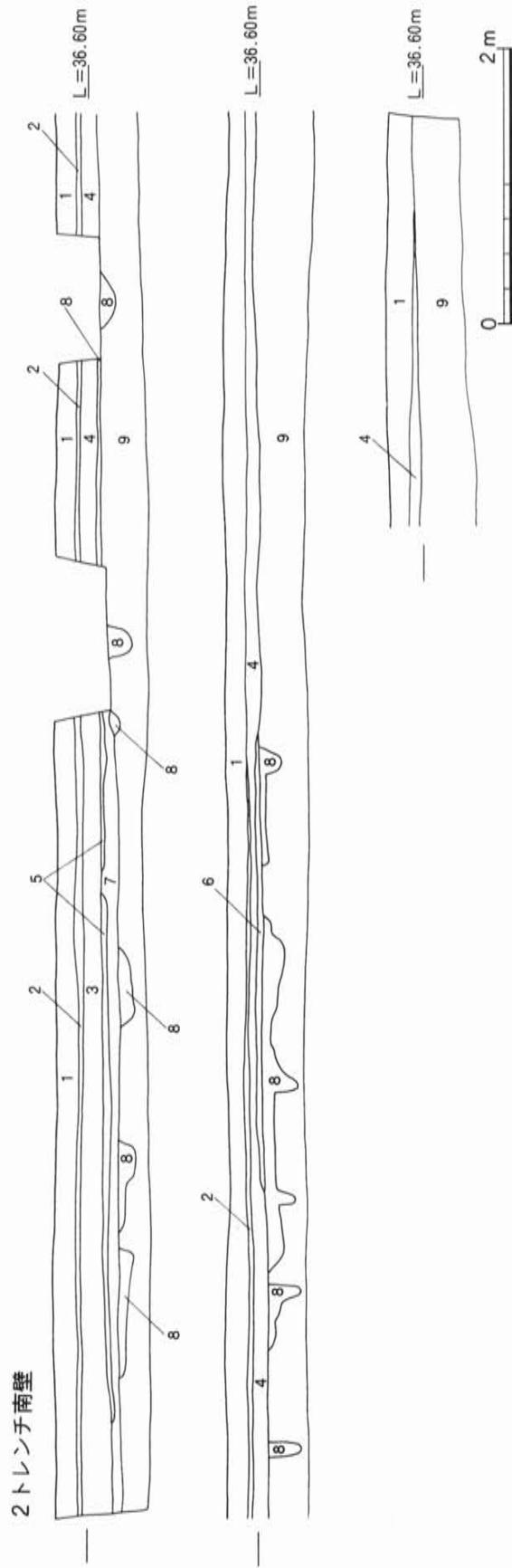
2トレンチでは、27～29.5m×4～4.5mのトレンチを、北西から南東に設定し、重機により、地表下0.7mの掘削を行ったところ、地表下0.25～0.45mで9層の淡明黄灰色土・シルトに、径5cm程度の円礫が不規則に挟まれており、河川内堆積土と判断された。そのため、遺構面は小泉川旧流路により削平を受けているものと判断したが、その後、壁面の清掃中に、耕作土・床土直下で、弥生時代後期～庄内期の甕を含む土坑を確認した(図版73-(3))。壁面の観察により、地表下0.3～0.45cmで、4層の淡明灰色土、7層の淡明灰色土(砂混じり)の下に、8層茶褐色斑混淡灰色土を埋土とする遺構状の落ち込みが拡がっているのを確認した。この茶褐色斑混淡灰色土は一部、包含層状に薄く堆積している。また、これらの遺構と判断される落ち込みのベースとなる淡明黄灰色シルト層は、厚さ40cm以上で堆積しており、この層中に土器細片が混じっていた。1トレンチと同じく縄文土器片と判断されるが、この層中では遺構を確認できなかった。

### 3) 3トレンチ(第94図、図版第74-(1))

5m×15～20mのトレンチを、ほぼ東西方向に設定して、遺構の有無を確認した。2トレンチと同様、当初は、地表下1.5mまで、重機により掘削し、地表下約0.6m付近より下位で茶灰色砂礫土が厚く堆積しているのを確認し、小泉川の旧流路により、遺構面は消失していると判断した。



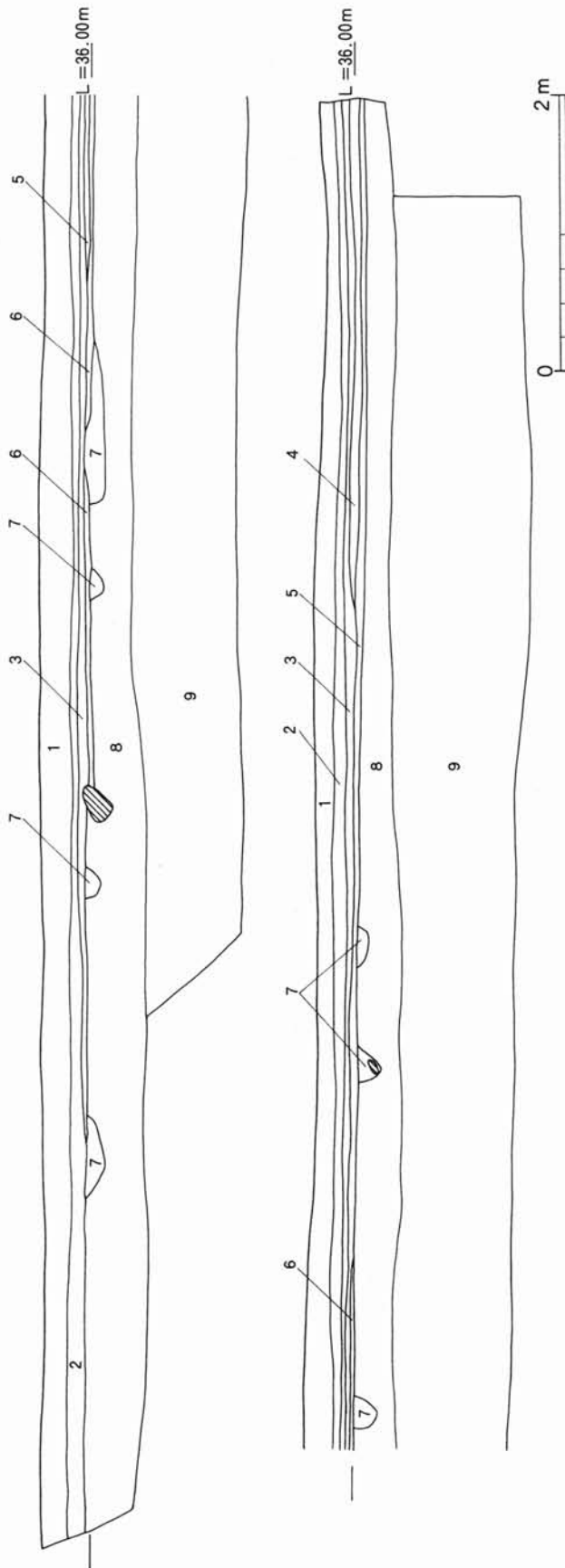
- 1. 暗灰色粘り混土
- 2. 淡茶黄色土
- 3. 暗灰色土(耕作土)
- 4. 明褐色土(床土)
- 5. 明黄灰色礫混土(固い;床土)
- 6. 黄灰色土混褐色礫(床土の一種)
- 7. 褐色礫混土(至3~5cm)
- 8. 黄灰色土・シルト
- 9. 淡茶灰色土・シルト



- 1. 暗灰色土(耕作土)
- 2. 明黄褐色土(床土)
- 3. 淡暗灰色土(旧耕作土)
- 4. 淡明灰色土
- 5. 黄灰色土(旧床土)
- 6. 明黄褐色礫土(旧床土)
- 7. 淡明灰色土(砂混じり)
- 8. 茶褐色泥混淡灰色土(遺構、包含層)
- 9. 深明黄灰色土・シルト(構文土器を包含する)

第93図 尾流地区1トレンチ西壁土層図・2トレンチ南壁土層図





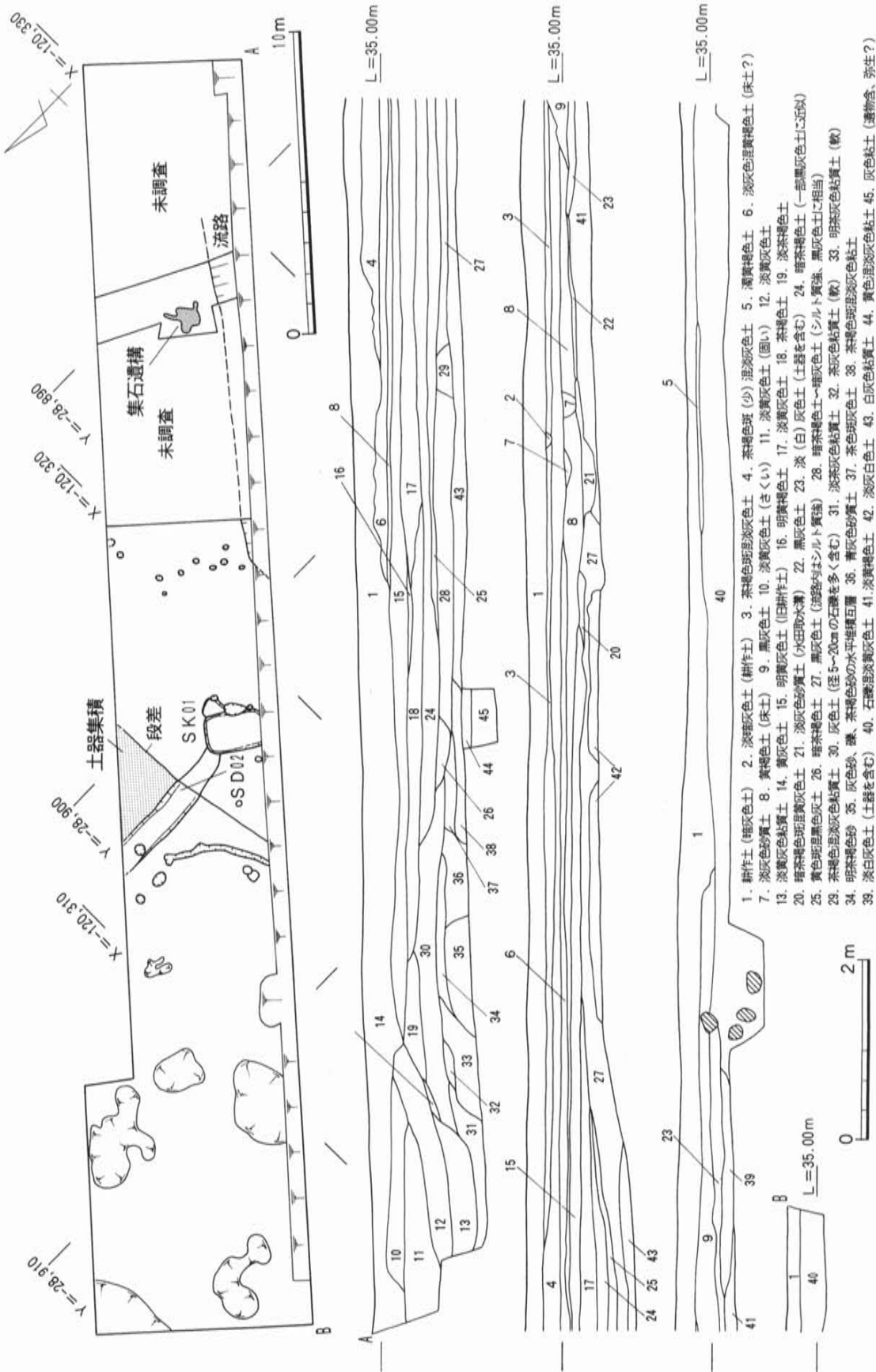
第94図 尾流地区3トレンチ南壁土層図  
 1. 暗灰色(耕作土) 2. 淡灰色斑混褐色土(床土) 3. 淡灰色(旧耕作土) 4. 黄灰色土(床土) 5. 明黄褐色土 6. 茶褐色土  
 7. 茶褐色斑混淡灰色土 8. 茶褐色斑混淡黄灰色土 9. 茶灰色砂礫土(径10~30cm大の円礫多含)

ところが、2トレンチで、床土直下で遺構を確認したので、地表下35cm程度に広がる旧耕作土・旧床土直下を壁面観察したところ、7層の茶褐色斑混淡灰色土が、2トレンチと同様に包含層状に堆積しているのを確認した。遺物の出土をみななかったため、一部を平面的に拡張し、面的に掘り下げて精査したが、遺構は確認できなかった。8層の茶褐色斑混淡黄灰色土は、縄文土器の再堆積層と判断される、1・2トレンチの黄灰色土・シルト層、淡明黄灰色シルト層に対応する層序と思われるが、土器細片の包含は認められなかった。

4) 4トレンチ(第95・96図、図版第74-(2)・(3)、75-(1)~(3))

5m×42mのトレンチを、北西-南東方向に設定した。現地表では、1トレンチから4トレンチに向けて、段々と低くなっており、傾斜面を整えて、田畑を形成しているのがみて取れる。

このトレンチでは、南側3/4にわたって、現耕作土・旧耕作土下で弥生土器・須恵器(古墳時代・古代)を含む包含層を確認した(9層および24層以下)。北西部1/4では、遺構はほとんど検出できなかった。包含層も削平を受けており、田畑の造成時に、



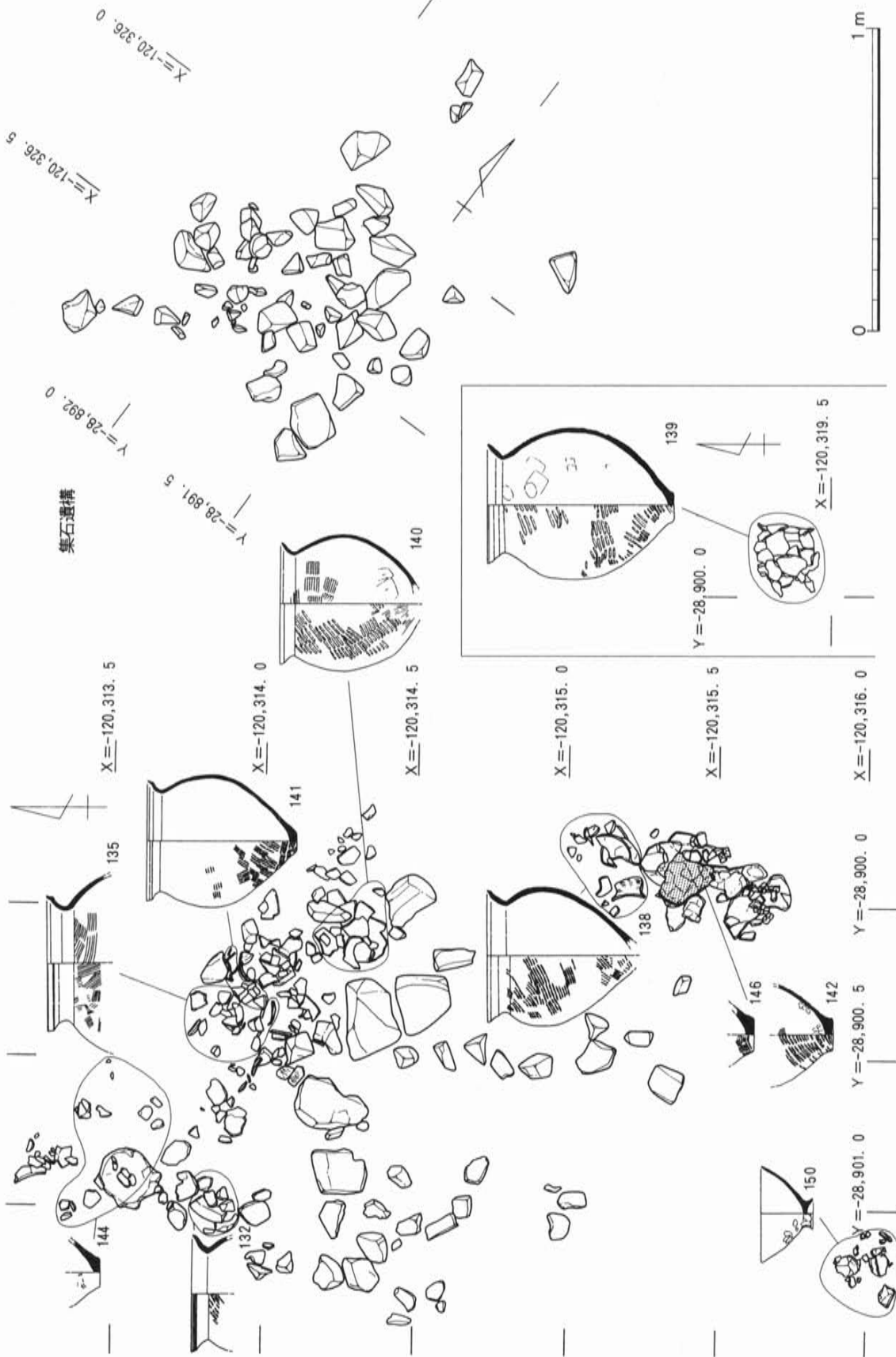
第95図 尾流地区4トレンチ検出遺構平面図・南壁土層図

高いところをカットしたためと思われる。この位置で検出した数基の攪乱土坑の底面が、バック・ホーの爪痕状を呈しているものがあり、近年の造成により、遺構面・包含層が削平された可能性が高い。

座標値  $X = -120,315$  付近に明示してある「段差」は、田畑の造成時に形成されたもので、約 20cm の高低差を有する (3・4・8 層で埋められた斜面)。これらには、中世の土器細片が混じる。便宜上、段差より北側のうち、東側にやや広げて掘削した方形区画を 1 区、その南側を 2 区とした。段差より南側、40 層淡灰白色土上面までの調査を実施し、小ピットを検出したところまでを 3 区、その南側、一部の断ち割りを実施したが、大部分を未調査である範囲を 4 区とした。

検出した遺構には、溝、土坑、小ピット、流路、土器集積および集石遺構がある。土坑 S K 01 は、平面形は隅丸方形を呈し、 $1.3\text{m} \times 1.9\text{m}$  以上で、深さ 15cm である。溝 S D 02 に切り勝つものである。遺物は溝 S D 01 と同様、弥生土器小片と古墳時代須恵器・土師器小片が多く出土している。出土遺物の時期からは、大まかには古墳時代と言える。溝 S D 02 は、ほぼ南北方向に穿たれており、幅 90cm、深さ約 20cm で、検出長 5.1m である (図版第 74-(3))。内部からは、弥生土器小片と古墳時代須恵器・土師器小片が多く出土している。古墳時代の溝と考えられるが、4 トレンチでは古代の土器片や土馬も出土していることと、真北を向いて掘削されている点を重視すると、この溝が長岡京期のものである可能性も捨てきれない。ちなみに、溝心の座標は、 $X = -120,314.0$  のとき、 $Y = -28,902.5$  である。南北溝の東側、段差付近には、多量の弥生土器小片と古墳時代須恵器・土師器小片が出土した。下層には弥生土器が小片に割れながらも比較的まとまって出土していることから、二次堆積ではなく、直接、この場所に廃棄されたことが窺われる (第 96 図、図版第 75-(1)・(2))。南半では、サブトレンチによる土層の確認だけではあるが、流路状の落ち込みとなっており、小泉川の流路跡と判断される (24~38 層)。埋土はシルト~粘質土が主体となっており、砂礫や砂層は少ない。ゆるやかな流れの中で、緩慢に粘土・土が堆積した様相を呈する。23 層の淡(白)灰色土、27 層の黒灰色土からは、弥生~古墳時代の遺物が出土している。流路の全幅を確認できていないので、本来の深さは不明であるが、壁面で確認できた深さは 0.75m を測る。この流路の下位の 45 層の灰色粘土中にも、弥生土器と判断される土器片が混じる。また、トレンチの南端では、それらとは異なる時期、おそらく、現代に近い段階の流路が、土層だけではあるが観察された (11~14 層)。トレンチの中央部分では、径 10~20cm 程度の小ピットを検出した。これらの小ピットは、流路内の埋土として連続している黒灰色土を除去した、42 層の淡灰白色土直上で検出したもので、その性格は不明である。層序の関係から、弥生時代後期~庄内期の所産と判断される。流路の中央部では、北東から南西方向にサブトレンチを入れて、流路の肩を確認したが、ほぼ、試掘トレンチに平行する方向に流れていることが判明した。サブトレンチ内では、集石遺構を検出した (図版第 75-(3))。その広がりの一部を記録しただけで、調査を中断したため、その性格は不明である。

現地表は田畑として利用されているため、ほぼ平坦であったが、調査の結果、北西が高く、南西に向けて傾斜する地形となった。



第96図 尾流地区4トレンチ土器集積平面図・集石遺構平面図

今回の調査は試掘調査であり、遺構の有無およびその大まかな性格を確認しただけである。上述のように、その性格および時期をおおまかに決定し得たため、未調査部分を多く残した上で調査を終了した。本調査時には、それらの性格が明らかになろう。

#### 5) 小結

西条地区の試掘トレンチは現集落内の一角に設定し、各トレンチでは古墳～奈良・平安時代にかけての柱穴群を確認した。現集落は周辺の田畑よりもやや小高い位置にあり、現集落と重なる広い範囲に集落跡が分布しているものと推定される。

尾流地区は現小泉川に近接しており、氾濫原に位置しているため遺構は遺存していないと想定された。試掘調査の結果、4トレンチを中心に、古墳時代および奈良・平安時代の土器片が多量に出土し、土坑・溝・柱穴などの遺構を検出することができた。西条地区との関連でみると、尾流地区の4トレンチ付近には西条地区からのびる丘陵の張り出しがあり、その上に弥生～奈良・平安時代における遺構が分布しているものと判断される。また、1～3トレンチでは、縄文土器片を含む包含層や弥生時代後期～庄内期の土坑などを確認した。このように、下海印寺遺跡の拡がり尾流地区一帯に及んでいることは間違いなく、遺構・遺物が広く分布しているものと判断される。周辺に、弥生集落が包蔵されている可能性が高い。

西条地区から尾流地区の4トレンチにかけては、奈良・平安時代の遺物も出土している。現小泉川の対岸には、長岡京の境界で祭りを執り行っていた西山田遺跡が位置している。長岡京市立第四中学校建設に伴い、(財)長岡京市埋蔵文化財センターが実施した、長岡京跡右京第104次調査地では、多量の土馬やミニチュア竈、墨書人面土器などの祭祀遺物が出土し、長岡京の京終のマツリが執り行われたものと考えられている。西条地区や尾流地区で検出した柱穴や溝、奈良・平安時代の遺物は、長岡京期の祭祀遺跡である西山田遺跡との関連が注目される。

(岩松 保)

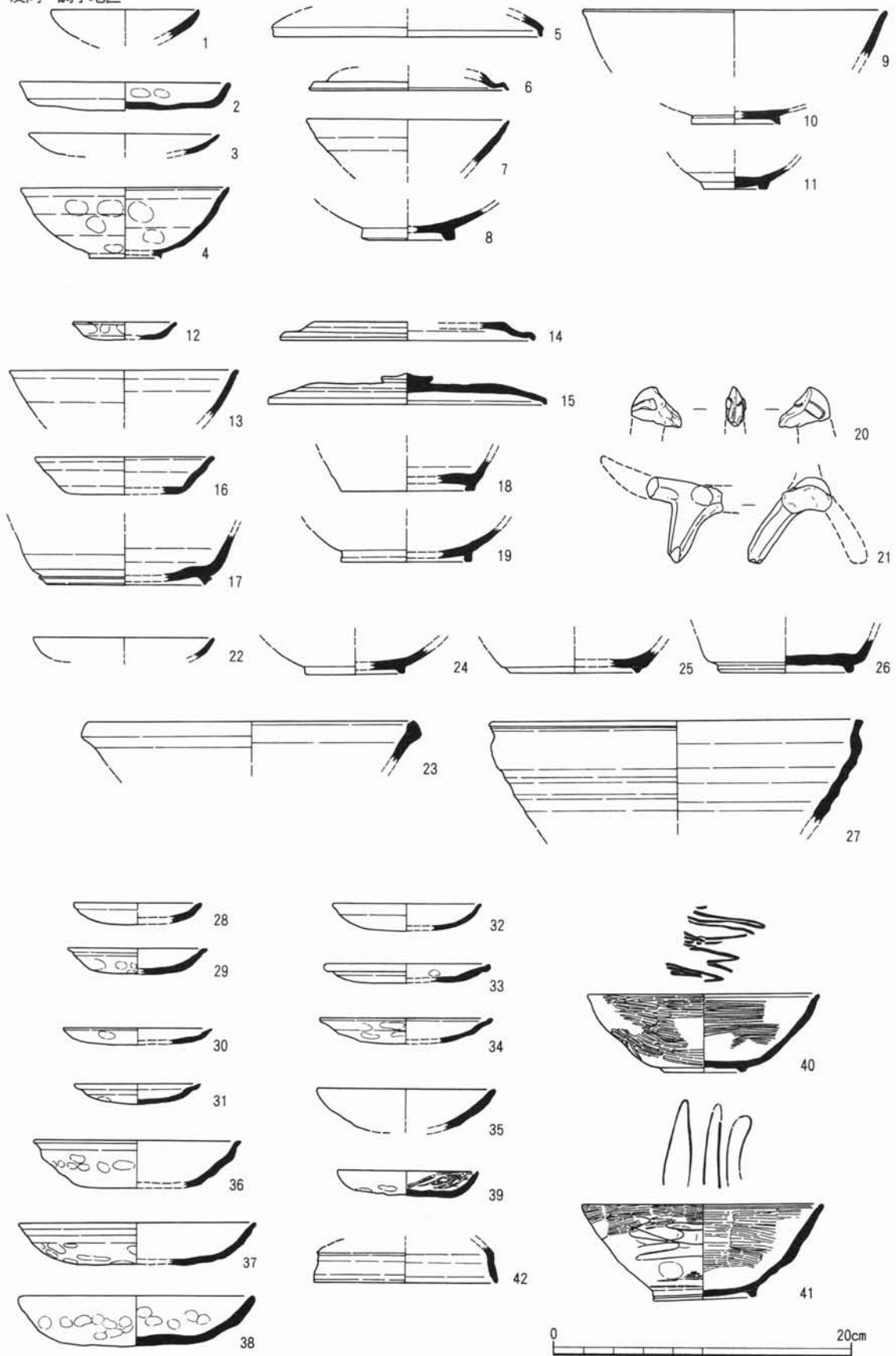
### 3. 出土遺物(第97～101図)

#### (1) 友岡・調子地区出土遺物

1～66は、友岡・調子地区出土の遺物である。1-Aトレンチの流路跡S X07からは、14世紀前葉の土師器皿(2)、瓦器椀(4)がある。4は内外面の僅かに磨きがあり、断面三角形の高台も低く小さいことから、13世紀後葉である。1-Bトレンチ(1～21)の中世の水田、畑地および溝から1～12(2・4を除く)が出土した。器種は土師器(1)、須恵器、緑釉陶器、瓦器、陶磁器などさまざまである。中世下層の茶褐色土では13～21の土器が出土したが、大半が須恵器である。溝S D02から須恵器杯蓋(15)、素掘り溝から須恵器杯身(14)、杯蓋(16)がそれぞれ出土した。20・21は土師質の土馬(大和型)である。

28～52は、11トレンチから出土した遺物である。大溝S D04の堆積土は大きく3層に分かれ、28～42の遺物が出土した。上層は棧瓦、近世陶磁器など、13～14世紀代の土師器皿(28)、口縁部の成形が乱れる瓦器皿(39)、内外面とも磨きが密に施されている瓦器椀(41・43)などがある。下

友岡・調子地区



第97図 出土遺物実測図(1)

層は13世紀代の土師器皿(31・32・36・37)、12～13世紀前葉の瓦器椀(44～46)がある。このほか、下層の下位には須恵器壺(48)、古墳時代の須恵器杯蓋(42)も混在する。溝S D03は上層には土師器皿(38)、須恵器鉢(47)があり、下層には11世紀前半代の土師皿(34)、器壁がやや密に調整された黒色土器椀(40)、底部が残存する緑釉陶器(49・51)がある。

53～66は14トレンチから出土した遺物である。井戸S E01の井筒内から江戸時代末期、明治時代と思われる土師器皿(54・55)、染付椀、曲物(柄杓)などがある。また、滑石製の小ぶりの石鍋(64)、表面黒灰色の瓦質のミニチュア水瓶(65)がある。溝S D01からは杯身(57・59)、壺(60)があり、平安時代の須恵器類小片が多く出土した。土師器甕(63)、灰釉陶器(62)があり、概ね平安時代後期のものである。66は祭祀用の赤褐色の土師質のミニチュア竈の破片である。

(竹井治雄)

#### (2) 岸ノ下地区出土遺物(第98図)

67・68は、岸ノ下地区の出土遺物である。出土遺物は細片のみで、いずれも磨耗を受けており、小泉川によって上流から運ばれた状態であった。

#### (3) 上内田地区出土遺物(第98～100図)

69～110は、上内田地区の調査で出土した土器である。各試掘トレンチから遺物が出土しているが、図化できた遺物は、4トレンチと7トレンチ出土のものがほとんどである。

69・70は1トレンチ、71は2トレンチ、72は3トレンチ、74は6トレンチ、75は8トレンチで出土した。75の土師器皿は、小泉川流路内の淡灰色砂礫層から出土した。径7.1～7.3cmと小さく、近世のものと判断される。

76～90は、4トレンチ出土の土器である。3層の淡黄褐色土中から瓦器・須恵器が出土した。6層の黄褐色礫混土中からは須恵器が、7層の黄色混茶褐色土中からは土師器甕片が出土した。

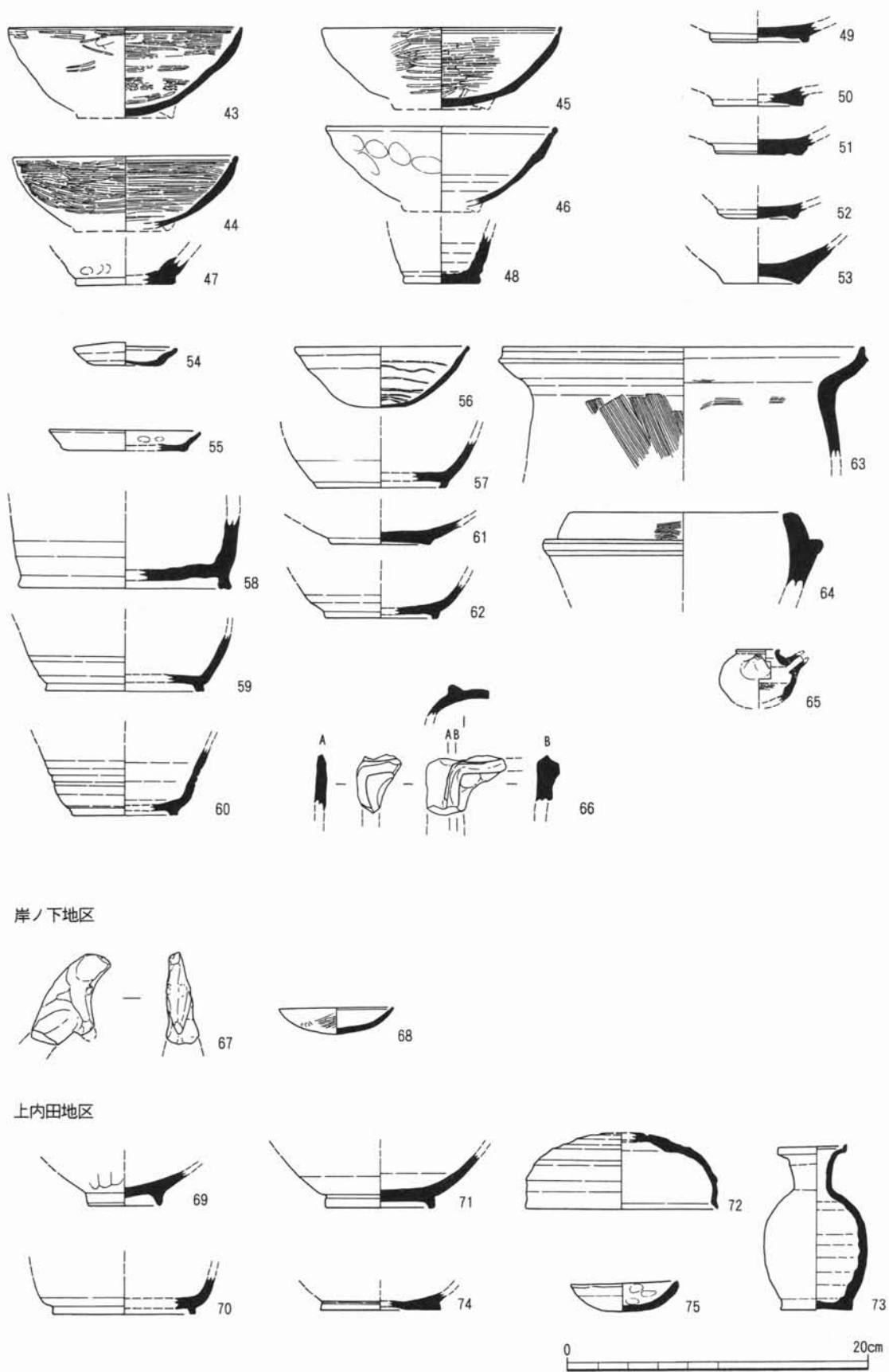
91～110は、7トレンチの出土土器である。このうち、94～110はトレンチ東半で検出した流路の底面近くで出土したものである。これらの土器片は、磨耗を受けていないこと、比較的大きな破片であることから、近辺で廃棄されたものと判断される。3トレンチで検出した竪穴式住居跡状の遺構との関連が注目される。

#### (4) 西条地区出土遺物

111～113は、西条地区の出土遺物である。112は1トレンチで検出した土坑S K15から出土した須恵器杯Bの破片である。111の須恵器杯蓋は排土中から出土したもので、具体的に遺構の時期を示すものではないが、遺構群の時期の一端を示すものであろう。また、包含層中からは、古墳時代の須恵器(113)が出土した。なお、小片であるために図化できなかったが、3トレンチ南端付近を中心に弥生土器片が出土しており、西条地区の近辺に弥生～古墳時代の遺構が分布している可能性がある。

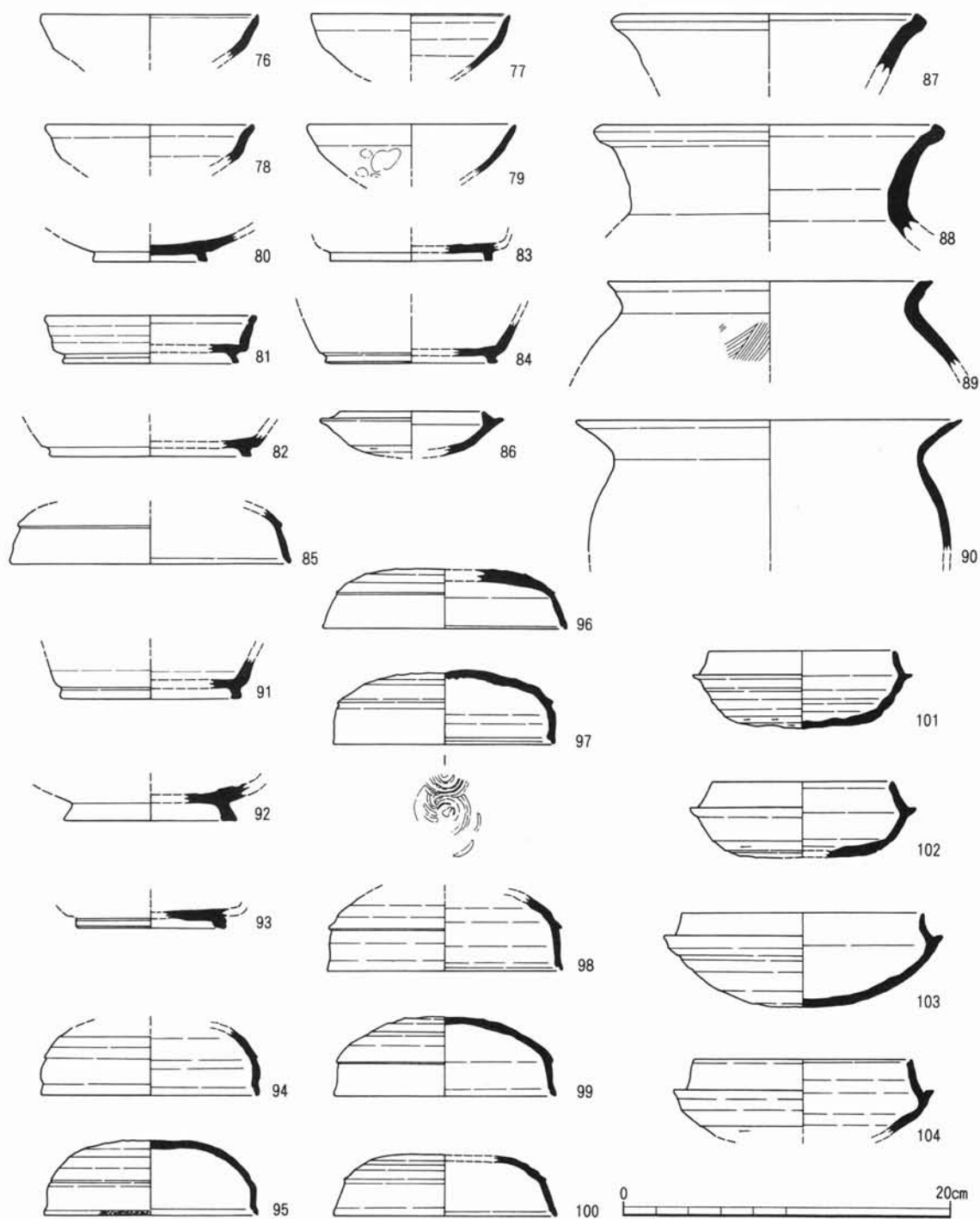
#### (5) 尾流地区出土遺物

114～151は、尾流地区から出土した土器である。114と134のみ2トレンチから出土したもので、ほかは総て4トレンチから出土した。134の緑釉陶器片はトレンチ壁面の清掃中に出土したもの

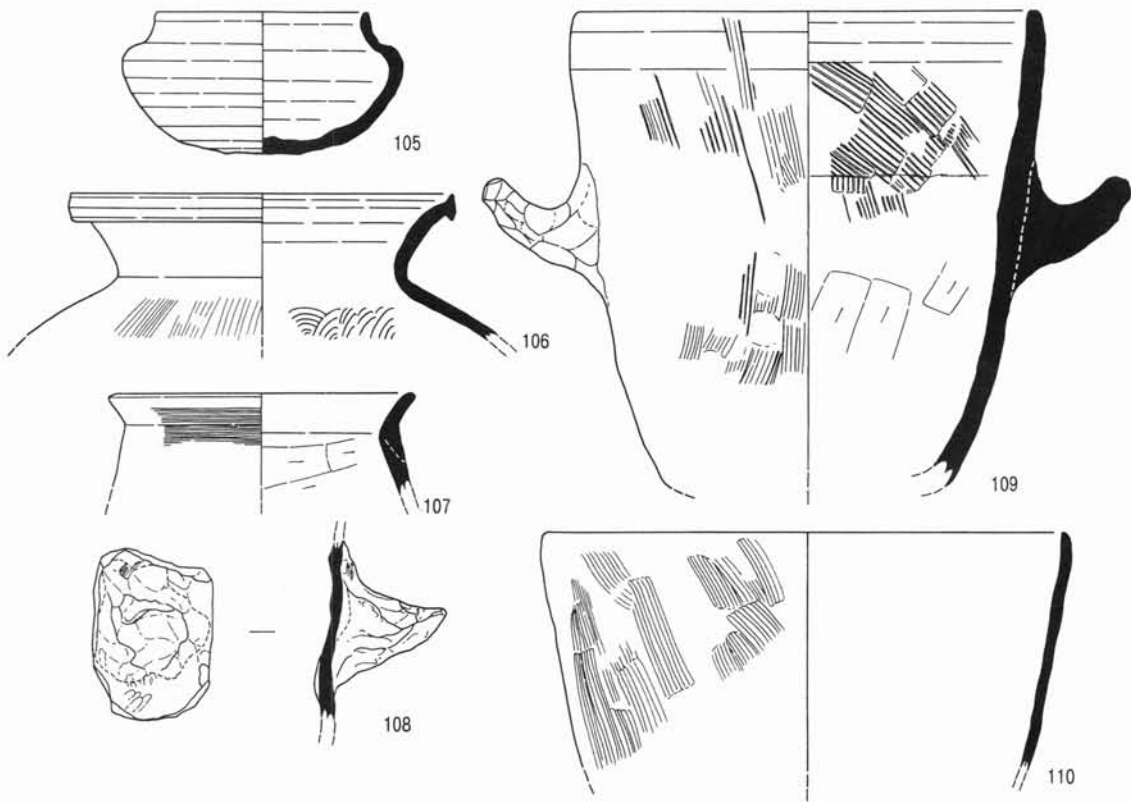


第98図 出土遺物実測図(2)

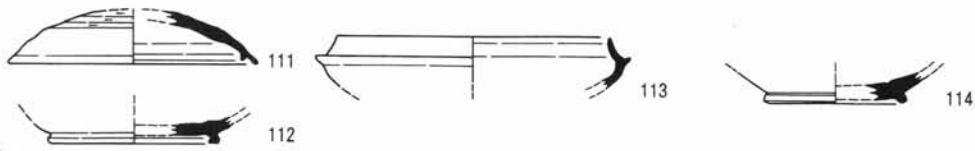




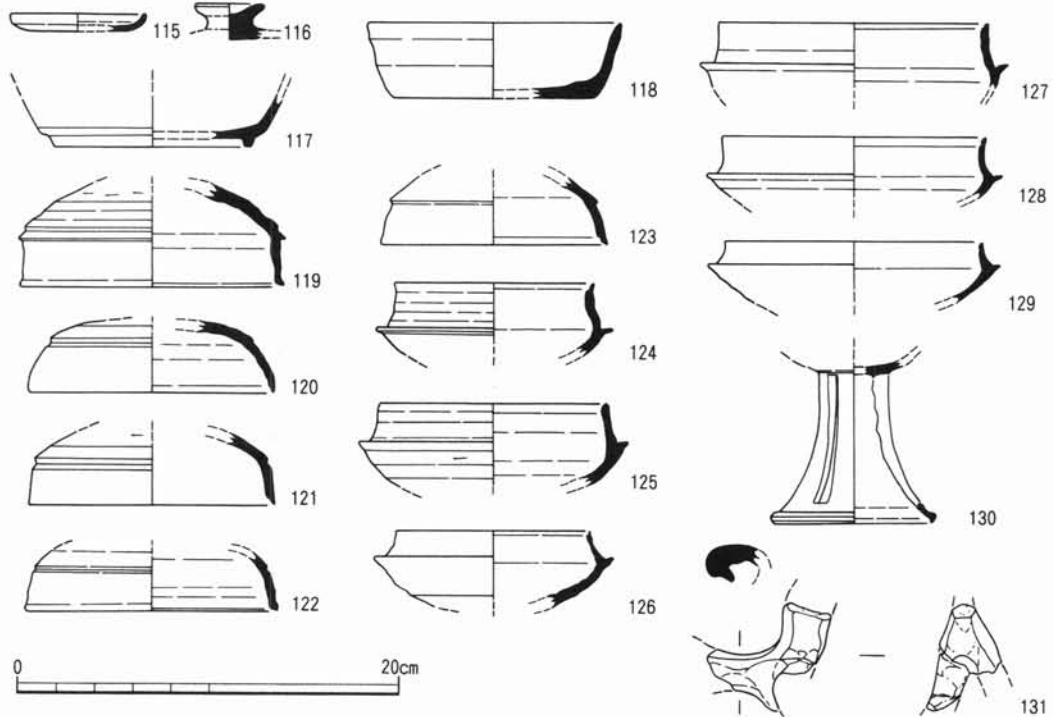
第99図 出土遺物実測図(3)



西条地区

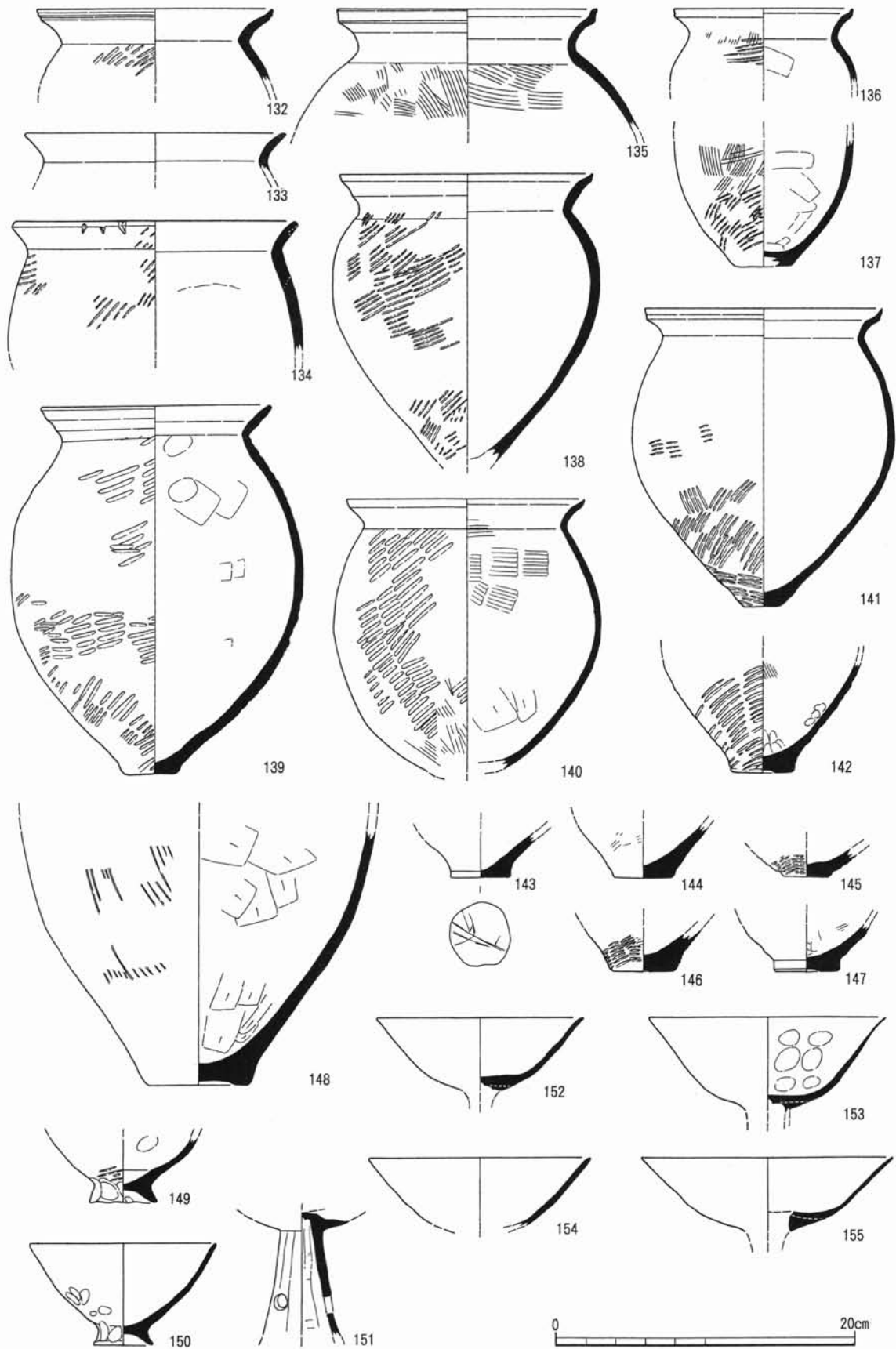


尾流地区



0 20cm

第100図 出土遺物実測図(4)



第101図 出土遺物実測図(5)

で、134の弥生土器甕も西壁を整えている際に出土したものである。特に134の甕は、壁面で確認した土坑およびその中に埋まっている土器と同時期のものと判断されるものである。

119～130は古墳時代の須恵器で、主として、黒灰色土層から出土した。

131は土馬の破片で、3区の淡黄灰色土から出土した。

132・133・135～151は、弥生時代後期～庄内期の土器群で、ほとんどのものが溝S D01東側の土器の集積から出土した(第96図)。包含層である黒灰色土からも弥生土器が出土した。先述のように、2トレンチからは134の甕が出土していることから、西条地区から段丘を隔てた下位に位置する尾流地区には、広く、弥生時代～庄内期の遺構が広く分布しているものと判断される。

#### 4. ま と め

平成16年度は、友岡・調子地区、岸ノ下地区、上山田地区、尾流・西条地区の4地区で試掘調査を実施した。上述のように、友岡・調子地区では、一部のトレンチで遺構を検出し、拡張調査を行ったが、顕著な遺構を確認できなかった。岸ノ下地区は、中世以前には小泉川旧流路およびその氾濫原にあたっており、中世以後に田畑として土地利用が開始されている。その中でも、友岡・調子地区の南端に位置するE地区では、平安時代に遡る溝が確認されており、この周辺に同時代の遺構・遺物が稠密に包蔵されている可能性が示唆される。

上内田地区では、古墳時代の集落跡と流路跡、尾流・西条地区では弥生時代から古代における集落跡が包蔵されていることが確認できた。両地区は、伊賀寺遺跡と下海印寺遺跡の範囲内に位置しており、両地区の周辺には稠密に遺構・遺物が分布していることが判明した。今後、この周辺地域の開発に際しては、より綿密な発掘調査を実施することが必要となろう。

(岩松 保)

注 調査参加者 木村悟・木村涼子・土谷真代・清水梨代・長沼暦・近藤奈央・大島弘子・西村敏子・荒川仁佳子・坪内千津子・松下道子・西村香代子・稲垣あや子・春日満子・石橋横貴・井上聡・川村真由美

付表3 出土遺物観察表

報告番号	器種	器形	調査次数	地区	トレンチ	遺構・層位	胎土	焼成	色調	調整 内面／外面	口径(底径)cm	器高(残存高)cm	口径残存率(底径残存率)	備考
1	土師器	皿	825	A	1-2	茶灰色土	密	良	淡茶褐色	磨耗	9.8	2.0	1/7	反転復原
2	土師器	皿	825	A	1-A	SX07	密	良	橙褐色	指オサエ	14.2	(1.9)	1/3	反転復原
3	瓦器	皿	825	A	1-1		密	良	濃灰色	磨耗	12.6	1.5	1/16	反転復原
4	瓦器	椀	825	A	1-A	SX07	粗	良	淡茶色～黒灰色	指オサエ	14.0	4.7	1/6	反転復原
5	須恵器	蓋	825	A	1-2	茶灰色土	密	良	淡灰色	回転ナデ	17.8	1.5	1/15	反転復原
6	須恵器	蓋	825	A	1-1	茶褐色土	密	良	青灰色、断面；暗青灰色	回転ナデ	13.2	1.25	1/12	反転復原
7	須恵器	鉢	825	A	1-1	荒掘り・壁面	密	良	青白色～青灰色	回転ナデ	13.4	3.2	1/10	反転復原
8	中国製陶磁器	椀	825	A	1-2	断割砂礫内	密	良	白灰色、軸；淡青緑色	回転ナデ、ケズリ	5.3	2.1	1/2	反転復原、施軸
9	緑釉陶器	椀	825	A	1-1	茶褐色土	密	良	淡灰色、軸；淡青緑色	回転ナデ	20.4	3.2	1/24	反転復原、施軸
10	緑釉陶器	皿	825	A	1-2	砂礫内	密	良	淡灰褐色、軸；緑色	回転ナデ	3.0	1.1	1/2	反転復原、施軸、底部貼り付け
11	中国製陶磁器	椀	825	A	1-1	淡茶灰色粘質土	密	良	白灰色、軸；淡緑色	底部；ケズリ	4.2	1.9	1/3	反転復原・施軸
12	土師器	皿	825	A	1-B	SX10	密	良	黄褐色	指オサエ	3.5	1.2	1/4	反転復原
13	灰釉陶器	椀	825	A	1-B北半部	暗褐色土礫上面	密	良	茶灰色、軸；茶緑	回転ナデ	15.4	(3.3)	1/9	反転復原
14	須恵器	杯蓋	825	A	1-B	SD11	密	良	青灰色	回転ナデ	17.0	(1.25)	1/6	反転復原
15	須恵器	蓋	825	A	1-B	SD02	密	良	青灰色	回転ナデ	基部径18.6	2.1	1/3	
16	須恵器	杯	825	A	1-B	SD12	密	良	灰色	回転ナデ	12	(2.5)	1/6	反転復原
17	須恵器	壺	825	A	1-B北半部	暗褐色土礫上面	密	良	黄灰色	回転ナデ	(10.6)	(3.5)	(1/6)	反転復原
18	須恵器	杯	825	A	1-B北半部	暗褐色土礫上面	密	良	青灰色	回転ナデ	(8.8)	(2.3)	(1/4)	反転復原
19	無釉陶器	椀	825	A	1-B	SX10	密	良	灰色	回転ナデ、高台ケズリ出し	(4.2)	2.3	1/4	反転復原
20	土製品	土馬	825	A	1-B	南東角	密	良	茶褐色	指オサエ		2.6		体部との接合面径2.5cm
21	土製品	土馬	825	A	1-B	SD12	密	良	茶褐色	指オサエ		5.6		
22	土師器	皿	825	D	8	淡灰色砂質土	密	良	茶褐色	磨耗	12	1.5	1/14	反転復原
23	無釉陶器	椀	825	E	10	礫上面	密	良	淡青灰色	回転ナデ	6.5	1.8	1/4	反転復原
24	須恵器	杯B	825	E	13	SD02黄褐色土	密	良	青灰色	回転ナデ	8.6	1.7	1/6	反転復原
25	須恵器	杯B	825	E	13	SD02黄褐色土	密	良	淡灰色	回転ナデ・ケズリ	8.8	2.5	1/6	反転復原
26	須恵器	鉢	825	E	13	褐色砂礫	密	良	灰茶褐色	回転ナデ	26.8	7.5	1/11	反転復原
27	須恵器	ねり鉢	825	D	8	淡茶灰色土	密	良	灰色	ナデ	21.8	2.8	1/12	反転復原
28	土師器	皿	825	E	11	大溝暗灰色泥土	密	良	茶褐色	指オサエ、ナデ	8.5	1.4	1/6	反転復原
29	土師器	皿	825	E	11	大溝下層	密	良	黄褐色	指オサエ、ナデ	4.7	1.7	1/4	反転復原
30	土師器	皿	825	E	11	壁面清掃	密	良	淡褐色	指オサエ、ナデ	5.0	1.1	1/8	反転復原
31	土師器	皿	825	E	11	大溝下層	密	良	黄褐色	指オサエ、ナデ	4.3	1.3	1/4	反転復原
32	土師器	皿	825	E	11	大溝暗灰色泥土	密	良	淡黄茶色～淡橙茶色	磨耗	9.8	1.8	1/6	反転復原
33	土師器	皿	825	E	11	大溝北側	密	良	薄茶色	指オサエ、ナデ	11.2	(1.25)	1/6	反転復原
34	土師器	皿	825	E	11	SD03下層断割	密	良	黄褐色	指オサエ、ナデ	11.6	1.7	1/8	内面煤付着
35	土師器	皿	825	E	11	大溝暗灰色泥土	密	良	淡茶褐色	磨耗	11.8	2.9	1/9	反転復原
36	土師器	杯	825	E	11	大溝下層	密	良	灰褐色	指オサエ、ナデ	7.0	3.2	1/5	反転復原

京都第二外環状道路関係遺跡平成16年度発掘調査概要

37	土師器	皿	825	E	11	大溝下層	密	良	淡褐色	指オサエ、ナデ	8.0	2.8	1/4	反転復原
38	土師器	皿	825	E	11	SD03黄灰色粘質土	密	良	淡茶褐色	磨耗、指オサエ	15.8	3.5	100	
39	瓦器	皿	825	E	11	大溝南側上層	密	良	黒褐色	指オサエ、ナデ	9.6	1.6	1/2	暗文
40	黒色土器	椀	825	E	11	SD03淡青灰色粘質土	密	良	黒灰色	指オサエ、ミガキ	15.6	5.1	1/2	反転復原、暗文
41	瓦器	椀	825	E	11	大溝下層	密	良	黒灰色	指オサエ、ミガキ	16.2	6.3~6.5	3/4	暗文
42	須恵器	杯蓋	825	E	11	大溝暗灰色泥土	密	良	薄灰色	回転ナデ	12.3	2.5	1/13	反転復原
43	瓦器	椀	825	E	11	大溝南側上層	密	良	黒灰色	指オサエ、ミガキ	7.8	5.9	5/6	貼付高台
44	瓦器	椀	825	E	11	大溝暗灰色泥土	密	良	黒灰色、断面；淡白茶色	指オサエ、ミガキ	15.0	4.8	1/2	
45	瓦器	椀	825	E	11	大溝下層	密	良	黒色	指オサエ、ミガキ	8.0	5.1	1/12	反転復原、貼付高台
46	瓦器	椀	825	E	11	大溝下層	密	良	黒褐色、断面；黄褐色	指オサエ、ミガキ、内外共磨耗	7.7	5.2	1/4	反転復原、貼付高台
47	須恵器	鉢	825	E	11	SD03	密	良	紫灰色	指オサエ、回転ナデ、糸切り痕	(3.3)	1.7	1/6	反転復原
48	須恵器	壺	825	E	11	重機	密	良	青灰色	回転ナデ、糸切り痕	5.2	3.4	1/2	反転復原
49	土師器	椀	825	E	11	SD03淡青灰色粘質土	密	やや軟	淡白褐色	磨耗	3.4	1.4	100	
50	緑釉	椀	825	E	11	重機	密	良	淡白茶色	回転ナデ、ケズリ	6.2	1.3	1/4	
51	無釉陶器	椀	825	E	11	SD03黄灰色粘質土	密	良	淡白灰色	回転ナデ、糸切り痕	5.7	1.5	100	
52	青白磁	椀	825	E	11	重機	密	良	淡灰色	ケズリ、回転ナデ	5.1	1.2	1/4	施釉
53	弥生土器	壺	825	E	11	大溝黄褐色砂礫	やや粗	やや軟	灰色	磨耗	5.4	2.7	100	
54	土師器	皿	825	E	14	SE01井戸側	密	良	淡茶色	指ナデ	6.8	1.2~1.5	ほぼ100	口縁ゆがみ
55	土師器	皿	825	E	14	SE01	密	良	淡褐色	指オサエ	10.0	1.4	1/6	反転復原
56	瓦器	椀	825	E	14	砂礫	密	良	暗灰色	指オサエ、ミガキ	11.4	4	全体残存率5/6	
57	須恵器	杯	825	E	14	SD01	密	軟	白灰色	回転ナデ	(8.6)	(3.3)	(1/4)	反転復原
58	須恵器	壺	825	E	14	SX20	粗	良	灰色	回転ナデ、板ナデ	7.6	4.8	約1/4	反転復原
59	須恵器	杯	825	E	14	SD01	密	良	明灰色	回転ナデ	5.3	3.9	1/4	反転復原
60	須恵器	壺	825	E	14	SD01	密	良	灰色	回転ナデ	(7)	5.5	1/6	反転復原
61	無釉陶器	椀	825	E	14	SX20	密	良	淡灰色	回転ナデ	5.3(3.3)	1.8	底部1/3	反転復原
62	灰釉陶器	椀	825	E	14	SD01	密	良	淡灰色、釉；淡茶緑色	回転ナデ	(7.4)	(2.5)	(1/4)	反転復原
63	土師器	甕	825	E	14	SD01	粗	良	茶褐色	ナデ、ハケメ	14.0	(7.3)	1/8	反転復原
64	石鍋製器	鍋	825	E	14	SE01	滑石		黒灰色	平滑に研磨／ケズリ痕	体部径18.6	(4.8)	1/8	反転復原
65	瓦器	水瓶	825	E	14	SE01井筒内	密	良	淡灰色～黒灰色	指オサエ、ナデ	2.8	(3.6)	1/2	
66	土製器	ミニチュア電	825	E	14	SD02	密	良	褐色	指オサエ、磨耗				粘土貼り付け
67	土製品	土馬	840	岸ノ下	2	第4区第3層	密	良	にぶい橙色	ナデ				
68	土師器	皿	840	岸ノ下	2	第1区第1遺構溝面上面	密	良	黄橙色～浅黄橙色	ハケ	7.6	(1.7)	1/4	反転復原
69	青磁器	椀	841	上内田	1	淡茶灰色土	密	良	素地；白灰色、釉；淡青緑色	ケズリ出し	4.7	2.35	1/2	反転復原 龍泉窯・連弁
70	須恵器	杯	841	上内田	1	礫混じりの淡灰色土	やや密	やや軟	淡灰色～淡青灰色	回転ナデ	9.5	2.7	1/5	反転復原
71	無釉陶器	椀	841	上内田	2	中央淡灰色砂礫	密	良	淡灰色	回転ナデ	(7.2)	(3.8)	1/4	反転復原

72	須恵器	杯蓋	841	上内田	3	淡黄灰色土、 淡灰色土	密	良	淡灰色～灰色	回転ナデ	12.65	3.25	1/6	反転復原
73	須恵器	壺	841	上内田	5		密	良	白灰色	回転ナデ	4.6	11.0	3/4	口径・器高 共に歪み
74	無軸陶器	椀	841	上内田	6	淡灰色砂礫混 土	密	良	灰白色	回転ナデ	(8.6)	(1.2)	底部1/4	反転復原
75	土師器	皿	841	上内田	8	北側断割・河 川堆積・図に 指示あり	密	良	淡褐色	指オサエ	7.1～ 7.3(歪み 有り)	2.2	ほぼ完形	口縁部ス ス付着、内面 有機物の残 留付着
76	瓦器	椀	841	上内田	4	淡黄灰色土	密	良	濃灰色	指オサエ	13.3	2.7	1/8	反転復原
77	瓦器	椀	841	上内田	4	淡黄灰色土	密	良	淡灰色～黒灰 色	指オサエ、ミ ガキ	12.2	(3.5)	1/6	反転復原 口縁内部沈 線
78	瓦器	椀	841	上内田	4	淡黄灰色土	密	良	濃灰色	指オサエ	12.7	2.5	1/10	反転復原
79	瓦器	椀	841	上内田	4	淡黄灰色土	密	良	淡茶白色～灰 白色	指オサエ、ミ ガキ	12.7	3.2	1/10	反転復原
80	無軸陶器	椀	841	上内田	4	淡黄灰色土	密	良	青灰色	回転ナデ	6.9	1.75	1/3	反転復原
81	須恵器	杯	841	上内田	4	排土中	密	良	淡灰色	回転ナデ	13.0	(2.9)	1/6	反転復原
82	須恵器	杯	841	上内田	4	淡黄灰色土	密	良	淡青灰色	回転ナデ	12.2	1.45	約1/12	反転復原
83	須恵器	杯	841	上内田	4	淡黄灰色土	密	良	淡灰色	回転ナデ	9.8	1.1	約1/8	反転復原
84	須恵器	杯	841	上内田	4	淡黄灰色土	密	良	淡青灰色	回転ナデ	10.2	2.75	約1/4	反転復原
85	須恵器	杯蓋	841	上内田	4	淡黄灰色土	密	良	淡青灰色	回転ナデ	16.9	3.5	1/20	反転復原
86	須恵器	杯身	841	上内田	4	黄褐色礫混 土	密	良	淡灰色	回転ナデ、ケ ズリ	8.7	2.8	1/4	反転復原
87	須恵器	甕	841	上内田	4	淡黄灰色土	密	良	淡灰色	回転ナデ	18.0	4.1	1/11	反転復原
88	須恵器	甕	841	上内田	4	淡黄灰色土	密	良	青灰色	回転ナデ	20.4	7.0	1/8	反転復原
89	土師器	甕	841	上内田	4	黄褐色礫混 土	密	良	茶褐色～黄茶 褐色	ハケメ	16.4	(4.5)	1/12	反転復原
90	土師器	甕	841	上内田	4	黄色混茶褐色 土	やや粗	良	浅黄橙	回転ナデ、タ タキ、磨耗	23.8	(7.9)	1/8	反転復原
91	須恵器	杯	841	上内田	7	淡灰色礫土	密	良	淡灰色	回転ナデ	11.0	(2.5)	1/8	反転復原
92	須恵器	鉢	841	上内田	7	淡灰色土	密	良	灰白色～灰色	回転ナデ	(10.6)	(2.2)	1/4	反転復原
93	無軸陶器	椀	841	上内田	7	淡黄灰色土	密	良	灰色	回転ナデ	8.8	1.2	1/4	反転復原
94	須恵器	杯蓋	841	上内田	7	流路内	密	良	青灰色	回転ナデ、ヘ ラケズリ	13.2	4.0	1/2	反転復原
95	須恵器	杯蓋	841	上内田	7	流路内	やや粗	良	淡灰色～青灰 色	回転ナデ、ヘ ラケズリ	14.1	3.1	1/14	反転復原 、口縁部刻 目状圧痕
96	須恵器	杯蓋	841	上内田	7	流路内	密 砂 混	良	青灰色	回転ナデ、ヘ ラケズリ	15.0	3.6	1/12	反転復原
97	須恵器	杯蓋	841	上内田	7	流路内	密 小 石混	良	茶灰色～青灰 色	回転ナデ、ヘ ラケズリ、天 井部タタキ縮 め痕	13.6	4.6	5/6	
98	須恵器	杯蓋	841	上内田	7	流路内	密	良	青灰色	回転ナデ、ヘ ラケズリ	14.4	(4.7)	1/8	反転復原
99	須恵器	杯蓋	841	上内田	7	7南辺断 割 淡灰色礫・褐 色斑混・淡灰 色土	密	良	青灰色	回転ナデ、ヘ ラケズリ	13.5	4.7	1/2	
100	須恵器	杯蓋	841	上内田	7	流路内	密	良	青灰色	回転ナデ、ヘ ラケズリ	13.6	3.7	1/10	反転復原
101	須恵器	杯身	841	上内田	7	流路内	密	良	灰色～茶灰色	回転ナデ、ヘ ラケズリ	11.4	4.8	3/8	反転復原
102	須恵器	杯身	841	上内田	7	流路内	密	良	淡灰色	回転ナデ、ヘ ラケズリ	11.0	4.6	1/2	反転復原
103	須恵器	杯身	841	上内田	7	流路内	密	良	淡茶灰色	回転ナデ、ヘ ラケズリ	17.2	5.8	9/10	
104	須恵器	杯身	841	上内田	7	流路内	密	良	青灰色	回転ナデ、ヘ ラケズリ	13.4	(4.6)	1/6	反転復原
105	須恵器	無頸壺	841	上内田	7	流路内	密	良	紫灰色～淡灰 色	回転ナデ、ヘ ラケズリ	11	7.4	1/4	反転復原
106	須恵器	甕	841	上内田	7	流路内	密	良	淡灰色	回転ナデ、タ タキ、ハケメ	20.2	(7.8)	口縁部完 形	
107	土師器	甕	841	上内田	7	流路内	やや粗	やや軟	暗黄茶色	回転ナデ、ケ ズリ、ハケメ	15.5	5.3	1/6	反転復原、 スス付着

京都第二外環状道路関係遺跡平成16年度発掘調査概要

108	土師器	瓶	841	上内田	7	流路内	密	良	浅黄橙色	指オサエ、ハケメ				
109	土師器	瓶	841	上内田	7	流路内	密	良	淡褐色～橙褐色	回転ナデ、ハケメ、イタナデ	20.0	(20.4)	1/6	反転復原
110	土師器	瓶	841	上内田	7	流路内	密	良	浅黄橙色	ハケメ、摩滅	23.0	(10.2)	1/4	反転復原
111	須恵器	杯蓋	842	西条	排土中		密	良	淡灰褐色	回転ナデ、ケズリ	13.2	(2.7)	1/6	
112	無釉陶器	椀	842	西条	1	SK15	密	良	灰色	回転ナデ、ケズリ	8.8	1.4	3/8	反転復原
113	須恵器	杯身	842	西条	3	淡黄灰色土	密	良	灰色～暗灰色	回転ナデ	14.4	2.75	1/6	反転復原
114	緑釉陶器	椀	842	尾流	2	西壁	密	良	淡青灰色、軸；深緑色	回転ナデ	6.95	1.7	1/4	反転復原
115	土師器	皿	842	尾流	4 2区	黒灰色土	密	良	橙褐色	ナデ	7.2	0.9	1/6	反転復原
116	須恵器	蓋	842	尾流	4 2区	黒灰色土	密	良	青灰色	回転ナデ	ツمام径3.7	(1.9)		ツمام部完形
117	須恵器	杯	842	尾流	4 4区 断割	暗灰色	密	良	青灰色、断面；青白灰色	回転ナデ	10.3	2.8	1/6	反転復原
118	須恵器	杯	842	尾流	4 3・4区北半	黒灰色礫土	密	良	灰色～淡灰色	回転ナデ	13.4	3.4	1/12	
119	須恵器	杯蓋	842	尾流	4 2区 南半	黒灰色土	密	良	淡灰色	回転ナデ、ケズリ	13.8	5.5	1/4	反転復原、一部に軸付着
120	須恵器	杯蓋	842	尾流	4 2区 北半	黒灰色土	密	良	淡灰色～青灰色	回転ナデ、ケズリ	基部径13.0	(3.7)	1/12	反転復原
121	須恵器	杯蓋	842	尾流	4 2区	黒灰色土	密	良	青灰色	回転ナデ、ケズリ	12.9	3.8	1/10	反転復原
122	須恵器	杯蓋	842	尾流	4 2区	黒灰色土	密	良	淡灰色～濃灰色	回転ナデ	13.4	(3.3)	1/4	反転復原
123	須恵器	杯蓋	842	尾流	4 2区 南半	黒灰色土	密	良	青灰色	回転ナデ	基部径12.0	(3.6)	基部径1/8	反転復原
124	須恵器	杯身	842	尾流	4 2区 南半	黒灰色土	密	良	淡灰色～青灰色	回転ナデ	10.6	(3.7)	1/12	反転復原
125	須恵器	杯身	842	尾流	4 2区 南半	黒灰色土	密	良	青灰色～淡灰色	回転ナデ、ケズリ	12.0	(4.4)	1/12	反転復原
126	須恵器	杯身	842	尾流	4 1区 断ち割内(東側)	黒灰色土	密	良	淡青灰色	回転ナデ、ケズリ	10.2	(4.2)	1/8	反転復原
127	須恵器	杯身	842	尾流	4 2区 南半	黒灰色土	密	良	淡灰色～濃灰色	回転ナデ	14.2	(3.4)	1/8	反転復原
128	須恵器	杯身	842	尾流	4 2区 南半	黒灰色土	密	良	青灰色	回転ナデ	14.0	(3.3)	1/8	反転復原
129	須恵器	杯身	842	尾流	4 2区	黒灰色土	粗	やや軟	淡灰色	回転ナデ	13.6	(3.3)	1/10	反転復原
130	須恵器	高杯(脚部)	842	尾流	4 2区 南半	黒灰色土	密	良	青灰色～淡灰色	回転ナデ	(8)	8.7	底径5/8	反転復原、自然軸付着
131	土製品	土馬	842	尾流	4 3区	淡黄灰色土	密	軟	浅黄橙色	指オサエ		5.7	1/5	
132	弥生土器	甕	842	尾流	4 2区	土器群	やや密	良	茶褐色	ナデ、板ナデ、タタキ	17.8	4.9	1/15	反転復原
133	弥生土器	甕	842	尾流	4 2区 北半	黒灰色土	やや密	良	淡茶色～淡橙茶色	ナデ	17.3	2.85	1/20	反転復原
134	弥生土器	甕	842	尾流	2	西壁清掃	粗	良	淡茶褐色～橙褐色	ナデ、タタキ	18.8	(8.9)	1/6	口縁部に刻み目
135	弥生土器	甕	842	尾流	4 2区	土器群	密	良	淡黄褐色	ハケメ	17.4	(8)	1/4	反転復原
136	弥生土器	甕	842	尾流	4 2・3区	土器群	密	良	茶褐色～暗茶褐色	ナデ、板ナデ、タタキ、ハケメ	12.0	(4.7)	1/2	反転復原、No.137と同一土器であるも接点ナシ
137	弥生土器	甕	842	尾流	4 2・3区	土器群	密	良	茶褐色～暗茶褐色	ナデ、板ナデ、タタキ、ハケメ	(4)	(8.5)	1/4	反転復原、No.136と同一土器であるも接点ナシ
138	弥生土器	甕	842	尾流	4 2区	土器群	やや粗	軟	淡橙褐色	ナデ、タタキ	17	(19.2)	1/2	反転復原
139	弥生土器	甕	842	尾流	4 3区	土器群	粗	良	淡褐色～暗茶褐色	ナデ、指オサエ、イタナデ、タタキ	15.6	(24.5)	2/3	



140	弥生土器	甕	842	尾流	4 2区	土器群	密	やや軟	淡黒灰色～淡灰色／淡黄褐色～黒灰色	ナデ、指オサエ、イタナデ、タタキ、ハケメ	16.0	(18.1)	1/6	一部反転
141	弥生土器	甕	842	尾流	4 2区	土器群	密	良	淡褐色	タタキ	16.0	19.8	1/2	スス付着
142	弥生土器	甕	842	尾流	4 2区	土器群	密	良	褐色～淡褐色	ナデ、指オサエ、タタキ	(4.2)	(7.5)	底径1/1	反転復原
143	弥生土器	甕	842	尾流	4 3区	SK02区	密	良	淡灰褐色～淡茶褐色	ナデ	(4.0～4.2)	(3.1)	底部のみ 完形	
144	弥生土器	甕	842	尾流	4 2区	土器群	粗	軟	淡茶褐色～橙褐色	磨耗が著しい	4	3.7	1/2	反転復原
145	弥生土器	甕	842	尾流	4 2区 北半	黒灰色土	やや粗	軟	白灰色～橙褐色	タタキ	3	2.0	3/8	反転復原
146	弥生土器	甕	842	尾流	4 2区	土器群	やや粗	軟	濃灰色～橙褐色	タタキ	4	3.0	1/2	反転復原、 黒斑
147	弥生土器	甕	842	尾流	4 2区	淡白灰色土	粗	軟	橙褐色	ハケ	4.2	3.3	1/2	反転復原
148	弥生土器	壺	842	尾流	4 1区	攪乱内	粗	やや軟	淡黄褐色	ナデ、ハケ、 板ナデ	6.6	17.0	体部1/4	
149	弥生土器	碗	842	尾流	4 3区	土器群	密	良	黄褐色	ナデ、タタキ、 指オサエ	(4.5)	(4.4)	底部ほぼ 完形	
150	弥生土器	碗	842	尾流	4 3区	土器群	密	良	明褐色	ナデ、指オサエ	12.6	6.9	1/24	反転復原
151	土師器	高杯	842	尾流	4 2区	黒灰色土	粗	良	橙褐色	板ナデ		(8.2)	脚部3/4	
152	土師器	高杯	842	尾流	4 2区	黒灰色土	密	良	橙褐色	磨耗	14.0	4.8	3/4	
153	土師器	高杯	842	尾流	4 2区	黒灰色土	粗	良	淡灰褐色～橙褐色	指オサエ	16.0	(6.2)	3/4	
154	土師器	高杯	842	尾流	4 2区 南半	黒灰色土	密	良	淡灰色～黄灰色	磨耗	15.0	(4.6)	1/2	
155	土師器	高杯	842	尾流	4 2区	黒灰色土	密	良	橙褐色～淡灰色	磨耗	17.0	(5.1)	1/4	反転復原

# 圖 版



(1)難波野遺跡航空写真(北から)



(2)難波野遺跡航空写真(東から)



(1)難波野遺跡航空写真(西から)



(2)難波野遺跡航空写真(南から)



(1)大垣遺跡・一の宮遺跡調査前  
(南から)



(2)大垣遺跡・一の宮遺跡  
トレンチ全景(東から)



(3)大垣遺跡・一の宮遺跡  
北壁東部断面(南から)



(1)難波野遺跡  
1・2トレンチ全景  
(航空写真：下が北)



(2)難波野遺跡  
1トレンチ全景(東から)



(3)難波野遺跡  
2トレンチ全景(東から)



(1)難波野遺跡  
1 トレンチ井戸 S E 03  
(南から)



(2)難波野遺跡  
1 トレンチ井戸 S E 03  
(北から)



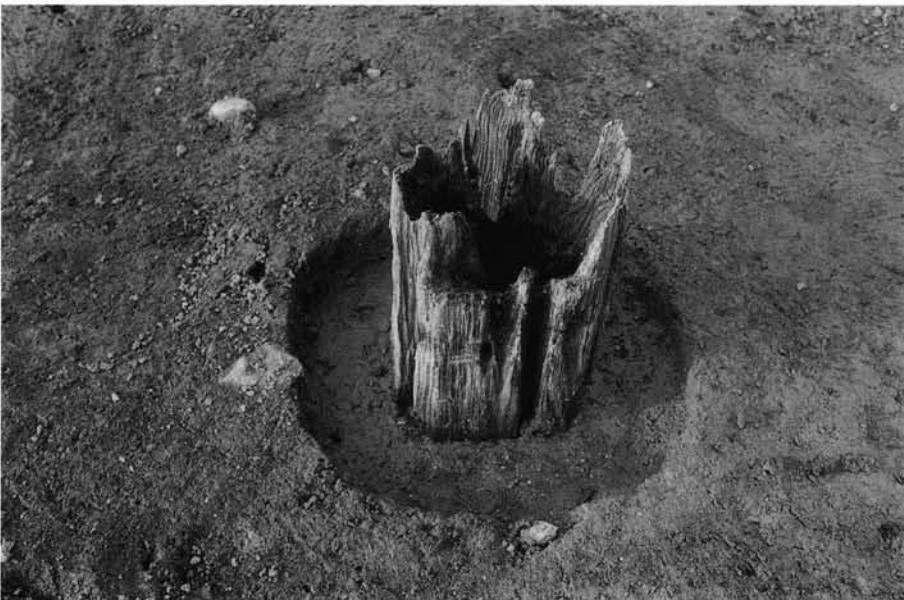
(3)難波野遺跡  
1 トレンチ井戸 S E 03の  
北側縦板(南から)



(1)難波野遺跡  
1 トレンチ土坑 S K06  
たが<sup>タガ</sup>状製品出土状況(北から)



(2)難波野遺跡  
1 トレンチ溝 S D03  
土器出土状況(北から)



(3)難波野遺跡  
1 トレンチ掘立柱建物跡  
S B12柱穴・柱根出土状況  
(東から)





(1)難波野遺跡  
1 トレンチ柱穴内  
土器出土状況(南から)



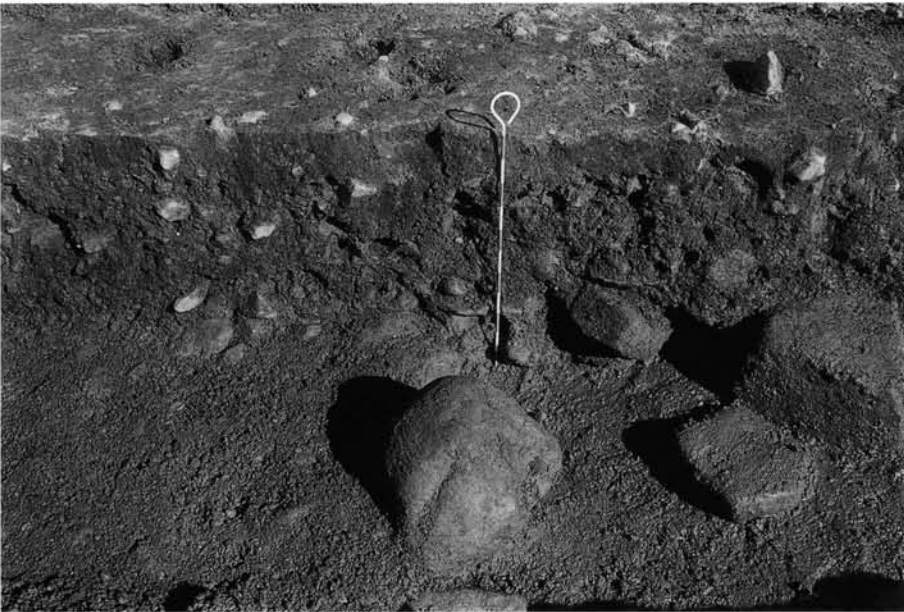
(2)難波野遺跡  
1 トレンチ西壁断面柵列  
S A13板状杭検出状況  
(東から)



(3)難波野遺跡  
1 トレンチ西壁断面  
(東から)



(1)難波野遺跡  
1 トレンチ西部下層(南から)



(2)難波野遺跡  
1 トレンチ東部断ち割り  
東部壁面(西から)



(3)難波野遺跡  
2 トレンチ中央断ち割り状況  
(南から)



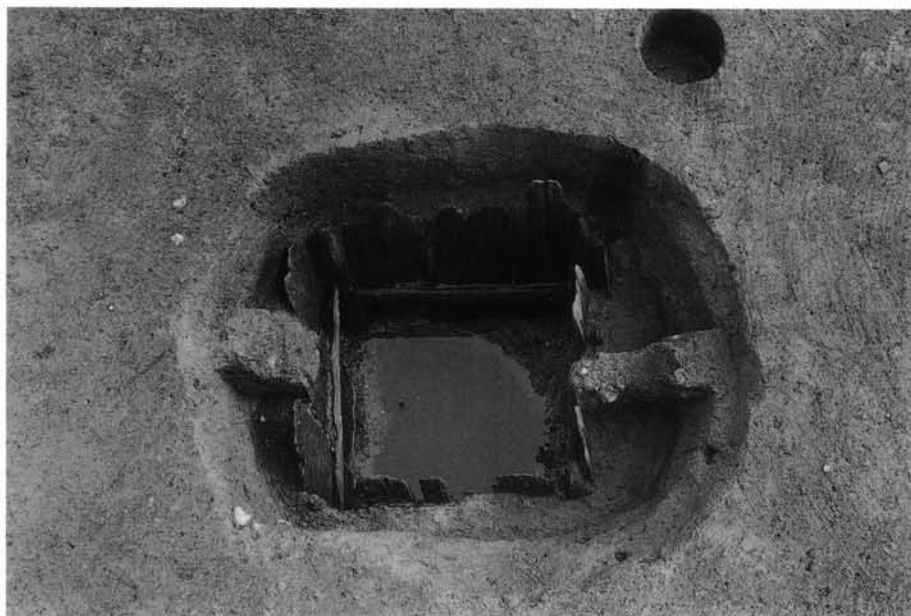
(1)難波野遺跡  
3トレンチ全景(西から)



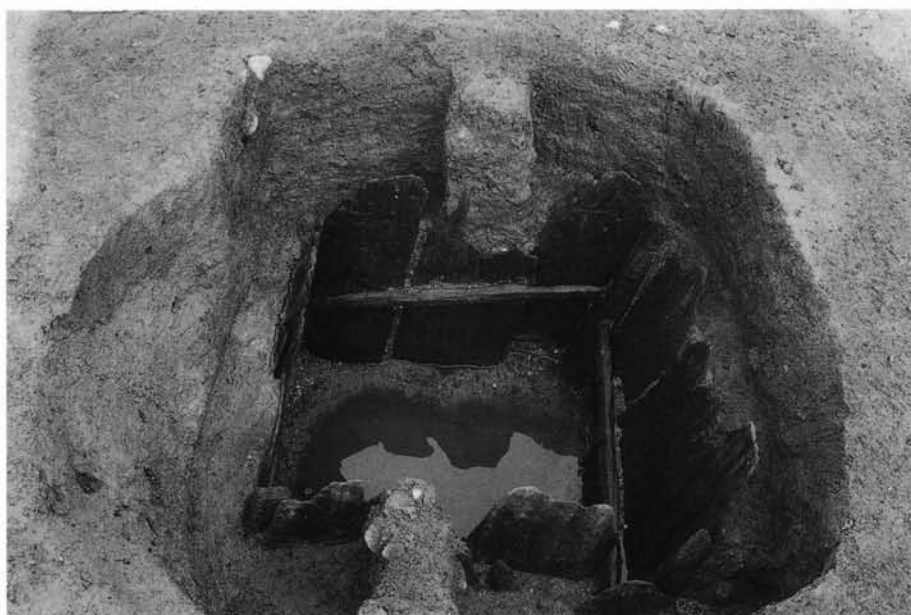
(2)難波野遺跡  
3トレンチ全景(東から)



(3)難波野遺跡  
3トレンチ北壁断面  
(南から)



(1)難波野遺跡  
3トレンチ井戸S E16(北から)



(2)難波野遺跡  
3トレンチ井戸S E16縦板組  
(東から)



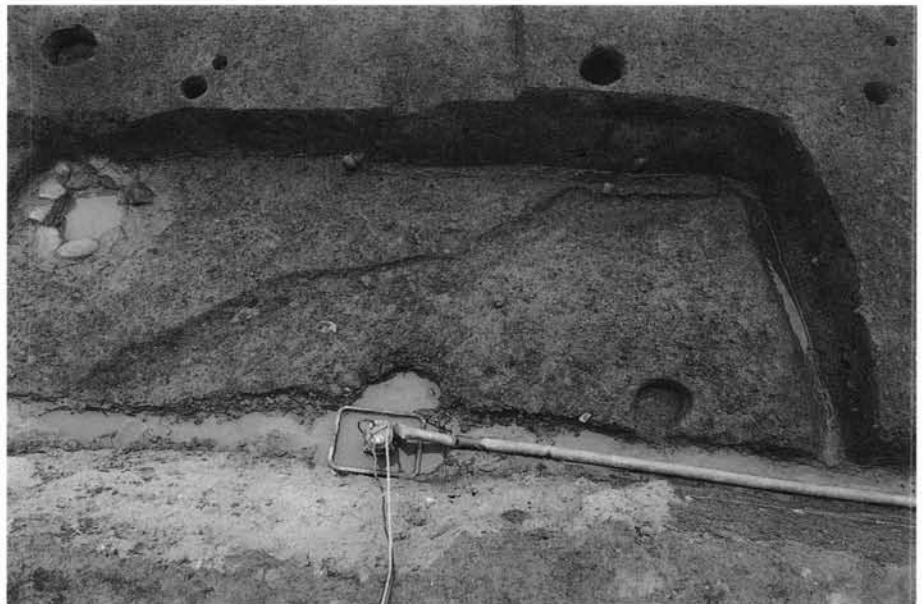
(3)難波野遺跡  
3トレンチ井戸S E17  
検出状況(東から)



(1)難波野遺跡  
3トレンチ土坑S K19  
完掘状況(北から)



(2)難波野遺跡  
3トレンチ掘立柱建物跡  
S B24の柱根(北から)



(3)難波野遺跡  
3トレンチ竪穴式住居跡  
S H23(南から)



(1)難波野遺跡  
4トレンチ全景航空写真  
(下が北)



(2)難波野遺跡  
4トレンチ全景(東から)



(3)難波野遺跡  
4トレンチ北壁断面



6



44



7



58



10



59



12



14



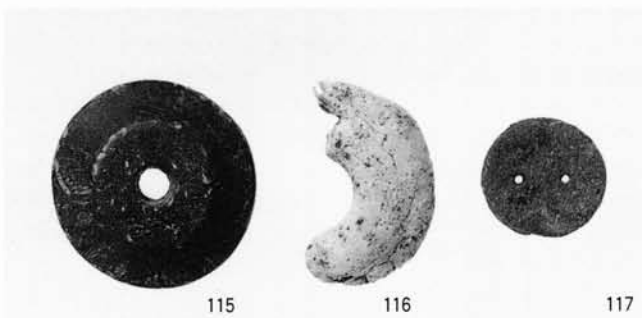
94



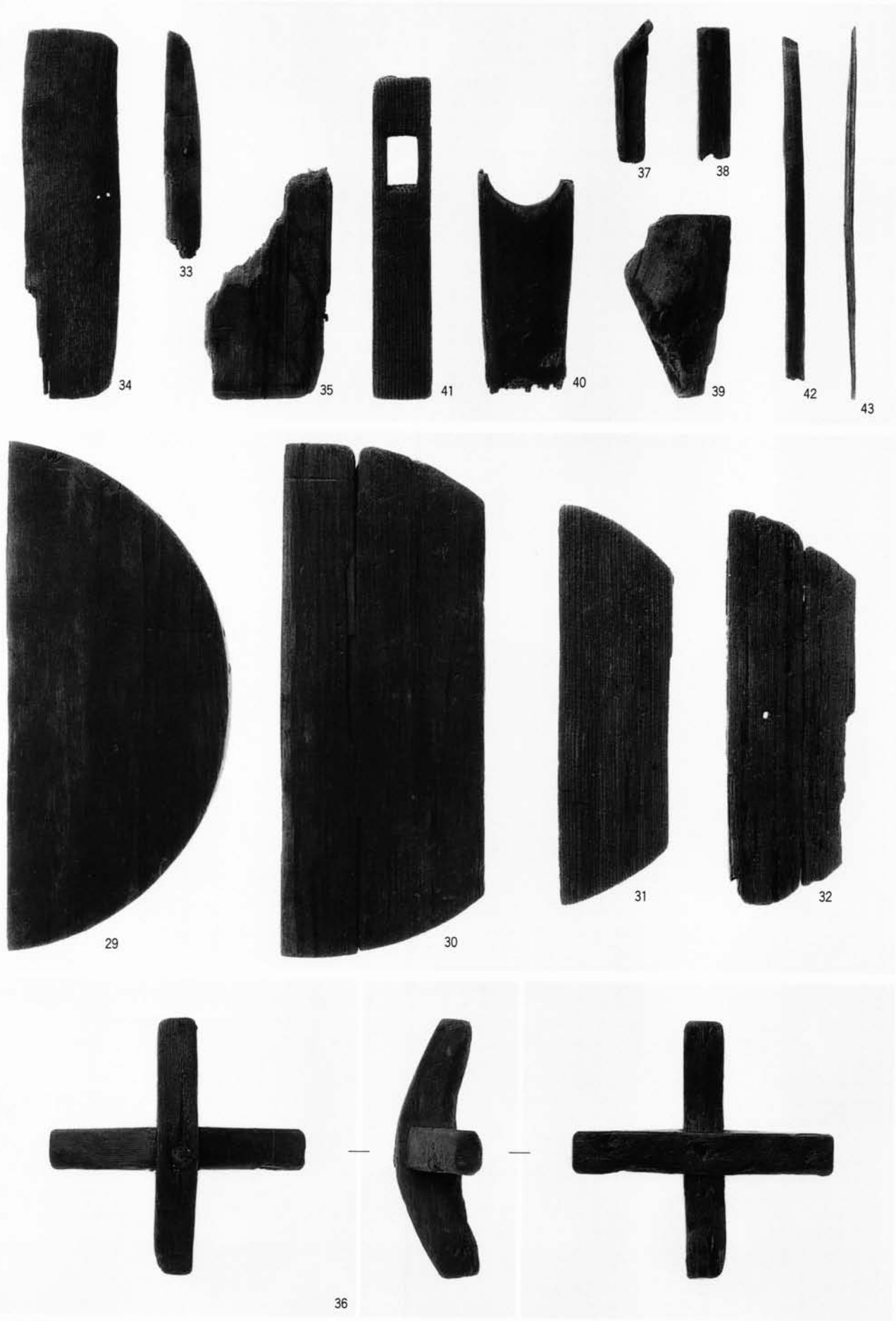
18

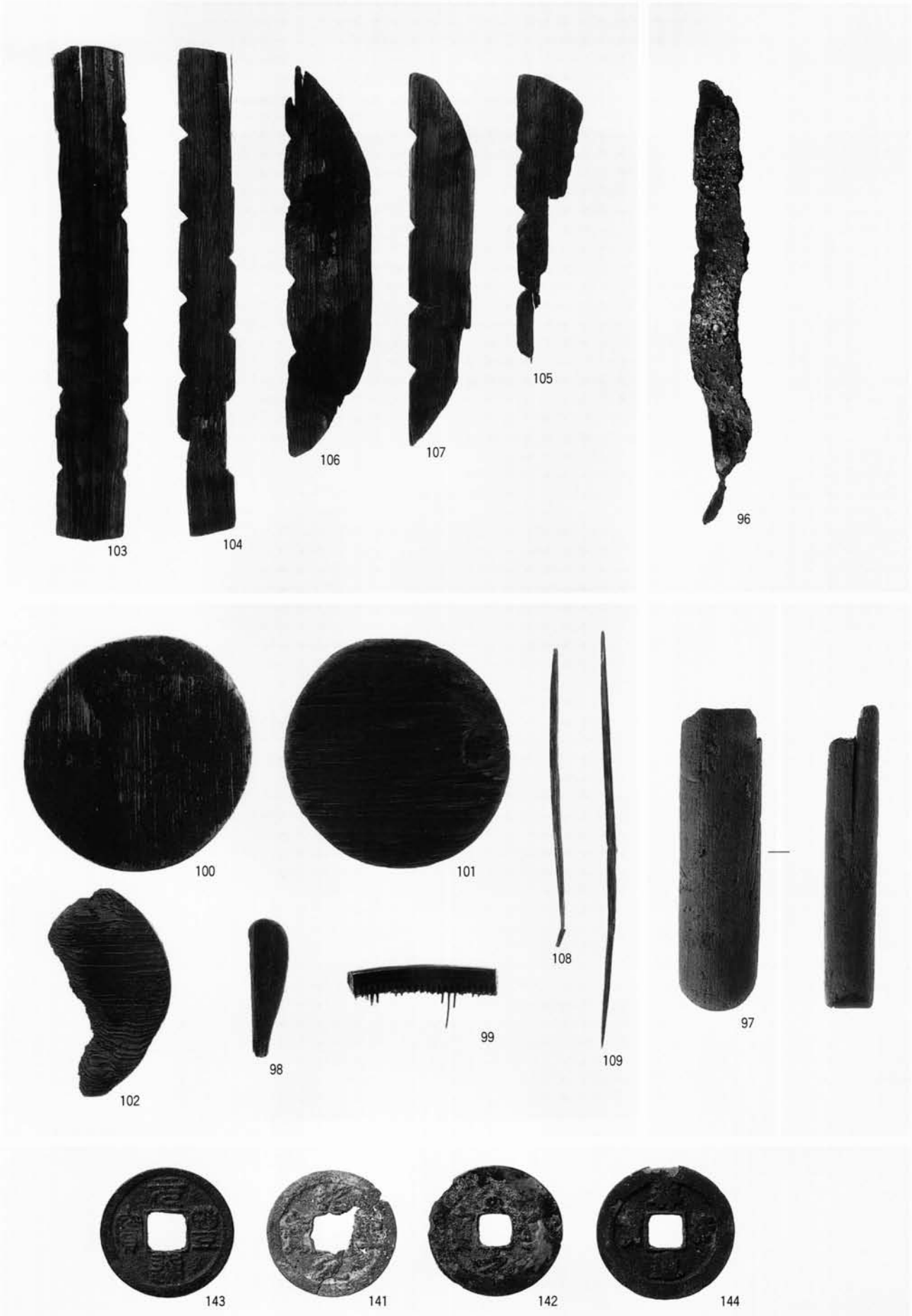


82









図版第17 先ノ段遺跡



(1)調査前遠景(南西から)



(2)1-a・bトレンチ  
調査前全景(南東から)



(3)2-a・bトレンチ  
調査前全景(北西から)

図版第18 先ノ段遺跡



(1) 3 トレンチ調査前全景  
(南から)

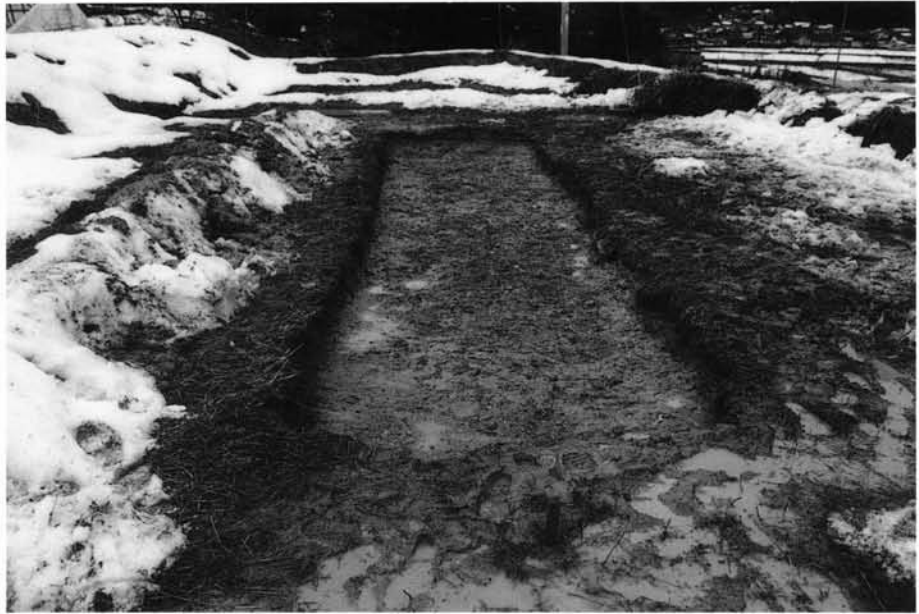


(2) 1 - b トレンチ重機掘削  
作業風景(北西から)



(3) 2 - b トレンチ重機掘削  
作業風景(北西から)

(1) 1-a トレンチ全景  
(南東から)



(2) 1-b トレンチ南側部分  
(北西から)

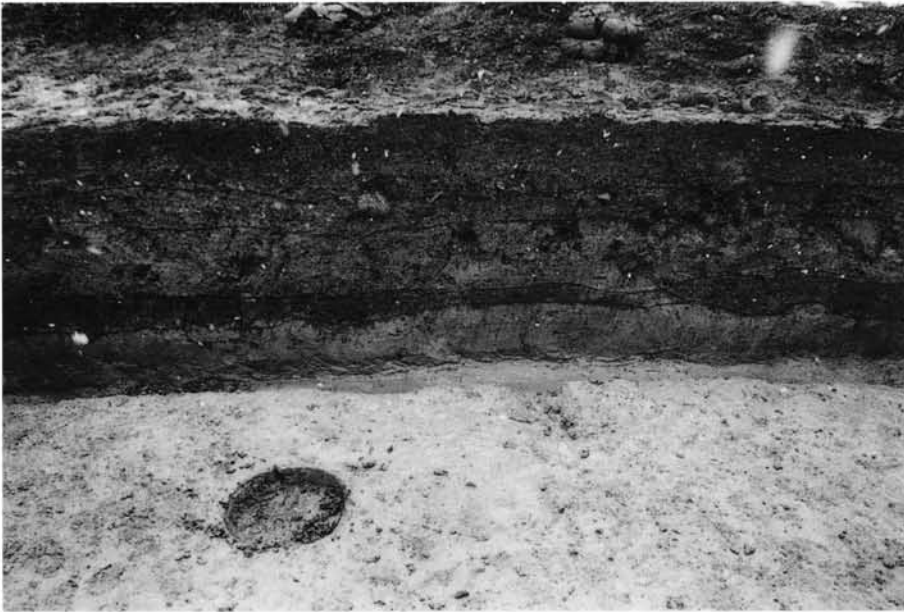


(3) 2-a トレンチ掘削作業風景  
(北から)





(1) 2-a トレンチ全景  
(南東から)



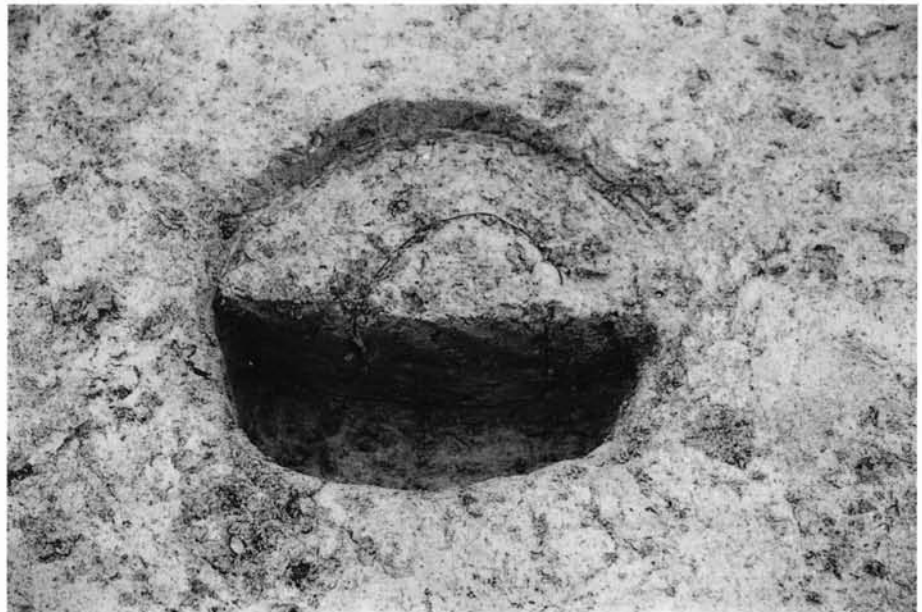
(2) 2-b トレンチ南壁断面  
(北西から)



(3) 2-b トレンチ遺構検出状況  
(南から)



(1) 2-b トレンチ柱穴  
掘削作業風景(南東から)



(2) 2-b トレンチ  
掘立柱建物跡 S B01  
柱穴 P 2 断面(西から)



(3) 2-b トレンチ  
ピット掘削作業風景(北から)



(1) 2-b トレンチ遺構完掘状況  
(南東から)



(2) 2-b トレンチ遺構完掘状況  
(南から)

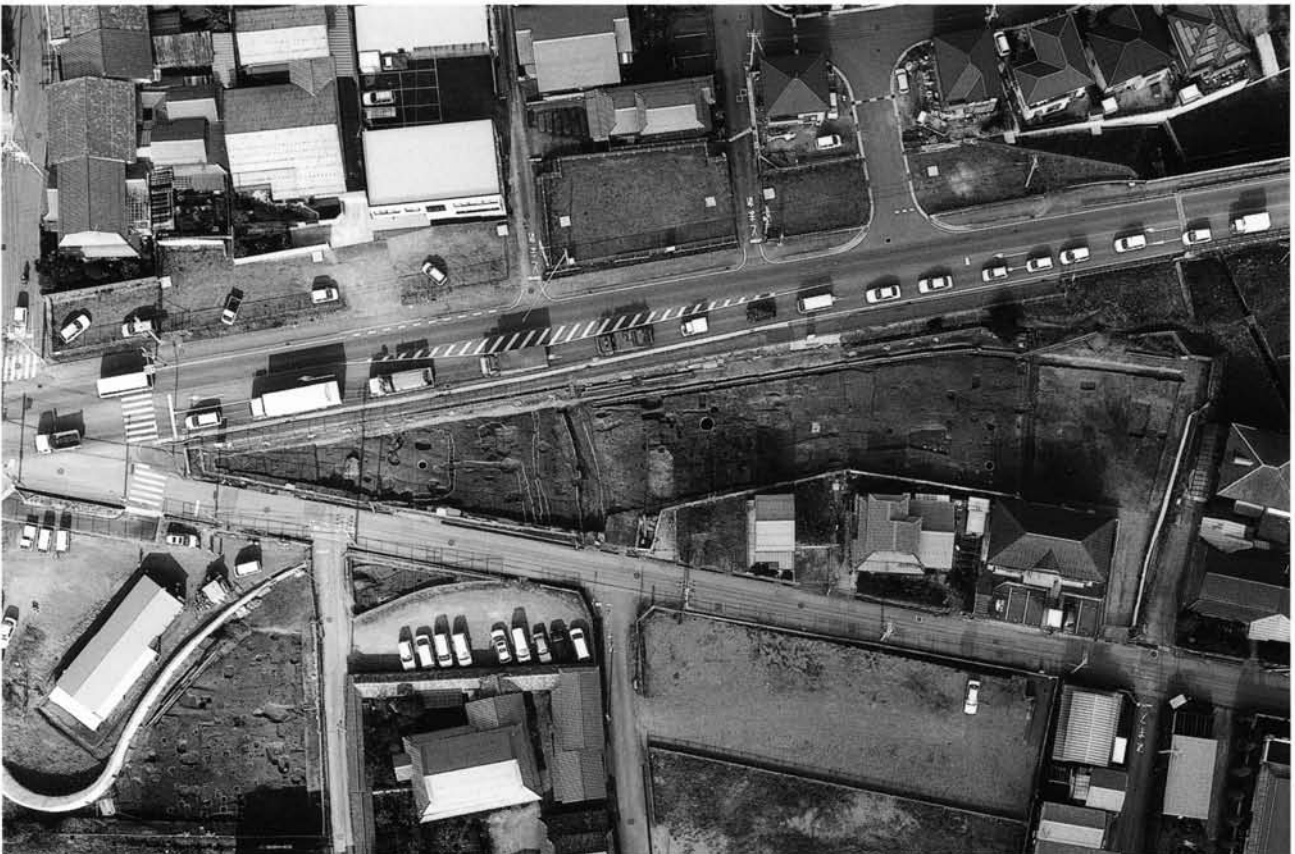


(3) 3 トレンチ全景(北西から)





(1)調査地全景航空写真(上が北)



(2)1～3地区全景航空写真(上が北)



(1) 1 トレンチ方形周溝墓  
S T1122土層断面(西から)



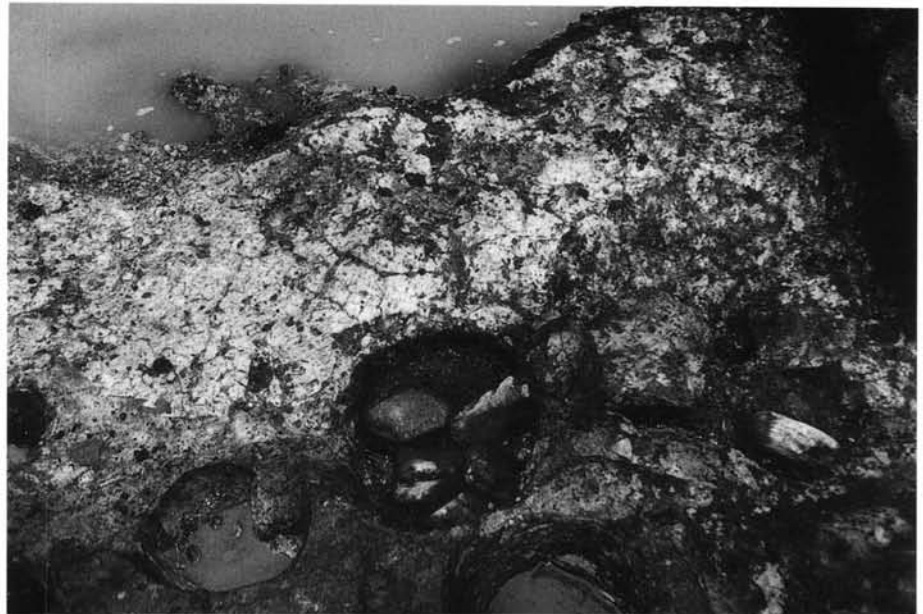
(2) 1 トレンチ方形周溝墓  
S T1122土層断面(南から)



(3) 1 トレンチ石錘出土状況  
(南から)



(1) 1 トレンチ堅穴式住居跡  
S H1313(南から)



(2) 1 トレンチ堅穴式住居跡  
S H1313(東から)



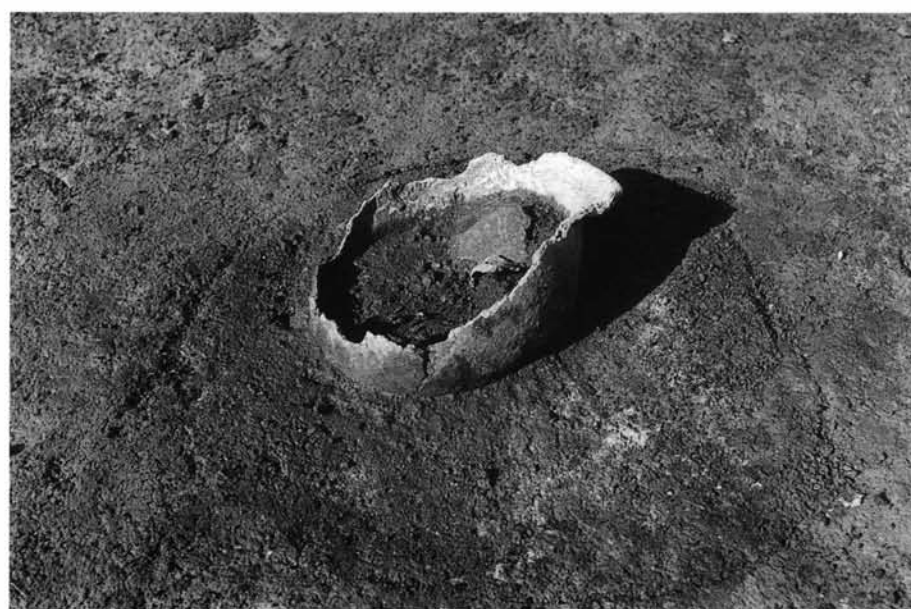
(3) 1 トレンチ堅穴式住居跡  
S H1313出土遺物(北から)



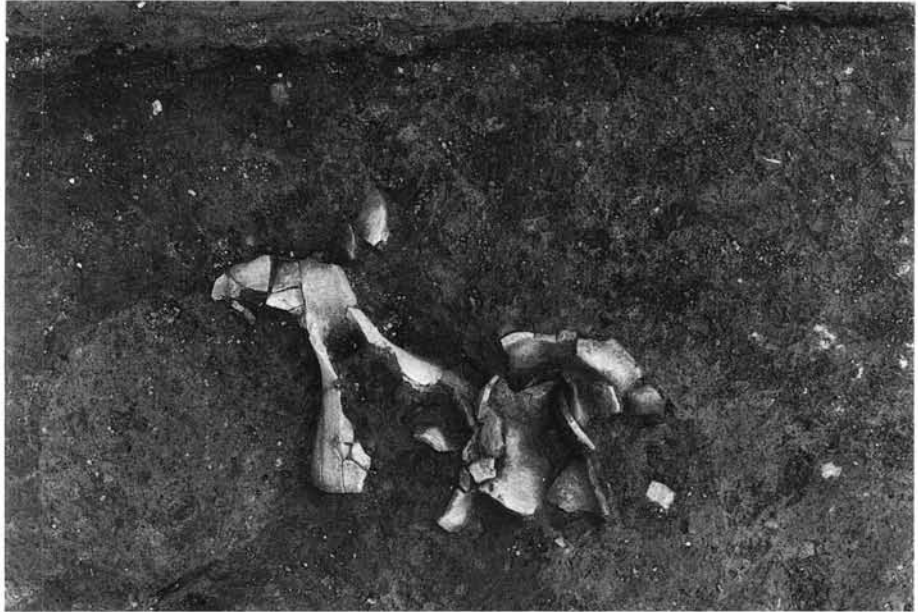
(1) 1 トレンチ 竪穴式住居跡  
S H 1313 遺物出土状況  
(東から)



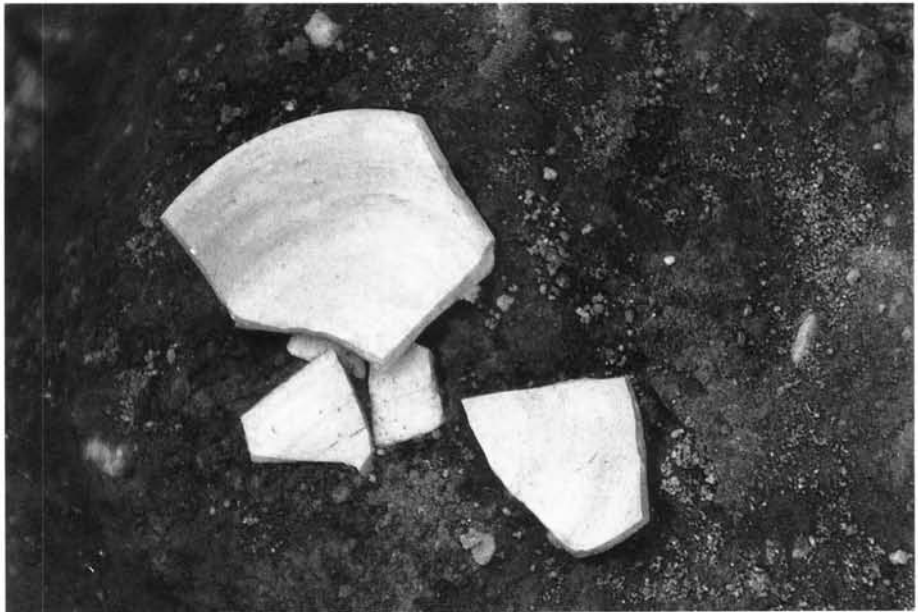
(2) 1 トレンチ 土坑 S P 1178  
遺物出土状況 (南から)



(3) 1 トレンチ 土坑 S P 1178  
遺物出土状況 (西から)



(1) 1 トレンチ土坑 S P 1306  
遺物出土状況(北から)



(2) 1 トレンチ竪穴式住居跡  
S H 1195遺物出土状況  
(北から)



(3) 1 トレンチ S K 1292  
遺物出土状況(南西から)



(1) 1 トレンチ土坑 S K1292  
遺物出土状況(南西から)



(2) 1 トレンチ土坑 S K1292  
遺物出土状況(南西から)



(3) 1 トレンチ土坑 S K1292  
遺物出土状況(南西から)



(1) 1 トレンチ土坑 S K1425  
遺物出土状況(東から)



(2) 1 トレンチ土坑 S K1425  
遺物出土状況(東から)



(3) 1 トレンチ土坑 S K1151  
遺物出土状況(北から)



(1) 1 トレンチ堀 S D1002西側  
(南から)



(2) 1 トレンチ溝 S D1018  
遺物出土状況(北から)

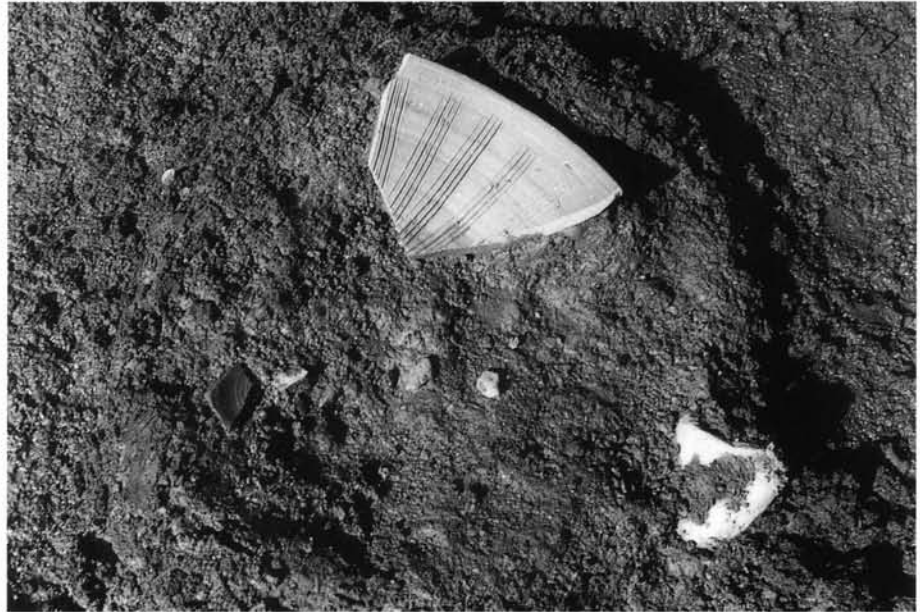


(3) 1 トレンチ土坑 S K1399  
遺物出土状況(南から)





(1) 1 トレンチ堀 S D 1002断面  
(南から)



(2) 1 トレンチ堀 S D 1002  
遺物出土状況(南から)



(3) 1 トレンチ堀 S D 1002上層  
遺物出土状況(北から)



(1) 2 トレンチ全景(西から)



(2) 3-4 トレンチ南半(西から)



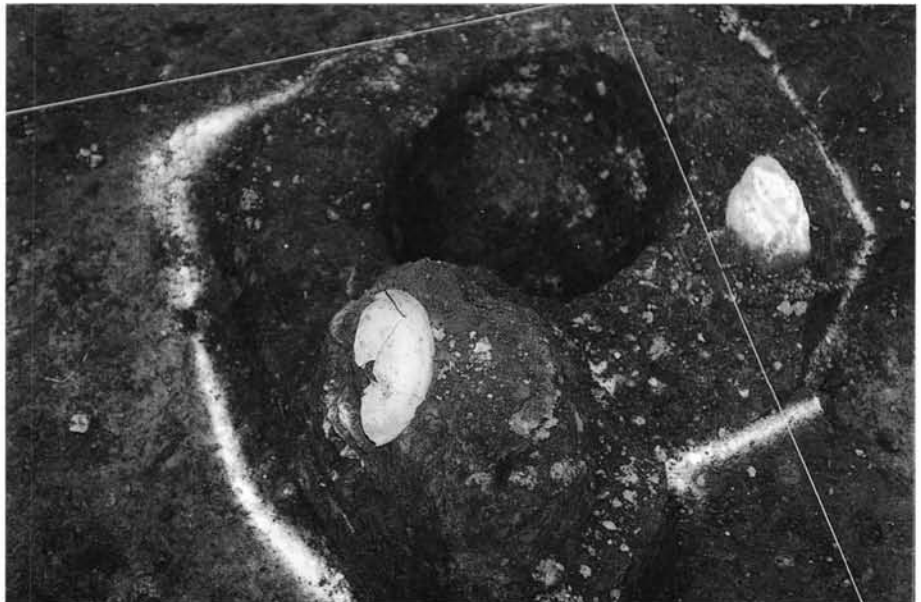
(3) 3-4 トレンチ北半(西南から)



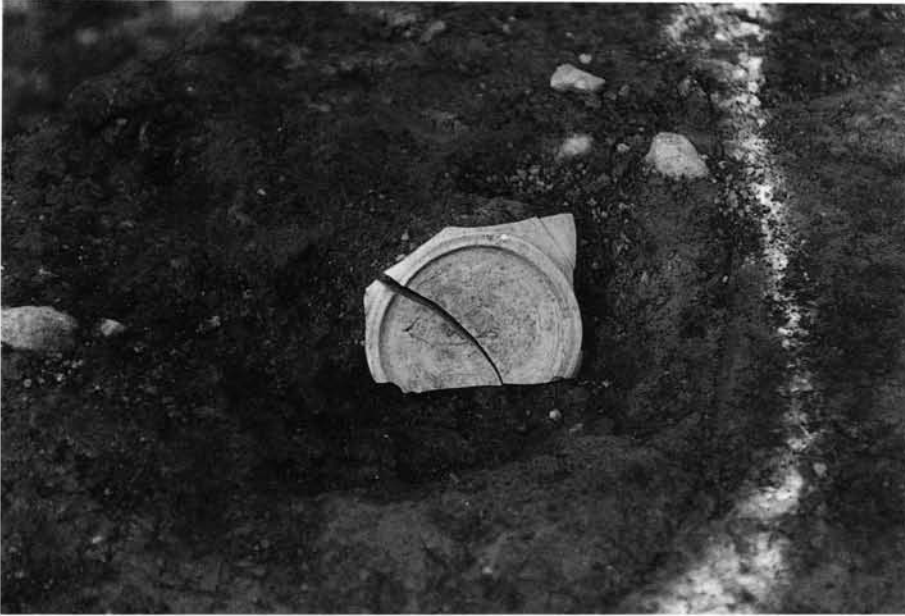
(1) 3-4 トレンチ掘立柱建物跡  
S B3402、P 3327(南から)



(2) 3-4 トレンチ掘立柱建物跡  
S B3402、P 3330(南から)



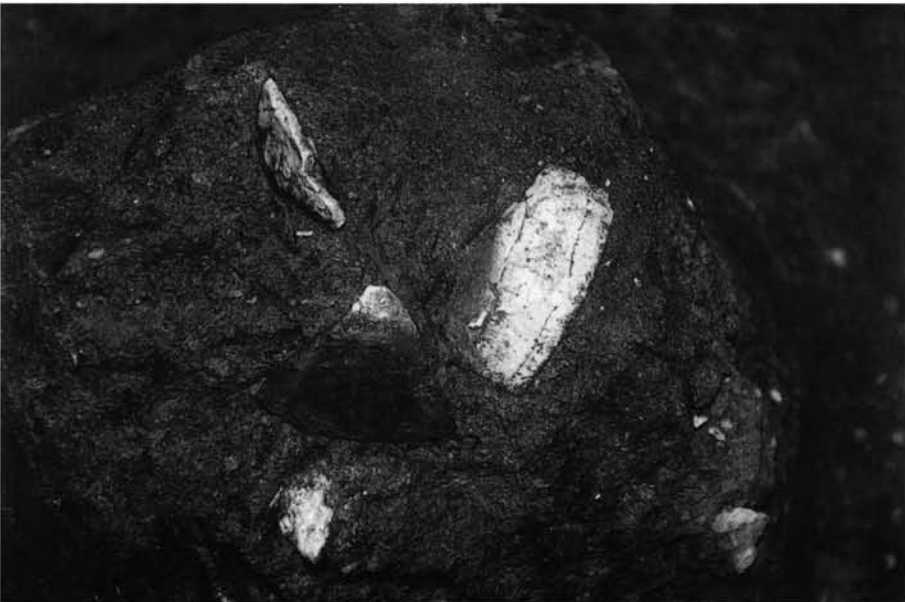
(3) 3-4 トレンチ掘立柱建物跡  
S B3403、P 3328(南から)



(1) 3-4 トレンチ掘立柱建物跡  
S B 3403、P 3321(南から)



(2) 3-4 トレンチ P 3100  
(南から)



(3) 3-4 トレンチ S X 3365  
(南から)

(1) 3-4 トレンチ S X3366  
(南から)



(2) 3-4 トレンチ S X3367  
(南から)

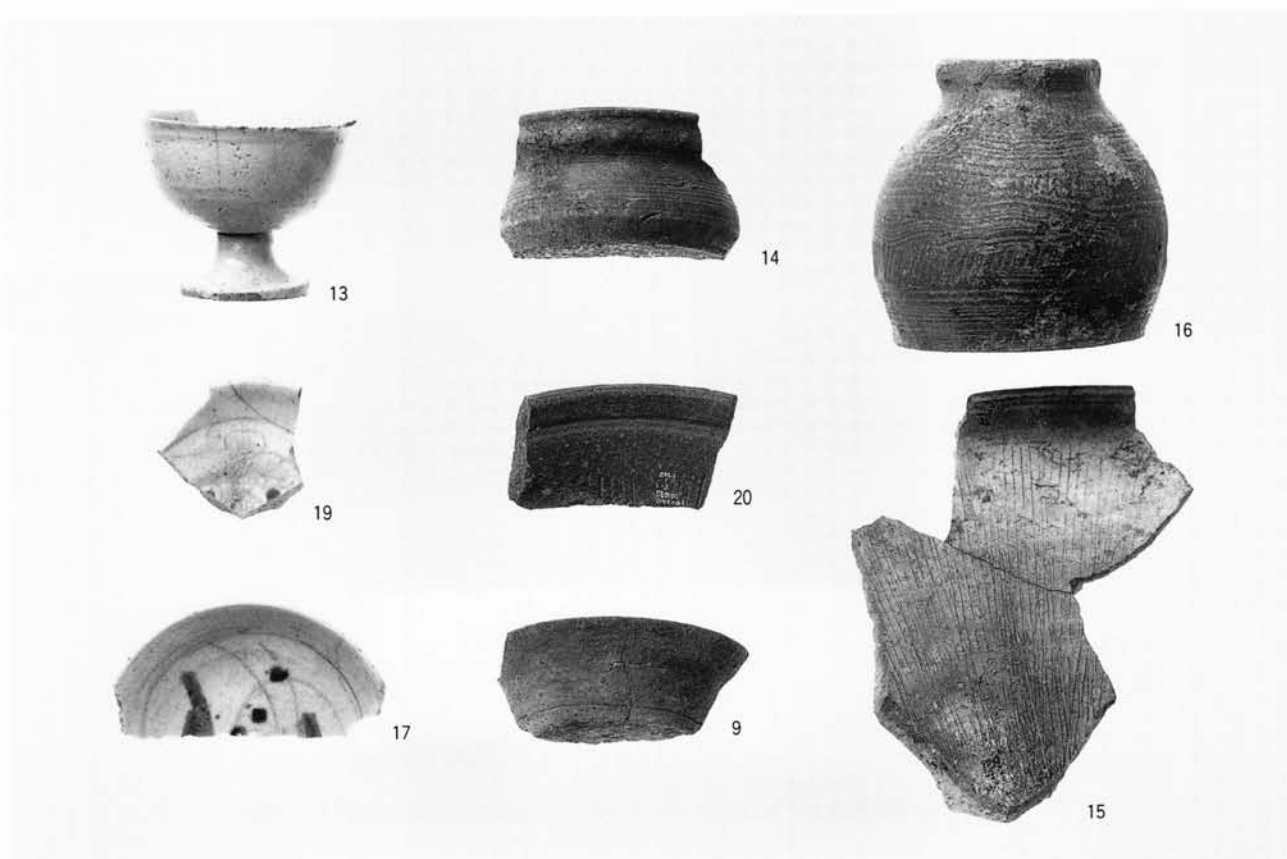


(3) 3-4 トレンチ S X3368  
(南から)





(1) 3-4トレンチ S X3369  
(南から)



(2) 1地区出土遺物(1)



25



2



S K 1151



9



S K 1603



11



包含層



S K 1292



27



33



60



49



61



43



S X 365



36



S X 368



89



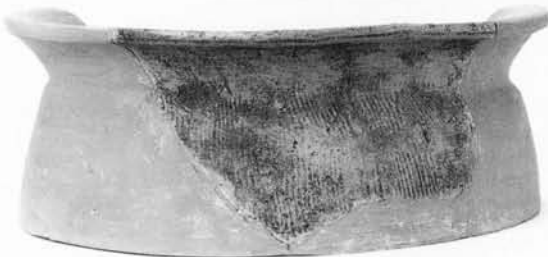
S X 534



71



S X 534



70



48



P 132



59





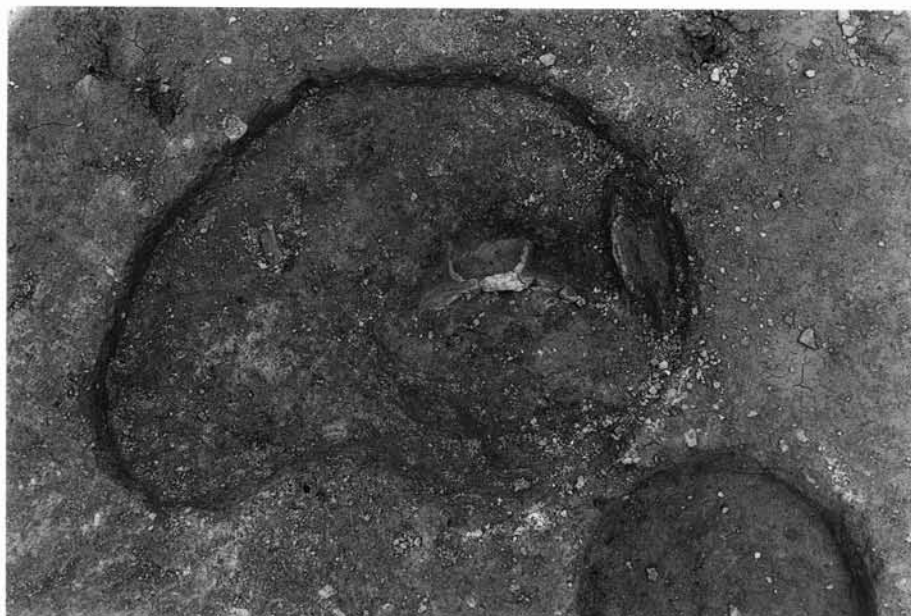
(1)プレハブ建上(北から)



(2)調査地全景(北から)



(3)調査地全景(南から)



(1)柱穴 P 85651 (上が北)



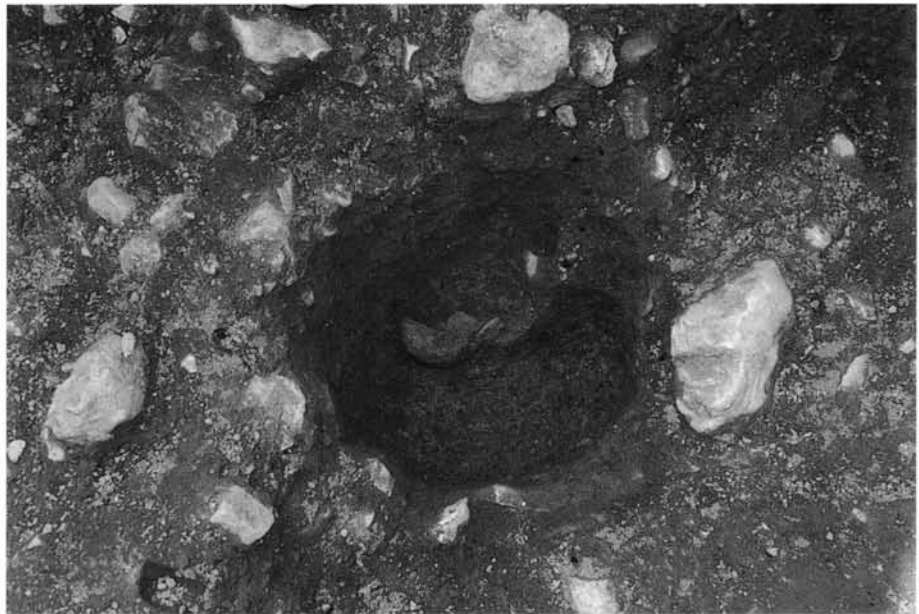
(2)土坑 S K 85602 (北から)



(3)土坑 S K 85602 (北から)



(1)土坑 S K85636(南から)



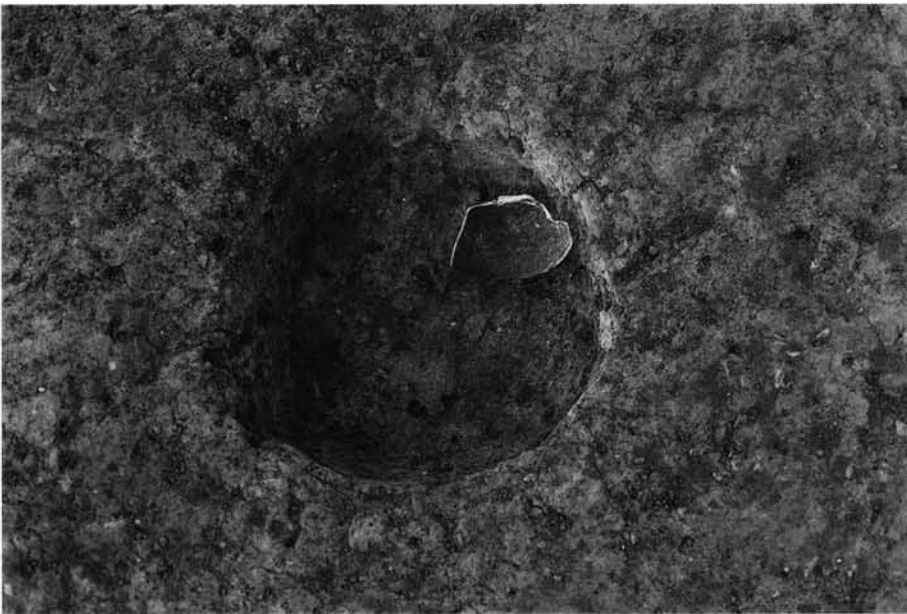
(2)柱穴 P 85603(北から)



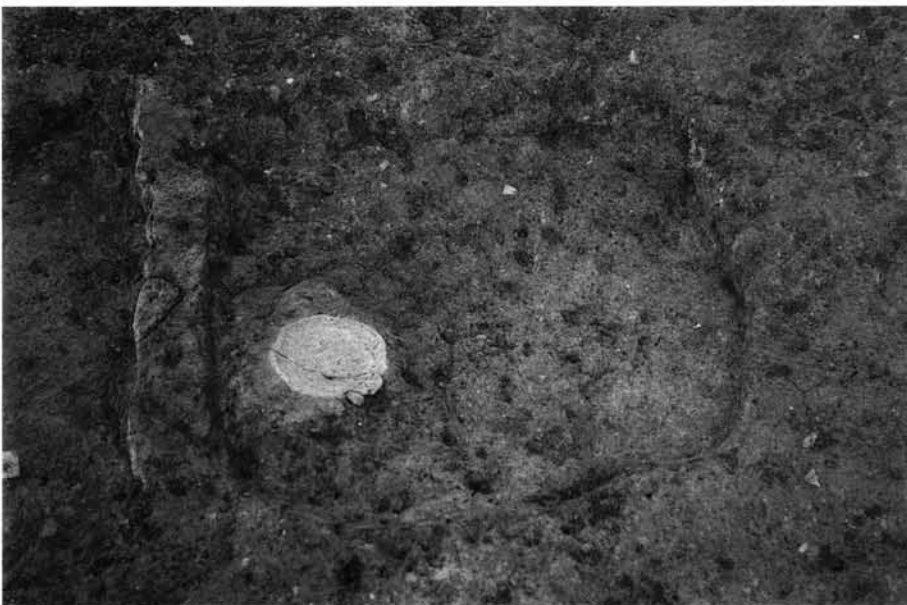
(3)柱穴 P 85643(上が北)



(1)柱穴P85638(南から)



(2)柱穴P85664(南から)



(3)柱穴P856140(西から)



(1)柱穴P85661(南から)



(2)柱穴P85622(南から)



(3)柱穴P85619(南から)



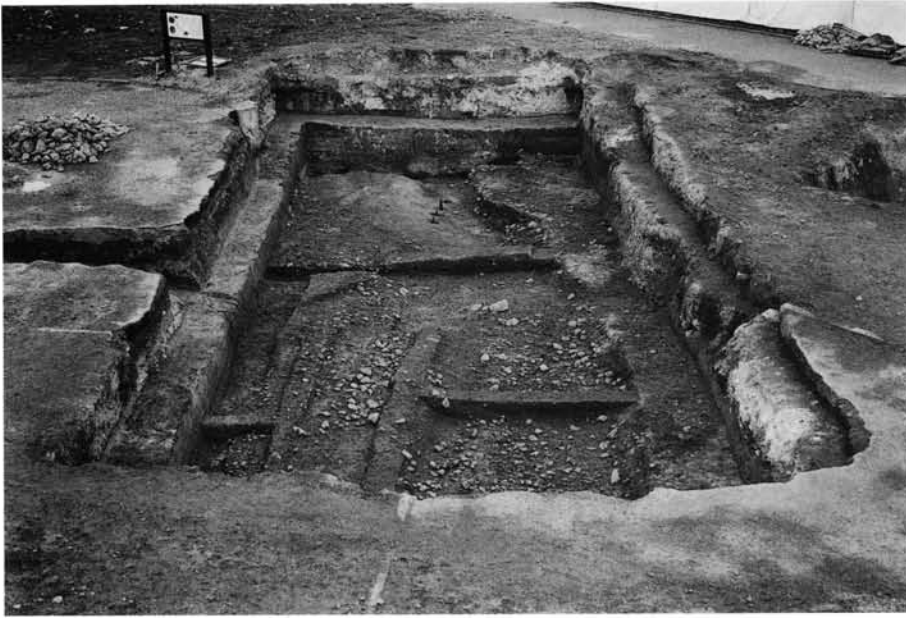
図版第45 京都第二外環状道路関係遺跡



(1)友岡・調子地区調査地全景(北東から)



(2)調子地区：E地区全景(北東から)



(1)友岡A地区：1-Aトレンチ  
全景(南西から)



(2)友岡A地区：1-Aトレンチ  
西壁土層(東から)



(3)友岡A地区：1-Aトレンチ  
杭列(東から)





(1)友岡A地区：1-Aトレンチ  
溝SD02(北から)



(2)友岡A地区：15トレンチ全景  
(南から)



(3)友岡A地区：15トレンチ  
南壁土層(北から)



(1)友岡A地区：1-Bトレンチ  
全景(北から)



(2)友岡A地区：1-Bトレンチ  
溝S D01(南から)



(3)友岡A地区：1-Bトレンチ  
溝S D01断面(北から)



(1)友岡A地区：2トレンチ全景  
(南東から)



(2)友岡A地区：2トレンチ  
溝 S D01全景(南東から)



(3)友岡A地区：2トレンチ  
溝 S D01部分(北西から)



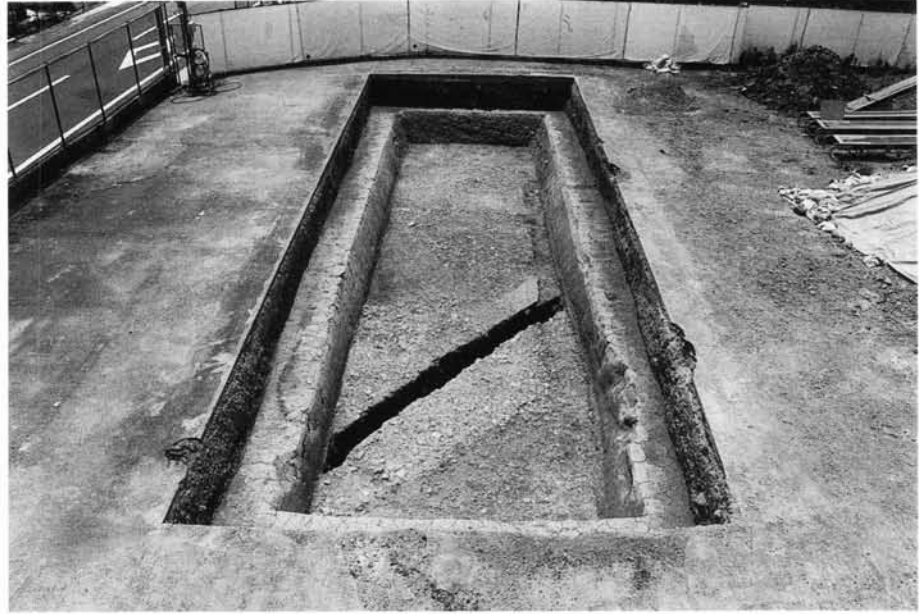
(1)友岡A地区：3トレンチ全景  
(東から)



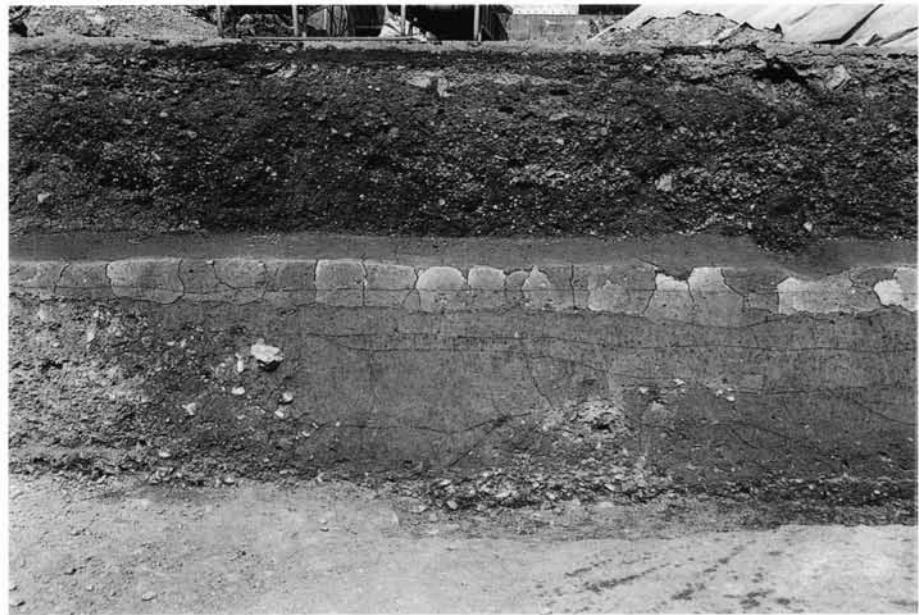
(2)友岡A地区：3トレンチ全景  
完掘状況(東から)



(3)友岡A地区：3トレンチ  
南壁土層部分(北から)



(1)友岡B地区：4トレンチ全景  
(北から)



(2)友岡B地区：4トレンチ  
西壁土層部分(東から)



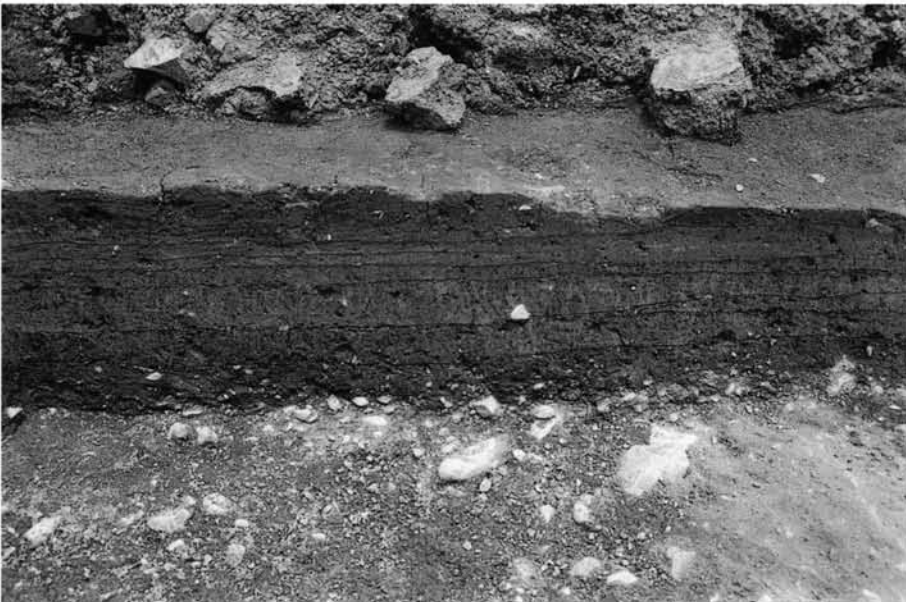
(3)友岡B地区：4トレンチ  
砂礫断割内土層部分  
(南から)



(1)友岡C地区：6トレンチ  
調査前風景(北から)



(2)友岡C地区：6トレンチ全景  
(西から)



(3)友岡C地区：6トレンチ  
北壁土層現代盛土下部分  
(南から)



(1)友岡C地区：7トレンチ  
調査前風景(北から)



(2)友岡C地区：7トレンチ全景  
(西から)



(3)友岡C地区：7トレンチ  
西壁土層(東から)

図版第54 京都第二外環状道路関係遺跡



(1)友岡D地区：8トレンチ全景  
(南から)



(2)友岡D地区：8トレンチ  
北壁土層(南から)



(3)友岡D地区：8トレンチ  
南壁土層(北から)





(1)友岡D地区：8トレンチ  
西壁溝断面(北から)



(2)友岡D地区：8トレンチ  
西側溝平面(東から)



(3)友岡D地区：8トレンチ  
南壁土層(北から)



(1)友岡D地区：9トレンチ全景  
(西から)



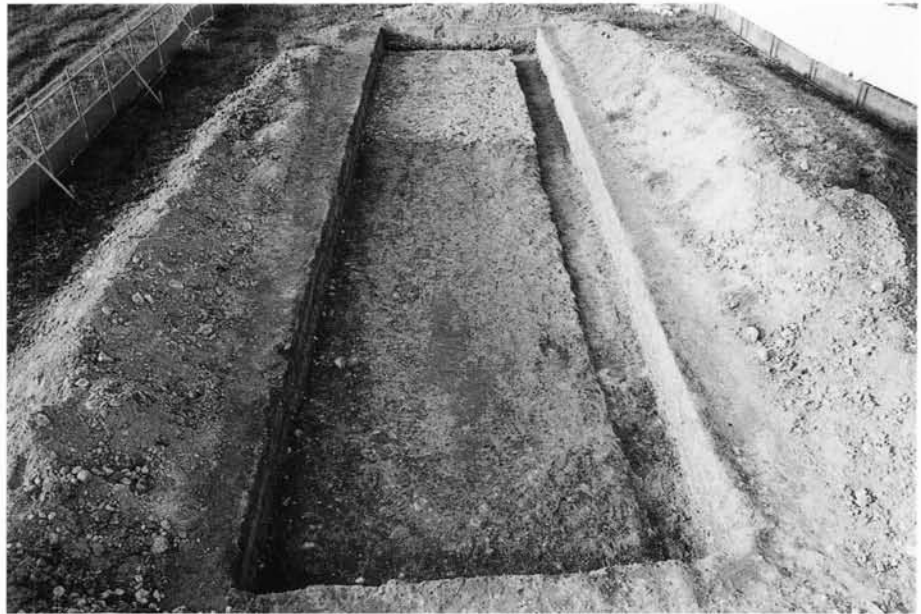
(2)友岡D地区：9トレンチ  
北壁土層部分(南から)



(3)友岡D地区：9トレンチ  
北壁土層(南から)



(1)調子E地区：調査前風景  
(南から)



(2)調子E地区：10トレンチ全景  
部分(南から)



(3)調子E地区：11トレンチ全景  
(北から)



(1) 調子E地区：11トレンチ  
溝 S D03(北から)



(2) 調子E地区：11トレンチ  
溝 S D03内遺物出土状況  
(上が北)



(3) 調子E地区：11トレンチ  
溝 S D03全景(北から)



(1)調子E地区：12トレンチ全景  
(北から)



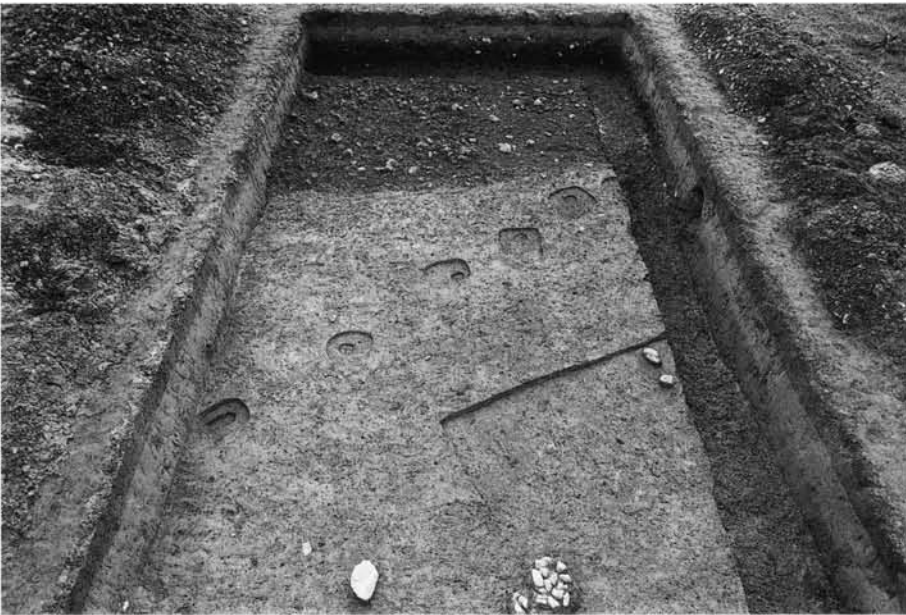
(2)調子E地区：13・14トレンチ  
調査前風景(北から)



(3)調子E地区：13トレンチ全景  
(東から)



(1)調子E地区：13トレンチ  
溝 S D03全景(南から)



(2)調子E地区：13トレンチ  
柱穴列検出状況(東から)



(3)調子E地区：14トレンチ全景  
(南から)



(1)調子E地区：14トレンチ  
溝S D01部分(北から)



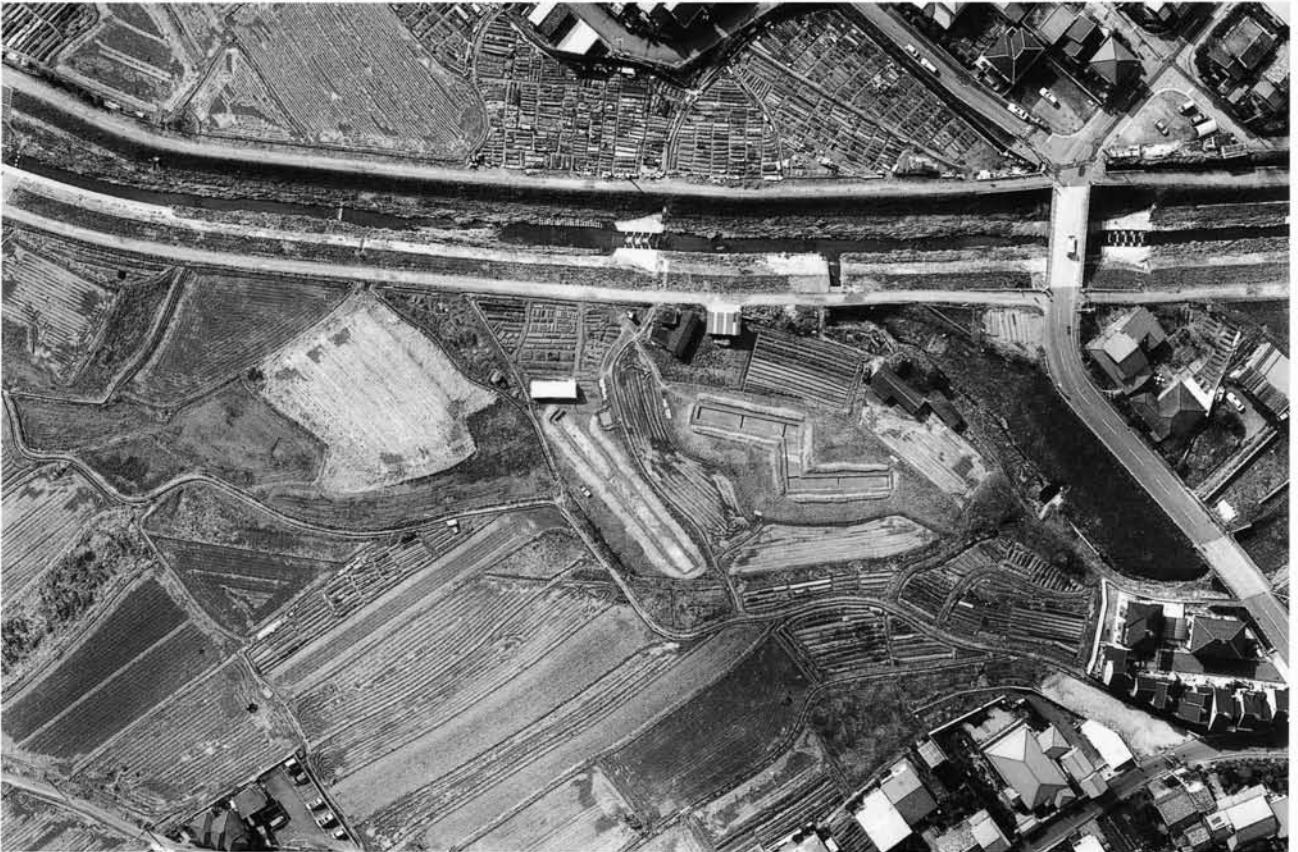
(2)調子E地区：14トレンチ  
井戸S E03(北から)



(3)調子E地区：14トレンチ  
井戸S E03内曲物検出状況  
(北から)



(1)岸ノ下地区調査地全景(手前が岸ノ下地区、奥に上内田地区；南東から)

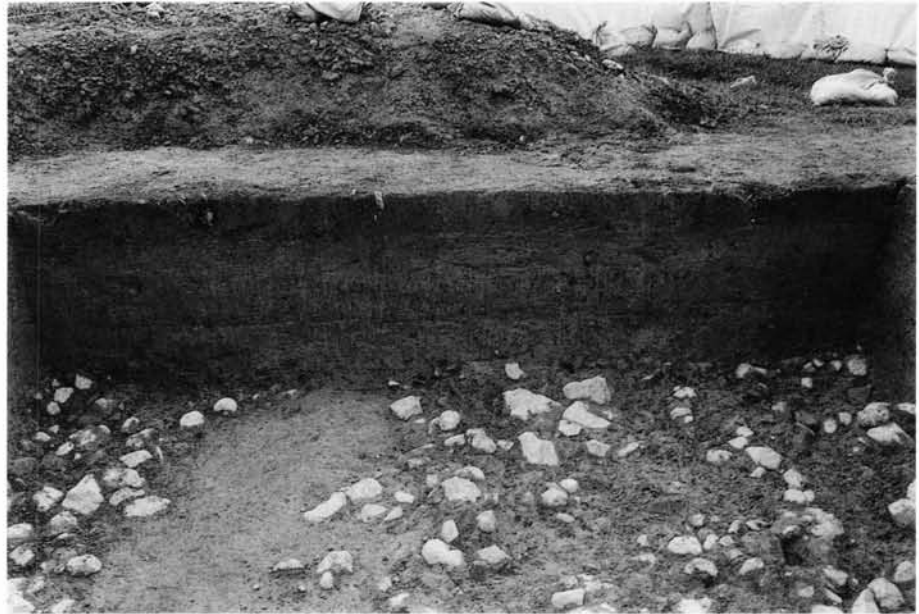


(2)岸ノ下地区調査地全景(上が南西)





(1)岸ノ下地区：1トレンチ  
完掘状況(南から)



(2)岸ノ下地区：1トレンチ  
南壁土層(北から)



(3)岸ノ下地区：1トレンチ  
暗渠状遺構(南から)

図版第64 京都第二外環状道路関係遺跡



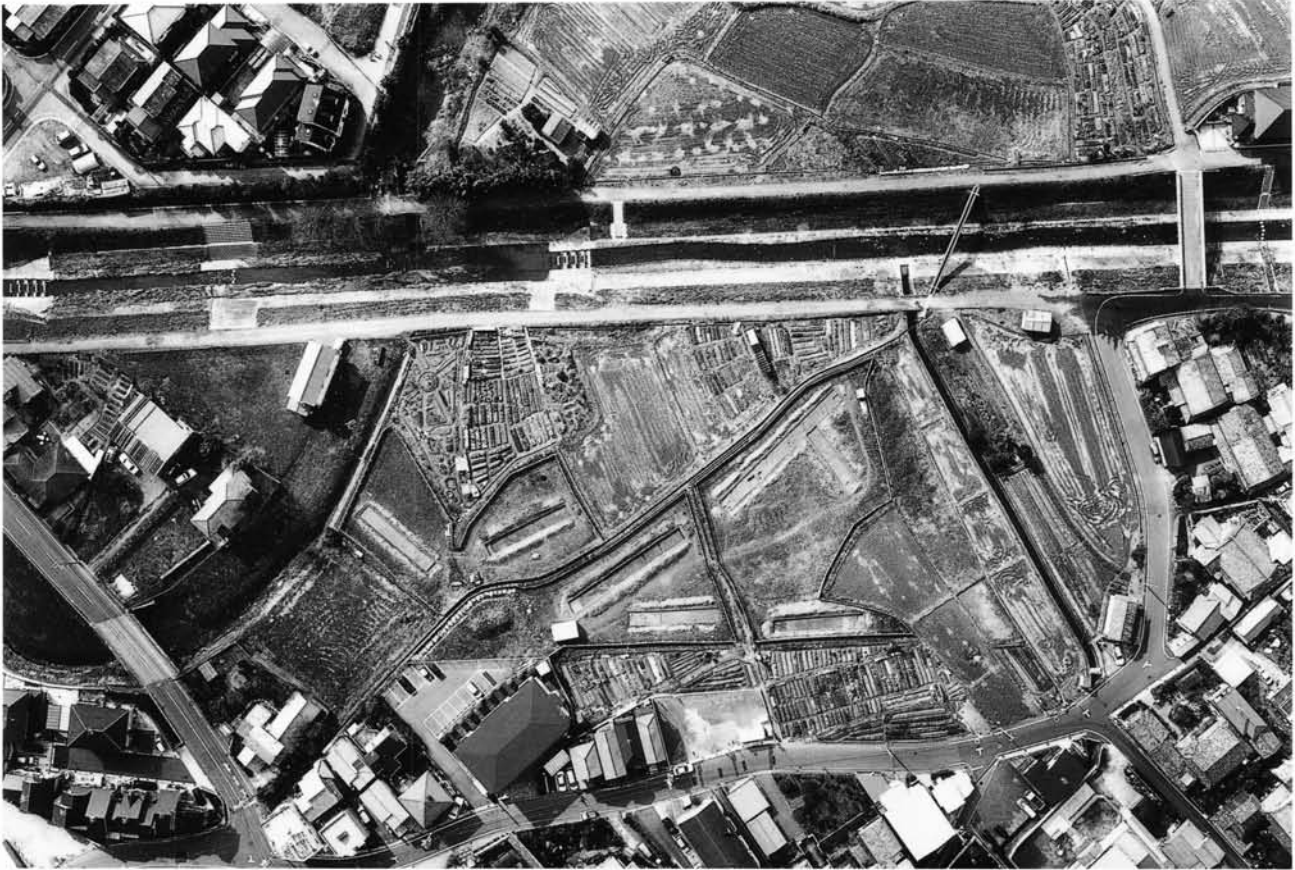
(1)岸ノ下地区：2トレンチ  
完掘状況(北東から)



(2)岸ノ下地区：2トレンチ  
畝状遺構(南から)



(3)岸ノ下地区：2トレンチ  
畦畔状遺構(南から)



(1)上内田地区調査地全景(上が南西)



(2)尾流・西条地区調査地全景(上が南西)



(1)上内田地区：1トレンチ全景  
(西南西から)



(2)上内田地区：1トレンチ  
流路跡(東北東から)



(3)上内田地区：1トレンチ  
流路跡土層(北から)



(1)上内田地区：2トレンチ全景  
(北から)



(2)上内田地区：2トレンチ  
流路跡(北から)



(3)上内田地区：2トレンチ  
流路跡(南東から)



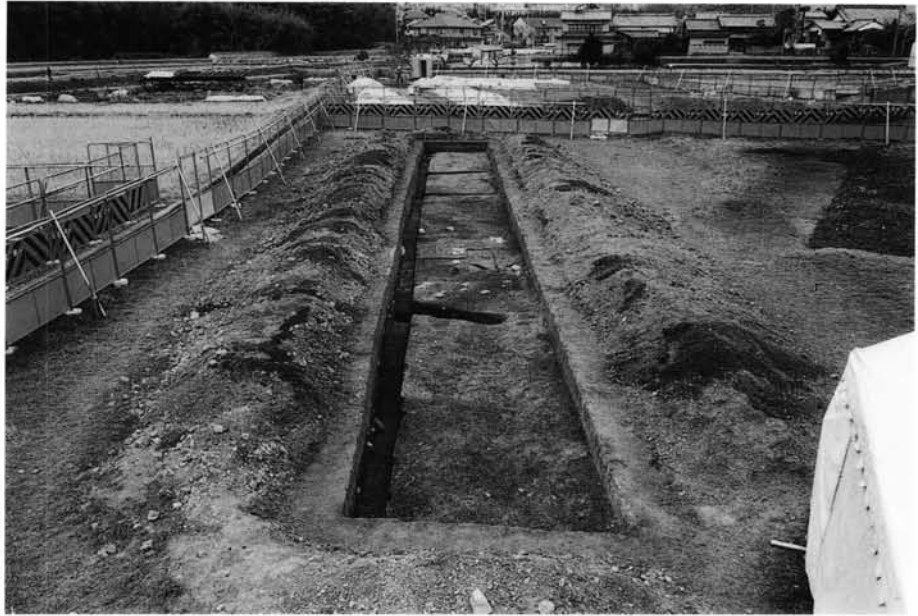
(1)上内田地区：3トレンチ全景  
(南東から)



(2)上内田地区：3トレンチ全景  
(南南東から)



(3)上内田地区：3トレンチ  
竪穴式住居跡(北から)



(1)上内田地区：4 トレンチ全景  
(東から)



(2)上内田地区：5 トレンチ全景  
(南東から)



(3)上内田地区：5 トレンチ  
暗渠溝(北西から)



(1)上内田地区：6トレンチ全景  
(北北東から)



(2)上内田地区：6トレンチ  
流路跡(北から)



(3)上内田地区：8トレンチ全景  
(北西から)





(1)上内田地区：7トレンチ  
流路跡(東から)



(2)上内田地区：7トレンチ  
流路跡内遺物出土状況  
(北から)



(3)上内田地区：7トレンチ  
流路跡内遺物出土状況  
(北西から)



(1)西条地区調査地全景  
(南西から)



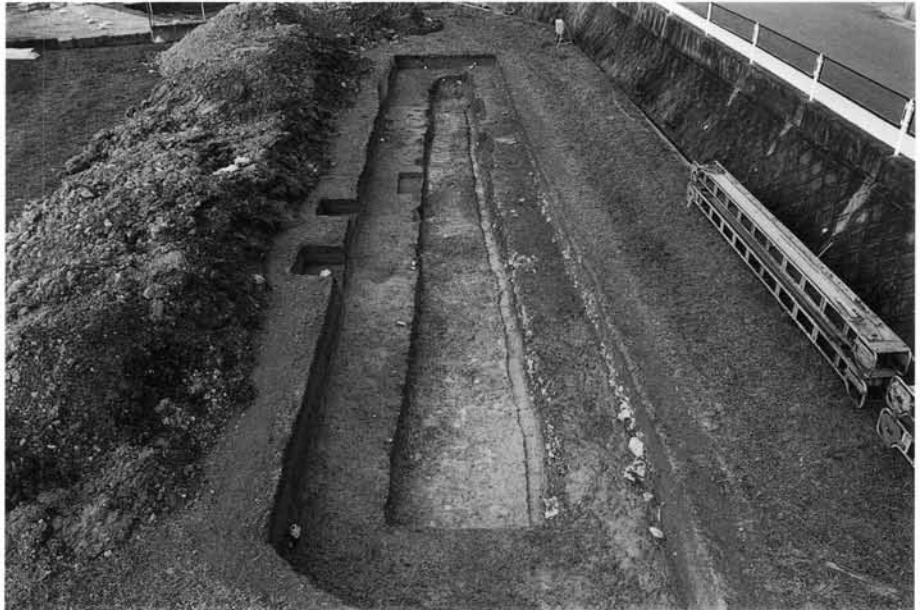
(2)西条地区：1・2トレンチ全景  
(南東から)



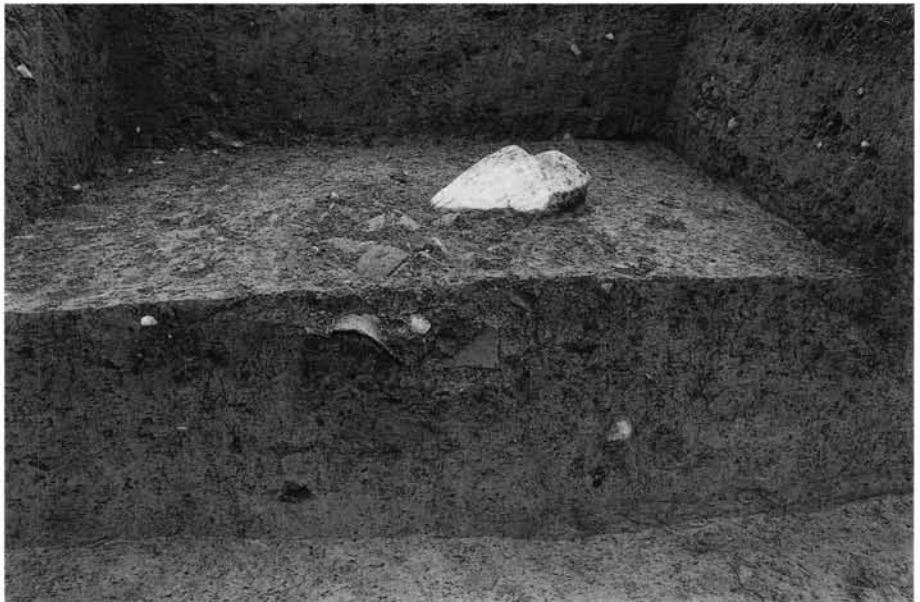
(3)西条地区：3トレンチ  
掘立柱建物跡検出状況  
(北東から)



(1)尾流地区：1トレンチ全景  
(南東から)



(2)尾流地区：2トレンチ全景  
(東南東から)



(3)尾流地区：2トレンチ  
南壁内土坑(北北東から)



(1)尾流地区：3トレンチ全景  
(北東から)



(2)尾流地区：4トレンチ全景  
(南東から)



(3)尾流地区：4トレンチ  
土坑S K01、溝S D02  
(南から)



(1)尾流地区：4トレンチ  
土器集積(北から)



(2)尾流地区：4トレンチ  
土器集積(北から)



(3)尾流地区：4トレンチ  
集石遺構(北東から)



39



75



2



55



38



65



15



73



40



41



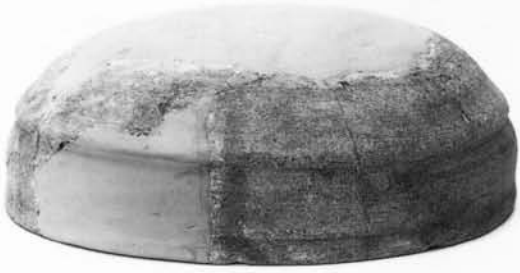
56



43



44



94



102



95



103



97



105



99



106



101



135



138



150



152



140



153



141



139



報告書抄録

ふりがな								
書名								
副書名								
巻次								
シリーズ名	京都府遺跡調査概報							
シリーズ番号	第118冊							
編著者名								
編集機関	(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター							
所在地	〒617-0002 京都府向日市寺戸町南垣内40-3			Tel		075(933)3877		
発行年月日	西暦 2006 年 3 月 30 日							
ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号	° ' "	° ' "		m <sup>2</sup>	
おおがきいせき・いちのみやいせき・なんばの(じょうりせい)いせき	きょうとふみやずしあざおおがき・えじり・なんばの							
大垣遺跡・一の宮遺跡・難波野(条里制)遺跡	京都府宮津市宇大垣・江尻・難波野	26205	11・89・90	35° 34' 59"	135° 11' 48"	20040915 ～ 20050221	1,500	道路建設
さきのだんいせき	きょうとふふくちやましにまにしなか							
先ノ段遺跡	京都府福知山市今西中	26201 (26422)	74	35° 19' 52"	135° 00' 14"	20051213 ～ 20060123	250	道路建設
いかのいせきだいさんじ	きょうとふふくちやましひがしおかちょう・みなみおかちょう							
岡ノ遺跡第3次	京都府福知山市東岡町・南岡町	26201		35° 17' 25"	135° 07' 29"	20040513 ～ 20050128	3,980	道路建設
ながおかきょうあとうきょうだいはっぴやくごじゅうろくじ・ともおかいせき	きょうとふながおかきょうしともおかにしやまじゅうろくーいち							
長岡京跡右京第856次・友岡遺跡	京都府長岡京市友岡西山16-1	26209	91・98	34° 55' 01"	135° 41' 19"	20050802 ～ 20051012	430	道路建設
ながおかきょうあとうきょうだいはっぴやくにじゅうご・はっぴやくよんじゅう～はっぴやくよんじゅうにじ・いがじいせき・しもかいいんじいせき	きょうとふながおかきょうしともおか、ちょうし、しもかいいんじきしのした・かみうちだ・にしじょう・おりゅう							
長岡京跡右京第825・840～842次・伊賀寺遺跡・下海印寺遺跡	京都府長岡京市友岡、調子、下海印寺岸ノ下・上内田・西条・尾流	26209	46・91・97	35° 55' 03"	135° 40' 57"	20040705 ～ 20050225	4,030	道路建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
大垣遺跡・一の宮遺跡・難波野(条里制)遺跡	集落	弥生～古墳	竪穴式住居跡・溝・貼石遺構	弥生土器・須恵器・土師器・管玉・小玉・有孔円盤・土製勾玉・手ずくね土器	古墳時代の祭祀遺物の出土。
	集落	平安～中世	掘立柱建物跡・柵・土坑・溝・井戸	土師器・土師器・墨書土器・円面硯・硯・銭貨・木器	
先ノ段遺跡	散布地	中世?	掘立柱建物跡・土坑・ピット		試掘調査
岡ノ遺跡第3次	集落・墓域	弥生	竪穴式住居跡・方形周溝墓・土坑	弥生土器	江戸期の福知山城の城下町に係わる遺構・遺物を検出。
	集落	奈良・平安	掘立柱建物跡・柵列	土師器・須恵器・緑釉陶器	
	城郭	近世	掘立柱建物跡・堀・井戸・土坑	近世陶磁器	
長岡京跡右京第856次・友岡遺跡	都城・集落	平安・鎌倉	土坑・柱穴・溝	土師器・瓦器・緑釉陶器・灰釉陶器・青磁・白磁・青白磁	貿易陶磁器類の出土。
長岡京跡右京第825・840～842次・伊賀寺遺跡・下海印寺遺跡	集落	弥生	土坑・流路	弥生土器	試掘調査
	集落	古墳	溝・流路	須恵器・土師器	
	都城	奈良・平安	掘立柱建物跡・柱穴・流路・溝	土師器・須恵器・緑釉陶器・土製品	
	集落	近世	井戸・流路・溝	瓦器・土師器・中国製陶磁器	

備考：北緯・東経の値は世界測地系に基づく。

## 京都府遺跡調査概報 第118冊

平成18年3月30日

発行 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター

〒617-0002 向日市寺戸町南垣内40番の3  
Tel (075)933-3877(代) Fax (075)922-1189  
<http://www.kyotofu-maibun.or.jp>

印刷 三星商事印刷株式会社

〒604-0093 京都市中京区新町通竹屋町下ル  
Tel (075)256-0961(代) Fax (075)231-7141